

名称	井上 馨 文書
標題	三井組ハ朝鮮分債金募吏之書 井上宛 花輪正模氏、書翰

分類 番号	673
	8

1. 2.

国立国会図書館

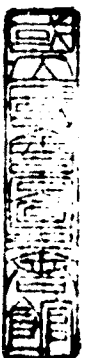
登録 番号	264023
----------	--------

264023

昭和 年 月 日

謹而花輪正模九并敬首恭シク

忠勇仁義井上全權公使閣下ニ内啓親展書奉呈上候正模  
儀ハ明治五年一月以降ニ并但事業ニ從事勤仕候中計ラ  
サリキ 井上伯令令ニ付疾病養生預可差出旨西邑帛四  
郎諭達ニ付無異議差出相忝キ后今辭職預書呈シ明治廿  
二年閏届示令ヲ受ケ独立貿易事業相管罷五候然ルニ我  
國政府ハ軍國ノ涉多端國家急務ニ方リ國民タル者敢テ  
熱望ノ意見ヲ默止スルノ現今ニアラサルヲ案シ別紙懸  
本ノ通ニ并高保江建議書差出し申候右ハ 本公使閣下  
ニ於テ本政府江涉臨議相成候趣ニ由リ各新聞紙ニ喋々  
タルヲ以テ内地経済社會ノ一問題ナル朝鮮國政府公債  
五百萬圓募集ノ件既ニ業ニ 本公使ノ所熱血所英談ニ



對し朝鮮王室政府國民ニ至ル迄服従内政革新ノ歩ヲ進  
メ平和ヲ告クル上ハ我カ政府ノ保証ヲ仰クニアラスト  
雖モ危険ノ恐レナキハ申上奉ル迄モ無之依之談公債五  
百萬圓三井組一手ニ引受ケ新得意ヲ開造スルハ三井組  
一層將來ノ富源ヲ開ク者ト確認仕候ニ付三井現今所有  
財産ノ數ニ對シテハ本政府ニ於テ認可セラルモ怪マ  
ルヘキニアラサルヲ信ス 本公使閣下ニ於テモ相當ト  
被思召候ハ、外務大臣江所急電ヲ以テ三井親族江所説  
諭ヲ奉仰候ハ將來朝鮮國獨立内政改良沿革ヲ計ル為メ  
一ハ大日本豪商三井氏ノ光榮ヲ奉ケテ世ニ傳クスル為  
メ恐惶モ不顧ニ井才ニノ富源ヲ他ニ譲ルヲ遺憾トス謹  
而 本公使閣下ノ所掌義ヲ奉仰候誠惶謹言

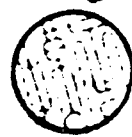


京都市下京區下河原通

下河原町四拾番戶

明治二十八年一月二十八日

花輪正摸



伯爵井上全權公使閣下



### 三井高保は建議書之寫

并啓陳目下朝鮮政府公債五百萬圓募集ノ件大藏大臣ヨ  
リ御諮問相成候事ハ世上ニ倭説スル所ニ有之然ルニ姑  
息事故ヲ拳ヶ躊躇セラルノ不可ナルヲ信シ正摸一書  
呈上仕候其故ハ既往明治五六年頃政府ヨリ毎利足ノ正  
貨幣數千萬圓御預ケヲ僥倖トシテ皇役ハ賄賂ノ餌ニ搦  
リ信用貸ト相称ヘ慢ニ毎抵當ニテ諸人江貸附ヲ開始シ  
テ大ニ損害ヲ蒙リ取立ノ整理方ニ當テハ正摸等ノ難苦  
勞力ニ負擔シテ汲々血熱勞動ニ苦心ヲ凝ラシテ回復爲  
シタル其偉功ハ皇役ノ食物ニ付シタル而已ナラス偉功  
拳勲ノ揚句ニハ無実ノ挑難ヲ付シテ擯尔ヲ受ケタルハ  
衆目ノ視ル所衆指ノ指シテ憎ム所ニ御座候得共今日之  
ヲ拳ヶテ私念ヲ述ルノ今日ニアラス且西邑市四郎麻田

佐右衛門等ノ兇惡ヲ攻撃シテ忿仇ヲ報スルハ敢テ難キ  
ニアラスト虫毛皆是ニ升家体面目ニ関スルヲ慮リ以テ  
黙過ニ付シタルハ涉推察可有之天下時勢今日ノ勢力ニ  
於テ國家ノ為メトニ升組ノ為メニ黙過スヘカラサル事  
實ハ既ニニ升家ニ於テハ勿論壹百萬圓ノ入費見込ヲ以  
テ軍器製造所設計献納ノ義舉之レアルニ就キテモ尚ホ  
政府ノ目的トセラレタル朝鮮國整理ノ件ニ付井上朝鮮  
全權公使朝鮮革新ノ英談ハ倭々諸新聞紙ニテ沸リ知モ  
可被為五候察スルニ井上伯涉英談ノ熱度ハ朝鮮國王ニ  
向ツテ万一本使ニ危害ヲ加フル者アルノ日ハ朝鮮滅亡  
ノ時機也ト発聲セラレタル一事ヲ以テ万事ヲ察スルニ  
井上伯生ヲ抛テ危害ニ懼レス天暗我日本大帝國ノ全權

公使タル使節ヲ視ルニ足ルヘシ既ニ此上ハ朝鮮政府財政困難ヲ救済方ニ努力セラレ本政府江所臨議ニ就テハ大藏大臣ニ於テミ井組及二三ノ者江諮問セラレ候趣ハ專ラ新聞紙ニ於テモ目繁仕候正摸索スルニ朝鮮政府公債募集ノ事ハ彼レ朝鮮政府ハ義務ヲ果シ得ルモノナリト我政府ニ見込アレハユソ大藏大臣ハ諮問セラレ享配ヲ採リ努メラルモモノニシテ万一ニモ後日朝鮮政府カ不條理ノ仕向ケアラハ我政府ハ容赦無ク進撃セラルヘシ然ラハミ井組ノ損害ニ拘ハラス我日本帝國ノ國威ニ関スルヲ躊躇スルノ謂ハレナキヲ信シテ毫モ疑ハサルモノナリ將來日本ノ強勢ナルハ萬國ノ信スル所ナルニ内國人民ニシテ吾政府ヲ懷疑スルヲ憎ム至急非常ノ所

英談ヲ以テ本件ハ日本銀行岩崎等ノ他ニ譲ラズ三井但  
一午ニ市引受最モ努メラルヘキ機會ニシテ懷疑ノ間ニ  
懸念スルハ一大得意福源ヲ退クルノ不得策ナルヲ察ス  
元来三井家ノ風俗トシテ昔諸藩々ニ疑惑ヲ措キタル餘  
風遺リテ政府ハ山子ナリト云フ詔ニ動レハ勢力ヲ占メ  
タル故ニ政府疑團ノ発言者一層ノ智者氣取りニテ伎倆  
者ラシク誇ルノ不可ナルヲ惜ミタリ三井今日ノ富源ヲ  
去ハル如何ン三井家ニ新空氣ノ浸入爲シタルハ三野村  
利左衛門ナリト信ス又其利左衛門ナル者ハナニ人ナル  
ヤラ去ハンニ彼ハ元幕府ニ大勢力ヲ占メタル所勘定奉  
行小栗上野介抱ノ公用人ナリ幕府ノ様制改正爲シタル  
手腕者ナリ正摸ハ役前ノ知己ナリ然ルニ三井家ノ不幸

彼レノ不幸ニモ五十八歳ヲ一期トシテ世ヲ去リ然ルニ  
今ノ人ハ頁々惜ミニ毛色ノ替ツタ山師者ト称スル輩ア  
ルヲ正授最モ憎ム所ナリ主君之ヲ容レサルヤヲ甚夕虞  
ル、モノナリ主君宜敷三野村利左衛門ト同一ノ御精神  
ヲ以テ三井組ニ御引受ケ相成候ハ、我政府は對スル誠  
忠一大面目ヲ呈スル而已ナラス将来朝鮮政府ノ偉功者  
タルヘキ勲ヲ占メ朝鮮政府一得意タル信ヲ得ルハ勿論  
ノ義ト奉存候征韓征清事件ニ因テ生スル三井家ノ一大  
幸福ハ此一義ヨリ始マルモノト確信仕候今日ニ至ルモ  
止マス三井家ニ依然トシテ政府ハ山子ノ内閣ハ山子ノ  
ト自ラ才師伎倆者然トシテ懷疑案ヲ主唱スルノ不可ナ  
ルヲ信シ御参考ニ呈セシニ丁卯ノ歳末ニ方リ天龍寺等

持院ノ如ニ麻児島達ノ整伏シテアルヲ京都童ハ薩摩ノ  
山子ト云フニ對シ西鄉吉之助君云ク京都ニハナア八宗  
ノ本山アリ彼レ岡山ナル坊主ハ何レモ山子坊主ニ相違  
ナシ然レトモ山子大當リニ御岡山様トナツタリ我々ノ  
山子當レハ政府ノ元勲様トナルソヨト明言セラレタル  
ヲ今日ニ至ルモ正摸ノ耳朶ニ相遺リ申候ニ付正摸血熱  
以テ建議仕候右ニ付大藏大臣江御上預ノ趣意別紙條件  
御修正至急御進達相成度候正摸明陳ノ旨主御採納被成  
候ハ、大藏大臣江呈セラレタル出預書謄本尙通至急并  
上伯江御進送相成リ尚ホ尙通私江御送附被下候ハ、正  
摸誓ツテ政府ノ認可相成候様進テ運動可仕候軍國策御  
採用御神速ノ御決定奉祈望候万一現在御家産ニ依頼シ

富貴安寧ニ馴レタル惰怠心ヲ主張シ先ノ解散代議士ヲ  
撲造シテ隱然政府ヲ諷罵シ冷膽ニ構ヘ麥飯ニテ鯛釣ル  
様ノ及間策ヲ考ヘ五拾圓乃至百圓ノ進物ヲ以テ毫萬圓  
ヲ得ル如キ御奉勤有之候テハ当今ノ時勢ニ適セス政府  
ノ御信任ヲ絶テ後世三井家ノ為ノ甚夕以テ不可ナルヲ  
察セリ三井家固有席上論ノ御堅説ナレハ日清戦争ハ何  
レニ勝ヲ制スルヤ終局ヲ見タル上ノ事ト固有御説前例  
之通御察申上候正摸ハ御家風ニ及シテ日清戦争ハ  
大元帥陛下大御心ノ維新元年以來國民ニ詔勅セラレタ  
ル一勅語タニ空シクセラレス此 聖徳ノ尊キ此ノ尊キ  
聖徳ニ勝テ者世界ニナキ者ト尊信ヲ固メタルハ我決心  
ノ基礎ニシテ之ヲ在命全体ノ本心トシテ我カ 帝國ハ

万々歳全勝占ムルニ相違ナキヲ誓フルモノナリ然リ而  
シテ國家經濟上ヲ豫言スルニ戰爭後我カ帝國經濟社會  
ノ變化非常ノ勢力ヲ得テ英佛ニ譲ラサルヲ知ル今ヤ將  
ニ萬國ノ一大資本家浸入シテ三井家位ノ資本家我國内  
ニ軒ヲ連ラヌルヲ信スルモノナリ而シテ物産ノ繁殖ト  
製品ノ輸出ヲ増進スルハ最早既ニ遠キニアラス三百議  
士ハ政府ノ經濟豫算節減シテ誇ル如キハ全國民ノ望ム  
所ニアラス前幕府ハ御老中ノ俸祿ヲ参万石ト若年寄ノ  
俸祿ヲ壹万石ト定メ其旧ヲ以テスレハ則参万石ハ藏米  
参万俵壹俵壹兩トシテ参万兩ナリ今日ノ價值ニスレハ  
壹俵参圓五拾錢トシテモ拾萬五千圓ナリ一老ニ次ク若  
年寄ニシテ参萬五千圓得タルニアラスヤ最モ然ラサル



ニ於テハ一大國家統治スルノ伎倆害スルノ虞レアルニ  
原因シテ私欲意ヨリ成立タルモノニアラス戦争終局ノ  
上ハ將來ノ政府一大改革行ハレ内閣大臣ノ俸給ハ五萬  
圓以上ノ位地ニアルヲ豫察シテ正模神明ニ誓ヘテ生涯  
ニ一大東洋ノ平和ヲ并觀シテ鬼藉ニ入ラント欲ス今日  
聖世ニ沐浴スル者ニ之アリ候然ルニ議會ニ百人ノ伎倆  
ヲ集メテ老人ノ伎倆モナク勅語遵奉シテ國勢大臣ノ  
提出案ニ悞賛ヲ奉呈候ハ一神聖ナル議會ナルモ顧ミサ  
ルハ遺憾ニ沛座候之ニ類スルニ三井銀行ノ役員等一年  
得ル所ノ俸祿金高今日親任官俸祿ノ上位ニアル富ニ慢  
シテ天皇陛下沛親任ノ最上高き官ヲ蔑視スルハ不教  
モ又甚シキニアラスヤ實ニ奥深キ紳士紳商タルノ品行

ナキヲ憂フル而已ナラス至尊ノ親任官に對シ三井家雇  
人等カ榮ヲ爭フ如キ實ニ世ノ絶倫ト云フヘシ早クモ其  
着眼ヲ移轉シテ將來事業ニ注目セラレン事ヲ祈リ朝鮮  
公債應募ノ儀ハ正摸見込ミト同一ノ見込ヲ以テ今日在  
京都日本銀行總裁河田小一郎氏ノ望ム處ニシテ其見込  
ミヲ新聞紙ニ公ケニセリ故ニ甚夕急ナルヲ察シ俄然中  
上候然ルニ三井家ハ之ヲ案セス躊躇セラルハ今日ノ  
政府ヲ懷疑ノ御皇念ニ過キタル御挙動ナリ三井家實際  
内幕ヲ云ハシニ皇役程一層人道ノ德義盡ク從テ嫉妬ノ  
念高ク事業以外ノ私交上ハ交誼ニアラスシテ探偵ナリ  
故ニ不知ヲ見ル如キハ又速カナリ此ノ如キ狀態陋習今  
日ニ改ムル能ハス加之兼シテ放言以テ三井親族ハ人ヲ

シキモノ無ク皆馬鹿モノナリト一言ニ罵倒シ恩待ノ主  
君江對シ不敬ヲ極ム此ノ如キ不德義ナル乎代等ニ勢力  
ヲ与ラレ且東京ノ勢力者タル名称名誉ヲ授ケ政府ニ對  
シテ三井親族ノ忠誠節義ヲ欠クハ世論ノ以テ遺憾トス  
ル處ニ御座候条深ク御推寃御親族非常ノ御英談ヲ以テ  
偉大ナル御愛心ヲ採リ本條朝鮮公債募集ノ件全御引受  
相成度俟セテ至仁文武天皇陛下御親任流遣セラレタ  
ル御皇任井上全權公使閣下ノ御英雄ニ副ヒ井上伯閣下  
御意中ニ在テモ朝鮮公債五百萬圓三井組ニ於テ一手御  
引受ノ事實ヲ被聞食候ハハ御満足在ラセラル事ハ知  
レ切ツタル事ナレハ一層御源氣御奮揚ノ一旦ニ供セラ  
レ度高橋公高壽公御在世中ニ在ツテハ維新ノ際王政御

一新ノ皇業成ラサル時ハ明治政府ト共ニ斃ル、ノ決心  
ヲ以テ御用ニ努力為シタル冥護ニ因テ三井一族ノ隆盛  
ヲ見ルモノナリト常ノ御物語并義為シタルヲ回想仕此  
段至急申上候恐惶謹言

二十八年一月二十六日

花輪 正

摸摺  
九拜

# 高保公尊臺閣下

朝鮮政府公債五百萬圓三升組一手引受ヶ應募ニ付政府  
江要求ノ條件左ノ如シ

一三升組一種ノ新紙幣ヲ以テ朝鮮政府江貸与ノ件

一明治四年地金代金及開拓使証券同種紙幣発行ノ件

一朝鮮國ニ三升組紙幣交換所設計ノ件

一朝鮮政府ト日本ニ三升組ト條約締結ノ件

一朝鮮政府ノ國庫取扱三升組江一任ノ件

一朝鮮政府江貸与ノ紙幣ハ國內通用ノ件

一朝鮮通商人携帶ハ内地ニ三升銀行ニテ引換ノ件

右條件上俾書中ニ明記シテ政府江涉提出之事

追啓本上仰書寫ヲ以テ五朝鮮井上伯閣下ノ親展ニ供候  
ニ付所ヲ兼可被下候最モ井上伯ノ親展ニ供シタル所以  
ハ元来ニ井家一般事業ノ成立ヲ拳クシハ明治四年政府  
為換座称号ヲ賜リ繼續シテ大藏省御用所ト改メ諸官省  
府縣ノ為換方出納取扱非常ノ福利ヲ得ラレタルハ大隈  
伯ノ配意ニアラスシテ井上伯ノ賜モノナリ而シテ世上  
ニ卒先シテ一國立銀行ニ井物産會社及私立ニ井銀行創  
立為シタルハ井上伯ノ賜モノニシテ一昨年七月ニ井組  
事業改革ニ至ル迄一切ニ付井上伯ノ恩賜ヲ蒙リタルハ  
筭スルニ遑アラサルヘシ元ノ實業事業本来ヲ拳クシハ  
呉服小賣店ト兩替店ヲ以テ經濟ト為セシニ井家ハ今時  
大日本帝國ニ冠タル第一等ノ豪商一大事業家タルノ榮

誓ヲ占領シタルハ揮テ井上伯ノ賜毛ノニアラスシテ何  
ソヤ三井家中ニ於テ三野村利左衛門中井三平氏ノ外ニ  
英談ヲ神速ニスル者アルヲ知ラス然ルニ三井家全般ノ  
者俱ニ其餘恩ヲ現在ニ蒙リ居リ乍ラ井上伯多年御熱心  
ノ御引立御恩ヲ忘却シテ自己ノ伎倆ヲ以テ主家ニ与ヘ  
タルモノ、如ク仮称シテ種々井上伯ノ惡口ヲ拳ヶ甚シ  
キニ至テハ麻田佐右衛門外若干名等ノ如キハ三井家ノ  
厄病神ト唱フル如キ隱然井上伯ノ御名誓ヲ害シ故ラ新  
規雇入栗本康等ニ三井内部ノ秘密ヲ示シ無心怪ナル栗  
本康等自己ニ威勢ヲ得ント慢ニ縣知事郡長戸長警察官  
及部下ノ役負等ニ對シ其當時ノ外勢大臣井上伯ノ名称  
ヲ濫用シテ吾意ヲ張り不都合千万ナルヲ傍廳ニ忍ビ難

キニ由リ正摸ハ是ヲ制諭為シタルヲ逆サマニ彼レノ不  
都合ヲ正摸ニ負ハセ井上伯江誣告諺訴ヲ為シ伯ノ感情  
害シタルハ則西邑帛四郎麻田佐右衛門杉村次郎等共謀  
惡拳ニ為シタル事情モ有之候ニ付今ヤ井上伯ノ懷疑ヲ  
怒スル為メ朝鮮公使館ニ向ケ本書ノ寫ヲ呈上仕候也

一月廿六日娘三保野代書所炎ヲ蒙リ保檢下



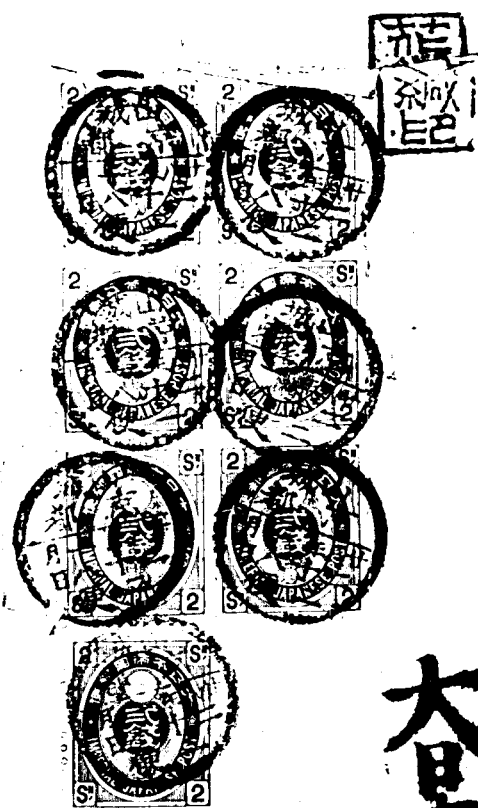
朝鮮國京城大日本官舎

伯爵井上全權公使閣下

書出分參 (月見) 内啓親展

明治三十八年一月二十八日

大日本京都下京區八坂下河原町四番  
花輪正模謹梓奉呈



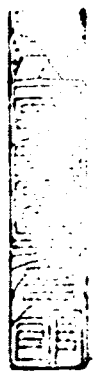
名称	井上 馨 文書
標題	朝鮮公使引受三井組入下命令 建言書

分類 番号	673
	9

18-1

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



謹而恭しく伯爵井上全權公使閣下ノ御参考ニ供スル爲  
メ花輪正摸内地ノ実況ヲ奉申上候 本公使閣下既ニ内  
務ノ要職ヲ擲却シテ韓廷改革ノ難事ニ当リ六十ノ御皇  
齡ヲシテ御渡韓ノ忠勇ハ則我 帝國ノ素望國家アルヲ  
知ルモノ誰レカ感セサルモノナレ今ヤ朝鮮國盤根錯節  
ヲ解カセラレ改革事業外面ニ顯ハレタルハ 本公使閣  
下ノ所英新万國ニ光譽シタル而已ナラス我國人民ノ爲  
メ至大ナル名譽福利蒙花ノ開源ナリ加之征清陸軍ニ海  
軍ニ敵國ノ厦門旅順威海ノ兩衛ヲ攻陷シテ全日韓清ノ  
航路開通新領往復運搬ノ糸ヲ告々且前議會ハ政府ニ衝  
突シテ陸海軍ノ擴張ヲ拒妨爲シタレトモ陸海軍ノ忠勇  
ニ由リ夥多ノ軍艦無代價ニ得タリ陸軍ハ進ム所ニ勝ヲ

訓シテ軍器兵糧ヲ得ルハ皆之レ 至粵浙威靈元勲政府  
ノ懿德天佑ナルヲ確信仕候然ルニ正摸以テ遺憾トスル  
ハ朝鮮内國財政ノ困難ニ因リ五百萬圓内地ヨリ借入リ  
ノ件今日ニ確定ノ新聞ヲ聞クナク 閣下ニ於テモ内地  
内閣ノ公報及ヒ新聞紙上ニ御覧見被知召候如ク川田小  
一郎ノ明言モ遷年万化新聞紙面信スル所ナシ朝鮮公債  
浪説ニ内地経済社會ニ關係ヲ被ル一方ナラス之ニ依テ  
朝鮮公債ハ 本公使閣下嚴命ヲ以テ三井組一手引受ヲ  
命令相成候ニ於テハ三井組ノ蒙譽ニモ相成候儀ニ付御  
急電ヲ以テ三井高保八郎右衛門益田孝渡韓仰付ラレ御  
説諭アラシニハ 閣下ニ對シ異議申上ケサルハ正摸信  
シテ疑ハス亦夕朝鮮政府ハ到底独立ヲ維持スル不能ト

スルモ其保護上ヲ我政府ハ他國ニ讓ルモノニ非サルヲ  
信ス然リ然リト虫モ 閣下ニ御信認不被為在 閣下危  
險ト被認候上ハ正摸達テニ并組ニ望ムニアラス此般ハ  
御推考奉仰候 閣下御渡韓以後内地実業者ノ状実ヲ視  
察スルニ毫モ忠誠愛國ノ哀情ナク政府軍費ノ御多端ナ  
ルニ兼シ銀行社同盟シテ暴利ヲ貪ラント國家ヲ忘シテ  
卑屈ノ手段ヲ採リ狡高不義遂ケ難キヲ知ラス慢ニ先見  
ヲ撻取レハ之ニ抹式取引市場ハ其愚ヲ豫知シテ争ヘ公  
債株式賣買直段ニ下落ヲ顯シ恰モ戦争ノ意ヲ示シ銀行  
社意外ノ攻撃ニ矢敗ヲ被リ乱錯ニ涉リ終ニ同盟互ニ争  
ヲ免シ預リ金ノ利足引上ヲ廣告スルト共ニ争ヒノ廣告  
ヲ為シ内地經濟社會ハ禽獸相喰ムノ有様ヲ呈シ愧嘆極

リナシ之レカ原因ヲ挙クレハ方ニ回軍事公債五千萬圓  
募集ニ際シ藏相ノ諮門ニ乗シ狡猾力ニ暴利ヲ占メ  
ト不実答申ヲシテ應募額九拾五圓ト爲シタル故ナリ此  
故ニ五千萬圓ニ對シ政府江貳百萬圓ノ損害ヲ加ヘタリ  
之レ社會ニ報ユルニ從前國民所有公債貳億五千貳百九  
拾四萬五千五百圓及才一回軍事公債參千萬圓ニ對シ百  
圓ニ五圓下落ノ損害ヲ加ヘ之レヲ算スルニ千四百拾餘  
萬圓ナリ株式券及社債券市公債共ニ政府公債ニ準照シ  
テ下落ヲ示シタルヲ以テ視レハ銀行社負ハ政府江貳百  
萬圓ノ損害ヲ加ヘタル爲メニ一般社會ノ損失ハ參千萬  
圓ニ下ラサルヲ案シ之則チ銀行社ハ私ヲ愛シテ國家ヲ  
愛スルヲ知ラス政府ノ富ハ國民ノ富ナル實ヲ知ラス信

アリテ徳ヲ得ルノ金言ヲ解スル能ハス銀行社ノ不徳義  
ナルハ去フ迄モナク金融ヲ妨害シ唯ニ逆老遺憾トスル  
ハ軍事公債價值回復シテ我帝國一般ノ公債額面以上  
ノ價值ニ復スルヲ以テ我帝國ノ國譽ト信スル者ナリ  
我内地國民ハ同盟ノ争ヲ中断シ外人ノ感情ニ一層ノ快  
事ヲ副ヘ大膽ナル決心ヲ奉テ我國固有ノ美ヲ天地ト共  
ニ発揚ノ光榮ヲ見ント欲ス高五百萬圓位ノモノト雖モ  
朝鮮政府ノ公債故ニ高利ヲ占ント市場ノ評ニ昇リ為メ  
ニ内地公債ノ價額ニ關係ヲ被ルハ少々ナラス此故ニ右  
朝鮮公債ハ内地市場ニ賣買ナキモノトス 本公使保護  
ヲ以テ三升組一手所有ト定メ然ルトキハ内地公債價額  
ニ害ナキモノト信スル而已ナラス方三回方四回軍事公



債募集ハ必ス額面ヲ以テ奉公義勇心ニ厚キ我國民ハ各  
費用ヲ節シテ公債ノ募集ニ應セントシ從テ從來國民所  
有ノ公債價值額面以上ニ回復ヲ見ル疑ヒナキヲ信ス正  
摺謹而内地ノ狀態奉申上候誠恐謹言

明治二十八年二月二十三日

花輪正模



伯爵井上金権公使閣下

名 称	井上 馨 文書
標 題	慰問状 兵庫県下赤松村有志、井上馨宛慰問状

分 類 番 号	673
	10

5

国立国会図書館

登録 番号	264623
----------	--------

慰問状

謹而

全權公使井上君ニ書ヲ捧ク閣下先ニ入韓ノ聲海山ニ響キ生等  
雨ヲ望ムカ如シ閣下果シテ渡韓セラレ爾後談國古習ノ大政ヲ一變ニ無塵  
ノ良境ニ至ラシメシヲ数々

大君主陛下ニ奏シ大君主陛下ハ閣下ノ精慮ニ任シ稍ヤ良政ヲ視ルノ今  
日ニ進ミタリ是レ誠ニ日本

天皇陛下至仁ノ顯ルル處亦タ以テ閣下寒風凜烈ノ候ヲモ顧ミス拮  
据勵精貫徹シ終ニ此美舉ヲ得東洋安緒ノ曉天ニ至レリ偉哉  
閣下ノ厚恩何ヲ以テ謝スルニ物ナシ生等日夜伏シテ感佩スルニ余リアリ  
故ニ寸書ヲ奉シテ慰問トナス恐々再并

兵庫縣播磨國赤穂郡赤松村壹千余人惣代

明治廿八年二月二十日

- 岩本 比部  
田淵彌平治  
山本源重郎  
横山五郎  
藤本万治郎  
横山長治郎  
横山猪平  
横山正  
田淵彌三吉  
小谷茂八  
西山藤四郎  
安則喜太治  
大上孫市  
前田芳太郎  
久保又治郎  
藤本京太郎  
竹田甚吾  
森本貞太郎

金權侯伯爵井上馨香殿

横山五郎  
藤本万治郎  
横山長治郎  
横山猪平  
田淵彌三吉  
小谷茂八  
西山藤四郎  
安則喜太治  
大上孫市  
前田芳太郎  
久保又治郎  
藤本京太郎  
竹田甚吾  
藤本菊太郎  
河野藤松  
山田清四郎  
真野仁太郎  
岸岡栄太郎  
村上嘉重郎  
前川寅太郎  
浦宗新五郎  
丸尾傳四郎  
金澤利平  
前川治良右衛門

名 称	井上 馨 文 書
標 題	韓国勅令第69号 字

分 類 番 号	673
	11

19

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	264623
------------------	--------

264023

19

昭和27年4月3日

勅令第六十九號

開國五百四年三月三十日

本年度ニ在テハ一同文武官ノ俸給ハ各其現  
受スヘキ俸給額ニ照ラシ左ノ如ク減額シ  
テ支給ス

勅任官

減額百分ノ二十

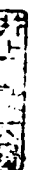
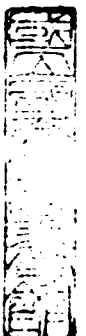
奏任官

減額百分ノ十五

判任五等以上

減額百分ノ十

本令ハ開國五百四年四月一日ヨリ施行ス



名称	井上 馨 文書
標題	十七条目 朝鮮國在政要綱 17 条目

分類 番号	673
	12

7

国立国会図書館

登録 番号	264023
----------	--------

(1)

日本文

朝鮮國施政要綱  
(十七條)  
和文・漢文  
各一通

65

1117

明治廿八年七月

18,117  
略に多少  
政治的利便  
を附加したもの  
- 表小記

給文  
略

出  
来



## 十七條目

一 官内府ハ至先シテ元負リ諸種ノ負  
役属隸ヲ云フ一掃スルヲ相お就業  
ノ方便ヲ設ケ之ヲ處置ヲおし並ニ王  
室長久ノ基礎ヲ定ムル事

二 王后ハ上常格ニ拘ハス特ニ内閣大  
臣又ハ協辦ニ内閣見リ許サハ事  
三 兩陛下ハ内閣大臣協辦等ニ托

セシ若クハ政務カリ内奏スル事  
一人リ位重シ又ハ偏倚偏愛



せうに、コトナキリ、要セス、然シ之、及ス、トキハ  
大正間、之、疑惑ヲ生ス、一原因ナシバ  
ナリ

四

内閣ハ大臣主陛下ノ内閣ニシテ  
各部大臣内閣ニ在リ、各其職  
權ミテ主張ス、トモ、非ス、閣臣一  
体ニ成リ、即議案又ハ人撰ノ通  
否、等其規矩アレハ之、隨ニ何  
部主官ニ拘ラズ、現今及ニ將  
来、ナシ、利害得失ノ熱慮

レテ才能功、討滅シ大后主  
ヲ輔翼シ以正シテ協同シテ其責任  
ヲ全スベシ

五 改節上ノ事宜ニ関シテ西陲下ハ  
一切閣臣協辦等ニ諮詢セラル  
外他人ト改事上ノ私議ニ及ビザル  
様ニ注意ス事要ムベシ

六 内閣大臣協辦ハ王室ニ對シ  
忠實ニ奉公スベキハ勿論相互ノ  
間秘衷協同ヲ告グルモ其心忌憚

得意見ニトナリ又後來ノ倚光  
ニ拘泥シテ却句属僚ヲ進退シ或  
ハ私心ヲ挟シテ親族故旧ヲ推授  
ニ若クハ政務ヲ討議シ官吏ヲ  
權揮スル者ヲ兩陛下或ハ同  
僚ニ對シ表面ニ唯々シ  
裏面ニ於テ却テ非難ソナシ  
甚々至リハ様ニ棄レテ擠陥セ  
シトスル者不徳義ヲ行ヒ終  
ニ互々感情ヲ害シ離雲怨相

是ルカメキ行為ヲムカニ様深ク慎  
戒ヲ加フベシ夫レ然ラザレハ改良  
ノ事ノ貴ソ者ナリト從來ノ不  
規則ナル習慣ヲ一轉シ規矩  
準繩ニ因リ各其職務ヲ盡  
ス能ハズシテ相令若者改或ハ更  
迭出ナリテ彌出テ彌其害ヲ深  
シ人心ヲ動揺シ氣ニ適ハズ  
ル所ヲ知ラザレテ紊乱ノ内ニ仍  
舊シ改良ハ有ル無ク貴

こるうこ果こるめ此クこハ  
事ハ改良事業ヲ企テかん  
こ優しんナリ宜こク右大臣  
協辦人者既往惡習貫テ  
反正改竊私心ヲ剗新  
こラ公正誠ヲ推スノ意こ  
出ラ至こ推定約ヲナシ之ヲ  
確守スルハ口一兩階下こ  
推テ盟スヘシ

七、勅任官ノ任命ハ大君主ノ選拔ニ出ル  
ルハ必ス先ツ内閣大臣ニ下問シ其下問シ  
受ケタル場合ニ於テ内閣大臣ハ被授拔者ノ  
才能定見カ當ル可キ職務ニ果シテ克リ適當  
スルヤ否ヤリ憑準トシテ其人物老小南北中常  
又ハ閥族大院君ノ党派シルト其他ノ党派  
タルトシテ論セスルヲ受憎畏懼ノ念ヲ起  
サス忠實公平ニ評論シナシ内奏シ又  
閣臣ノ撰出ニ係ル勅任官ト雖モ大君  
主ニ先ツ内奏經伺ノ後正式ノ手續ニ

從ヒ裁可シテスベシ

ハ各部ヨリ内閣ニ提出スル整理案又ハ改良  
案其他法案并ニ理由書施行規則等モ  
二週シ創設シ閣議ヲ開ク三四日前ハ先ツ  
大君主ノ内覽ニ供シ一ハ各大臣ヘ回附シ  
孰一慮ノ時日ヲ与ヘタル上内閣會議ヲ開ク  
ニ當タリ其邊目ニ關スル法案ニ就テ度支部  
財政現況ヲ調査シ將來ヲ推算考究シタル  
後始メテ決定スベシ又時トシテ大君主ヨリ整理  
案等ハ大體ノ主意ヲ公意セシタル時ハ其主



大臣其法案ヲ制シテ細ニ逐條釋義附シ  
一通リ製シ上頂ノ手續ニ從フヲ要ス

九 内閣大臣勅任官ヲ能ク援定スルカ又ハ凡ソ法律

案ノ閣議ニ提出セシムル前其理由書等又ハ財政ノ

現況並ニ將來ノ推算ヨリ利害得失ニ關スル意見ヲ以

奏スルノ總理大臣共ニ内閣ニ内謁見シテ其主

任大臣ヨリ仔細ニ辨明シテ内閣ニ於テ虚心平易ニ

一ニ國務成績ノ結果ヲ軫念アリテ寛大其説ヲ聽納ス

若シ又聖意ト相符セサルハ其失ヲ更ニ再考ニ付ヤル

ノ内命アリテ之ヲ終結シ然レ後閣議ニ付シ議決ノ上大

君主ノ裁可シテ此等ノ場合ニ當リ君臣儀  
式的ノ虚礼ニ拘泥シ唯ニ諾ニ唯余ノマ  
是レ後々如キヲアル可ラス耳シ和氣洋々忠正  
受君ノ誠ヲ敷クヲ專要トス是レ即上下裏面上ニ  
生スル疑惑ヲ除却スルノ要素タシハナリ

十二

兩陛下差シ際臣協弁其他高等ノ官吏ニ對シ疑惑  
ア時其間ニハシメス總理大臣ト當ハシ召シ賜意ナリ  
其疑惑事柄ヲ推問アリテ直ニ之ニ答明セシメ又各大  
臣兩陛下ニ對シ疑似シ生スル場合ハ内謁見ヲ乞  
フテ内奏シ兩陛下ノ恩取リ伺フ等終始上下

間疑惑ヲ疏通スルノ方便ヲ取ル君  
臣間苟モ面従心非以テ其非ニ他  
人ニ語ル等ノ事アレハ即チ離隔ノ  
原因トナルノ恐アリ

十三從來ノ旧惡ヲ逐定之ヲ制縛  
囚禁シタルカ如キハ復讐的動作  
ミシテ弊害ヲ後世ニ貽スノ恐ラレ  
ハ罪已往ニ関スルモノハ一切釋放ス  
ヘシ其関氏ニ関スルモノモ亦同シ  
但昨年六月以前ニ於ケル官吏

十

各部大吏ハ各其主官事務にこゝ職務上法  
律勅令ヲ施行スル必要ノ部令今令施行  
細則等ヲ布ク事ヲ其案ヨ具ヘ先ッ各大  
臣内閣ニ且而陛下ニ内奏スル後決案ニ  
内閣ニ提議スル職一部ノ部令今令  
等ハ各其施行上各部ニ相貫聯シ各行  
政機關ト相伴リテ動作ヲ成セシメ非サハ張  
弛宜キヲ失ヒ氣ニ行政機關ニシテ其運用  
円滑ナラシム能ハシム事ナリ

十一

各部ハ其主官事務リ一毫其操  
ニ劣リ各々機關ヲ侵スルニ劣リ傾向アリ  
（張ハ内閣ハ官報發表ノ劣リ印刷機械ヲ  
要シ學部ハ教科書ヲ作スル同一ノ機械ヲ

在朝鮮國日本公使館

設ルコト云々軍部ハ何々度反ル云々其  
此ニテ各部共ニ榷関リ後ニ必要ソ至  
張コ一々之リ倣設スルセバ必費重出徒  
財政ノ困難ヲ招キ其極人氏ノ負擔  
ヲ重カラシメ怨怒發至爾ニ由觀ツルニ  
ズル止モ故ニ各部ハ筋ヲ此等榷械ノ  
此等榷械使用法ヲ設ルニ必要アリ  
從來政府ノ所有ニ係ル諸器械責任  
者ニ定メ之ヲ保管ス漸次使用ニ法  
ヲ備スルベシ（後ハ榷関局所ニ移ス）  
榷械又ハ世圖ハ造貨榷械鑛山榷械  
ノ數ノ多キヲ考メリ）

ノ贓贖罪、関シテ現今亦お因禁  
中ニアルモノヲ云フ

十四 從來ノ成績ニ徴スルニ大院君シテ  
政事ニ關係セシムルカ又ハ同居トス氣  
脉ヲ通シ寢食進退無隔々干與  
セシムルトキハ再ヒ内政ノ紛擾ヲ来ス恐  
アルハ内閣大臣協弁タルモノ抵言ツテ政事  
上又ハ人撰上ニ談又ハ依頼ヲ受サル  
様注意スヘシ故ニ各大臣協弁間ニ  
適當ノ抵言約シ併ニ之ヲ兩陛下ニ

誓ヒ無貳ノ意ヲ明カニスヘシ若シ同君  
ト大臣協年間政治上些少ノ干係  
ルモ忽チ疑心トナリ其極王室  
并ニ政府ノ安寧ヲ害スル虞トナ  
ナリ

之ヲ要スル前陳各條果シテ上下一  
体ニ各守リテ遺ルニナケレハ王室内  
閣間ニ睽離ソ生スル憂ナク又臣族  
黨派シカツテ互ニ軋轢スル患ナク若  
臣暢和綱紀斯ニ振ヒ王室永又

仁壽縣國山本少伊錦

安に閑居に職務ヲ盡シ其忠勤ヲ效  
に國家ノ基礎ヲ永久に安カラシム  
ヲ得ベシ

五閑泳駿閑泳胡等、對スル善後策  
ノ事

少クトモ一ヶ年位日本、アツテ各官省  
ニツキ事務ヲ見習ヒ必要ノ取調ヲ  
おカシメ、歸國ノ後時裁ヲ見計ヒ採  
用ノ途ヲ設クヘシ

此蓋シ人オノ用フヘキモノハ黨派又ハ



旧怨等、拘サハサルサノ意ヲ示知セシム  
ル所以ニシテ此ヨリ若々黨ヲ立テ政  
府ニ於テ争衡スルノ弊ヲ止ムコトヲ  
得ベシ

十六從來王室ノ附屬ニキ氏田宮莊  
又ハ山林ノ在龍石財産トシテ可キモノ  
ハ之ヲ已別シテ内藏院ヘ屬セシムル

# 事

十七外國ニ派遣ノ生徒ハ年數ヲ二種ニ  
已分シ從ヘハ日本商學生ニ就テハ

諸専門科ノ卒業セシメ大成爲器  
後帰國其才能に従ヒ採用ニ可シ又  
軍人タラシテ望ム生徒ナシハ中學校  
卒業ノ上戸山學校ニ入シメ卒業  
帰國セハ軍部<sup>准尉</sup>士官トシテ採  
用スベキ事

(R)

十七  
日  
文  
文

65  
1  
(1)  
1  
6

井上 繁文書

第一 宮內府宜首先裁汰冗員指諸項員但後屬隸  
預約定就業之道俾得無以失所其安  
王室於悠久

第二 王后陛下可不必拘於例格特准內閣  
大臣若恊辦以時 內謁見有所奏對

第三 兩陛下每於 召接內閣大臣若恊辦  
或當有所奏候機務不宜偏于倚信如或  
扶視重視輕之別則恐難免因此生嫌隙  
疑惑於各大臣恊辦之間

第四 內閣者乃係

大君主陛下之內閣凡百樞機之府而各部大臣之於內閣也不宜固執各自職權過有憲議之案若或選定人員祇職與否等事勿拘其何部專司質之現今考之將來其有利害所繫得失所存其有成規可循者即依此而行其餘亦當無不及覆丁寧悉心討議如此方能閣臣合心為一足以輔翼

大君主公正持平以克盡其責任也

第五 凡有關於政務各事宜

兩陛下除向大臣核轉函詢外切勿與局外人  
偷行談論政事以填戒紊亂綱紀之端

第六 內閣大臣若各核辦公忠潔已仰事

王室固為分所當然惟在互相共事之際務  
以虛衷和悅為旨勿得存忌憚隔模之念  
即至進退部局屬僚之末不可拘泥曩日  
用黨之見尤不可援引親故以開黨緣徇  
私之弊至如討議政事選舉官員有所奏  
對

兩陛下或與同僚有所相商切不可唯諾於當  
面而竊議于退後甚至於從而計謀陷擠  
恬不為耻以致各懷怨恨譬結莫釋則綱  
紀將由此而弛不可不畏而戒之哉倘此  
弊而不除則釐革政弊欲以實心行實事  
一轉曩日紛擾痼習而循規蹈矩各盡其  
職期張政綱不亦難乎究其所歸徒止政  
令數變除罷無常衆志不固莫知所適而  
彷徨乎迷惑紛擾之間所謂夫釐革者終  
屬虛望各大臣若協辦宜以樁然改圖務

去既往痛習作顧已亡私國公忠之志各  
相立誓確守保以此立誓於

兩陛下勿得或有易渝

第七 擢用勅任官雖係出自

大君主簡命但必宜先商之內閣大臣大臣於

是審察其才力果能堪膺職任與否為準

無論其曾為光少南北中常或係曾屬

國太公及閭族若其他黨與之人概不稍

存愛憎畏懼之念一秉至公因器取材以

答



聖明圖治至意即或由閣臣推薦勅任亦須

先行

奏候

兩陛下旨意然後循照成例奏請

裁可施行

第八 由各部轉牒內閣會議之整理案釐正

案以及一概法案若施行細目各章程均

須繕進二道於內閣開議前三四日一呈

大君主閱覽一傳送各大臣查閱容其趁時熟

圖尤如法案之實籌款施行者宜在度支

部稽查財政實情併推究將來方可議明  
准奪又過

大君主授以應行整理若新定法案之大概  
旨意則當由專司大臣先立案稿併開明每  
條釋義繕造二道照上開辦法施行

第九 內閣大臣遇有選定勅任官才具若備  
諸凡法律案欲開內閣會議宜先開具事  
由

奏明成就現在財政實情推之將來考究利  
害得失所繫將有所

奏候則與總理大臣共稽 內謁見

兩陛下備細陳明而在

兩陛下一以實政斯舉為念虛衷聽納如有與  
聖意未符之處諭令一再推敵俟有成議於  
閣臣會議定奪方可仰請

聖裁其過有此等事宜在

君主軫念國政之重不可姑妄聽之在臣僚亦  
不可視為虛儀唯 上命是從總宜

君明臣良上下一心無稍睽離此所以下情下  
達無所壅塞嫌疑莫由而生也

第十 當各郡大臣因其專司事務進行法律  
勅令欲頒發郡令命令以及施行細目均  
先具稿與各大臣商議並奏候

兩陛下然後定為議案再於內閣議明准奪蓋  
雖係一郡部命令命令當其頒布實行也自  
與各部互相關涉故非此行彼應串聯一  
氣則政務不得因轉暢行

第十一 在各部所司事務因呈望靈便辦理

為快未免各欲具備所需事物

如內閣印行官

報備有刷印機器而在掌部欲印教科書亦欲同設此機置推至軍部云何度支云

何等 如果各部執以分設此項事物為要

則徒糜重資以致財用匱乏延及庶民苦

于重歛怨聲載道將不至斯豈則不已也

故在各部有需此項機器事物則宜設一

定章各相通融使用以省浩費為要

向來政府所備各項機器須宜專設一員

俾其責成保管以漸詳究用于實際之道

即如鐵器局之製造子荷機器或典圖書

之儲送貨幣接署開辦鐵器等類是也

第十二 西陲下地過南以事挾疑于閣臣若

煩辦若高等臣僚則勿庸以他人直石

總理大臣英欽臣僚就其難解事宜開懷  
質詢至無遺蘊令其明白面奏又各大臣  
於

兩陛下聖懷有難解之處則不妨隨時請謁仰  
叩似此務期上下洞達毫無壅阻倘或在  
君臣之間互相面從心非退與他人譏諷  
則恐離間挾嫌等弊因此而起

第十三 如追思旧惡倚勢因轉等弊乃係以  
怨報怨恐貽後世之累故其罪屬既往者  
概宜釋放不料其間乎閭民者亦當一律

但此專指上年六月以前官吏之因犯職  
罷而被逮至今者言

第十四 國太公之于預國政若或與之通聯  
氣朕使之左右朝臣之進退黜陟替之已  
歷事休則難免再有國政紊亂之一日故  
在內閣大臣典協辦如以政務或薦材等  
事承其商及決訖國辦勿久各大臣與朕  
辦須以此事立誓堅約併立誓於  
兩陛下以昭無貳焉要倘各大臣典協辦於政  
務等事或與

國太公稍有似葛輒易衆疑叢生馴致  
王室共政府復不得相安此實防範未然  
之微意耳

要之以上條列各節果能上下一體恪守  
無遺則內亂

王室與內閣互相聯離之虞外則臣族樹黨  
傾軋之患居臣暢和細紀斯振

王室永臻乂安閣臣盡職効忠庶得奠定  
國基于長遠豈不休哉

第十五 至於閣詠駿閣詠翔宜如何善處一



節須宜使之赴我國觀光其間就我官衙  
學習事務其有關係要者則尤分調查考  
究之後回國可由政府趁時機酌量權用  
蓋此所以示材畧之堪用者無所拘干用  
虎威前嫌而從此康幾可息各分虎其以  
政府為市場之獎也

第十六 嚮來應歸

王室之屯宮庄若山林又撰有最利於採收  
之礦山可充世襲財產者須宜分別歸內

藏院掌管

第十七

遣派外國肄業之學生宜以年歲分

為二班如派往日本肄業之學生其約十

七八歲以上者作為速成學生一俟言語

暢通之時使之在日本各衙門若或各地

方廳署各裁判所學習辦事實情回國後

視其才力可於各部各裁判所若各地方

廳署分別祿用其約十七八歲以下學生

使之專攻實學為要故中學畢業則轉入

大學攻究法律經濟行政鑛山理化工農

醫等諸科專門學藝俟業成歸國之日即

因材畱使至如願作武員之學生在中華  
業成後可令入戶山學校其業成後國之  
日即可在軍部酌宜祿用

名 称	井上 馨 文書
標 題	帰朝祝辞 京都奉迎送有記の井上馨帰朝=対しての祝辞

分 類 番 号	673
	13

4

登録 番号	964623
----------	--------

客歲朝鮮ニ事アルニ當リ閣下特命ノ大任ヲ奉シ渡韓セラレシヨリ  
 日夜勵精以テ磐根ヲ鑿キ錯節ヲ拆キ是ニ於テ同國獨立ノ基礎  
 始メテ建立セリ今ヤ將サニ我

皇ニ對シ謝恩使ヲ特派セントスルノ議アルヲ聞ク是レ固ヨリ我  
 皇御威德ノ然ラシムル所ナリト雖トモ亦閣下報國ノ赤誠善隣ノ大  
 誼ヲ重セラレタルニ因ラスンハアラス某等恭シク閣下無事ノ歸朝ヲ祝スルカ  
 為ノ聊不腆ノ一折ヲ呈シ以テ微衷ノ在ル所ヲ表ス恐懼頓首

明治廿八年六月十八日

京都奉迎送有志總代

京都市實業團體

高木 文 平

京都市商業會議所

中野 忠 八



為ノ聊不腆ノ一折ヲ呈シ以テ微衷ノ在ル所ヲ表ス恐懼頓首

明治廿八年六月十八日

京都奉迎送有志總代

京都市實業團體

高木文平

京都市商業會議所

中野忠八

京都市參事會員

安戸龜三郎

京都市會議長

雨森菊太郎

京都府會常置委員

林長次郎

京都府會議長

中村榮助

京都府書記官

一坂俊太郎

朝鮮國特命全權公使

伯爵井上馨殿閣下

名称	井上 馨 文書
標題	対韓策意見

分類 番号	673
	14

X3

国立国会図書館

登録 番号	564640
----------	--------

大正十一年五月廿四日

於朝野

露野嶽

上野



# 對韓策

朝鮮ハ自主獨立ノ國ナリ日韓及北韓条約ハ特ニ之ヲ確認  
シ来リ他各國モ亦之ヲ認めルヲ得ヘキ地位ヲ取り居ルヲ独リ  
清國ハ突降屬邦ヲ以テ之ヲ遇セルニ止ラス公然之ヲ揚言シ  
テ憚ラサルニ至リ日清韓ノ釁端之因ヲ生シ我皇宣戰ノ  
大詔亦之ガ爲メニ出テタリシガ今ヤ平和条約ニ依リ更ニ清  
國ヲ強制シテ之ガ認諾ヲ確乎タラシメタリ朝鮮ノ獨立國  
タル既ニ一点ノ疑義ヲ存セサルヲ於是乎明カナリ矣朝鮮既ニ  
獨立國タリ即チ日本ハ他各國ト共ニ之ガ對等ノ地位ニ在ルヲ言  
フ俟タズ惟ダ日本ハ一輩水ヲ隔サルノ隣國トシテ互相因果

繋アルミナズ此項戦捷ノ結果依リ自ラ他条約國民シテハ

實際強大ノ

権力ヲ振ヒウ、アリ又振ルヲ得可シト雖此場力

對シテハ朝鮮ハ勿論之ヲ抑遏スルノ権アリト謂ハルベカラズ

而シテ他ノ条約國ニ於テモ亦均シク之ヲ牽制スルノ權利ト實力

ヲ併有スルモノナリ顧ミテ露國カ朝鮮ニ於ケン國勢ハ我日本

カ同國ニ有スル利害ノ關係ト西ナカク最も深ク而カモ最も及

對ノ地位ニ立テリ他各國ニ至テモ日本ノ権力ノ伸張ニ由リテ

以テ自ラ裨益スル處ナケン假令益スル處アリトスルモ人情ハ

獨リ日本ノ專權ヲ快シトセサル可シ於是露國ハ之ニカ首動者

トナリテ朝鮮ニ於ケル日本ノ権力ノ伸張スルヲ掣肘沮遏セシ

ト他各國モ亦將ニ其祖ヲ左ニセシテ強ト疑フ容ルベカラザル  
ニ似タリ情勢ノ至ルトコニ其極遂ニ日露間ノ關係ニ大破綻ヲ生  
スベシ此危機一旦爆發セハ露ハ少クモ佛ノ援助ヲ得清モ  
亦之ニ加ルナラシテ他國ハ之ニ德義上ノ應援ヲナスナラシ  
當是時日本ハ或程度迄ハ米國ノ應援ヲ得可ク或ハ  
英國ノ好意ヲ受ルヲ可ト思フ其極度ニ迫算シテ  
能ク此二國ノ應援ヲ得ヘキヤ否ヤハ此ニ頗ルハ豫料シカ  
キモノアリ然ラハ則當今ノ勢愈日露ノ關係一旦整  
告タルニ至ラハ我日本ハ究竟獨力以テ露佛清ニ對シテ  
情ナカニ可カラズ

今や日本ハ千戈甫メテ戦ミ瘡痍未タ癒ヘズ此時ニ當リ再び  
他國ト戰端ヲ開クハ勢ヒ最モ不利益ナル地位ニ立テリ假令事  
情ノ迫ルモ兎ニ角經濟上ニ兵力上ニ日清戰爭ニ依リ  
受ケタル結果ヲ修補スルニ六十年ノ星霜ヲ要ス可ク折目下戰  
端ヲ再開スルノ時機ニアラサルヲハ我政府ガ遠東半島ヲ  
返却スルヲ決ミタルヲ見ケモ知ン可キノ一想ヲニ今ヨリ新占領  
地ノ制度ヲ立テ海陸軍ヲ擴張シ新日本ノ國力ヲ充實スル  
等善後諸般ノ要務ヲ整理スルニ六十年ノ星霜猶甚ク短  
少ナルヲ思フ政府ハ既ニ開戦ノ今日ニ不利ナルヲ知リ霞佛  
独ノ要求ヲ容ヒタリ然ラハ今ヨリ六月ノ後ハ兵ヲ動カスニ於テ

更ニ一層ノ不利ヲ感スベキヲ疑ナキナリ然ルニ歐國ハ今ノ日  
 本ト戰端ヲ開クヲ以テ甚シキ危機ノ虞アリト爲サルベシ何  
 トナレバ彼ハ既ニ其決心ヲ以テ海陸軍ヲ幾カ力運動シテ今ハ  
 軍裝既ニ整ヒ旦夕進發ノ命ヲ待メモノ如クナレバ此際彼等  
 シモテ其營所ニ退避躊躇セシムコソ却テ手ヲ不沙汰ノ有  
 様ナラニ更ニ顧ミテ歐洲ノ形勢ヲ察スルニ佛ハ猶未タ露ト  
 離スル獨ハ左右ノ敵國ニ款ヲ通セント拮据中ナリ由是觀之  
 ニバ今日ノ勢殊ニ露ガ東方ニ力ヲ伸ブルノ防衛トナル可キモノ  
 ナシ況ンヤ新帝ハ年壯ニ氣鋭ニシテ國歴未タ富マセラシサ  
 ニ其責任ノ重大ナルヲ覺ラシサレノミナラス却テ事ヲ好ス可

キハ天性ノ然ラシムル處加之前年日本ニ於ケル遭難事情  
ハ新帝ノ即位ニツキ一層著シク皇帝政府共ニ臣民ノ  
腦裡ニ浮ヒ来リタルヲ疑ナカルベシ蓋シ露力年末東洋ニ  
於ケル日本將來ノ傾勢ヲ察シ務テ我歡心ヲ得ルニ汲々  
ラサリシニアラスト爲民大津事件ハ不幸ニ露國官民ヲ  
シテ其日本ニ對スル目的ヲ達シ得ヘキヤ否ヤニツキ一大疑  
團ヲ生セシムルに至リ爾ク當時露政府ハ實ニ日本討伐  
ノ決心ヲナシタルモト再來露力日本ニ對シ抱持スル意向  
如何ハ暫ク措キ今固金州半島ノ讓與ニ関シ斯クミテ  
蹈ハシデ及對ヲナシタル以上ハ之シカ爲メ侵蝕ヲ被ムリタル

將來。事多<sup>ニ</sup>變<sup>ニ</sup>對<sup>ス</sup>ん關係上變遷ヲ来スヘキ事多<sup>ニ</sup>ヨリ  
暗悟ノ上ノ一ト推斷セザン可ラス假令其決心ナシトスんモ其  
結果タル日本ヲシテ露國ヲ離シシムン一前ニ幾倍ナルヤ  
ハ想フテ知ベキ耳然ラハ則テ其結果トシテ日本ハ勢カシ  
英ト親ク露ニ疎シ露モ亦日本ヲ遠クンノ念ヲ生シタリト  
推察シ下<sup>ニ</sup>大甚<sup>ニ</sup>キ誤リナカルヘキヲ信スんナリ

露國現今、地位大畧太<sup>ニ</sup>如シ而シテ露國  
對<sup>ニ</sup>露國準備ヲ整ヘタリ露國ハ今日日本ヲ  
露國ヲ不利ナリトスルヲ知<sup>リ</sup>テ露國ハ日  
本ノ將來恐<sup>レ</sup>ルヤカトナル一ヲ知<sup>リ</sup>

故に今にシテ美日東ノ力ヲ城殺ニ多ク得  
ニシバ少クトモ將來ニ向テ其勢力カリ  
増長ニキ、原料ヲ剥キ一念自ニ  
根據ヲ牢固ナラシムルニ是事ノ可キハ  
勿論ニシテ今や其ニ如美に中ニ以テ實ヲ  
發見セシト爲シ長ニモノナリ、實ニ露ハ  
其地中海艦隊ヲ壓制シ派シ、北海  
艦隊モ亦之ヲ東洋ニ廻駛セシ、  
津藩ニ集メタル陸軍兵五万又オランダ  
軍、調遣シタル陸兵五千人、孰レモ皆



既ニ近海アリト抑モ彼ハ金刻ノ割  
讓ヲ阻得シ首尾能其目的ヲ達シ  
タルヲ以テ其船艦軍兵ヲ引上ケ其  
原駐地ニ還ル可キヲ專見スルハ比ヨリ  
六七ヶ月俟ニ之ヲ其儘ニ撤置セリナラ  
ン或ハ假令其一部ヲ引掛掛フトス  
ルモ東亞ニ於ケル軍備ヲシテ全然旧態ノ  
状態ニ復スルヲナカルベシ

夫レ露路ヲ東洋ニ於テ一不統水軍港  
ヲ有セントスルノ念ハ未タ當テ須臾モ其

懷ヲ離レサルナリ。吾々露路ハ其版圖内ニ  
不結氷港ヲ領有スルハ國トシ億千ノ人  
口ヲ有スル大國ノ主責任トシテ又天職ナリ  
ト稱ヘ朝露ノ邦トボルトナザレフハ正當  
之ニ依據スルヲ得ルモノナラフハ言ハレ  
界モ亦其利害ノ關係アリ。觀衆ニ  
テ一朝事アルノ日ハ露路ハ其然ナリ  
ト望ムルモノト思フ故テ性チサルモノ  
妙シ而テ露路ハ又目レノ計トシテ陳一  
之ヲ平ニ入レント欲スルノ理由アリ。何ト

ナレハ彼西伯利亞大鉄道、竣工ハ愈  
迫テヒ我ニセトナリ然ルニ一市ニ  
於テ適一島ノ陸國ナリ軍港ナリ水  
陸ニ便シテ其用リ收ム能ハス故  
是年露路ハ近ノ概念ニ乗シテ  
之ヲ取リ以テ大ニ經營スルトコト  
アルモナリ

彼ヤ是ヤヲ念モ考フル所ニ平和回復、  
後ニ至ルモ露路ハ兵備ヲ其心ニ爲シ  
五年一市ニ於テ支那ニ向テ意ニ東

半思返還ニ関スル周旋ニ對シテ較  
酬ヲ施請スルノ後猶トナシ一市ニ於テハ  
日本ノ朝多輝ニ對スル是年勳ヲ注視シ  
出来得ル限リハ日本ノ勢力力ヲ朝多輝  
外ニ及ビ一介ニ及ビテ及ビテ其私  
事ハ見テテ前陳ノ如リ日朝ノ關係  
ヲシテ單ニ結ナル獨立ト爲ト  
關係ト立テ居テシムルヲ得んモノト  
假定ス可シ今若シ露路ニテ其野  
心ヲ逞フムルヲ憚ラサントセバ日

是端ヲ世後をモ云ハ支那ニテ下キ  
セシムルモ云ハバルヤリニ於ケルヒトモ  
云、策ヲ函演スルモ皆易ナルノミ  
能露ハ英、嫉妬キテ知ルカ故ニ  
素ヨリ安善ナル以安良ノ世後見スル  
近ハ姑リ正當情理ノ在ル所ニ依テ違  
ト来ルモノト假定セサレタリ

夫レハ、如ク露ハ朝鮮ニ勢力ヲ張  
ラントシ而シテ日本ハ如何ナル事情アルモ  
之ヲ露ハ官スガ依テ、放任スル能ハ

バトセバ其結果ハ日露路、衝突トナリテ現  
出スルヲ免レサル可シ、但此、衝突ハ如何ナル  
ニ合ヒテ起リ来ル可キヤ想像シ得可  
ラサルニヤナリトモ、今茲ニハ早晚衝突ト  
至ルヲ予知スレハ可ナリト信ス

備比衝突ノ結果ハ如何ト云フニ日露路  
此路ヲ干戈トシテ決スルニ至ル可キ乎、又  
一市ト朝鮮ヲ介在シテ他ノ一市ト戦フ可キ  
カ、或ハ又他ノ市法ニ出ツル可キカ、然ルニ又  
ト是凡支那に必ズ此橋ト乗シテ日露ノ

及對立タシテ一國ヨリ明ナレハ  
露落佛對日來（或是近ハ）トナレ可キ  
モノナレ凡要スル大破烈心至ラズレテ  
落着スルナレ而シテ其結果ハ日露路  
而必ハ各其希望ノ全部ヲ失レト主張シ  
是然ル能ハサレ場合ハ露路少クモ元山  
以北ノ土地ヲ取ラセト云ヒ日米ハ金山ヲ  
所有ト爲サレト云フナル可シ其餘ハ他  
必ハ所ナク之ヲ取ラセト云フカ將又他  
者必ハ朝鮮ノ分割ニ及對立ナカ  
卑見ニ戸ハ

米必ハ朝露鮮ニ日未ノ國權、擴ルヲ  
蟻視ニ毛ノアヲ久々却テ之ヲ隱然  
擁護ニ十レ可レト雖凡一歩ヲ進メテ朝  
露ノ存亡ニ關スル場合ニ至ラハ恐クハ  
日本ニ毛露ニ毛反封スルヲ又英毛日  
本、朝鮮ニ年ヲ俾メハ一獻ハサレ毛露  
元山則チ不沈氷港ヲ与フルハ將來ノ  
關係ニ餘リ緊切ナル景、海軍、及  
亦又之付之ニ反封スルヲ毛露ニ對シ  
西一毛力朝露ヲ分取スルニ至ラハ彼ニ毛



其一部ヲ取らんを然ナリとし刀折  
失盡クルニアラサレハ到底止ムナカルナリ  
清ノ事ヲ其々分ケ前ヲ受クナキ充  
分ナルクレームヲ有スルモ恐ラク之ヲ安見ト  
スル事能ハサルナリ、英米獨佛ノ諸國ニ  
至テハ之レヲ割據ノ儀ト云ハルベキ充分  
ノクレームナキヲ故ニ假令指テ鼎中ニ  
添タルモ到底食ムベカラザルノ瘡肉ヲ得  
ルニ偏キスレテ其饑饉ニ充タムニ足ルベキ  
一箇ノ美肉ヲ分テ望ミナリ之ヲ得テ

其穀ヲ受テシヨリハ寧ナク之ヲ取ラズシテ  
其名ヲ潔クスニ如カサルナリ、  
其國ハ何モ之ヲ分取セサルノ同意ニ  
其法果ハ遂ニ至リシテ、  
勢力ノ保正ヲ賴シテ、  
瑞西、白耳、義等  
如牛中、立名トシテ、  
至ルベシ

抑モ日本、美クハ各々、  
國トシテ、  
一旦朝鮮  
ト稱シ、  
可クナル、  
興寧、  
端ヲ設キ、  
終ニ兵ヲ  
用ヒ、  
勝リ、  
割シタル法、  
果トシテ、  
朝鮮ニ而テ、  
其土地、  
割讓ヲ要求スルアリトセン、

其戰勝國、爲人所望、在正し少理  
項ナルモセ日露路、自う其分前ヲ取ル  
非スレバ之ヲ默認スルヲナカレ可シ、然レモ  
日露兩國ト戦フ、戦事ト依ルト平和ト  
段ト依ルトヲ断ラズ、是モ朝敵ノ完全  
無缺ヲ害スルハ前陳ノ如ク、是  
は國ヲ中立國ト爲ムト至ラント大是  
ノ端、麻痺臆測ト過キスト雖モ  
安否、際情勢ノ結果トナシ中々ト雖  
遠キニアラザル可キヲ信スナリ

仙傳集卷之八

今後朝辭、之托<sub>レ</sub>ル土波瀾ノ結果ハ  
大畧在、如ク終<sub>ニ</sub>結<sub>ス</sub>ルナリト想像ス  
可シト蓋<sub>ニ</sub>氏<sub>ノ</sub>世<sub>ノ</sub>界<sub>ノ</sub>形勢ハ時々刻々変  
遷シテ止<sub>ズ</sub>目<sub>ノ</sub>故<sub>ニ</sub>漠然望<sub>ミ</sub>テ此  
想像<sub>ニ</sub>、之属<sub>シ</sub>タ<sub>ル</sub>ニハ将来時<sub>ヲ</sub>確  
シ、悔<sub>ヲ</sub>報<sub>フ</sub>ノ是<sub>レ</sub>ナシトセ<sub>ズ</sub>依<sub>テ</sub>太<sub>ノ</sub>  
惘<sub>然</sub>ノ如<sub>キ</sub>程<sub>ニ</sub>強<sub>キ</sub>ト抑<sub>ス</sub>人<sub>ノ</sub>我<sub>ノ</sub>日本<sub>ニ</sub>  
到底朝<sub>ニ</sub>辭<sub>ス</sub>ト托<sub>テ</sub>露<sub>ト</sub>唯<sub>ニ</sub>推<sub>テ</sub>決<sub>ス</sub>ル<sub>ノ</sub>  
覚悟<sub>ナ</sub>ル可<sub>ク</sub>久<sub>シ</sub>唯<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>危<sub>ニ</sub>檣<sub>ノ</sub>爆<sub>ス</sub>北<sub>ノ</sub>後<sub>ノ</sub>  
時機<sub>如何</sub>、我<sub>ノ</sub>利害<sub>ニ</sub>、之家<sub>ノ</sub>大<sub>ノ</sub>關係<sub>ヲ</sub>

有人觀之、此時機を失ふと後十年以  
内少くも五年以内には到着するものとせば  
其我國に不利ナルヲ前段既に述べ  
トコロ也、之に反し、露路ハ之ヲ以テ奇貨  
と爲シトナシ、極に築シテ進ノル所ア  
ラフヲ思フモノナリ、然レバ我國ノ當  
計を以テ後數年百ノ方針ハ可成  
衝突ノ時機ヲ枕邊迄セシメ、結局我が  
機十分熟シタルノ日、於テ蹶然起テ之  
レト馳騁スルノ策を出テサレ可ラズ、則チ

今日ニ在テハ暫クク寄クモ觸ルモノ至  
義ヲ配ルニアリ 志十カクモ然レモ寄クモ  
觸クモノ至ニ義ヲ至フハ決シテ卑座無  
爲ノ至ニ義ヲ解ス可ク又朝野ノ改革ハ  
先ニ南今暫クハ此調子ニテ續ケ  
ハクテ日本ノ面目ニ上必要ナリ 要ハ  
唯露ト義ト向ヒニナリナルニ下リ然  
レ凡テ予ハ以爲ク我々名ヲ絶々封伯之朝  
野ノ独立ヲ擁護スルノ地位ニ立テ又  
其國政ノ改革ヲ完成スルヲ期スル

ハ智者ノ言ニトシテ：アラスト 誠ニ思ハ  
朝氣鮮ノ独立ハ支那ト聞戦ノ以實見ニ  
供シタルモノトシテ 独年以テ之ヲ改革ヲ  
實見ヲセント言ヒタルハ比口實見ヲ實見  
演ズルノ道具トナシタルニ過キヌ然  
ラば尙朝氣鮮ノ独立成ルモ成ラザル  
氏改革ハ運ヲモ運ハサルモ土勢上  
杜テ決シテ日本ニ痛痒ヲ与ヘサルモ  
ナリト、点ニ疑フニ洛何ヲ又朝  
氣鮮ニ特物ト爲サントノ希望ヲモ





取<sup>ル</sup>テ以テ良策トス此方針ヲ以テ  
去

一政界在上而政治ニ美向ヒト成ルヲ

一辭一ケサル可ク

一朝與<sup>ル</sup>我<sup>ニ</sup>我<sup>ノ</sup>商業ヲ保護ス

一勵<sup>シ</sup>テ經濟上ノ關係ヲ安密ナク

ニムル

此方一項目<sup>ノ</sup>目的ヲ達セシメ日本政府

對<sup>シ</sup>韓<sup>國</sup>策ヲ定メ先ツ之ヲ先決ニ

示シテ彼等が臣民上ノ態度ヲ

求ノ且ソ獨得露<sup>ノ</sup>デモ沈泊<sup>ト</sup>ナ  
明<sup>ケ</sup>テ其公明正<sup>ニ</sup>ナル<sup>ヲ</sup>主<sup>ト</sup>報<sup>ノ</sup>韓<sup>ノ</sup>  
事<sup>ハ</sup>今日<sup>モ</sup>既<sup>ニ</sup>他<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>黙<sup>ニ</sup>忍<sup>ビ</sup>ル<sup>ヲ</sup>  
日本<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>任<sup>シ</sup>テ之<sup>ヲ</sup>行<sup>ハ</sup>シム<sup>ル</sup>ヲ<sup>ハ</sup>口<sup>ニ</sup>意<sup>ナ</sup>  
セシ<sup>テ</sup>又<sup>ハ</sup>米<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>如<sup>キ</sup>井<sup>ノ</sup>好<sup>意</sup>ヲ有<sup>ス</sup>ル<sup>ヲ</sup>  
他<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>比<sup>ト</sup>更<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>我<sup>レ</sup>ト<sup>ハ</sup>和<sup>ス</sup>ル<sup>ヲ</sup>  
ハ<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>衝<sup>ニ</sup>突<sup>ク</sup>柱<sup>ト</sup>爲<sup>シ</sup>ル<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>名<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>ヒ<sup>ト</sup>  
地<sup>ニ</sup>位<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>タル<sup>ヲ</sup>力<sup>ナ</sup>サル<sup>ヲ</sup>又<sup>ハ</sup>  
實<sup>ニ</sup>米<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>我<sup>レ</sup>カ<sup>ハ</sup>政<sup>ノ</sup>畧<sup>ヲ</sup>知<sup>ル</sup>  
廿<sup>九</sup>日<sup>ハ</sup>陽<sup>ノ</sup>介<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>位<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>獨<sup>ニ</sup>逸<sup>ニ</sup>毛<sup>ノ</sup>達<sup>ス</sup>

一五 月 羊 國 日 本 公 吏 官

立タシト欲セハ日ホハ形跡ニニ断然某  
野心ヲ絶テ極メテ公明正気ヲ力メ  
廿山カク久畢竟目ホカ從來廿對  
韓政界ニ野心ヲ有ル一事ハ實  
ニ百般困難ノ源トシテ將來ハ是レ  
或ハ一綱根トナルモヤレ朝敵ハ  
既ニ独立ノ國ナリ之ヲ獨ニセルト欲ス  
ハ國ヲナシテ是レ故ニ此ハ朝敵ハ  
廿對スルハ閑港所ノ中ニアレ院鐘ノ  
了ニヤレ鉄道電信ノ事ニアレ我々

於テ利害ヲ得レト欲セハ我ハ單獨ニ  
朝鮮政府ニ拘リテ決ツテ求メス  
之ヲ以テ事業ハ朝鮮ヲ文明ニ  
導キリノ道具ナルハ我等先進者ノ  
義務トシテ朝鮮政府ニ勸メ出  
シ得ヌバ外國人ヲ以テ之ヲ爲サシム  
可シト、誠意ヲ以テ國代表者ニ  
提議ヲ爲サハ列國連シテ之ヲ爲サシム  
朝鮮亦タ能ハサル可シ、此見解ハ  
當國ニ有ル我地位ノ重キニ認メ自

然他國より連して朝貢せしむるに  
得たり。此、如く是れ外王ノ尊  
嚴ヲ受ける事と上座と置かれし事  
實とあり。其目的ヲ達するを得  
斯くして既に成る、後ハ日米人ト西洋  
人ト自由競争トナリ遂に日米人  
先取トナルベキヤノ懸念ナキコト  
ナレバ此國と和せる一般ノ本意を就  
ハ自由競争上西洋人ハ決して日清  
人ト勝る能ハサルヲ前十年ノ

歴史ニ於テ明<sup>著</sup>ナルノミナラズ此ノ理執、自ら  
然ルカキモナリ、蓋シ西洋人ニ在テハ  
凡百ノ事、新朝<sup>新</sup>舊<sup>舊</sup>ノ別ナキ、其<sup>其</sup>縣<sup>縣</sup>隔<sup>隔</sup>ス  
一遠<sup>遠</sup>キニ過<sup>過</sup>キ朝<sup>朝</sup>野<sup>野</sup>人<sup>人</sup>ニ到底<sup>到底</sup>之<sup>之</sup>  
中<sup>中</sup>ニ由<sup>由</sup>延<sup>延</sup>ス、一能<sup>能</sup>ハサル<sup>ハサル</sup>ナリ、又鉄<sup>鉄</sup>  
道<sup>道</sup>電信<sup>電信</sup>、鑛<sup>鑛</sup>山<sup>山</sup>等<sup>等</sup>、如<sup>如</sup>キ事業<sup>事業</sup>ニ於テ  
本邦<sup>本邦</sup>人<sup>人</sup>ハ西洋人<sup>西洋人</sup>ニ一歩<sup>一歩</sup>ヲ輸<sup>輸</sup>スル<sup>ル</sup>怨<sup>怨</sup>  
ナキコトヲ知<sup>知</sup>ルモ、是<sup>是</sup>ニヨリ、新政府<sup>新政府</sup>中<sup>中</sup>一  
番<sup>番</sup>貴<sup>貴</sup>重<sup>重</sup>シテ重<sup>重</sup>シク見<sup>見</sup>ルモノナキ、所<sup>所</sup>以<sup>以</sup>  
ニ今<sup>今</sup>例<sup>例</sup>ハ巴<sup>巴</sup>里<sup>里</sup>和<sup>和</sup>是<sup>是</sup>、皆<sup>皆</sup>皇<sup>皇</sup>帝<sup>帝</sup>ヲ政府<sup>政府</sup>

有りハ客ノ財と貨とを以テ之に十  
分ナル保護金ヲ与フルトモ兎ニ角  
競争ト全勝ヲ占ナレムルノ方策  
ヲ決行スルコソ政府ノ義務ナルベシ  
畢竟竟一日未ハ端を現存及び未  
来と稱セル望係ト是レ位ノ墮落ハセ  
カレ可クハ惜哉我日本人ノ多ク其  
性質利利ナルニモ拘ラズ度固重狭  
隘ニシテ遠大ニ事業ヲ經畫スルノ  
才器ニ乏シク其爲ニ所概不規模



缺陋政府亦夕僅々數市田ノ人全額ヲ  
使用之ニモ支費困頓會計當ラサルヲ  
是レ事憂ヒ事態ノ大端ヲ見ル  
餘裕ナシ又優者ヲ見テハ到處敵太  
可ク其モト思ふ事ナリ自家憤懣ノ  
如クテ察モ之レ徒勞也又可ク其モト  
断念シテ強レト自暴自棄之類ニ  
ノ所爲ニ出テテ然レ其例ヲ見ルハ  
慨嘆ノ至リト謂フ可シ日本未レ之  
前ニ於テ自由競争上西洋人ニ

勝つ能ふと云ふ事今列國競争  
博覧の如く如何に我が國を維持  
せしむべきに然る則ち我朝自ず  
對する方針ハ官事と下し和事と下し  
私事と下し獨り物種を得んば何  
事と云ふまふと思惟せんモノか如キ  
例キアル意を求地中ノ極下留  
へキ之志ハ朝露鮮政府ノ例  
官事と云ふ日本ノ多致ヲ巨ノ  
之ルハ来りハ必要ナレ民衆ヲ日

才人ト爲カシル可クト爲ラ  
 轉々局  
 量ノ狭キヲ表スルニ似タリ抑モ朝  
 野政令ノ變更官ニシテ自由競争  
 上日本程適任者ナキハ利シモ人モ  
 之ヲ忍ビ居ント云フナリ然ラハ孰モハ  
 獨逸人モ聘ス可シ佛人モ用ス可シ  
 シ米人モ如キハ亦モ有利無害ノモノ  
 ナリ要其金品ヲ控制スルニナリ  
 我利益ノ一部ヲ分ク彼等ニ事ナ  
 啗ハシタル果畢竟他日抑ケル我慾

望より即ち之に凡の好餌とて供ふをノ  
ナリ美し然るに之島人根性  
現るに偏僻自ら拘し飽くまで他  
排し之を獨り壟斷ノ利ヲ私せし  
欲を如キアムバ終る我と現と風俗  
人情地理歴史其他文化ノ關係上  
於テ有る所ノ事多シ地位として他  
列國と亦大抵に殊る所を以テ  
毛儀を失フノ不幸に陷るト云ふ  
昨心より考ふるに如中流にヤ世界

今日ノ風潮ニ逆ラセ朝日輝クニテ馬  
車馬ノ如ク眼ノ如ク例ニ西復華ニ如ク  
日本ノ外ニ世界ヲ見セシメサニ如キニ力  
針ヲ如クモアハ目ニ如ク田畠ニ粟  
海ニ毛トアハ目ニ如ク如ク其目  
如ク連テ如ク得ニヤ如ク路ニハ字  
如ク強テ如ク無比ナク獨氣如ク至萬  
身ノ上ニ立テ一程如ク果ノ如ク似テ如ク  
人心ヲ支配シ其境ニハ如ク所如ク北ニ  
如ク在テ如ク西如ク迴如ク渾如ク振如ク溢如ク如ク



此ヲ未タ必クシモ其利害ヲ同クセサル  
ヲ學ビテ先ク權勢ノ平衡ヲ維  
持シ而シテ後始テ之ヲ能ク互ニ抑制シ平和  
ヲ保ツヲ得可シ而シテ此平衡ヲ維持  
セシメ日露路日英、美、ハ露路英ノ關係  
定ムルヤんヲ得、又昂午之ヲ定ムルノ時  
機ハ實ニ我國中東亞ノ全局ニ對スル  
方針ヲ定ムルノ時期ナリ夫レ我國ト  
英露路ノ關係ハ今回戰事ノ結果ト  
シテ既ニ固著ス定メタルモノ、如クナレバ

深ク過ぐたれども此二国ノ経歴ヲ觀ミ  
遠ク將來ニ於テハ東亞ノ形勢ヲ考フ  
ハハ未タ容易ニ知テ方針ヲ決ムル  
ヲ能ハサレナリ抑モ今回ノ暴動ノ間  
ヲ稀有ノ大事ニ遇ヒシハ此際ニ際シ  
他国ノ如ク自ラ方針ヲ定ムル  
ハ此ニ於テ大影響ヲ有スル事ナリ  
理ノ當リ然レドモ此ニ對シテ  
一事ヲ學ブ自ラノ方針ヲ決セリハ  
盡ニ未タ輕率ナラズ免レズ今ヤ



新國に斬り、海軍所、此に去る、交  
所、此に臨み、タル、ミ、ニ、シ、テ、此、際、案  
断、他、手、断り、注視、之、ノ、時、期、ナリト  
爲、人、海、に、至、し、ハ、朝、露、一、ト、ナ、ル、我  
政、界、ノ、物、と、案、前、之、人、觸、る、人、至、る、我  
取、ル、必要、アル、事、候、之、ナリ

名 称	井上 馨 文 書
標 題	源 位 控 -

分 類 番 号	673
	15

16

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	364623
------------------	--------

電信和

秘  
卷

264023
16 (123)
昭和27年 月 日



電信扣

郵船會社代官船朝鮮政府所屬頭等  
 客室ニテ明十日午前六時仁川出帆馬尾直  
 行上陸スル故此度限リ本船可地寄港  
 時許リ日本郵船會社本店ニ與ヘル  
 様請配出アリタシ

廿八年六月十日午後三時五分發

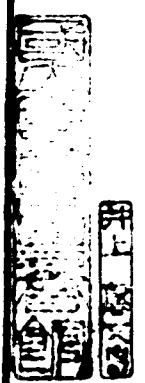
東京

大森大八

仁川ニ於テ

井上公使

卜



市出發後異状ナシ魚先中ハハ玉玉ヨリ

取使リ送リ解職シ差止メラレタル由

獨逸領事ハ三百萬圓ノ貸借約束シ一見

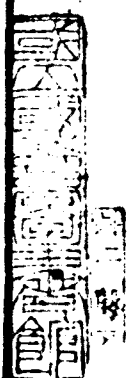
シタシトテ朝鮮政府へ申入タリ

佐々柴近日歸朝ス可シ

朴泳孝ノ預ケ金二萬圓ハ急皆銀所

ヨリ引キ出シタリ内五千圓ハ上海へ送ラレ様

ト省



子ナリトノ義ニ付所ハ二便ノ旅費ナラセトノ

疑ニアレドモ詳カナラヌ

當日公使ト主トノ預係ハ種々浮説アレドモ

衝キ止メタルコトナシ

廿八年六月廿四日午所四時東京城發

京城

杉村

馬廻

井上公使

六月十四日午所七時馬廻

接新

今日午後二時無事着京

様下某朴永孝ノ家ニ礼入セシ説ノ事實十

ニヤ等學戒方内田領事ト協議ノ上嚴

重ニ取締リマシ

大正六年六月二十日午所五時五分發

井上公使

修木山經公使

卜





電受第八〇〇號 只幸有

三十二日午後七時五分  
二十六日午前一時九分着

櫻間某酩酊、上朴泳彦部、於テ乱暴シムルハ事實ナリ  
右ハ早速取調ヘ領事ヨリ退韓ヲ命セリ猶ホ将来ノ取締  
リニ関シテハ目下領事トモ協議中ナリ右ノ件及他ノ事  
モ本日外務大臣ニ電報セリ

杉村臨時代理公使

井上特命全權公使

昨日参内兩陛下、拜謁ノ上、一切ノ事情ヲ  
奏上セリ

現在京城守備兵ハ漸次知ノ通り後備ナレ

シ以テ到底常備ト入隊シ要ス可シ就テハ

尚別讀キ守備兵ノ要否ハ内部大臣一御相

談ニ成見非共入隊トノナレハ大君臣ノ命

ヲ受ケタル上外部大臣ヲ經テ時々我政府へ

卜務少自

公文ヲ以テ依頼スルノ必要トスル者官ハ  
我等ニ付熟ト村田部心算リ被カシム必要  
トコトナシハ所安ノ兵數在リ場所モモ  
談ノ上解セテ通報アル

渡氏中何カ企テ居ル様様アリト事實探教ス可シ  
所至急返電マツ

大正六年六月二十二日午後

安城

杉本ハ理公使

井上公使

明治三十八年六月二十七日發

櫻間有馬ノ件ニ因スル電信受取リタリ右ハ退  
韓ヲ令スルニ先チ刑法ニ因リ一應要罰ヲ要ス  
ル義ト存ス其邊ノ事ハ領事ニ於テ如何ニ電  
置ヲ執リタルヤ取調ノ上回電スヘシ  
本浦ハ鎮南浦ノ件ニ付テハ井上公使トお話し  
右目下ハ本浦中ノ事モアリ未タ決定ノ運ビ  
至ラザルハ執原ラズテ市港ヲ決行スルコトハ朴  
泳孝トモお話し上今暫ク猶豫スル概取計  
ベシ

西園寺

松村臨時代理公使



264023

16-1-7

昭和7年1月4日

共年六月

二十九日午後三時三十分京城發  
三十日午後五時十分着

櫻間有馬ノ件領事ヘ向合セタル要刑法ノ要分ヲ  
加ヘス直チニ退韓ヲ命シタル由ナリ委細ハ既ニ領事  
ヨリ報告セシ由ナリ

松村代理公使

西園寺外務大臣

外務省

金嘉鎮申出ノ郵便會社約条變更ノ件  
ハ新約種容ス可ラス依テ一面ハ最新約定  
ノ成立ニ至リ昨年主筆一銀行ヨリ金貸借  
ノ事情等精ハシク協議ニ至リ或人  
ヨリ朴泳孝一申合メ同氏ノ意中リ以テ  
變更セシメサルニ取ラレタシ

廿八年六月二十八日午所ニ付發

夕川  
孫  
補

舟上  
公使

多  
行  
打  
心  
理  
公  
使

電受第七九七号廿年六月

二二日午後四時五十分  
二五日午後十時五十分

不道延考

左ノ電信ヲ齋藤ノ求ニ依リ閣下ニ轉電ス但シ朴泳孝ノ  
申スニ王妃ト露西亞公使トノ往來頻リナリト云フコトハ充分  
ニ探偵スルヲ得ヌ思フ近來王妃ト朴泳孝トノ間隔離ノ兆  
ルニ依リ朴氏ハ露公使ニカヨケ我カ公使ノ應援ヲ求ムル為  
メナルヘシト思ハルノ杉村

朴泳孝曰ク王妃ト露西亞公使トノ往來益々頻リナリ誠ニ困  
リタムモノナリ井上伯再ヒ来ラシヌコトナラハ誠ニ致シ方ナシ何  
卒地位ト名望トアル新公使ノ至急来ラルコトヲ望ム

朴ト王妃トノ間近來餘リ面白クナキ模様ニテ義和君日

外事省



本行ノコトヲシテ決行シタム如キモ亦兩人不和ノ新タナル媒  
ハトナルヘシ併シサカラ朴ノ話ニ内閣ハ愈々一致鞏固ナリ  
ト又朴ト魚允仲ト間モ亦素好都合ト見ヘ朴ハ已レ  
ノ股肱トシテ魚允仲ヲ徐光範ノコウニ算ヘ居ル  
程ナリ

井上公使

264023

16-1-10

昭和27年7月4日

外務省

電受第七九八號

(明治二十八年六月二十五日午後一時三十分發)  
明治二十八年六月二十五日午後一時五十分着

義和宮ハ日本特派大使ニ任セラレタリ地方制度ノ改正奉  
日役布相成レリ義和宮ノ任命ニ付王妃ハ大分異  
議ヲ唱ヒラレタル由ナルモ内閣論議決テ裁可ウヒタル  
ヤニ聞ケリ

杉村驛時代理公使

井上公使



外務省

電受第八〇八號  
(明治二十八年六月二十六日午時三十分發)  
明治二十八年六月二十九日午時一分著

井上公使、左、自、

廿二日、電信にて成申越、件昨日朴泳孝一面  
 談したる処、因大臣、追て朝鮮兵、整頓スル迄我カ  
 兵、駐屯ヲ望ム旨申出タルを以て、内閣會議ニ於テ  
 異論起リ、最モ國王ニ我兵、駐屯ヲ好マセウレサルヤコ  
 漏レ聞ケリ

急電

板村代公使

西園寺大臣

手記

貴客之通あるを中事

亦り内政を以て之を論じたる為事なり

又、こゝに疑問を起し、其の意を述べ

帰国後、冬新なりと云ふこと

予備兵の件、朴氏と云ふ内政ノ上ニ至

何れ迄電り待つ

同氏の子に流れて、何れナリシヤ、女官ヨリ

不車魚園二片お下才々信舎

来々トシテ 金宗子 漢一 御談しアリテモ 且

元平六月初九日 本年 秋 夕 校

月 上 乙 巳

新 城 杉 本 氏 時 代 聖 王 使

我兵駐屯ニ列スル迄電報手セリ村氏  
 内閣ノ異論ヲ纏メ且王王ニモ勸告シ常  
 兵ヲ乞フノ積リナルヤ今一為密談シ遂ニ  
 ラレタシ

又本官ハ彼等與金其他鐵道電信ホノ事

ニ付テモ朝鮮金ノ利便トナル様目下折角

尽力中ニ付此際惟朝鮮内閣ノ一致協和  
 ト

尤ニ必要ナリ

我等ハ極メテ秘密ヲ要スルニ付他方

負其他何様ナル朋友ニモ漏ス可ラスト

本部ト約束し且此電文ヲ朴氏ニ密示シ

親ト内談ス可シ

又貴官ハ顧問官トモ談話無用

廿年六月二十日

井上公使

密

杉本代理公使

暗號

外務省

電受第ハ〇七號

（明治二十八年六月五日午九時五十分發）  
明治二十八年六月五日午八時一分着

井上公使ヨリ王妃へ献上セヌキ段面ハ何レハ此注文  
おありしや留日韓も仕まり當彼へ段面款数  
数到るもしを甚々不明と付公使へ伺へ上返  
電ア

杉村外相へ

二〇番

不通過

井上



王妃世子宮へ進上ノ段通及ヒ府子類ハ出發  
ノ際御依頼セシ通り如何程宛ニテモ御見  
計ラヒノ上可然御分配アリタシ

不進物ハ願フハ貴官御持參相成リ奉官無  
事歸朝ノ一系、御暇乞ノ際王室年

々御家ノ為メ懇々奏上シタル層々、御志  
レナキ極切望罷在ル、又用事滿次方歸

任ス可しトノ意ヲ奉官ヨリ貴官シ以テ内謁  
ノ上奏上致ス可しト来電セリト電又シ  
持参シテ取所計之レアリタシ

又内謁ノ義ハ余宗漢へ請願談アラハレ  
叶フ可し

大正六年六月三十日

井上公使

多崎

杉本代理公使

# 特別な事

廿年六月廿日東京電 四十九号

本日國分ヲ金外部ノ許ニ派シ近情ヲ問ハシタル処左ノ通り申出  
タリ

昨日内閣大臣ハ入謁シテ王宮護衛ノ旧兵ト訓練隊ト交代ノ  
事ヲ奏上シタル処國王震怒シテ王宮護衛ノ旧兵ヲ廢スル  
コトハ元來朕ノ好サル所ナシ大臣等強テ事ヲ奏上スルハ其  
意ヲ得スト云ハシタルニ依リ大臣等再ヒ旧護衛兵ヲ廢スルコ  
トハ陛下既ニ裁可セラレタルモノナリト奏上シタル処國王益々怒  
リ昨年六月以來ノ勅令若クハ裁可セラレタルモノハ皆朕ノ意  
ニ非ラス之ヲ取消スヘシト云ハシタルニ付大臣等大ニ恐懼シ總

理大臣、遂ニ辞表ヲ捧呈セリ。右ハ金ク王妃ガ閔氏ノ勢力カラ  
回復セシメ、底意ヨリ窺カニ人ヲ以テ露西亞公使ニ通シ其ノ  
根元ヲ固メテ茲ニ出テタルコトナク到底抵抗ス可ナル勢ナ  
リ又近來朴内務ハ昔日ト替リ勢力カラ失ヒタルハ頼ミトナラス  
以上ハ井上公使速ニ御歸任アラサルトキハ此勢ヲ挽回スル  
能ハサルヘシ我國安危ノ機毫髪ノ間ニ迫レリ願フハ此意ヲ  
公使ニ傳ヘラレヨ本日又朴内部ヨリ漢山ヲ以テ申越シタル  
コトモ略々同様ニ唯々今朝ニ至リ國王ノ怒リ稍々解ケタリト  
云ヘリ

倭光範ハ星ニ面会スルコトヲ厭フカ如ク齋藤モ朴泳孝ニ

直接面会スルコトナシ時、浅山ヲ以テ互ニ意思ヲ通スル由  
依テ我レヨリ勧告ヲ入ル、途袂隘ナリ

松村代理公使

西園寺外務大臣代理

只年六月

廿六日午後二時三十分 京城  
廿九日午後二時十分 着

宮中ト内閣トノ間漸ク離隔シテ頗ル難渋ノ様子ニテ  
此レヲ為シ朴定陽ハ辭職セント申出テ朴泳孝大ニ苦心  
シ居ル由右ハ全ク露西亞ノ政界ニ誘ハシ宮中ノ模様一  
変シ此間ニ所謂セイトジンナル者起リテ此レト連絡ヲシ朴  
泳孝即チ日本派ニ及対スルニ原因セシモノト推察セラレ  
シリ昨今ノ勢ニテハ遠カラズ宮中ト内閣トノ間ニ大衝突  
起ルヤモ測リ難シ

杉村代理公使

西園寺外務大臣

外務省

264023

16-1-18

昭和27年7月8日

電受第八一三号

庚午六月

廿八日午後一時三十分發  
三日午前一時三十分着

朝鮮政海近日、変情ニ付キ昨夜及ヒ本日トモ各顧問官ヲ會シ相談、上密カニ現内閣ヲ助ケ焦眉、急ニ應シタノ手段ヲ執ルコトニ決セリ其大要ハ第一、内閣ノ一致鞏固ヲ固ムルコト、第二、警務軍部及ヒ法部ニ堅固ナル人ヲ配布シ他ヨリ動カサレザル様ニ取リ固ムルコト、第三、宮中、同志ヲ求メテ國王ノ御心ヲ離トヘサンコトヲ努ムルコト、第四、宮中ト外國公使ノ間、直接交通ノ出来ガル様ニ取締ヲ為スコト、第五、陰ニ陽ニ現内閣ノ成立ヲ害セントスル者アラハ警告察ノ力ニ依リテ之ヲ除クコト、

第六、雇外國人等ヲ厚ク遇シテ現内閣ニ反對セシメサル  
様ニスルコト等、數個条ミシテ先ツ其方針ヲ朴泳孝ニ示  
シ同氏ミシテ我ニ依頼セントスル傾アラハ各々手ヲ分チテ  
密カニ尽カスル積リナリ但し當館ハ飽マテ中立ノ態度  
ヲ保チ毫モ干涉ノ形ヲ顯ハサズんべし尙ホ昨日来  
ノ模様ハ稍ハ平穩ミシテ総理大臣ヲ除キ各大臣ハ聊カ  
元氣ヲ取り直シタル様子ナリ

京城

杉村代理公使

西園寺外務大臣



264023

11-1-19

昭和2年 2月 1日

電受第八二号

庚午六月

廿九日午前九時五分發  
三十日午前一時着

井上公使へ

守備兵ハ京城ニ一中隊釜山、一中隊元山、一中隊  
合セテ一大隊ノ駐在ヲ依頼スルコトニ内定シタル由  
然ルニ右依頼ハ公文ハ大君主ノ命ヲ奉シ朝鮮外  
部大臣ヨリ我外務大臣ニ送ラシムヘキヤ又ハ拙  
官ヘ送テ送ラシムヘキヤ至急御返電ヲ待ツ

京城

杉村代理公使

西園寺外務大臣

ト 務 官

午後四時四十分

廿年六月廿七日 東京 癸

三十七歳

朴定陽、辭表ハ一旦却下セラシムルモ当人ハ館上辭表ニ  
 決心ナリト又ハ際関氏ジダイシントウ中ニテ総理大臣タラコ  
 コトヲ願ヒ王妃ハ賄賂ヲ入ルモノアリト聞ケリ。○守備兵駐屯  
 ノ依テハ國王ニ於テ再ヒ裁可ヲ取消セシムル付徐光範  
 朴泳孝ノ兩人代ル其不可ナル理由ヲ申上テ漸ク聞届ケ  
 ヲ得タリト聞ク右ノ如ク毎ニ衝突スル勢ナリ朴泳孝ハ内心大  
 ニ困リハ際一時身ヲ退セテ形況ヲ窺フヘキヤト昨夜浅山ハ内  
 話シタル由ナレトモ当館ハ未ダ相談スル方ヲ申サス

朴村代々使

小 務 省

井上全權公傳

264023

18-1-2

昭和27年7月4日

午後十一時

廿年六月廿日景城癸 三ツ着

守備兵駐屯依頼義府大君主、該旨ヲ奉レ  
外部大臣ヨリ我カ外部大臣ニ宛依頼公文ヲ送リ然  
レテ兵ノ数ト駐屯ノ場所ハ今朝癸電ノ通リ但ニ戦  
時組織ノ兵員ヲ望ムト云ヘリ右公文ノ主旨ハ本友ニ於テ  
差支ナシト認ムルニ付キ早便之ヲ轉送スヘシ差支ナキヤ

松村代打云使

井上全權云使

卜 務 旨

廿年七月一日午後五時祭

在席中

村代任公使

西園寺大良

井上公使ヨリ

其、廿、廿九日、外電五通、今、見たり

村内、秘、大、良、左、電、文、ヲ、渡、し、返、電、亦、求、メ、アリ、タ、シ

ト、宣、陽、ハ、辞、表、ヲ、出、し、タ、ル、由、以、際、同、人、辞、職、ノ、秋、ニ、ア、ラ、ス、却、下

ト、タ、リ、ハ、リ



サレタナラハ内閣一同申合セ國家ノ爲メ努力シ合テ一致團  
結シ尤モ必要ナリトス

又閣下モ苦心ノ程推察ス今一時引退シカモ如キ考ヘ出ス  
可ラ何事モ齋藤星ノ兩人ニ眞實打明カシテ際ノ困難ヲ國  
家ノ爲メ非常ニ尽力ヲ祈ル

朝鮮政府將來ノ爲メ目下非常ニ尽力中ナリ結果ヲ得次第  
帰任ス佐々柴兩人モ今朝面会シ事情ヲ聞タリ

王室ト露公使トノ干渉并ニ段氏ノ模様ニ付如何ナル秘

密ニテモ  
お村へ眞情ヲ打明カシ  
成返電アリヌ

山形ヨリ村内部へ求メタル返電ハ此ノ

ナリシヤ略足アリタシ

守備兵ノ義兵トテ好マセラルルナ

ラ、故テ強ヒサル方然ル可シ

又義和團ノ事モ王配ニ異論アリ、是ニ非強

ヒサル方然ル可シ

此後ヨチ一駐劄ス可キ朝鮮公使ハ互ニ意



夕霧

思シ通スルノ尤モ必要ナリ故ニ其人撰ニ付テ

モ此辺ノ注スルヲ要ス

義和親王ハ高ノ取喜回船ニ付已ニ出發セシ

新渡見ニ見ユ果シテ此ルヤ

山電文シ林内却ニ露示シ至急返電請求

メアリタシ

日ハ年七月四日午後

京城

杉本や何云使

井上公使

廿年七月三日京城發 同四日着

本日内謁見ヲ遂ケ井上公使ハ傳言ノ趣ヲ具サニ奏上シ  
タル外國王ニ公使カ告別ノ際述べシ眞実ナル忠告ハ明カ  
ニ記懐シ居ル旨ヲ仰セラレ並ニ國王王妃トモ公使ノ早ク帰任  
相成ルコトヲ渴望スル旨ハ沙汰アリタリ又公使ノ献上物ヲ王  
妃世子トモ深ク謝詞申述べラレ全体ハ極嫌ヨキ方ナリシ迄日  
来宮中ト内閣ノ間ニ起リタル衝突ハ内閣ニテ手ヲ緩ムル為メ  
一先ツ平穩ニ復シ國王ニモ安堵セラレタルハ様子ナリ義和  
君ノ出奔日ヨ國王ヨリ確カナル返答ナキモ同君自カラ急  
カレ由ニテ本日人カ派シテ船便ヲ囑ンセラレタリ

夕 月 斗

松村作理公使

西園寺大良

其地新河通者ヨリ昨日左ノ如ク電教セリ

昨夜王妃内務大臣朴泳孝ヲ捕縛セリトセリハ朴

氏ハ難ヲ辞ケテ仁川ニ逃走ス

軍部大臣申賛善ハ今訓練隊ヲ率ルトリ其行

動更ニ分ラズ至急確教セヨ

又貴官ハ左ノ電文ヲ朴氏ニ示シ忠告ス一し

王宮守兵ノ事モ無理ニ決行リ遂ケレトスルハ不可

ト  
タ  
目

ナリ又此際村氏ヨリ王此ト所突リ起ス如キハ得  
策コラフス深ニ忠告セシ所リ室深ニミコリト所突  
ハ先シサレ又ハ事ヲ真トニ處ニ至ル方此レ可  
し

而ハ此ハ各處宛一モテ候ニ由テ後ハ極  
事ニ及アラハ邊ニ電報ス可シ

本年七月ハカキ  
牛上ニ使

安城  
杉本氏宛

考 考

# ○王妃の跋扈、朴泳孝の逃走

朝鮮京城の近報王妃漸く政權を弄せんとし大に朴内務を疎んずるの色あるを傳へしが昨夜半特派員より達したる急電は左の如く京城の政界是れより多事なるべし

京城七月七日午前十時五十分特派員發

昨夜王妃は内務大臣朴泳孝と捕縛せんとせり由て朴氏は難を避けて仁川に逃走す軍部大臣申箕善只今訓練隊と守る

各顧問官は日本公使館に會して頻りに評議中なり

度支協辦安胸壽、警務使に轉じ申大休は訓練大隊長に高奎黨は宮闕内兵營監督に命せられたり

王妃政權を恢復せんと欲し近來其黨を集めて陰かに計畫しつつあるは既に報道の傳る所なれば朴内務を捕縛せんとするが如きは蓋し此陰謀を實地に施すの第一着手ならん歟電文簡單にして詳細を知るに由なし後報を俟て讀者に報道せん

發行兼編輯人 譚澤連三 印刷人 池田常太郎  
發行所 東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地 時事新報社

上 月 羊 國 日 一 日 官



西島新子

七月七日午前十時分發

朴永孝一派ノ計画ハ破壞サレ朴氏

ハ捕縛セラレテ捕部ニ移サレタリ

朴氏ノ一派ハ逃走隠匿シテ捕縛セ

タルモノアリ人心惶々及米荒（王妃ノ愛カ）

刑カ七罪カヲ得

在車魚園中者ハ何人

昨夜知解人我乃年上後  
感々不

叔<sub>ニ</sub>在<sub>リ</sub>目<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>我<sub>ノ</sub>培<sub>ル</sub>心<sub>ノ</sub>聲<sub>ノ</sub>漸<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>過<sub>ス</sub>

子



昭和27年7月6日

九月廿五午前十时

本草魚部下考介食

27

蘇東坡詩集卷之四

家解人故也

刑部

卷之四

上解又書

264023

16-1-28

昭和27年1月28日

電受八三四号 廿年

七月七日午前九時四十分  
七月八日午後三時五十分着

昨夜王宮ニ各大臣ヲ召集セラル（朴徐二人ノ外）俄ニ朴  
泳孝ノ官ヲ免シ且ツ謀反ノ嫌疑ヲ以テ之ヲ捕縛  
スヘキ旨警務廳ヘ命令アリタリ右ニ付朴ハ今  
朝潜カミ仁川ヘ赴キ同地ヨリ日本ヘ潜行スベシ  
トイヘリ朴泳孝謀反ノ嫌疑ニ付テハ探偵書類多  
ク國王ノ手許ニ蒐マリシ由ナルモ其内日本人佐々木  
留蔵ナルモノノ筆談書ハ重ナルモノナリト聞ク申箕  
善李允用ハ其職ヲ免セラレ安駟壽ハ警務使ニ  
任セラレタリ其他ハ聞込次第電報スヘシ

事城

外務省

杉村代理公使

西園寺外務大臣代理

264023

16-1-29

昭和7年7月6日

日本公使館

昨七日發賣電不令見夕此際各款洞官中  
ヲ種々ナル小細工又ハ朴シキ事獲スル為メ運動  
ス可ラス愈以テ却南シ居ル様御談議アリタ  
シ  
王室ト露下使トノ干繋及ヒ朴氏ノ疑ニ付  
テハ相當ノ探偵費ヲ出シ實情十分ニ穿索  
シ遂ケ確教アリタシ  
追付機密ノ電報差出スニ付自身譯ヲ賣  
リタシ

昭和七年七月八日午後

井上公使

新  
杉  
お  
代  
理  
公  
使

井上公使

廿年七月七日午後五時の京城発、八日正午十二時四十分着

探偵ノ報告並ニ佐々木留藏ノ供ニ拠リ、朴泳孝ノ謀反

トハ王妃ヲ<sup>刺害</sup>シガイセシトシタムコトニテ、三回、日本人モ加ハリ多ク、

隠謀アリシ事ヲ右佐々木ニ<sup>接</sup>テ聞ヒ、<sup>シツタソシ</sup>ヲ以テ之ヲ朝

鮮<sup>カンサソヘキ</sup>ニ告ケ、<sup>カンガイエキ</sup>金宏集ニ告ケ夫ヨリ國

王ノ許ニ達スルコトニナリタリ又朴ノ反対ニ金宏集中箕善

趙義淵等氣脈ヲ通シ更ニ旧派ノ人ニ<sup>ヲ</sup>以テ内閣ヲ

組織スル計畫アリト云フ尚探偵ニ拠リ、昨日午後四時

金宏集参内引續キ申箕善愈々吉瀆尹致昊リコ

ウレヨク朴定陽リカモ等参内夜半迄安眠ナリ石

シテ警務使に任セラルル者元用ヲ拘引シ訓練第一大  
 隊長シシラウキヲ罷メテ申大休ヲ以テ之ヲ替ヘタリ本  
 日晝頃ハ徐光範ヲ除ク外各大臣何レモ各内ニ居  
 ルト云フ因テ考フルニ此度ノ事件ハ全ク王宮ヨリ起リシヤ又  
 ハ旧党ノ企謀ニ出テタルヤ若クハ朴泳孝等實ニ隱謀アリ  
 テ之ヲ促シタルモノナリヤ未タ判然セサル所アリ目下探偵中  
 ナリ朴及李主完シシラウキ等今朝七時頃洋服ニテ  
 京城ヨリ出テ直至一リウザシヨリ乗船シ仁川ニ於テ本日出  
 帆汽船ニ乗ジミ日本ニ赴クベシ徐光範ハ在京ナリ  
 四人及金嘉鎮權在衡ノ三人ハ危險ノ虞アリト云

コ馬今迄ノ所ニテハ外國トノ關係アリトモ見ヘス

杉村

西園寺外務大臣

264023  
16-1-31  
昭和27年7月6日

外務省

電受第八三六號  
(明治二十八年七月七日午後一時一五分發  
 明治二十八年七月八日午後二時四五分着)

朴源孝不軌ヲ謀リ事顯ハシ免官逃亡  
 大嚴重ニ乗取ラ防キ搜索セヨト京城外郎  
 有リ多岐其節ハ電信ニテ伝ヘテアリ  
 所長等ハ爲シ即内報ニ及ブ

釜山

ハテシテ

外務大臣





電集

去月七日、  
軍部、  
報告、  
之、  
費、  
電、  
承、  
知、  
セリ

朴泳孝ノ王妃ノ弒害ヤヒトシタル事實并ニ

卷之九 雜著 日本、平家等

計 被 ト 寄 素 シ 家 ケ ラ レ タ シ

又金部傳入一画成二顔三好四知五念六ナリ

費官以尾、講、魚、允、中、金、允、植、卜、玄、日、助、成

運ウツ力リキアリタシ

八月七日

午時

井上

家

杉本

264022  
18-1-22  
昭和27年7月4日

電受第八三九號

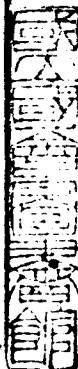
(明治二十八年七月八日午後十時十分發)  
明治二十八年七月九日午後十時十分着

朴泳孝李圭完申應熙三人今朝江時御用  
船富士川ニテ仁川發当地ヲ經テ馬関ニ向  
テ警保護ノ道充カテ既ニ還キタリ

釜山

加藤領事

西園寺外務大臣



電受第八四〇號

(明治二十八年七月八日午後四時)  
分發  
明治二十八年七月八日午後十時

本日午當地發駿河丸、朝野公使高永喜  
乗組ニ居リ

釜山

加藤欣幸

西園寺外務省



電受第八四一號

共年七月

八月午前八時四十分発  
九月 土曜 午前八時

昨七日朴泳孝李圭完申應燕三人難ヲ遁シ龍山ヨ  
リ我蒸汽ニテ下仁ス其前杉村公使ヨリ同人等  
ヲ保護シテ本邦ヘ逃シシムル様取計方電訓アリ  
依テ彼等ヲ一ノ民家ニ匿シ置キ尙ホ船便ハ商船ノ  
都合ヨキモノナク一方ニテハ朝鮮政府同人等ノ捕縛  
方ニ急ナルヲ以テ御用船富士川丸ニ便乗セシムルコトハ  
シ今朝午前一時乗船同四時釜山ヘ向テ出帆セリ京城  
ヨリ<sup>陸</sup>路急ニ派遣サシタル朝鮮巡查等ハ多人數波  
止<sup>場</sup>波ノ附近ヲ徘徊シタルモ幸ニ無事ナルヲ得シリ

仁川

山座

原外務次官

電信譯文 廿八年七月廿日京城發



東京

京城

外務大臣

内田領事

本官ハ地方ノ平和ヲ害スルコトヲ恐レ三名ノ  
日本居留人ノ退韓ヲ命シタリ其内一人告ケ  
テ曰ク朝鮮政府ノ日本人顧問ノ或者ハ  
王妃ヲ暗殺スベキ朴泳孝ノ密謀ニ關  
係アリト本官ハ其姓名ヲ杉村ニ告ケ本  
件ニ付直チニ相當ノ處置ヲ執ラシメトテ請  
求シタリ一兩日中尚ホ二十名程退韓ヲ命

外務省



スベシ

夕  
務  
半



廿年七月廿日京城發日九日接文

稍、行スヘキ筋ヨリ得ル報告、如ハ朴泳孝ノ隱謀ヲ佐ル木  
某ヨリ之ヲ「カンガイエキ」ニ筆談シ「カンガイエキ」ハ之ヲ「シンフーク」ニ  
ニ告ケ「シンフーク」ハ國王ニ密奏スルニ國王甚々驚カシ如何ニスヘ  
キヤト問ハレタレハ「シ」氏ハ前總理金宏集ヲ召シテ少相談ア  
ル外良策ナカルヘシト奏上シタルニ付キ國王ヨリ急使ヲ派シテ  
金宏集ヲ召シタリ金氏ハ本月六日午後四時頃、穴内ニ入ルニ  
國王ニ深く既往ノ不明ヲ謝シ悔悛ノ状ヲ顯ハサシタ後、  
朴泳孝處分ノ事ヲ頼マシタリシカ金宏集ハ申其美命  
寺瀆等致人ヲ捉キ手縛ヲ穿メ尚國王ヨリ他ノ大臣ヲ

石サシ夜半後安眠すヲ警務使ニ任シ訓練大隊長ヲ  
 文選モ又明モリ未明ヨリ處分ニ取リ掛リタリト云フ同  
 日朝五時前金外部大臣ニ来館シテ其意ヲ本方ニ  
 通シ且ツ朴氏ヲ逮捕スルニ関シ日本人ニ妨碍セサル様  
 取締ヲ為スヲ依頼セリ同大臣ト対談中朴氏突然其ノ  
 席ニ入り来リシニ付金大臣ハ暫ラク辭ヲ交ヘテ去リ朴  
 氏本館ヲ去リシ後々政府ヨリ巡查及兵隊ヲシテ其跡ヲ追  
 ハセタリト聞ク将又王宮ノ方ニテハ金宏集君主トナリ事ヲ  
 執リ七日昼頃ニ徐光範ヲ除ク外各大臣打揃ヒ兵  
 隊巡查ヲ以テ嚴重ニ王宮ノ内外ヲ整シ備ヘタル城内

別ニ不穩ノ事ナリ徐光範ヲ始シ朴氏一味ノ人々皆を予  
ナリ昨ヨ申實喜免職亦允用拘リ、事電報シタルハ  
誤リナリ又昨日屢々大院君ヲ召サレタルモ病ヲ稱シ入闕  
セサリシ由柳モ本件ノ起リヲ探究スルニ宮中又旧党ノ  
内ニ深キ計畫アリシトモ思ハレス尤モ近來朴派ノ舉動  
ニ付キ疑ヲ厲スルモノアリ衆目之ヲ集マリシ當偶然  
ハ重猶ニ接シタルハ恰モ期シタル如ク相悖同シ以テハ當分  
ヲ決行シタルモノト思ハシ今日ノ模様ハ至極平穩ナレハ以  
上ノ早ク全黨某一派ノ人ヲ以テ由國ヲ但候シ以テ閔氏  
カ変  
カエンニ乗ズルヲ防ギ  
行ヒ来リシ改革ノ順序ヲ逐テ

進<sub>レ</sub>行<sub>セ</sub>ハ或ハ却テ堅固ノ内閣ヲ立ツルヲ得<sub>ル</sub>カ否  
ハ減<sub>ニ</sub>肝要ノ場合ニ付本官内々其勸<sub>メ</sub>人々向<sub>テ</sub>早ク  
金宏某内閣ヲ任<sub>ン</sub>テ勸<sub>メ</sub>居<sub>レ</sub>リ今回ノ事ニ付充分  
探<sub>知</sub>候<sub>シ</sub>タ<sub>レ</sub>トモ外々トノ關係ハ更ニナキ模様ナリ

松村

西園寺外務大臣代理

貴族院

先刻外務大臣ヨリモ電訓お成りし通此際

貴官ヲ始メ各顧問官達中ニ於テ朴氏并ニ

朴ノ餘類ヲ保護スル為メ往々ノ細工ハ

断シテナスヘカラス王冠ヲシテ窮乏ヲラシムル

ハ將來東洋世界ノ目的ヲ達スルニ必要

ノ資アリ一同中合ハセ此致漢文アリタシ

貴官ハ金宏集ニ面會シ朴氏密謀一件

トテ  
トテ  
トテ

夕 景 小 冊

ハ事實ノ昭々ニ様取ルベキ事ヲ談議セリ

我ノ潔白ヲ示ス可シ

幸官ハ一月内ニ出頭スベシ

大正七年七月九日午後七時

井上公使

子 氏  
杉本少将公使

電報

朴永孝ノ密謀ニ加ハリタル可也人之名

程昆由御申越アリタリ 然ハ已ニ逆シ命セ

ラシタルモノ、内ナルヤ否、去ラス 然ハ其ノ事人

凡テ逆シ命セス至急極ニ事実明シ

タニ上處至極申越アリタシ

然ハ朴村ト水談ノ上取付フベシ

七日發書電に據るに尚二十名退韓シ命セラル由  
朴永孝密謀事件に干渉ノモノハ退韓處分シ  
見合ハセ先ハ拘引ノ上退韓ス可シ又已ニ退韓シ  
命セラルタルモノニシテ在索ノモノモ同様引致取糾サレ  
タシ

大正七年七月九日午後七時

西園寺

藏

西園寺



電受第

八四三號

（明治二十八年七月八日午後十時一分發）

朴ノハ今乾富士川丸三才出帆ス

村

井上公使

264023

11-1-40

昭和7年7月4日

外務省

電受第八四五號

(明治二十八年七月九日午後十時五十分發  
明治二十八年七月十日午前八時五七分着)

昨日以來ノ模様ハ内閣員ハ當分從前ノ條ニ振置  
ク由ニテ朴定陽モ出勤シ政令ハ宮中ヨリ出ルト云ハ  
此僞傍觀スルトキハ國民派追々宮中ニ集まり政權ヲ  
左右スルヤモ測リ難シ依テ此際及フ丈々金宏集  
内閣ノ成立ニ尽カス(キヤ又ハ傍觀シテ自然ノ成  
行キニ任ス(キヤ返電ラ乞フ

朴村代理る使

西園寺大員

朝鮮ノ内地ノコトニ付テハ金谷集内ニ

ノ成主ツ様也密ニ結々セラル可シ

此方ノ事件ニ関シ其日自退韓ヲ命セラ

シタルモノ已ニ本邦ニ向テ出發シタルモノアラハ

其人名出所ノ時日姓名等要シテ電報ア

ル可シ

又將事モ同様ノ手續ヲ取ル可シ其事

水



江戸、御事、  
（海）

大、年、  
（海）

西國寺大屋

杉、お、  
（海）

264023

16-1-42

昭和7年7月9日

外務省

電受第八四七

號

明治二十八年七月十九日

午前十一時五分

分發

朴本乘込ミル御用船富山丸ニテ昨ハ

日午前四時出帆釜山ヲ經馬関ヲ指渡ラ受

ルニ若自由黨態本縣人田中ケンロウ及ヒ

其吉生二名モ同行ス

仁川

山陸

西園寺大臣



関氏ノ地方ニ在ル者ノ時ニ害セシ又此日江戸参府儀  
ニ於テ玉ヲ自今勅任官ハ予一人隨意ニ任免スヘシト御  
沙汰アリタル処奥允中ノ外人モ抗議スル者ナク謹テ御  
交々レタリト云ヘハ將來ノ事甚ク案セラレタリ此日鄭秉  
昌安銅表<sup>寺</sup>被<sup>寺</sup>シテ此際井上モ使早ク帰任セラレサルトキ  
ハ再ヒ此年以爲ノ状ニ怯スヘシトテ深ク恐レテ懐キ居リ

杉村代理ノ使

西園寺外郎右良

廿年七月十日午前九時三十分癸巳辰三時三十分着

昨九日癸井上公使ノ電報ニ通読耳セリ本官ハ初ヨリ朴  
派ノ過激手餃ヲ執ルヲ戒メ頗ル苦心シタル程ナリ顧問  
官ノ内ニモ今トナリキ朴派ヲ保護スル者ナシ唯朴氏逃亡  
日民間ニ激昂ノ模様アリシモ之ヲモ防止メタリ依テモ安心相  
成リタシ○朴ノ餘類亦主完申應熙逃亡シ其代ハ依然  
出勤シ淡山恒屋モ同シク出勤セリ徐光龍モ亦無ク出勤  
勤セリ○佐々木田藏ハ執事新聞ノ通代負尾崎行雄ノ  
子ト自称シ性慾正シカラス日本人ニテ之ト交ハ者ナシ曰  
ハハ朴派孝ニ因テ轉廷ニ居ハシテヲホメ痛ク恨リ



ソケラシえを深ク朴ヲ怨ミ疾シト云フの金宏集入  
則件ハ内ノ尽カシ疾シトモ朴宜陽ハ腰ヲ振テ勤カ  
ズ國王モ亦之ヲ勤カスヲ好モラシム様子ニ付困リ疾シ  
リ

松村

西園寺大良

264023  
16-1-65  
昭和27年7月4日

外務省

電受第八五三號  
(明治二十八年七月十九日午後三時五分發)

今田朴泳孝ノ陰謀事件ハ始メ佐々木秀雄十八モノガ西本願寺ノ僧高田セイガン十八者ヨリ聞知リ之ヲ某韓人ニ知ラセタルヨリ発露シタルナルニ依リ高田ヲ手出し取調ベントシタルモ同人ハ既ニ去八五日仁川発ノ駿河丸ニテ長崎ヘ歸朝シタル由ニ付御注意ノ為メ具報ス

内田領事

原外務次官



64023  
16-1-46  
昭和27年7月9日

外務省

展

電受第八五四號

(明治二十八年七月九日午後二時十五分發)  
明治二十八年七月十日午後三時五分着

市訓電今着セリ朴、富士川九ニテ既ニ出帆  
シタル故アエテミヅカラ市訓電ヲ屋山加  
藤領事一送レリ

仁川

山座

西園寺大臣

264023  
16-1-47  
昭和29年1月4日

外務省

電受第八五〇 號  
(明治二十八年七月十日午後三時三十分發)  
 明治二十八年七月十日午後三時三十分發

答へ朴泳孝ノ密謀ニ加はりたる日本人三名程アル由ニ  
 申し出テタルニアラズ去ル七日三名ノ日本人、退陣ヲ令  
 シタルモ右ハ何シモ此度朴泳孝ノ密謀ヲ覺知シ際ニ當  
 政府部内ノ混雜、乘シ種々ノ思案ヲ働ク恐レハ  
 ニ依リ退陣ヲ令シタルモノニシテ其密謀ニ關係アリト  
 認メタスニアラズ尤モ其内佐々木秀雄ナルモノハ朴ノ密謀  
 ラ他ヨリ聞キ知リ之シラ或ハ韓人ニ告ゲタルモノニシテ同  
 人が當彼ニテ取柄ヲ受テタル節申立テタル所ニシハ或ハ有  
 カナル顧問官モ亦朴ノ密謀ニ加はりたる趣キニ付材料トモ相  
 俟ノ上今當面調へ中リ悉細ハ書面ニテ既ニ具報セリ

内田 領事

西園寺大長

電案

本官ハ来月十三日横濱出發 神戶ヨリ御用

船ニテ直航ス十八九日頃ニハ着ス可シ

貴官ハ外務大臣ノ電訓ニ因テス 公使全

員集ニ會合ノ上 本官歸任ノ一環ニ當テ奉

官ニ對シ為シタル挨拶的ニ對シテ此際就テ

因テノ聲同シ據ン可シ 什ノ事ハ恐ルニ足ラ

スト志告ス可シ

又貴官いたノ電文ヲ持参ル御主ニ因詰ノ上

本官在歸中辱ヒ出ホ州暇モノ際御電

不采ニ王室ノ為又誠實ヲ以テ内奏シタル所

ニ抑志内アリテ能ク御記憶アラセラルハ

敢テ疑リ容レス付又ふハ金宏集リシテ

理ニ抑々命アリテ内々ノ筆意ヲ事一ニ御

注スアラシメリ王室御家ノ為メ而シテ心

以テ御ス

幸官二月九日頃迄ニ必ス着任ス

ト奏上アリシ

大正七年十月午後九時ニ發

井上公使

素  
村公使

外 務 省

電受第 八五五 號  
(明治二十八年七月十日午後七時五十分發)

其筋(命)朴泳孝密謀事件、高田セイカニテ取調  
ノ上其口供概略御通知ス。又、同人ハ地所買入ノ件ニ  
付大洲鐵然(相)談ノ為、奉出(行)ク云、当地ニ出資  
セリ

内田領事

西園寺大良





481023  
16-1-51  
昭和27年7月4日

外 務 省

電受第八五六 號  
(明治二十八年七月十日午後五時五分發)  
明治二十八年七月十日午後七時二分發

本日金允仲金允桂に逢ひ懇話し及じり今日金宏集  
 う總理トスルハ好様ニ非サモ王妃ハ君權回復ニ熱  
 心ナレハ必ス衝突ヲ起スヘシ依テ暫ラウ時様ヲ見計ヒ  
 今一變動ヲ待チネトウシテ總理トスル方好サント存  
 セリ宛ニ角井上公使歸任相成ラハ如何様ヲ取付  
 方アルヘシト云リ君權回復ノ事ニ付王妃ヨリ屢々露  
 公使ニ依頼アリヌハ露公使ニ餘リ君權ヲ振テ置キ  
 ルトキハ國家滅亡ニ至ルヘシト云ハ断ラズ金允植  
 ヨリ密訴アリ尚ホ探偵中ナリ

西園寺大長

杉村

秘

484023
16-1-51
昭和7年7月4日

外務省

電受第八五八

號

（明治二十八年七月十日午後十時十分發）  
明治二十八年七月十日午後一時 分着

本日午後五時に川馬の港、留まの丸に  
木匠、外二人乗込に候。後、カノ田中  
ケンドウ付座と居し、同船ハ風ナギ次第  
馬乗へ向て帆、長

天香山

松澤 領事

正岡 大長

484023  
16-1-52  
昭和7年7月4日

秘

電受第八六〇號  
(明治二十八年七月十一日午七時三十分着)  
(明治二十八年七月十一日午七時三十分着)

事城ノ風況ニ據ル彼等ノ隠謀ハ事更  
 ニシテ星嶺間ヲ侵ルカメシト又韓延  
 里布ハリセントルヤリト云フ御矣  
 ムデ

仁川  
山莊

五國大臣

484323  
16-1-53  
昭和27年7月4日

外 務 省

電受第八六一號

(明治二十八年七月十一日午前十一時三十分發  
明治二十八年七月十一日午後一時五十分着)

昨日入港セシ富士川丸ハ風波ノ為メ未タ碇泊中ト  
ハ早川誠一郎申ハ吉田一郎、李ハ古城辰雄ト  
斐名ニ居リ○露國軍艦チルロフ及水雷  
艇五艘今朝入港ス右ハ芝罘ヨリ浦塩へ進  
航ノ途次風除ケノ為メニテ明後日出港ノ筈  
ナリト云フ

金山

加藤 領 了

西園寺大臣

484323  
16-1-54  
昭和27年7月2日

電受第八六二號

(明治二十八年七月十一日)

日午後一時四十分發  
日午後一時十分着

佐々木秀雄、井上三使、末看せうん、三つ  
並、苦り、海、民、我、店、民、最  
早、激、昂、模、様、ナシ

事紙

内田 領事

西園寺外務大臣

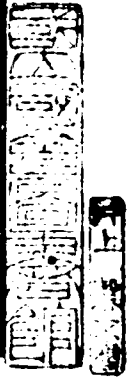
外務省

電受第八六三號  
(明治二十八年七月十日午時五分)  
明治二十八年七月十日午時五分

朝鮮公使着港付小官面會上  
 御訓示旨傳達より依テ同公使  
 何時迄ニテモ當地ニテ井上公使  
 来着ヲ待ツ由但ニ外面ハ疲レ為  
 滞留スル体ニスベシト之ヘリ左様  
 兼知相成リ度シ

神戸

外務大臣  
 周布兵庫縣知事



電受八五五

廿年七月十日午後一時五分東京

追々探偵シタル所ニ於テ朴泳孝ヲ陷ル計

畫ヲ立テシモノハ愈々命吉濟ニシテ金宏集沈

湘重コウタイクニ等ト西三日前ヨリ密議シタルモ

人如シ昨日及今日トモ沈湘重ハ内々人ヲ

派シ自分ハ王命ニ依リテ無餘儀諛惑

議ニ如ハリタルコトヲ辨解シ且當館ノ助力

ニ依リテ内部大臣タランコトヲ望ム旨ヲ本

タリ昨今模様ニテハ總理大臣以下位地ハ

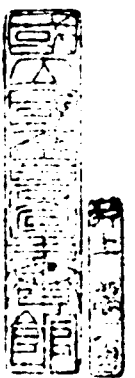
一方ハ閔堯ヲ入セント欲シ一方ハハリウ堯ヲ入

レシコトヲ欲シ晚合ノ姿ナリ大院君ハ内々人ヲ

派シ今日ノ如ク王妃跋扈シラハ國家滅亡

スベシ昨年ハ日清兩國ノ大勢ニ暗ク事ヲ誤

ト  
各  
省



リタヘ今度ハ萬事日本ニ使ノ意志ヲ受ケ  
王妃取抑ヘ方ニ尽カシタレト申越セリ  
中金允植等モ亦内心大院君ヲ利用セシ  
トスハ考案アリ又同君ヨリ岡本ヘ李載冕ヲ  
宮内大臣トセバ不充分ナガラモ王妃ヲ制スルヲ得  
ヘキ旨申越セリト但シ大院君ノ事ニ付テ本  
官ハ常ニ之ヲ抑ヘ置ク方針ヲ執リ今朝井  
上ニ使ノ来電ニ接シ直ニ内謁見申込メ  
タリ

西園寺外務大臣代理  
梶村代理ニ使



43433  
16-1-5  
昭和27年2月4

別冊末電一通

夏子

得父兄山村重治友

今夕四時歸糸熱

電校為之

為念上

七月十日

佐世佐友

井上公使



484033

16-1-58

昭和7年7月4日

外務省

電受第八六七號

(明治二十八年七月三日午前十時五十分發)

富田川丸今朝五時出帆也

釜山

加藤領事

西園寺大臣

484323  
16-1-57  
昭和27年2月4日

省 務 外

電受第

號

(明治二十八年七月十一日午後七時二十分發)  
明治二十八年七月十一日午後七時二十分發

富士川 行敷港ニ寄泊ニ居人ノ報知アリ

釜山

加藤領事

西園寺大臣



484033  
16-1-60  
昭和27年1月4日

外務省

電受第八七二號

(明治二十八年七月十三日午後七時三十五分發)  
明治二十八年七月十三日午前十一時一分着

此度朴詠孝密謀事件ノ證據トシテ當國  
政府ニ差押ヘタル佐々木秀雄ト或ハ韓人ト筆談書類  
中ニ星岡本恒屋淺山外ニ三名ノ日本人モ亦同謀者  
トシテ記載シタル趣ナガ當地ニテ會面追索調査ハ所立  
ハ未ダ佐々木ノ話ヨリハ外ニ此等ノ日本人カ朴ノ密謀  
事件ニ加リタリトシテ証跡ヲ發見セシ等ノ人々ハ  
矢張り去ル九日發ノ電訓ニ基キ司法上ノ手續ニ  
ヨリ當館ニ引致シテ其事實ノ有無ヲ取ルヘキヤ  
又ハ井上云使ノ來着セラハ迄之ヲ見合スヘキヤ至  
急電訓ヲ待ツ杉村ハ公使ノ來着ヲ待ツ方宜カラド  
中ス

西園寺大臣  
内田外務大臣

京城

454033  
16-161  
昭和2年7月14日

外 務 省

電 報 第

號 (明治三十八年七月十三日午後) 時

分 發

朴憲謀子件ニ關係ノ証跡ナキ星岡本等司該上  
手続ニヨリ召見方ニ井上公使署任上見合スル又該  
陰危険ノ虞アリ若シ良ニ糾子スルスル

由 田

西園寺



284033  
16-1-62  
昭和27年7月4日

館使公本日

赤坂：故障あり、四日前八時横濱に發ス  
是ヨリ直航ニ付、前電ノ日限ニ到  
着ス可シ

不使館機密金ハ此際必要ト認メラレナハ、何程  
コトモ費用シ、十分ニ運動アリタシ、本官ハ別に異千金  
受取りアリ

又此際、金事ヲ談ス可キ人物ハ、通金ヲ論セス、彼ノ  
意向ヲ曉キタル上、我ノ所存ヲモ説カレタシ、先ツ、渡  
氏中ノ派、機密金ノ遠ノ為人ナツシ説キ見テハ、如何  
モ、固十分ニ働キ置カレタシ

明治三十七年七月十四日

杉本公使

井上公使

井上公使

481033  
16-1-63  
昭和27年7月4日

省 務 局

電受第

號

(明治二十八年七月三日午前十時五分發)  
明治二十八年七月三日午前十時五分發

井上之使馬桑通、折為鉅へ電報ス  
へ、極速傳へラセフ

外務省

村付



名称	井上 馨文書
標題	電信控 (二)

分類 番号	673
	16

18-14

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



# 電信扣

264023
16-3
昭和7年4月3日

264023

16-3-1

昭和7年4月3日

三子おき



かゝる遺しを要する所

最も一人の心を得る

得るよし

人々に与ふるべきもの

江村

井上

おき

昭和27年4月3日

中全

支

而  
 此  
 光  
 有  
 一

十 4 十  
 2 2 2  
 十 2 2  
 二  
 4 十 2  
 3 2  
 2 十  
 9  
 10 3  
 12

今朝九時高森下化ス一し

十指



イ  
ノ  
ウ  
エ  
コ  
ウ  
エ

人 信 也  
か  
イ  
ム  
セ  
丁

東京

一

コ	ミ	ミ	ミ
エ	セ	ミ	ミ
フ		ミ	ミ
ウ	ホ	ノ	コ
ウ	ウ	イ	4
リ	ハ	フ	ナ
タ	ホ	ゴ	ラ
リ	ニ	に	キ
	カ	ナ	コ
	ニ	ニ	ウ
	ア	ア	ハ
	ヒ	ト	ヲ
	ナ	ウ	コ

通卷  
七十八卷

264023

16-3-4

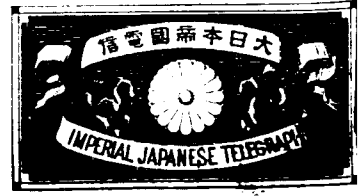
昭和27年4月3日



Handwritten Japanese characters and symbols, including "セ", "カ", "リ", "ル", "エ", "ハ", "ニ", "三", and "友".

Handwritten Japanese characters and symbols, including "リ", "ハ", "ニ", "三", and "友".

Handwritten Japanese characters and symbols, including "セ", "カ", "リ", "ル", "エ", "ハ", "ニ", "三", and "友".



昭和27年4月3日

宣統元年六月十七日

事記 卷第

五

人 信 發

大日本帝國

ゼン  
ン  
コ  
ト  
ク  
シ  
イ

キ  
ヨ  
ト  
和

一  
〇  
九  
之  
十  
七  
二  
十  
五  
二  
十  
八  
二  
十  
九

ナ  
リ



ゴ  
ア  
ン  
シ  
ン  
ユ  
ヤ  
ウ  
ン  
カ  
ガ  
ヘ  
ス  
シ  
イ

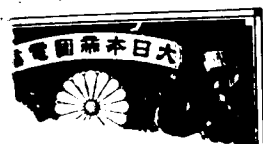
二  
二  
四

ソ  
ン  
ジ  
ヨ  
ウ  
ド  
ウ  
シ  
ト  
ガ  
フ  
ヤ  
シ  
ウ

は  
あ  
の  
着  
の  
質  
ス  
何  
ッ  
御  
生

帆  
力  
返  
事

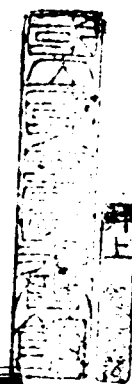
主  
張  
品  
の  
部



有客如夢  
醒乃來  
如新

新  
有  
出  
凡

中  
有  
取





キツケ  
イノウエハクカウ

ナイムセ  
エギケシ  
キヨウサ

ゆ

ナイムセイ

エ

チ

セ

一

セ



ツデサノノスウツゾ  
ハカソタリヨガウタ  
ゾケツセツタヨス  
ザイヤウタソゴソウ  
ゾメトサキメサヨヨ  
ホツエユアリリケヤ  
メウセメヲメヨシ  
ゾヨリノニダヒタ  
ルノテヤタリメヒ  
ナ●イラスキメノサ

新 展

東京電報

新 展

三



通電報

親展

官報

電報のりふを  
又いふは、  
一

この打直しを  
乞ふ

ヤ

お  
は  
い

お  
と  
う

至急官報

祝宴ノ事ハ此節滞京ノ地方官其他而總  
意ノ向キ申合セ紅葉後ニ相會シテは無事成  
内報ヲ祝スル為ソ一杯ヲ傾リルニ過ギズ敢テ外交  
上ノ謬話等ヲ為スノ旨意ニアラス而シテ準備モ已  
ニ整ヒ居ルニ付キ是非而承諾ヲ請フ

六月十八日  
午後十時三十分  
松岡内務次官  
に本報送付

264023

16-3-9

昭和27年4月3日

不  
海ノ義ニ付再電ニ候



一  
共飽迄謝絶  
改定  
帰東ノ上謝

絶ノ理由詳述ス可シ  
否ヲ

六  
及テ迷惑ニ存ス

子  
ハ

知  
念  
以  
充

以  
未  
知  
也

知事

書記官

警部長

暗號電報譯

發明治廿年 月

日 前

時 分

着 月

日 前

時 分

譯

受 信 人

知 事

發 信 人

大 臣

局 長

指 定

ンジョウシコフスグゴヘレマツ  
ハ場ヲヒク 直グハニ返事ヲ待リ

264023

16-3-10

昭和27年4月3日

書記官

警部長

暗號電報譯

發明治廿八年六月十七日 午前 三時十分

着、月、日 午前 三時十分 譯



受信人

知事

發信人

内務次官  
江本 局長  
木串

指定

至急友報

サノデシブシヤクノウエイノウウエコウ

左ノ電文 翻訳ノ上 井上 公使へ

シヘゴソウフアル

送込アル

ゴキヤヨウニツキカリシヨウコウトウカ

御帰朝ニ付キ 右者 高等官

ンヲヨビキゾクイニギインケウゴコンイ

及び 貴族院 謝々 中 有懇意

ノムキニライテキタルニニケツキシク

ノ向キニ於テ 来ル 光二日 ヲ期シ 祝

エンシヒラクヤトニケツテイセリゼヒゴリ

宴ヲ開クコトニ 決定セリ 是ハ

シキハコノ誤ヲ

コソナレ

何新<sup>ユセコ</sup> 各省<sup>タシ</sup> 高<sup>タカ</sup> 等<sup>トウ</sup> 官<sup>カン</sup>

及<sup>ツキ</sup> 貴<sup>キ</sup> 族<sup>ツク</sup> 院<sup>イン</sup> 儀<sup>ギ</sup> 欠<sup>ケ</sup> 中<sup>チュウ</sup>

平<sup>ヘイ</sup> 幸<sup>コウ</sup> 文<sup>ブン</sup> 陳<sup>チン</sup> 凡<sup>バン</sup> 諸<sup>シュ</sup> 君<sup>クニ</sup> 性<sup>セイ</sup> 子<sup>シ</sup>

亦<sup>モト</sup> 二<sup>ニ</sup> 日<sup>ニチ</sup> 祝<sup>シュ</sup> 宴<sup>エン</sup> 會<sup>カイ</sup> 完<sup>カン</sup> キ 下<sup>カ</sup> サル

ル ヨ シ 祥<sup>ショウ</sup> 感<sup>カン</sup> 謝<sup>シャ</sup> 降<sup>カウ</sup> アリ

保<sup>ホ</sup> 督<sup>トク</sup> ハ 軍<sup>クン</sup> 人<sup>ニン</sup> 奏<sup>ソウ</sup> 大<sup>ダイ</sup> 印<sup>イン</sup> アリ タル

ト 曰<sup>イフ</sup> 日<sup>ニチ</sup> 詔<sup>ミコトノコト</sup> 之<sup>ノ</sup> ナリ 自<sup>ミヅカ</sup> 心<sup>シン</sup> 亮<sup>リョウ</sup>



むしり何トかミテ均ホ上

マニ日足含シ新フ公能々ル

場ホミ格チ新父汝略ト謂ス

ル子柄ヲ皆讀スルニモ若クシ

他モ種々有テアリヨ

解アリタ



昭和 年 月 日



午  
九  
時  
の  
十

2

午  
二  
時  
乙

十月十一

七

三三三

2

$\frac{1}{2} = \frac{1}{2}$   
 $\frac{1}{3} = \frac{1}{3}$   
 $\frac{1}{4} = \frac{1}{4}$   
 $\frac{1}{5} = \frac{1}{5}$   
 $\frac{1}{6} = \frac{1}{6}$   
 $\frac{1}{7} = \frac{1}{7}$   
 $\frac{1}{8} = \frac{1}{8}$   
 $\frac{1}{9} = \frac{1}{9}$   
 $\frac{1}{10} = \frac{1}{10}$

4 4 3 4 2

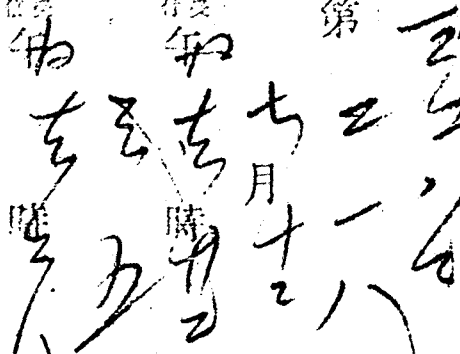
~ ヤ  
 ゴ ア  
 セ ウ  
 ~ ゴ  
 ハ ウ  
 ビ メ  
 シ ウ  
 ヌー  
 ヲ 三  
 ハ 二

行政院函送報紙

昭和 年 月 日

發

第



分 字 分 日 號 局 郵

日本政府電報送達紙

う　う　や  
 か　ア　ア  
 こ　り　ろ  
 せ　る　こ  
 し　し　う  
 は　は　ろ  
 る　ろ　ろ  
 り　り　り  
 と　と　と

出販 十曾午子八時ニナ  
ヤア 号舟ニ故障アリ

7  
カ  
/



至急官報

264023  
16-3-15  
昭和 年 月 日

得此信者

敢借信者

富士川村

五時屋山出帆



常山行旅記

五時屋敷出帆

宿切子坂五時

三時馬場着明

五時九時行

五時着明

五時関ヶ原着

五時十時お茶

田中十時お茶

五時お茶

五時お茶

五時お茶

明後十町、お然、

田中ナリ、名ハ、無、

神、人、お、せいの、

、た、せいの、た、

お、た、せいの、

、た、せいの、

、た、せいの、

井上伯

関、

Handwritten characters in the top left section, including a large character resembling '山' (mountain) and others that are difficult to decipher due to cursive style.

Handwritten characters in the top right section, including a large character resembling '月' (moon) and others.

Handwritten characters in the center, arranged vertically, including characters like 'ス', 'ア', 'イ', 'ウ', 'エ', 'オ', 'カ', 'キ', 'ク', 'ケ', 'コ'.

Large handwritten character '中' (middle) or '九' (nine) in the bottom right area.

Small printed characters '人信' (person's name) in the middle right area.





264023

16-3-18

昭和27年7月4日

張子厚

張

~~コラッ~~  
~~ウパ~~  
~~コワカニ~~  
~~クリス~~  
~~ゴハ~~  
~~子~~  
~~ト~~  
~~ヤナ~~  
~~ク~~  
~~フ~~





名称	井上 馨 文書
標 題	電信控 (三)

分類 番 号	673
	17

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

十二月十五日午後二時十分接 神戸から

井上公使 西園寺お妙大僧

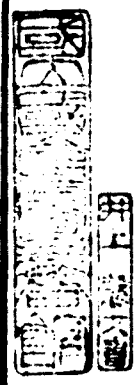
江川山彦より在ノ町ノ電教アリ

一昨日妻日平人こころを患ふ四名四名死に

朝鮮人二名々之四名ノ死にアリ預防法行ハレ難ク追

々蔓延ス

同 十五日午後二時五分接 神戸から



井上公使

原外務次官

五、書記長、本、日、十二日、公使館に等、通譯官

に任し、高等官七等、に叙せしむり、其、日、本人、に

電教  
アリタシ

日  
十五日午後發

神戸

杉本代理公使

井上公使

原外務次官ヨリ、在ノ商、に電教アリ

東の事なるを中ねしるに使節ニ其の旨を達せしむ  
に在りし事其の事とせしむに叙せしむ

不達ス

門 十五日午後迄 浦戸船

心齋寺にお務大臣 井上公使

に川 ころしノ事承知セリ 今官 明題之時出航ス

日

十五日午後五時三十分

計

井上公使

西園寺外務大臣

在露西公使ヨリ在ノ電信アリ

清皇皇帝ハ四月十九日ヨリ「セクト」ハタルスバルグ

ハリスアムラルダムブルツセルスリヘビゼネバ「これ」

募集スル旨廣告アリ甘排込ハ四月二分チ十月一

日ヲ以テ全額シ拂ヒ終ルモノトス

在露東林公使ヨリ在ノ電信アリ

信用スルニ足ル向ヨリノ教道ニ據レハ露西政府  
ハ朝鮮王境近傍ニ五萬ノ兵ヲ集合中ナリ

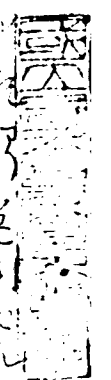


八年

七月十三日午後八時三十分癸  
十四日午前二時十分着

代参日記有記述あり

神戶



本日國王ニ謁見シテ井上公使來電ノ意ヲ奏上  
シタル處其御答ヘ左ノ如シ

朕ハ金宏集ノ再任ヲ希望スレドモ今直ニ  
之ニ任スルトキハ朋黨ノ争ニ類スル嫌アルニ  
付キ暫ク時機ヲ待ントテ同人頻リニ之ヲ辭  
セリ且ツ林總理ハ依然在職ナレバ何レ井上  
公使ノ來参ヲ待ツテ相談ノ上金ノ再任ヲ因  
ルベシ又曰公使ノ意ヲ金宏集ニ傳ヘタルニ曰  
氏曰ク金ハ能ク公使ノ意ヲ了スルモ少シノ事

情アレハ時機ヲ待テ入閣スベシ余ハ決シテ一身ノ  
安ヲ偷<sub>ンテ</sub>入閣ヲ厭フモノニアラズ依テ考フル  
ニ令氏ノ意ハ將來内閣ノ安全ナル見込ミツキテ然  
ル後入閣セントスルモノ、如し昨日リケンエイハ内部  
大臣ニインヨウキウハ宮内大臣ニ任セラシ又國王ハ  
日々閣臣ト計リ政治ヲ行フ旨ノ詔勅ヲ發セラレ  
タリ

京城

杉村代理公使

正園寺大臣

西園寺外務大臣来電  
七月十七日  
西園寺外務大臣来電  
七月十七日  
西園寺外務大臣来電  
七月十七日

西園寺外務大臣来電  
七月十七日  
西園寺外務大臣来電  
七月十七日  
西園寺外務大臣来電  
七月十七日

内田金事<sup>と</sup>无ノ電信アリ

今日<sup>追</sup>取<sup>追</sup>討<sup>追</sup>ヤタル處ニシハ朴<sup>ハ</sup>只<sup>ハ</sup>王宮ノ護衛

兵ヲ交替セシム<sup>ハ</sup>為メ邊<sup>ハ</sup>激ノ手段ヲ以テ訓練

兵ヲ押入<sup>ハ</sup>レントシタル者ニシテ王妃暗殺<sup>ヲ</sup>企テ

タルニアラザルガ如シ而シテ右ニ就<sup>テ</sup>ハ星恒屋

浅山又<sup>ハ</sup>朴ト同行シテ帰朝<sup>セリ</sup>能<sup>ハ</sup>本縣人

田中賢道ナル者其ノ謀ニアツカリタル疑<sup>アリ</sup>

ト  
家  
ハ  
目

杉村代理公便ヨリ老ノ電信アリ

昨十日宮内恆辨金宗煥其ノ職ヲ免セラル

未人<sub>リセントリ</sub>宮内顧問トナセリ



近來京城上使館ノ機密ハ直ニ館外ニ漏レル  
越常地ニテ通キハミタリ是迄モ郵便電信ノ取  
扱者中電信又ハ上使館ノ回復等ニ付在案リ  
以テ新丁探教共等ニ内訌スルノ憂アリ故ニ  
本官今度歸任ノ上ハ右取扱者ニ確實ナル  
人選方申出ル義モ可有之ニ付豫メ注意ス  
トモ此義未成リ電キタシ

外務省

二十一年七月十七日馬關橫濱丸

東京

井上公使

西園寺外務大臣

今銀着明午後三時出帆

二十一年七月十七日

井上公使

西園寺外務大臣

九月十七日 申時 申時 申時

白鷺井上氏

小野田製鋼社長

富士川  
九  
日  
初  
六  
時  
竹  
葉  
生  
坑  
穀  
丁  
氏  
東  
夕  
馬  
河

一着ノ教ヲキニヨリ  
馬ノ海ヲ得テノリ

如斗にタリ  
 新暑の夢研  
 教ス

၇

五子夜發

小野田榮次郎

井上公使

其電流を可成り時出航ス

日 十時午後五時五分迄 計五十分

井上公使 小野田警備局長

田中ハ馬廻ハ上陸セシ教アリ 富子ハ九時出航

時刻未定

日 十時午後二時五分迄 計三十分



井上公使

小野田警備局長

富士川九年後五時馬廻殺字品一向丁出帆ス

日

十七日午前十時中馬廻馬廻橋渡ル

井上公使

小野田警備局長

富士川九年後八時字品馬廻村外貳名共無事

上陸福澤引取今午前十時海軍ニテ歸ル

終

在朝鮮國京城外北門外使館

甲品ノ来リし朝鮮人ニ名大坂ヨリ山陰島

山口へ旅行スルトテ免状ヲ持テ所ノ福澤ノミ

以テ林ノ學ヲルニ知ラサレモト云ヒし由目下

探偵中

貴電敬承。寧ろ、未嘗、朝鮮人、之、名、ノ、聲、  
動、毎、日、亦、人、カ、此、等、リ、利、用、ス、ル、カ、母、キ、ナ、ラ、  
シ、モ、料、リ、難、シ、故、ニ、先、方、以、テ、戒、憚、有、リ、タ、シ、

神戶、深、田、中、朝鮮人、崔、鎮、翰、ナル、モ、朴、ノ

股、腹、ナ、リ、ト、稱、シ、妻、訪、シ、タ、シ、凡、同、ヨ、リ、之、リ、却、ケ

タ、リ、但、シ、之、ヲ、懸、譯、ス、ル、ヲ、以、テ、内、談、シ、意、カ

シ、メ、タ、ル、ニ、其、要、領、ハ、朴、今、度、ノ、事、ハ、全、ク、王

ト、終、リ、目



其八年七月十五日神戸ニ於テ發ス

赤石河野警察署長

井上公使

小野河野警察局長ヨリ秘密ノ電信アリシナリレ由中  
ニ會ヒシナリハ直ニ電報セヨ

日 十五日午後六時五分接

神戸接

井上河野警察署長

赤石河野警察署長

日 十五日午後六時五分接

神戸接

赤石河野警察署長

井上公使

日 十五日午後六時五分接

リタルモノカ直ニ事セヨ

神戸接

日 十五日午後六時五分接

井上河野警察署長

小野

馬河野警察署長小野

王明洋園日本公使官

刻御教告申上ケタル通り  
田中ハ御着船迄當

地ニ相ハサセ置ク

同 十五日神戶發

赤坂長 赤坂署長

井上公使

富士川丸午後五時馬淵發字品一向ケ出帆スト

小野田發長ヨリ電教ト接セリ果シテ此ラハ

田中ハ如何セシヤ女官ノ意ヲ承諾ノ上留マル

トコナリシヤ直ク返電ス可シ

日 十五日午後五時馬淵發 神戶發

井上公使

赤坂署長小野田發

田中ハ御意ヲ承諾ノ上御待々受ケ申ス

大正七年七月十五日發 津戸様

廣島縣知事

井上公使

貴地出張ノ内務属村上正使一丸ノ言ヲ專一直リ返

電セヨ

富士川丸ハ未タ着セサルヤ

日 十五日午後三時五分接 津戸様

井上公使

廣島

内務属村上正使

石卓魚圖京州日本公使館

富士川凡未夕着セス今朝馬河に着ス可キ哉ノ由ナルモ

馬河ヨリ今ニ教ナシ申上ク

日  
十五日午後十時五十分接  
江戸様

井上公使  
本島  
村上内務属

朝鮮ガレゴタウセウキレトウジシト称スルモノ字品ハ来シリ

殿密取部中

取申上ク



大正四年七月十五日 發 神戸

宇品

兵部司令官

井上公使

今日以入港ス可キ富士川丸ニ兵隊乗リ込ミ此ヲ返

電マツ

日

十五日午後九時五十分接

神戸

井上公使

兵部司令官 宇品

富士川丸(兵)係に引取られ破れ七サレモ多分兵を乗リ取レリ

在朝鮮國本日公使館

六月十七日午後一時分接神戶來

井上公使

杉本

神戸發着電ノ趣委田承知セリ

買下所に着任迄何事モ有シ着トサレ概ナリ

朝鮮國日本公使館

廿八年七月十五日午後十時五分神戶に接

井上公使

杉おや理公使

本日俞吉濬ハ金宏集ノ内意ヲ受ケテ本館セリ

曰氏ハ將來王妃ニ對スル防禦策ナク非常ニ苦

心シ居ルニ付テ流下ノ町軒下ヲ待テ執ラレ、所ノ方

針如何ヲ視テ進退ヲ決スル見込ノ由俞氏宛テ

リ

在朝鮮國日本公使館

二月廿七日午前十時馬関船に接し到

井上公使

杉本

所々宮内省并金宗漢氏職シ宛セラル  
人リゼンボル宮内親王トナレリ

田中ニ緊會セリ

機密金ノ事心配ニ及ハス子シ馬ノ可  
必要ノ事アラハ支々馬ノ事カレタシ

二十八年七月十七日 馬河橋澤九

井上公使

新お代理公使

今年後之時出航 只 明後十九日午後二時  
仁川之着又可也

二月、再七月、各馬河、橋、演、九、三、

井上公使

字 院  
小 井 上 公 使

二十八年七月十八日午後二時四十分卒  
同日午時五十分葬  
十景到記

井上金權公使

野村

昨日之浦子來談、大意ニ曰ク、酒林ノ件ニ付キ

過日來熟一考セシニ、不才ノ身ヲ以テ、困窮ノ

地ニ處スルハ、國家ノ大事ヲ誤マルヲ恐ル、

念益盛シテ強シトモ、憂夜ノ不眠ル事ヲ得

サリシ末、斷然此方ノ行ヲ辭スルコトニ決心セリ

先日承諾セシコトハ、輕率ノ至リト云フ可ク、しテ

と更井上は其外謀君に對し之り謝スルノ外ナシ

一幸此意ヲ伊藤伯に傳へ英レタシト右ニ付キ

小生ハ此市に對して口を至り斯ル異論ヲ發セ

ラルハ公務上及ヒ友誼上二ツ共ニ其當シ失フヤ

ナリトノ意ヲ以テ再ニ忠告ヲナシタレバ竟ニ聽カス

蓋ニ市ノ意ヲ變ヒタルモノハ過日未だ方ヨリ

往々事ノ地ノ事ナリ何モ其國難ナルトニ當テ

セシモノニシテ別ニ他ノ意味アルニ非サルモノナリ



有不取敢御教書ニ及フ

此電行ハ七月十九日着仁門外館事ヨリ接到

大正七年七月十九日 前年子府江川致

野木四務大臣 井上公使

今起無事着仁貴電函ニ就テハ子浦子

ニ先ノ電言シ付

今日用紙ニトテフトキハ 到底何事ニ処

不韋魚尾ノ井ノ木ノ作  
不韋魚尾ノ井ノ木ノ作

スル能ハス人ノ説シ終モ自家ノ決心ヲ變スル  
如キハ其意シ得ク  
四家ノ為メ尽ク可キ  
社ナリ是れ約來セし通り決心斷行  
アリシコト  
リ致ラ志告ス至急返電アリタシ

二十八年七月十九日午後四時三十分東京發  
ミヤコ

井上公使

野村内務大臣

三浦子ノ事ヲ電報セシカ其後小

必及に田中光顯ノ尽力アリテ奇説ニ及  
しり且ツ悦ニ叙任ノ命ヲ拜セリ御安心  
リタシ

大正七年七月九日午後七時に刊發

野村内務大臣

井上公使

貴電に依りて安んじたりと云ふ人ノ説ニ

ヨリ決心シ勳カスハ御  
御語に云々安心立命

足うサル 研 研ルカ 研 能ッ 研 研ル 研ル

うしタし

庚午年七月廿五日午時八時子分發

野村內務大臣 井上公使

朴永孝着京後來國一船航ノ筆ハ如何

タニヤ承知し夕し

在朝鮮國日本公使館

二十八年七月廿九日午所十二時四十分發

野田事務大臣 井上公使

朴正孝ニ對スル結案ハ如何ナリシヤ返

電ヲ待ツ

在朝鮮國日本公使館

廿一年七月廿九日午後十二時四十分發  
西劇書外務大臣 井上公使

左ノ電言ソモ由子ニ專ヘラレタシ

新ウ紙上ニ紫田朗ハ朴泳孝ト會合懇話セシ旨

記載アリ朴氏ハ國王ニ種々ノ事ヲ奏上シ居レリ故

ニ今同氏ト會談スルワトハ王妃ニ對スル關係モ

アリ宜シカラサルニ付可ハヨリ紫氏ニ御忠告ノ上

會合セシメサル様致ス可シ

在朝諸國日本公使館

二十八年七月二十日午後一時  
三十八年七月二十日午後一時  
三十九年七月二十日午後一時  
四十一年七月二十日午後一時

井上公使

野村公使

朴正孝等二家月二日

ノ氣が二家月二日  
既ニ横濱ニ出テ

タリ



在朝鮮國日本公使館

廿六年七月二十一日午後一時接  
七月二十一日午後一時接  
三十分東京發

井上金藏公使

野村四郎大臣

朴永孝來朝行ハ二十九日申達シタル通り

来月二日ハバレークーパーへ向テ出帆スルコトニ

決ス

在朝鮮國日本公使館

八月二十日午時に於て、本館に於て、

井上公使

西園公使

之浦公使

出發

ノ件

ニ付

テ、

本館

ニ

紙

ニ

付

テ

可

シ

ト

八月二日午前十時發

西國事務大凡

井上公使

本公使所り命せりしや、  
合アリ、  
承知し、  
タシ

八月二日午前十時發

野村内務大臣

井上公使

之浦公使ハ多ク命セラレタルヤ曰公使ノ牛  
コトヲ以テ本官既ニ大君至ハ四奏満足セリ  
昨夜西園寺外務大臣ノ電言ニ據レハ之浦出  
發ノ件ハ委細ニ紙ニ云々トアリテ曰氏又變説  
セサル歟ノ憂アリ故ニ今日トナリテハ速カニ  
命シ可成早ク出發セシムル方當所ノ如  
令旨ニシ

右總理大臣外務大臣一至急談議アリタシ

在 國 本 日 公 使 館

廿八年八月二日午後一時至東京發七日午後一時至橫

伯壽井上馨

小野田毅局長

朴泳孝李圭冕ノ二名本日「ジャパ」号に乗

込ミ「バシク」号へ向テ横濱ヲ出發セリ

此電は釜山に河野送

八月八日七日後之時午後發

小野田警察局長

井上公使

朴孝二君出發ノ義氣承知セリ申知候

五ノ也しヤ至る迄電セリ

二十八年八月八日午前九時十五分發

西園寺公格大臣

井上公使

之浦公使ノ申ニ付テハ今官邸ニ大勢集

内奏し満足アラセラルル故ニ今日ナリテハ可成

速カニ所リ命し赴任セシムル方計ナリ

令旦ロシヨロ使ハ一日以出發スルヤ返電シ

待

二十八年八月一日午所  
時三十分  
發  
是日午所  
到

井上句

朝比奈

波斯駐劄國王(俄王)公使  
スパー元

松平



九月二十日亥時二十四日

五國公使以上使

海にまゝに任せししや可成り水

發せしうし  
地種事  
阿公

使着任上川地等為十町以上者

必  
要  
ア  
リ

紅毛字江庵

二月八日午前八時至午後六時

井上金橋公使

野村内務大臣

日本郵船株式會社

申為照、昨病、北里病院、保養

中

在朝鮮國日書館

二十六年八月十二日午後五時三十分  
東京府立中央圖書館  
接到

井上金權公使

野村浩

之市、今日、中、修、命、云

四五日、出、立、ノ、積、リ

在朝鮮國日本公使館

二十八年八月十日午後九時五分發

野村內務大臣

井上公使

之浦、立、二十四日頃、  
都令、是、此、二十日頃、  
出、立、セ、シ、メ、シ、

二十六年八月十一日午後十時二十分發

野村内務大臣

井上公使

帝王皇宮警察本部警察署長人

組織しアルヤ御取調、上迄電リ乞フ

在朝鮮日本公使館

二十六年八月十二日午後十時軍務發

西國寺外務大臣

井上公使

三浦ハ三日午後二時發スルヤ至急送電スレ

朝鮮國本日公使館

二十八年八月十七日午後一時至五時交  
二時至五時

井上金海使

野村四務大臣

皇宮警察所ノ定員ハ警察部一等ヨリ五等

マテ十五人警察部補六等六人警察部十ヨリ

七ヨリマテ二百二十四人ナリ但し警察部外

朝鮮國日本公使館

二十八年八月十九日午前十時五分發

野村內務大臣

井上外使

臨時議會ハ河内川カニ都合ナルヤ請教ス  
リ夕し



二十八年八月十九日午後三時四十分東京府立  
女子高等學校  
四年生  
播磨

井上公俊

野村内務大臣

臨時議會ヲ開カルコトハ  
今更ト思フ来

ル少曜日ニ其様子刻ル一し

二十八年八月二十日午前十時發

外務大臣

井上公使

三浦公使一老ノ電信ヲ專ヘヨ

赴任ノ節西洋料理ノ出来ルウツクシク連レ

ルハト必要ナリ  
右御旨奉達

在朝鮮國日本公使館

二十一年八月二十日午後一時五分發

野村四郎大佐

井上公使

三浦、出發セシヤ、外務大臣、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

何タル返シ、向ナシ、市、通、電、シ、セ、フ

在朝鮮國本日公使館

八月二十七日午前十時十分東京發  
日清鐵道  
ハルビン

井上金橋公使

野村内務大臣

三浦、去ル二十三日當地出發赴任也

リ

在朝鮮國本日公使館

八月二十七日午後一時發

赤伯國警察署長

井上公使

左ノ電報シニ浦公使ハ傳ヘヨ

貴官馬頭所出發ノ日時及ヒ所更乘ノ船

名并ニ江川着ノ日取寄電報アリタシ

二十一年八月二十日午前十時西子乘馬河發

日午後五時十五分發

井上公史

三浦

肥后凡三十四日前之時馬河發一日

前之時江川着ノ積リ

二月二十八日午前十一時至午後四時

同日午後六時至八時

井上勲命全悔

野村四郎大行

松方伯爵聴し度邊大藏大臣の如くナル  
隨う臨時議會に開かれ事と決せり

八月二十九日午後七時馬関發 日午後九時二十分接

井上公使

三浦

肥後丸ニ乗リ今出ル



二十一年八月二十四日午未時

兵庫 大坂 豊前 豊後 井上受

今被部主以府に所送せし、り女留學

生にふと名女官に監督依頼り受り

ハ明にふ江川出帆ノ報り凡て係發元

ハ付 甘知到一君ノ不旅名ノ不極ハ

必り多量ノ増新に似方等格に知り

東田遺にせし、り 陸軍に 河泳結 度し

名称	井上 馨 文書
標題	寄贈金一件 寄贈金処分法

分類 番号	67.3
	18

国立国会図書館

登録 番号	264023
----------	--------

(1)

65

1

(1)

1

9

日本政  
府

朝鮮政  
府

金  
分

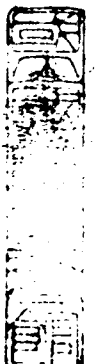
方  
案

18-10  
南支路校升延  
ノ日李父  
-書272

書  
文  
卷  
上  
井

# 寄贈金處が方案

此等贈金ハ從來朝鮮ノ財政ノ紊亂ニ因リ  
其困難極度ニ達セシニ付之ヲ整理シテ其  
基礎ヲ鞏固ナラシメントノ趣意ヲ以テ日  
本政府ヨリ特ニ寄贈相成ルタルモノナレ  
ハ朝鮮政府ハ深ク其好意ヲ沐シ之ヲ以テ  
國家有益ノ事業ニ投シ王室財計ヲ永遠ニ  
鞏固ナラシメ并ニ國庫ノ基礎ヲ固メルヲ  
圖リ爾ヲ其處が方法左ノ如シ



一 寄贈金金額參百萬圓ヲ折半シ其一半即  
チ百五十拾萬圓ヲ王室ニ屬セシメ殘百五十  
萬圓ヲ政府ニ屬セシム可シ但之ヲ領收  
シタル時ハ其濫費ヲ防キ且ツ經濟上ニ  
與ワル激變ヲ避ケンカ為メ日本ニ於テ直  
ニ之ヲ確實ナル銀行ニ預ケ置キ 此少ニ  
テモ利  
子シメ附必要ニ從ヒ漸次之ヲ引出ス可シ  
セシメ

王室ノ部

一 金額百五十拾萬圓ノ内百萬圓ヲ以テ政府  
ニ交付シ其交附ハ銀行預リ手形政府ヨ  
リ之ヲ為スモ妨ケナシ

リ支出スル資本ト合併シテ京城仁川間  
ノ鐵道建築費ニ充ツ可シ但鐵道建築ニ

方案ハ政府ノ  
部ニ詳カナリ

右王室ニ屬スル百萬圓ハ之ヲ政府ニ渡  
シ政府ハ其度支ニ屬スル百五十萬圓ト  
合シ之ヲ基金トシテ紙幣ヲ發行スルヲ  
許シ其代リトシテ該金支附ノ日ヨリ年  
五分ノ利子ヲ拂ハシメ鐵道開業ノ日迄  
政府ヨリ王室ニ拂フ可シ尚ホ開業後其  
利益配當金五分ニ達セサル時ハ政府ヨ

其不足ヲ補~~充~~之<sup>る</sup>年五分ノ割ニ達スル

近王室ハ渡ス可シ

此金額百萬圓ニ對スル利子即チ一々年

五萬圓ノ高ハ之ヲ積立テ毎年王室財産

ノ基本金ニ組ミ入ル、方法ヲ設ク可シ

殘額五拾萬圓ハ直ニ王室財産ニ組ミ入

レ殖利ノ方法ニ從テ之ヲ保存ス可シ右

ハ最モ堅固ナル方法ヲ擇フテ必要ナリ

之ヲ既往ニ鑑ミルニ最近十餘年ノ間ニ

政府ハ紙濫器械又ハ汽船ヲ購入シ機器

君其他之ニ類似シタル製造所ヲ創立スル  
ル為メ多額ノ費用ヲ投シタルニ今日迄  
一錢モ其利ヲ得サルモオラズ其資金  
迄モ消滅ニ属シタリ故ニ先ツ日本ニ於  
テ五分又ハ六分利付公債証書ヲ購入ス  
可シ而シテ毎年受スル可キ利子貳萬五  
千圓ハ前記五萬圓ノ利子計共ニ五萬財  
産ニ組入ル可シ但現今冥内府無用ノ官  
吏官女等ヲ處分スルニ當リ不得已事情  
ニ因リ恩恤金又ハ年金等ヲ給與セザル



可  
得  
サ  
ル  
場  
合  
ニ  
シ  
テ  
支  
出  
ス  
ル  
ハ  
格  
段  
少  
ク  
可  
キ  
ト

政府ノ部

一 金額百五十萬圓ノ内百萬圓ヲ王室支出  
ノ百萬圓ト合併シ九二百萬圓ヲ以テ京  
城仁川間ノ鐵道建築費ニ充ツ可シ同費  
ノ概算ハ漢江架橋費ヲ併セテ九ノ貳百  
萬圓ヲ要スル見込ナリ王室支出ノ資本  
金ニ對シテハ前ニ述ハタル通り政府ヨ  
リ年五分ノ利子ヲ拂ヒ鐵道開業後ト雖

此鐵道營利ノ利益金年五分ノ利子以上  
ニ達スル迄保証ス可シ

此鐵道建設ハ周ヨリ政府ノ事業ナレハ  
政府ハ臨時鐵道建築局ヲ興シ理財ニ長  
セモノ一人ヲ舉ケテ其長官ニ任シ外ニ  
日本ヨリ通任ノ技師長一人會計長一人  
ヲ招聘シテ之ヲ輔佐セシム可シ此重任  
ニ當ル者ハ全權ヲ附與シテ專ラ其事務  
ヲ處理セシム可シ決ニテ政府若シハ其  
他ヨリ之ヲ牽制シテ事ヲ敗ル可ラス其

他重要ナル職事ニハ其首長タル可キモノ  
一二人ツ、ハ必ス日本ヨリ適當ノ技  
術員ヲ招聘シテ其事切ノ成ルヲ期ス可  
シ

一紙幣發行ノ事鐵道建築ノ為メ王室及政  
府ヨリ支出ノ金額貳百萬圓ト外ニ政府  
ノ剩余五拾萬圓トシ基本トシテ政府ハ  
兌換紙幣ヲ發行ス可シ其發行高ハ基金  
貳百萬五拾萬圓ニ對シ百分ノ二十五増ト  
立テ最高額貳百萬五拾萬圓ソ目途トシ

貨幣鑄造ノ高ニ應ニ漸次其限額迄之ヲ  
發行ス可シ但シ一方ニ於テハ紙幣ノ交  
換シ隨意ナラシメ其信用ヲ落サ、ルニ  
注意ス可シ該鐵道ノ起業ニ乘シテ紙幣  
ヲ發行スルハ其流通シ圓滑ニセシムル  
ノ好機會ナレハ細心以テ各割合等確守  
スルヲ尤ニ必要ナリ

一紙幣印刷ハ目今ノ場合政府自ラ其必要  
トスル諸器械ヲ購買セシトスル中ハ年  
一其實用多シ目今ノ財政ニテハ到底支

出ニ最モ困難ナリ第一其器械ヲ購買セ  
ントスレハ九ツ一ツ年ノ歲月ヲ費サ、  
ルヲ得ス故ニ其彫刻印刷等ハ日本印刷  
局ト契約シナシ尤モ紙質ハ朝鮮産上等  
品ヲ使用シ其内ニ廢造豫防ノ為メ秘密  
ノ符トナル可キ藥質并ニ文字又ハ模様  
ヲ濫用シ且ツ印刷済返送ノ後廢支部ニ  
於テ精密ナル部印ト大臣ノ官印ヲ押サ  
ハ以テ廢造ヲ防クヲ得可シ特宜ニ依テ  
ハ廢支部ヨリ官質ヲ印刷局ニ派遣シ其

調製ニ適合ハシム可シ

紙幣ノ使用法ハ先ツ鐵道建築職工人夫  
ノ賃銀并ニ國因ニテ購入ス可キ物品ノ  
代價ニ支拂フ可シ日本ヨリ買入ル可キ  
物品ノ代價ハ度支ニ於テ現ニ蓄藏シテ  
ル日亦紙幣ニ換ヘテ支拂フ可シ

紙幣ノ通用愈々活發ニ赴クハ豫期ノ  
如ク數百兆<sup>三</sup>拾<sup>五</sup>萬圓ノ最高額マデシテ發  
行ス可シ然ル中ハ建築費ヲ除テ猶ホ七  
拾五萬圓ノ剰余ヲ生スルニ付更ニ以テ

來年度ニ於ケル財政ノ不足ヲ補充セハ  
少クトモ二三ヶ月ヲ支フルヲ得可シ朝  
鮮ニ于ハ前年度ノ歲入ハ多ク翌年三四  
月ニ至テ收納スル例ナレハ歲初二三々  
月ヲ維持シ得ハ來年度ノ財計ハ蓋シ格  
別ノ困難ヲ見サラン乎

### 一 機關銀行創立ノ事

紙幣ノ發行ニ先ツテ政府ハ富豪ニ諭シ  
株金ヲ募リ資本金九拾萬圓已上ノ一  
銀行ヲ興サシメ嚴重ナル銀行條例ヲ設

ケテ之ヲ檢束し且ツ度支部ヨリ之ヲ監  
督ス可シ其甄取支配人ハ株主中ヨリ撰  
舉ノ上度支大臣ノ認可ヲ受テ其任ニ  
就カシムルヲトシ外ニ銀行ノ顧問并計  
算ニ關スル庸貧ノ銀行事務ニ練熟セル  
日本人一名ヲ招聘セシム可シ  
此銀行ノ株金ハ期限ヲ定メテ之ヲ募集  
ス可シ但シ募集高五萬圓ニ達シタル中  
ハ期限前ト雖モ開業の許ス可シ  
株金ハ總テ銀貨銀塊並クハ砂金金塊ニ



ヲ募集ニ其金銀地ニ属スル分ハ之ヲ分  
拆ニ其品位ノ價格ニ應シ且鑄造手数料  
ト運送賃ヲ差引キ銀貨ニ換算ス可シ  
此銀行ハ京城ニ本店ヲ置キ仁川釜山元  
山及ニ開城平壤大邱公州全州原州咸興  
ノ各處ニ銀行事務ノ整備ヲ見計ヒ必要  
ニ從テ支店若シハ出張所ヲ置キ政府發  
行紙幣ノ交換ノ交換望人ヨリ百分ノ二以下  
ノ手数料ヲ徴收スルヲ許スニ政府税金  
其他ノ為替方ヲ取扱ハシム可シ

政府紙幣交換基金トシテ及支部ヨリ豫  
メ發行額ニ對スル若干分ノ正貨シテ付  
シ置キ可シ右交換基金ノ下附方并交換  
シタル紙幣處分ニ關シテハ別ニ規則方  
法ヲ設ク可シ

(12)

	65	書
	1	文
開	(1)	略
支	1	上
貝	12	井
贈		
歟		
辨		
法		

28.8.6  
内陽史書2冊  
処分案(漢文)  
-森山記  
18, 8の漢文

此項贈款係因上年日清兩國開釁朝鮮國致  
被虧累欲為之彌補起見由日本國政府特行  
贈送者也朝鮮國政府理宜克体其意用之叙  
興裨益國家事業鞏固

王室財計以及于永遠併立國家度支根基以期無負美意為要今開列辦法于左

一將贈款全數叁百萬元均分之其一半即一百五十萬元歸之

五重一半一百五十萬元歸之政府但於收

到後一為務杜濫支兼銷一為豫防民間財  
情失序先在日本國將此款寄存安實可靠  
之銀行勿嫌行息甚少每遇有緊要用項方  
得隨時抽支

### 王室用款

金額一百五十萬元內抽出一百萬元交附  
政府用銀行存票過付亦無妨礙與政府支  
出之款歸併為一以免京城仁川間修造鐵  
路資本但修造鐵路一機事宜既將其屬

王室之一百萬元交附政府則在政府與其所

領一百五十萬元歸併為一以此作為基金  
准其發行紙幣但由交附款之日起每年  
由政府行五分利息納之

王室至鐵路開業之日為止

倘於鐵路開業後其利益配當金不到五分  
則應由政府補足為五分納之

王室至得交納利益配當金五分之一日為限

此項一百萬元利息每年可得五萬元即將  
此款積儲每年歸入

王室財產基本金內其如何辦法須預行切實

考定為要

至剩餘五十萬元應歸之

王室財產宜從殖利之法妥為儲存但必須慎  
擇切實妥靠之法為要稽之既往近於十數  
年之間政府購抄紙機器或火輪船以及製  
設機器局若或類此製造所支款項為數  
良非尠少而至今未曾獲一毫之利併其資  
本亦屬子虛前報可鑑故如此剩款先於日  
本購置五分或六分利附公債證書其每年  
所獲利息貳萬五千元與前開應得五萬元

利息一併歸入

王室財產切勿輕易支銷但現在應行裁汰害  
內府浮冗官員或官女等莫情有不得已者  
酌予恩恤金或年金以示體恤則不得不由  
此項開銷

政府用款

一全額一百五十萬元內抽出一百萬元與  
王室交到之一百萬兩歸併爲一即用此款充  
作京城仁川間修造鐵路之款現查修造鐵  
路所需興築設漢江橋梁之費一併估計約



為二百余萬元至

王室支出資本即如前股所開每年由政府籌  
付五分利息雖迄鐵路開業之後其由營業  
所獲利益在政府承保照數付清不得因利  
薄有所欠第

修造此項鐵路係屬政府管業故在政府設  
臨時鐵道建築局舉長於理財官員一名作  
為長官併由日本國延聘嫻熟技藝之技師  
長會計長各一名俾其輔佐而權此重任之  
責必須予以全權專責辦理不得由政府若

局外之人稍涉牽制以致債事其餘分掌緊要事務其為首之一二名須由日本國選聘適任之技術員以期事業克成

一發行紙幣事宜以

王室政府備充修造鐵路之貳百萬元以及政府所剩五拾萬元作為基本可由政府發行兌換紙幣其應發數目於本款貳百五十萬元准增百分之二十五以抵三百拾二萬五千元為車限按照鑄造貨幣之數逐漸發行紙幣至額滿為限但有願以紙幣兌換銀貨

者隨到隨換以昭大信當開辦修建鐵路之  
時發行紙幣正屬暢通時機故其紙幣貨幣  
各項比例務當細心恪守最為緊要

印紙幣事宜方今政府欲自行購置必需各  
項機器一則需款浩繁以現在財政情形斷  
難籌措一則欲備齊工場機器約需周年余  
方可成就故其彫刻刷印等事莫如與日本  
國印刷局訂約為便但至其紙性可用朝鮮  
國自造上好之物於抄紙之時參用藥物之  
足以為秘密符號者若或找出字樣花樣且

由日本印成送到後在度支部蓋用精密部  
印以及大臣官印則足以防範贗造之弊若  
或酌量時宜由度支部遣派官員到日本印  
刷局眼同從事亦無不可

至如行使紙幣之法所有修造鐵路工匠夫  
役工資以在國內應購各項物件價值均以  
紙幣支交其由日本購辦物件價值可與度  
支部所存之日本紙幣兌換開支

紙幣果能暢行靈便則可照豫先籌定將三  
百拾貳萬五千圓儘數發行如缺則除開銷

修造鐵路需款外尚可剩餘百餘萬五千  
元即以此充作墊補來年度歲計不敷則優  
可以支持三四箇月蓋因朝鮮國前年度歲  
入概于第二年三四月方得收清為常故能  
維持開年三四箇月間則彌補來年度歲計  
亦有所恃庶幾無甚艱絀

一擬設機關銀行事宜於發行紙幣之前由政  
府曉諭殷實富戶招集股份開設三十萬元  
以上資本之銀行併制定嚴緊條例藉杜冒  
濫之弊又由度支部為之監察其銀行總董

董事等人由股份主撰舉經度支大臣承認  
方准其執事併須由日本國延聘銀行顧問  
一名以及延傭嫻熟行務及計筭之日本人  
各一名以司冊簿會計

此項銀行股份須限定日期招徠但股份之  
數集至五萬元以上則雖在限期以內亦可  
准其開行營業

招徠股份均用銀貨銀塊若或砂金金塊其  
屬金銀地者先行分析按照成色價值併扣  
除鑄造規費以及運送費照銀貨換算

此銀行在東城設立本行俟至行務就緒時  
酌宜在仁川釜山元山以及開城平壤大邱  
公州全州原州咸興隨時擇要分設支行若  
分支所（在日本稱出張所）承辦兌換政府所發紙幣  
又辦理政府徵收稅項以及各項匯款等事  
由度支部按照所發紙幣之若干分撥先換  
給銀貨以久兌換政府所發紙幣之基金如  
其兌換基金應如何撥交以及所換紙幣應  
如何辦理之處須宜另定章程辦法

名 称	井上 馨 文書
標 題	明治28年9月15日 内務省費部 係次

分 類 番 号	673
	19

国立国会図書館

登録 番号	264623
----------	--------



明治三十八年九月、若升上伯、由召見、時、奏、閣、條、項、

一、大院君 秩祿之事

義和君 秩祿之事

一、宮内、田、整、理、事  
但、宮内、及、度、支、分、局、ヒ、レ、ル、年、  
内、閣、會、議、ニ、至、テ、採、用、ス、ル、事、

一、鑛山、件

内、閣、負、以、各、自、召、見、ス、不、可、ス、ル、事、

從、來、延、滞、俸、給、一、即、四、月、之、前、分、

政、府、之、延、滞、一、致、ス、ル、事、

留、學、生、修、業、上、歸、國、之、採、用、

在朝鮮國日本公使館

之事

地方、官、員、之、廢、止、事、

使、令、ハ、本、密、羽、カ、南、北、一、帶、地、業、

轄、ス、ル、類、ソ、シ、テ、

宮内、財政、整、理、事、

宮内、贈、金、成、否、ハ、又、新、年、政府、

財政、整、理、事、

財政、整、理、事、

財政、整、理、事、

財政、整、理、事、

財政、整、理、事、

名 称	井上 馨 文書
標 題	王俄事變顛末報告書

分 類 番 号	673
	20

国立国会図書館

登録 番号	964623
----------	--------

264023

3

昭和7年4月3日

明治三十九年  
十月八日  
王城事變願末報告書

日本帝國政府  
陸軍省  
參謀部  
第一課  
庶務課  
庶務課長

昭和七年四月三日

陸軍省

機密ノ三十ノ子

明治廿八年十月八日王城事變ノ顛末ニ付具報

今日宮地ニ起リタル事變ノ性質及其顛末ニ関シテハ小村

新理ニ依リ具報及其他公私ノ報告ニヨリヒニ詳細御

承知相成候事トハ存候ヘ其尚為御參考本件ニ関シ小官

實地見聞シタルコト及ビ職務上取計ヒタルコトヲ左ニ開陳

ス報候

先般三浦公使新タニ来任セラレ候ニ付テハ乍延引勸進

ノ意ヲ表スル為メ奉月七日午後七時ヨリ當館ニテ晩餐ヲ

供セントシ全公使ヲ始メ杉村日置兩書記官日下計外交

官補國分通譯官及堀口領事官補ノ案内狀ヲ發シ

候處杉村書記官ハ武朝鮮官更ト前約アル故ヲ以テ之ヲ

辭シ國分通譯官モ亦來客ノ前約アル故ヲ以テ之ヲ辭シタル

氏他四人ハ之ヲ承諾致候然レ其日約束ノ刻限ニ至リ三浦日置日下部三名ハ未館致候ヘ其堀口ハ刻リ其下婢コト凡ツ三十分間ニ及ブモ尚未會セザル付人ヲ遣ハシ其下婢ニ勢ネシヲタルニ今人ハ夕景ヨリ萩原警部ト共ニ乗馬シテ他行セシ俟未ダ帰館セスト事付官モ今人ノ為ノ願ル心歟致シ堀口未ダ充分乗馬ノ經驗ナキヨリ若シヤ郊外ニ於テ乗馬ニ其儀之ガ為ノ帰館ノ後ルニ非ルカト申シ候處其時三浦日置ハ小官ニ向ヒ堀口ノ行先ハ自分良ク深知セリ心配スルニ及ムルモ事付官モ深ク之ヲ尋究セズ直チニ食事ヲ終リ凡ソ九時半頃至リハ全解散致候其後八時頃至リ寢室ニ入リタリモが間モナク三浦公川吉輔(別低カニ馬馬通リ)ヲ以テ堀口等ハ自分用達方ニ遣ハシタリ其事柄ハ翌朝ニ至リ話スルヨリ

申来リ候此時小官、未だ堀口ノ行先キヲ承知致カザリシモ、過日  
夫ノ永後入城ノ噂頻リナリシ折柄、付三浦公使ノ命ニヨリ、淡  
原警備ト共、其情況偵察、爲メ城外へデモ出張セシナラセカ  
ル事ナリト、又用向リ帶ビ他行ヒシモノナラバ別段心配スルモ、父バガ  
ル事ナリト想像致候ヘ共、タトヒ如何ナル用向ニモセヨ小官部下  
日ニモ、ハ道ノ山ビ如此不都合無キ様、三浦公使ニ面談シ、尚大  
堀ト等ヘモ訓戒致シ置ク積リ、其終就眠致候

翌ハ日拂曉、小官ハ銃聲ノ連発ニ驚カサレ、城カニ飛ビ起キ  
窓外ヲ望ソバ、玉宮ノ方面ニ當リ、猶數発ノ銃聲ヲ聞キ付ケ候  
處、前日來番巡換ト共、イトノ間ニ争闘アリタルニ付、又々引銃キ  
争闘ヲ試ミタルナラシカ去リナガラ、銃器ヲ用ヒテ、相闘フハ實ニ  
容易ナラサル義ト相認メシニ付、兎ニ用人ヲ遣ハシ、眞實情ヲ

頃察セシメテ欲シ先ツ萩原警部ヲ起サントシタレト全人ハ  
 在定セズ次ニ堀口領事官補ノ宅ヲ伺フニ此亦不在ナリ依ツ  
 ラ萩原ト同居セル大木書記生・向ツテ其故ヲ尋マルニ今  
 朝大院君入闕ニシキ堀口萩原兩人トモ之レニ隨行セリトノ  
 事有ハ官モ非常ニ驚キ入り茲ニ始ツテ三浦公使ハ前晚来  
 堀口等ヲロ此事ニ使用シタルコトヲ知り尚ホ巡査ノ人員ヲ点  
 檢スルニ此又警部・隨行シタル者数名アリタルヲ認メタルヨリ  
 益々事々容易ナラザルニ驚キ三浦公使ニ面會シ其實情ヲ  
 曉メシメテ官ハ直ニ公使館ニ向ツテ馳セ行キシガ途中  
 日蓮寺ニ至リ官ハ出迎ヒタルヨリ其概畧ヲ聞カント欲シタレト  
 全島此官モ亦所謂竊耳・水ノ有様ニテ少モ之ヲ承知セズ  
 且ツ三浦公使始メ杉村書記官ハ已ニ参内セリトコトニ付  
 日蓮寺記官ノ言ニ從ヒ公使館付新納海軍少佐ノ宅ニ

立寄リシ。全所ニ少佐ノ外ニ柴田部及熊本縣人佐藤  
殿。兩人來會セ居リ佐藤ハ前夜來他ノ壯士輩ト共ニ  
先ニ岡本柳之町等ト貴山ニ會ヒ其ヨリ相率ヒテ孔德里  
ニ至リ大隈君ヲ擁シテ玉宮ニ圍入シタル顛末ヲバ三浦公使  
報告セル爲メ今正ニ玉宮ヨリ歸來シ全處ニ立寄リ其始  
末ヲ物語リ中ナリシ。付ハ官モ亦之ヲ傍聴シ稍々其要領ヲ  
得タリ夫レヨリ小官ハ一旦歸館セシガ警部ニ隨行シテ大隈  
君ト共ニ玉宮ニ入リタル當館巡查等ハ年前ハ時頃ヨリ続々  
歸館シ或ハ微傷ヲ受ケタルモノアリ或ハ衣服ニ鮮血ノ染ミタルモ  
ノリ或ハ力ヲ折リタル向モアリテ頗ル殺伐ノ状ヲ呈シ居リシガ  
堀口及萩原等モ亦巡查等ト互ニ相前後シテ午後三時頃  
迄ニ悉皆歸館致候依ツテハ官ハ不取敢堀口頭事官補  
及萩原警部。向ヒ今國ノ事件ニ關係セル顛末ヲ相尋ネ



候處堀口、申立ニ今回事ハ全ク三浦公使ノ命。出ラタルモ  
ノ。レテ前日ノ夕刻ニ浦公使。面會シタル時公使ハ自分ノ命  
スル。今回事々大院君ヲ入嗣セシムル。付テハセ。萬事固本  
ト打合ハセ置キタル。ヨリ今夜入京ノ筈ナル全人(岡本ハ一兩  
日前帰朝スルト称シ下仁セリ)ト寛山。相會。別紙ノ通り全人  
ハ申傳フベシトテ大院君入嗣ノ方法及ビ善後策。関スル數  
箇條。草案書シ示シ(其箇條ハ堀口ヨリ已。京外務次官ヘ  
内報シタル筈ナリ)且ツ曰ク他。何人カ王宮内ノ模様ヲ熟知セル  
者。申述シ行。ベレトノ事。付萩原總督ヨリ然ルベシト答ヘタル  
。然レバ全人並。事。慣レタル。巡査並等ヲモ適宜撰擇ノ上  
。此ノ中ニ即刻出立スベシト。コト。付今タハ領事。晚餐ヘモ招  
カレ。此ノ方以テ一應領事ハ協議致シタルト返答セシ。決シ  
テ。他言スベカラハ領事ヘハ自分ヨリ可然言譯シ致シ不

都合無之様取計に置くべきに付心配スルに及ハズ即時出發  
ハシトテ公使ヨリ強イテノ訓命有之候に付已ラテ得ズ小官  
漸々秋原警部等ト共ニ馬ニ跨リ青山指シテ出テ行キ  
タト事ニ御座候ハ秋原警部ノ申立モ之ト畧全一ニシテセ  
ヒタ別公使ヨリ應ジ公使館ヘ行キタルニ今回事ニ付テハ堀口ヲ  
補正シ御本ト協議シテ行フベシトノ沙汰有之尚ホ之ト全時ニ秋  
村書記官ヨリモ御本ト衝突ヲ起リガハ様注意アリタル趣キ  
御座候依ツテ小官ハ堀口萩原等ニ對シ若シ小官ニシテ之ノ前  
知シタラシムハ決シテ斯ル事ニ關係セシマザリシニ前以テ之ヲ小官ニ聞  
知セシマザリシハ甚ダ遺憾ナリ併シ今後ハタトニ公使ノ命ト雖モ  
最早一即本件ニ關係スルコト相成ラガハ旨申達候然ルニ全日正  
午十二時過ニ至リ三浦公使モ王宮ヨリ歸館シタルヲ以テ直ニ之  
レ會致候處其時公使ヨリ圖取タル趣キニ言レバ近來王妃

シ如ク政黨ノ輩露國ト結托シテ蓋々勢力ヲ逞ツシ内政改  
 革ノ業ハ漸ク進フテ悉ク破壊シ我士官ノ養成セル訓練隊モ  
 亦同黨ノ策ニヨリ故ラニ巡檢等ト爭鬪ヲ惹起カレノ之ヲ口實  
 トシテ遂ニ訓練隊ヲ解散シ且ツ其士官ハ悉ク捕ヘラ之ヲ殺戮  
 シ因テ彼等ヲ入レテ國政ヲ執ラシメ萬事露國ニ依頼シテ我  
 ニ難反セント計畫シ得サニ本日ヲ以テ先ヅ訓練隊ヲ解散ニ着  
 手セシトシタルヨリ最早躊躇スベキ時ニテハバト認メ最モ國本  
 柢ニ叩ク人シテ打合ニセ置キタル大院君ヲ起タシル爲メ確々七  
 日ヲ刻リ以テ一面ニ國本堀口等ヲ孔德里ニ遣ハシ大院君ノ  
 入城ニ當リ壯士輩ヲシテ之ヲ護衛セシメ又タ一面ニ訓練隊ノ  
 一及野備兵ノ一部ヲシテ途中ヨリ全島ニ從ヒ之ヲ警衛シ  
 王宮ニ身カシツタリシガ入城ノ際王宮ヲ護衛セル侍衛隊ト全島  
 一及ト間ニ衝突相起リ多少ノ騷擾アリタレモ固モナリ鎮定ニ帰

國王及び母子宮ハ安全ナリ但シ王妃ハ騷擾ノ際或者ニ殺害セ  
ラレ其他宮女ニ三名訓練隊聯隊長洪啓董及宮内大臣  
李耕植及び兵卒一名モ亦殺害セラレニ至レリ而シテ自分ハ  
今早朝國王ノ召ニヨリ参内シ大院君御席ノ上謁見ヲ遂ケ  
本件ニ関スル前後策ヲ奏上シ置キタリ然ルニ本件ヲ實行ス  
ルニハ当初朝鮮人ノミヲ使用スル筈ナリシモ韓人ノミヲハ到底目  
的ニ達シ能ハガルニヨリ已テ得ズ日本人ヲ用ユルコトニ相成リタリ  
又最初ハ蘇月中日ヲ以テ此事ヲ行フ筈ナリシモ漸次機密漏  
洩ノ患アルニモナラズ八日ニ至レバ訓練隊ハ弥々解散セラレ其武  
器ハ悉ク取上ケラルコトナリ事情頗ル切迫シタルニヨリ已ムヲ  
得ズ急ニ七日ヨリ着手セシニツキ萬事手邊ヲ生シ種々ノ不  
都合ヲ来シタリ併シ日本人特ニ公使館員領事館員並ニ  
守備隊人々之ニ關係セシコト公然ト相成候ヲハ甚ク面

倒ニキ能迄之ヲ隱蔽セザルベカラズ依ツテ多急居留民ノ  
重ナル者ヲ領事館ニ召集シ今回ノ事件ハ全ク大院君派ト  
王妃派トノ争闘ニシテ日本人ニハ關係ナシモ守備兵ハ王城  
内ニ於ケル騷擾ヲ鎮定スル為メ入城セリト分明シ種々ノ凡說  
ニ逐ハガル様諭達シ尚ホ官部下ノ官吏ヲ戒メ決シテ之ニ  
關係セシフトテ口外セザル様取計フベシ云々トノコトナリシガ官  
も當時ハ此事實ハ可成之ヲ隱蔽致シ置ク方可然ト存候ニ付  
先ニ南三浦公使ノ命ニ從ヒ夫々内諭致置キ候

然ルニ尚ホ三浦公使ノ直話堀口領事官補萩原警部並ニ今  
回ノ事件ニ關係セル當館巡查及其他確カナルヤ即ヨリ探聞シタル  
所ニヨリハ抑モ今回ノ事變ハ全ク大院君及三浦公使ノ計畫ニ基  
キタルモノニシテ大院君ト王妃トハ平素武様モ密チラザル間柄ナル  
上ニ近來全君ハ一層王妃ノ專横ヲ憤リ機會ヲアラハ再ビ入

闕レ王妃ヲ始メ其黨與ヲ排斥セントテ時期ヲ俟テツ・アリレ排柄  
三浦公使モ亦當國ニ對スル政略上到底王妃ヲ除ク・アラゲバ内政改  
革ノ行ハレガルバ勿論當國ニ於ケル我勢力カハ全ク地ヲ拂フヲ去  
ルコト旬月ヲ出デザルベク而シテ之ヲ除クニハ大院君ノ勢力カヲ利  
用スルヨリ外ニ途ナキモノト思ヒ効カニ岡本柳之助ヲ遣ハシ(岡  
本ハ昨年七月廿三日ノ事變ニ當リ大院君ヲ擁シテ入國セシメタ  
ル以來全君ト頗ル懇意ノ間柄トナレリ)大院君ノ内意ヲ伺ハシメ  
タルニ全君ハ若シ三浦公使ミテ余ノ志ヲ達セシムルナラバ如何  
ナル條件ニテモ承諾スヘシトコトニ付其後岡本ハ三浦公使ト大院  
君トノ間ニ在テ數回ノ往復ヲ爲シタル末公使ハ岡本ヲシテ大院  
君ハ入國ノ後決シテ政事ニ容喙セザルコト李坡銘ハ直チニ日本へ  
留學セシムルコト及其他重要ナル案件ヲハ認メタル誓書ヲ大  
院君ヨリ受取ラシメ置キタリ然ルニ其後堀口鎮守官補ハ三浦

公使ト大隈君トノ間ニ斷ル計畫アルベシトハ知ラズ其後入籍員房  
之進ナルモノト其ニ偶然全君ヲ訪問セシニ日本領事館ヨリ來ル  
人ナリト聞キ全君ハ効カキ幕門ヨリ之ヲ通シ面會シ且難談  
中詩文ノ應答ヲ爲シタリレガ其時全君ノ賦シタル一篇ノ詩中  
自分モ再び入關シテ故事ニ興リタレト思ヘば自分ヲ輔佐シ吳  
ルベキ知己ナキニ苦ムトノ意ヲ寓シタルニヨリ堀口モ亦試ミ其  
韻ニ和シ易ミシラ若シ志アラバザレモ輔佐ノ人ナキヲ慮フルニ  
及バガルベシトノ意ヲ寓シタル一詩ヲ賦シ之ヲ示シタレバ全君モ  
頗ル満足ノ色アリ李坡銘ヲ呼出シ之ヲ堀口等ニ紹介セシガ  
告別ニ臨ミ大隈君ハ堀口ニ向ヒ子ハ岡本柳之助ナル者ヲ  
知レリヤト問フニツキ堀口ハ之ニ對シテ然リ予ハ彼ト懇意ナ  
リト答ヘタリ大隈君曰ク本日子ト應答ノ事ハ若シ他日死  
賢セハ子ノ累ヲ来スヤモ計ラズニ付今之ヲ焼キ棄ツベシ

トテ當日、筆談書類及詩文、認ノアル書類ハ悉皆堀口ノ面前ニテ  
焼キ棄テタリ依テ堀口ハ稱大院君ノ禁止ヲ怪ミ歸ツテ之ヲ三浦公  
使ニ告ケタリ然ルニ其後大院君ハ其信任スル洪顯鐵ナル者ヲ屢々  
堀口・宅ニ遣ハシ三浦公使ニ面會ノ出来ル様取計ヒ呉シ度ニト  
ノ事ニ付堀口ハ其都度之ヲ公使ニ傳言セシモ公使ハ未ダ其時機  
到來セズ若シ其時機ヲ得バ我ヨリ進ンデ面會ヲ求ムベキニツキ暫  
ク、候ソルベシトシノ毎ニ其面會ヲ拒絕セシガ來月七日ニ至リ大院君  
ハ忽々セキ込ニ例ニヨリ洪顯鐵ヲ遣ハシ堀口ニ告グルニ本日ハ是  
非英三浦公使ニ面談致シタキコトアリ若シ面會日ヲ拒マルナラバ公  
使ハ余ヲ疑フモノト見做ス外ナレトコトニツキ堀口ハ之ヲ傳言ス  
ル為メタ刻ニ三浦公使ヲ訪ヒタリレガ其時公使ハ已ニ翌早朝ヲ以  
テ事ヲ舉ケント企テ居リタルヲ以テ實ハ斯々ノ方法ヲ以テ今夕  
ヨリ忽々大院君ヲ入廟セシムルコトニ着手スル筈ニ付直ニ龜山へ行



■岡本ト會合スベシトノコトナリシカバ堀口ハ茲ニ始メテ公使ノ計略  
ヲ知レリ是ヨリ先キ大院君ハ岡本ヨリ聞ク處ニヨレバ自分<sup>ガ</sup>今回入  
國ノ企テ付テハニ浦公使モ賛成ヲ表シ之ヲ應接スル筈ナレ堀  
口ヲ以テ其内意ヲ伺フニ甚バ冷淡ナルガ如クニ思ハルニヨリ全君モ  
少シク疑ヲ起シ若シヤ岡本ガ自分ヲ欺キタルニアラザルヤニ浦公  
使ハ<sup>果シテ真ノ意ヲ轉シテ積リタルヤト訝リ始メタリ而ルニニ浦公使ハム</sup>岡本ヲ以テ大院君ヨリ<sup>書</sup>書迄取ラセ置キタル事ナレハ  
時機カハレハ何時ニテモ之ヲ利用シ得ベク且ツ之ヲ利用スルハ可  
成<sup>チ</sup>苛立タセ置ク方好<sup>チ</sup>結果ヲ奏スベキコトト認メタルニヨリ  
其封函ヲ知ラザル堀口ニ對シテハ故ラニ冷淡ヲ装フヒ置キ陰カニ  
乗ズベキ時機ヲ伺ヒ居リタリシガ<sup>客</sup>本月七日ニ至リ前記ノ事情ニヨリ  
忽ニ其封函ヲ實行スルコトニ相成リタリ

堀口ハ款款等ハニ浦公使ノ命ニヨリ渡辺境横尾小田本殿  
或相ノ大巡査ヲ奉ヒ(但シ手服着用)七日夕景ヨリ當地ヲ祭シ

青山：趣キ全所：於ケル本邦人並司事ナル者、定。於テ岡本が仁川  
ヨリ来葡スルヲ待テ受ケ居リシニ國友重章佐々木之安達謙  
直美晴顯月成光山田烈成其他凡ソ二十余名、本邦人モ  
亦多シキヲ携ヘ京城ヨリ全所ニ來會シ種々評議ヲ凝シ  
タリ。ガ其夜深更ニ至リ岡本モ漸ク青山ニ到着シタルヨリ一全  
體卒ニテ孔德里ニ趣キタリ時已。夜ノ十二時頃ナリシカバ門扉  
閉サレテ入ルコトヲ得ズ依ツテ秋原警部ハ渡邊巡查ニ  
命ジ柵屋巡查ノ肩ニ乗リ牆壁ヲ越ヘテ門内ニ入り内部  
ヨリ之レヲ開カレタタルニヨリ一行ノ者ハ直ニ邸内ニ進入セリ其時  
豫ネテ警衛ノ爲メ其節ヨリ全邸へ派遣セル十餘名ノ德巡  
巡檢等ハ之ヲ強迫シテ一室ニ押込メ外部ヨリ堅ク之ヲ封  
鎖シ其外出ヲ制止シ尙ホ其着用セザル制服制帽ヲ剥  
取り之レヲ我巡查ニ着用セシメタリ斯クテ他ノ人々ハ門内ニ

入り候々居ル間ニ岡本ハ其通井人鈴木順見ヲ伴ヒ大院君  
 ノ居室ニ入りテ之上面會シ凡ソ二三時間モ評議ノ末弥々  
 出立スルコトニ決シ全君が轎ニ乗シテ出門スルヤ岡本堀口  
 萩原及其他ノ人々一全轎ノ前後ヲ擁シ西大門ヲ指シテ向  
 ヒタル途巾一群ノ訓練隊ニ遇ヒ此亦大院君ノ護衛ニ加ハリ  
 タリシガ全刻我守備兵ノ一部分モ亦行軍ヲ名トシ西大門  
 外ニ於テ同君ノ一行ヲ迎フル筈ナルニモ拘ハラズ該地ニ至ル  
 モ未ダ日本兵ノ来ラザルニヨリ暫時候々合ハセ居リしが已ニ  
 レリ日本兵ハ途巾誤リ南大門ヨリ出テ行キタルコト相分リ  
 シレニ時使ニ使ヲ派シテ之レヲ西門外ニ呼集シ始メテ全君  
 一行ニ相ハラシタル村隨分時間ヲ徒費セルカ爲メ其一行  
 力西大門ヨリ入城シ至宮ノ正門即チ光化門ニ達シタルトキハ  
 已ニ黎明ノ頃ト相成リタル趣キ御座候然ルニ萩原ハ部下

ハ此處ヲ率ヒ全居一行ノ前ニ進ミ先ツ光化門前ニ於ケル我  
等諸隊ノ共當ヨリ機ネテ用意セル梯子及斧等ヲ領取シ之  
ニ付成井ヲ該門ノ近傍ヨリ高壁ヲ乘リ越シ門内ニ入リテ番  
兵ヲ進ヒ拂ヒ内部ヨリ鐵錠ヲ解キ之ヲ引明ケシカバ門外ニ到  
リしハ大院島一行ノ者ハ俄カニ吶喊シテ門内ニ突入セシガ其奥  
ニ於ケル數モノ中門ハ一行ノ先驅者モ巡査等ガ其勢ヘタル梯  
子ヲ以テ一々牆壁ヲ踰越シ内部ヨリ之ヲ開キタルヨリ一行ノ  
者共ハ其後ニ從ヒ武ハ銃ヲ振ヒ或ハ銃ヲ放テ頗ル混雜ヲ極メ  
ツ、宛然百戰一揆モ全様タル勢ヲ以テ一處ニドツト復宮迄押  
寄セケリ此時宮内ノ處々ニ集リ居リタル侍衛隊ノ兵士ハ非  
常ニ狼狽シ悉ク其制服ヲ脱キ棄テ殆モ蜘蛛ノ子ヲ散スガ  
如ク何レハ逃ゲ失セテ片影ヲ止メズ國王宸殿ノ近傍ニ宿  
直モ當國政府廳ニシテ侍衛隊ノ教官タル米國人モセネタル

グイ、如キハ最初先化門辺ニ関警ノ起ルヲ聞キ此レ唐事

ナラズト思ヒ俄カニ部下ノ兵士ヲ招キ之ヲ其附近ニ配置シテ急

下ニ先後撃退ノ準備<sup>急</sup>スリナカリシガ右ノ兵士著ハ日本人ノ

振ヲテ近寄ルヲ見ルヤ否ヤ此亦敵ニ向ツテ一突ノ銃ヲ放ツ

暇<sup>ク</sup>直ニ列ヲ乱シテ逃散シ之ヲ制止セントセシ全教官ス

ラモ此兵、為ソ突キ飛バサルニ至リシト云フ然ルニ後宮ニ押

寄リタル一隊ノ日本人等ハ外ヨリ戸ヲコデアケテ内部ヲ同フニ数

名ノ宮女其内ニ潜ミ居ルコトヲ察見セシカバ此ゾ王妃ノ居間ナリ

トニ尋直ニ自刃ヲ振ツテ室内ニ乱入シ周章狼狽シテ泣キ

叫ビ逃ケ隠セントスル婦人ヲバ情ケ容赦モアラバコソ皆ナ悉クヒッ

捕具中服装容貌著優美ニシテ王妃トモ思ハルベキモノハ直

ニ紐ヲ以テ之ヲ殺戮スルコト五名ニ及ベリ去レバ彼等中ニハ真ニ

王妃ノ容貌ヲ識別シ得ル者一人トシテナカリシノミナラズ既ニ

殺害セラレタル婦人ノ死骸及尚ホ取押ヘ居ル者ノ相貌ヲ一々点  
検スルニ其年配皆ナ若キニ過キ豫テ聞キ及ビタル王妃ノ年齢ト  
符合セザルヲ以テ是レ必定王妃ヲ取逃シタルナラント思ヒ國友重  
章ノ如キハ尚ホ残り居ル一婦人ヲ捕ヘ室内ヨリ椽側ニ引ズリ出シ  
左手ニ襟髪ヲ攫ミ右手ニ白刃ヲ以テ其胸部ニ擬シ王妃ハ  
何處ニアリヤ何時何處ニ逃ケ行キタルヤ杯ト邦語ヲ以テ頻  
リニ怒聲スレバ邦語ニ通セサル害女ノ事アレバ何ヲ云フノカ又何ト  
返答スベキヤヲ知ラザルニツキ唯徒ラニ號叫シテ哀ヲ乞フノミ  
ナリシガ旁ニ居合ハセタル堀口ハ國友ニ向ヒ斯ル殘虐ヲ行フベカ  
ニズトテ之ヲ制止シタレバ更ラニ聞入ルベキ模樣ナク萩原ノ叱  
責ニヨリ始テ其暴行ヲ中止セリ此時最早日出後ナリシガ最  
キニ部下ノ侍衛隊ニ逃ケラレ唯独リ残り居リタル宋國人ニセネ  
グダイハ其近傍ニ佇立シテ本邦人ノ暴行ヲ目撃シ居リタルヨリ

或者ハ直チニ彼ヲ殺害スベシト叫ブアリ又某時備隊士官ハ堀口ニ  
 向ヒ彼洋人ヲ此處ヨリ退去セシムルハ易ヲ任務ナリ且シク速カニ之  
 ヲ他ニ避ケシムベシトノコトニツキ堀口ハ今人ニ向ヒ佛語ヲ以テ速ニ  
 此處ヲ立退クベシト請求シタルニ「ダイ」曰ク自今ハ米國人ナリ日本  
 人ノ命ニ後ヲ能ハズト退去ヲ肯ゼズ山田烈盛モ亦英語ヲ以テ  
 之ト應答ヲ始ソタリシが其後間モ無クシテ今人ハ一時現場ヲ  
 立去リ暫クツテ再び出テ来リ傍觀セリ尚ホ今日「ダイ」ト共ニ王  
 宮内ニ宿直セル露國人「サバチ」ナル者モ亦隠カニ之ヲ傍觀シ  
 居レリト云フ然ルニ他ノ壯士輩ハ王妃ヲ逃シタルト聞キ處々搜索  
 ヲ始ソ終ニ國王ノ居室ニ迄隔ミ込マントセしが此所ハ國王妃ノ  
 赤子寓モ亦居ラセラレ何レモ願ル御恐怖ノ御様子ニツキ萩原  
 ハ直ニ國王、御座ニ進ミ御安心アルベシト告ケ狂ヒ奔ノク壯士  
 輩ニ向ヒ大手ヲ張リテ大字教ヲナシ此處ハ國王陛下ノ宸殿

ナリ立テ入ルベカラスト辨叫シ其乱入ヲ制止シタリレカバ豫テ大院  
君ヨリ國王及女子夫妻ハ必ズ助命シ呉ルベシト、依頼アリタルト  
ハ、一々異議ナリ其場ヲ立退キタリレカバ國王及女子ハ身ヲ振  
ハシテ伏梨、兩腕ニ取リスガリツ、頻リニ保護ヲ頼ミ給ヒタリ斯  
クテ本邦人ノ乱入者ハ處々ニ王妃ノ所在ヲ捜索中或ル宮女ノ言ヨ  
リ王妃ハ頼ノ上部ニ一点ノ赤跡アリトコトヲ聞キ已ニ殺害セル婦人  
ノ屍ヲ点検スルニ其内臺名ハ果シテ頼ノ上部即チ俗ニ米嚙ト  
称スル部分ニ赤跡ノ存スル者アルヲ発見セルヨリ之ヲ他ノ宮女數  
名ニ示シタル、何レモ皆王妃ニ相違ナシト云ヒ後テ之ヲ大院君ニ告  
ケタルニ全君モ亦ハ其王妃ナルヲ信シテ手ヲ拍ツテ嘆ル満足ナル意  
ヲ表サレタリ其後間モナク三浦公使ハ松村書記官國分通譯  
官ヲ伴ヒ参内シ大院君列座ノ上國王ニ謁見シ何事カ奏上ス  
ル所アリシ趣キナルカ王妃ノ屍ハ三浦公使ノ入闕後公使ノ意ニ出デタ



否や詳カナラザレ故原ノ墓園ヨリ韓人ツレテ武門外ノ松林  
 中ニ運び行カシメ薪ヲ積ンデ其上ニ載セ置テ之ヲ焼キ棄テ  
 タリト云フ而シテ之ヲ燒キ棄ツル際王妃ノ腰ニ掛リ居リシ巾着ノ中  
 ヲ探シタル朝鮮國王ヨリ露國皇帝ニ向ヒ露公使ウエーバー氏  
 留任ヲ依頼スル書狀ノ原稿ミテ王妃ノ自筆ニ成レルモノニ通テ  
 察見セシカバ故原ハ之ヲ鈴木順見ニ渡シタリトカ聞及候而シテ  
 ハ其後公使館ノ於テ杉村書記官ガ之ヲ其親ノ引出シヨリ取出シ  
 タルヲ見セシガ當時尚齋香ノ香郡都トシテ鼻ヲ衝ケリ而シ  
 其寫ハ即チ別紙カニ歸ス第ニ歸寫ノ通ナリ又タ王妃及ビ前記  
 ヒル宮女ノ外ニ殺害セラル者ハ訓練隊大隊長洪啓薰宮内  
 大臣李耕植及侍衛隊ノ兵士一名ミテ他ニハ韓人中一名ノ  
 負傷者モ無カリシカ侍衛隊ノ士官古典澤ハ王宮内ニ於テ  
 一時本邦人ノ爲リニ捕ヘラレタルモ遂ニ逃レ去リタリ然ルモ右ノ人

人、皆本邦人ノ手ニ搦リ殺害サレタルニハ相違ナカルベキモ日本人中  
同ノ手ニ殺サレタル者未ダ判然セズ去レテ王妃ハ我陸軍士官ノ  
手ニ所リ殺サレタリト云フ者アリ又タ田中賢道ヨリ其下手人ナ  
ル者ヨリ横尾境面巡查モ何人カリ殺傷セシヤノ疑アリ高橋  
源次モ不慥カニ或ル婦人ヲ殺害セリ其證據ハ即チ別紙第四号  
馬ノ如シ洪啓策我陸軍士官之ヲ殺害シタリトハ信ズベキガ如シ  
奇聞海ノ兵卒壹名ハ多分我守備隊ノ銃彈ニ斃レタルモノ  
ナルベシ曰石巡查ハ事變ノ當日南大門ニ於テ大院君一行ノ  
來タルヲ候テ受ケ居リシガ銃聲ヲ聞キ王宮ニ馳セ附ケタルモ  
最早事終リタル後ナリレ故前記ノ殺戮ニハ與カラザリシガ如シ  
又今圖ノ事變ハ前記ノ如ク大院君及王浦公使ノ兵謀ニ基キ  
多勢ノ人々王宮内ニ亂入シ終ニ王妃ヲ弑シ其他ノ人々ヲ殺戮スル  
ニ至リタル況ヤタルガ其關係者ハ朝鮮人中ニモ現軍部大臣張



モト認シテ候然ルニ前記ノ方法ニヨリ王妃敎育、計画ヲ實行ス  
ルコト決ミタルハ果シテ何時ナリシヤ確ト判然不致候ヘ共之ニ關係シ  
ル者ハ母、敎唆ヲ受ケタルハ七日ノ夕刻ニシテ堀口等が龜山出張  
ノ時、或タル時、前後ナリトコトナリモモ三浦公使、直記ニ  
シテ、今日ノ事ハ極シテ秘密ニシテ顧問官等ヘハ勿論七日ノ朝  
ニ至リテハ松村ヘモ秘シテ置キリト、事ニ御座候ヘ共松村國介  
ハ六月六日、日ニ於テ其翌夕催スベキハ官ノ宴會ヲ辞シタルヨリ  
考テレバ全人等ハ其時ニ本件ヲ謀リワ、ヤリシモノト察セラルヌカ  
三浦公使ハ官ノ招待ヲ辞セガリシハ其計畫ノ發覺ノ患ヒタル  
故ニアシガルカト推測セラレ候尚又訓練隊敎官、ノ守備隊附  
宮本少尉ハ九月廿七日ヲ以テ訓練隊大隊長島範然ト共其  
訓練隊ヲ率ヒ龜山ニ於テ演習ヲ行ヒシハ其時島範然  
ハ悄然トシテ全少尉ニ向ヒテ予ハ昨午東學黨征討ニ采

今日、至ル迄永ク足下ノ懇切ナル教訓ヲ受ケ實ニ感謝ノ  
 至リ。堪ヘズ左レに余ガ訓練隊ヲ率ヒ足下ト共ニ演習ヲ行  
 フハ最卑今圓ガ最後トナレリ遺憾極マリナシト申ス。付全少尉  
 ハ任シテ其故ヲ問ヒシ。高曰ク我訓練隊ハ最卑旬日ヲ出デズ  
 ンテ解散セラルベク而シテ其時校ハ悉ク異利ニ屬セラルベキ也  
 ニ付余ハ可成速カニ逃亡シテ一身ヲ全クセント欲スル。而此事  
 決シテ他言セザレバ足下ハ永ク教訓ヲ受ケタル恩アルヲ以テ  
 余ガ衷情ヲ打明カシ置タリト。事ナリシガ如キ乎八日高ハ  
 訓練隊教官石森大尉ヲ訪ヒ何事カリ相談シ十月五日至  
 リ。高屋敷少佐石森大尉ト相伴ヒテ玉浦公使ヲ訪問セ  
 リ。トコトナレバ玉浦公使ガ王妃排斥ノ方法事ニテ大隈君ヲ利用  
 セント欲シタルハ果シテ何時ニ始マリシヤ審カサウ事ニ岡本加ハ  
 成初見之ニ關係シ訓練隊及守備隊ヲ利用セントシタルハ

十日三日前後ニシテ楠瀬中佐及馬場栗が佐等が事件ニ与  
リタルモ亦此時ナラント推測致カレ候左レ此我軍人軍属カ何  
時如何ニシテ本件ニ関係シ如何ナル舉動ニ及ビタルヤハ今固當  
ニハ出張セシ田村中佐ヨリ已ニ詳細ノ事情ヲ其筋ヘ報告  
シタル義ト存候ニ付茲ニ譯述不致候然ルモ今固ノ事ハ三浦  
ノ使が願ル秘密ニ計畫シタルハ固ヨリ論リ候ガザル次第ナレ  
ニツテ実行スルモ當リ小官ノ部下ニ属スル堀口領事官補款  
案警部及ビ巡查等リ使用セルモ拘ハラズ小官ニ一言ノ相談ナ  
キノミナシズ却ツテ之ヲ小官ニ隠蔽セント試モタル所以ヲ推測  
スルモ抑モ當地ハ御承知通りノ場所柄ニテ内外人ノ別ナク不  
義不仁ノ手段ヲ以テ種々ノ計畫ヲ行フモノ頗ル多ク常ニ有  
鬼夜行ノ有様ヲ呈シ居候處此地方ニ於テ小官が其職務  
ヲ適當ニ施行セントスルモ如何ナル人ニ對シ如何ナル事ヲ處

人ルモ皆剛直ヲ以テ主義本領ト爲サバカラザルハ要ヲ  
認メタルヨリハ官当地着任以來平素一般人民ニ對スル剛直  
ヲ以テスルハ勿論公使舊託官等ニ向ツテモ亦此主義ヲ持タル  
コトナク時々其命ヲ聽カズト抗論シタルコトモ往々有之候所  
若シ事件ノ如キ權謀的ノ計畫ヲハ官ニ覺ラセテ候テハ却  
リテ其實行ヲ妨害スルナラント王浦公使村高託官等ニ於  
テ懸念セシ故ヤランカト存ビラレ候

十月八日、朝王宮内ニ於テ日本人が被戮シ行ヒタル時ハ已  
ニ日登ナリレナリ米國人ヲセネラル。ダイレト露國人ガバチントハ  
其現場ニ在ツテ之ヲ目撃セリ且ツ全日王宮内ノ事變ヲ聞  
テ直ニ参内セシ露國公使ヲ始メ門外ニ群集セル數多ノ  
朝鮮人ハ兇器ヲ携ヘタル日本人モ三位々群ツテ死シテ死  
門内ヨリ出デ去ルヲ認メタリ之レニ關係セル日本人等ハ帰宅

後直す、他人々、向ヒ公然ト自己ノ功勞ヲ吹聴スルニ至レリ而シテ  
小人ガ之レノ關係セシコトハ故早蔽フベカラザル事實トナレリ去レテ  
一面ノ便及ヒ其他ノ日本官吏ガ之レノ關係セシコトハ直チニ外國人  
等ニ知レ直ラザリシガ如シ小官ハ數日前晚餐ニ招カレタル筈  
惟高翌九日午に四時頃英國總領事「ヒリアー」氏ヲ訪じ  
又々其歸途英國副領事ニ面會シタレト云氏トモ本件ニ日  
本人ノ關係セシコトハ已ニ承知セシモ我官吏ノ關係セシコトハ未  
カ知知セザル模様ナリトナリ然ルニ小官ハ事變ノ當日其顛末  
ヲ聞知スルヤ否ヤ是レ我外交上實ニ容易ナラザル出来事  
ナリト相認メタルニヨリ三浦公使ニ向ツテ其前後策ヲ尋ネタルニ  
公使曰ク朝鮮政府内部ノ事ハ大院君ニ於テ一切其責任ヲ  
持タル筈ニ付其憂モ心配スルニ及バズ唯外國公使等ガ日本人ノ  
關係セシコトヲ非難スルノ患アレト云ハ大院君ト平素和交アル



日本人等が同君入朝。付其請。應し之。隨行せしモノナリト  
并解スル。是レリ而シテ若シ已ム。得ズバ其内數名。シ重刑ニ  
處シ。尚。シ名許。退轉ノ處。分ヲ行フベキ。ト本件ニ關係セシ  
壯士中。藤勝。顯。月。成。光。外。壹。名。ノ如キハ。如何ナル重刑ニ處  
セラル。モ。異存ナシト申シ。居レリト。コトニ付。小官ハ。更ニ公使ニ向ヒ  
今回ノ事。實ニ關係セシ日本人ノ多クハ。閣下。始。シ其他ノ公使  
能。負。領。事。館。負。甚。ビ。守。備。隊。士。官。ノ一部モ亦之ニ關係  
スルコトヲ。知セリ。若シ其事實他ニ漏泄シ。諸外國人ノ耳  
至シタルニ。如何セラルベキヤト。反問セケル。公使曰ク。我。實。受  
難。係セルコト。付。テハ。當人ハ。勿。論。他。國。係。者。リ。シテ。其。重。ニ。其  
和。密。ニ。守。シ。レ。シ。タ。ト。ハ。法。庭。ニ。於。テ。審。問。シ。受。クルト。雖。モ。決。シ  
テ。之。ヲ。口。外。セ。シ。サ。ザ。ル。權。取。討。ヒ。置。ク。積。リ。ナリト。事。ナリ。ト。其  
後。當。地。ニ。控。ケ。ル。本。邦。人。ノ。新。聞。進。信。負。等。ハ。公。使。ノ。旨。ヲ。受。ケ



要ト認リ候ニ付小官ノ事度ノ當日直チニ書リ認リ其實情ヲ  
原外務次官迄内報致シ置キ其後尙ホニ回全次官へ内報  
致シ置キ候ニテ亦堀口領事官補ヲレテ詳細ナル事情ヲ  
認リ之レヲ全次官迄内報セシメ置キ候然ルニ本件ニ關スル犯  
罪者ノ屬分方ニ可成速カニ着手スルニテハ犯人著漸次  
逃散スルニミナラズ証據埋藏ノ患モ有之候處本件關係者  
ハ前記通り候リ居留人民壯士輩ニ止マラズ三浦公使始メ  
本村書記官及ビ小官ノ部下ニ屬シ犯罪人ノ逮捕審問處  
ニテハ之ニ關シテハ小官ノ手迄トシテ使用スベキ堀口領事官  
ハ下級警察部セヒ最モ有用ナル巡查ニ悉ク本件ニ關  
シテハ之ニ付其處分方ニ頗ル困難ヲ相覺ス候ヘ共  
終ニ兩三浦公使ト計リ便宜ノ處分ヲ行フ積リニテ十月十  
日ヲ以テ本件ハ三浦公使ノ意見ニ從ヒ處分致シテモ不爲

然キヤ否ヤ電信ヲ以テ伺ヒ出候處也ハ今四ノ事件取調ノ爲  
ノ當地ニ出懸スル小村政務局長ノ到着スル迄務テ總便ノ手  
段ヲ執リ他日ノ煩累ヲ貼ケル様注意スベキ旨御電訓有  
之候然ルニ事變後既ニ數日ヲ経テ日本人ノ之レニ關係セシ  
コト最早隠レナキ事實ニ相成候モ拘ハラズ尚ホ當館ニ於  
テ公然其取調ニ着手不致候テハ外國人ニ對シテモ甚ガ不  
体裁ニ付十月十二日ニ至リ先ツ警察官ヲシテ關係者ヲ口供  
ヲ取ラレルコトニ致候處松村書記官ハ其意ヲ國友重章  
ニ傳ヘ關係者中甘シテ我警察ノ取調ヲ受ケベキ者ノ姓名  
ヲ撰出セシタルニ即チ別紙第五号及第六号寫ノ通り申出  
テ尚ホ取調ヲ受ケタル節ハ別紙第七号ノ通り今一ノ申立ヲ  
致スベキ様彼等間ニ申合ハセシツテ而シテ彼等ニ警察ノ  
取調ニ從ハル以上ハ退轉又ハ多クノ刑罰ニ處セラレハ貴陪

に致し居り候處是と皆柴田郎等取計ニヨリ大隈君ヨリ報酬  
トシテ實に受ケタル金六千圓ノ分祀ニ与カル約束ニ以テ之ヲ承  
諾セシメタルヤニ聞及ビ候而シテ等ノ人々が我警察ノ取調ニ  
應シ陳述シタル口供ハ即チ別紙第八号留ヨリオナ九号留迄  
ノ通りニ御座候處是と聞ヨリ虚構ノ供述ニ過キサレ只  
舊使吏ヲ主トスル為メ強ヒテ推測モ不致其低小村局長ノ  
来着ヲ待テ受ケ居候然ルニ翌十三日ニ至リ退轉ノ處分ハ  
日ニシテ受ケルモノ刑辟ニ觸ルガ如キハ断シテ辞セザルヲ得ズ  
ト議論訓証人々ノ間ニ相起リ且ツ公使館ノ處置ニ對  
シ腹ル不平ヲ抱キ我々ヲシテ刑辟ニ觸レシムルニ至ルハ畢竟  
公使館ノ措置其宜シキヲ得ザルガ故ナリ若シ我々ヲ刑辟  
ニ觸ルガ如キコトアラバ我々ハ公使館ノ秘密ヲ洩スベシ公  
使館ニ乱入スベシ公使館員ヲバン擲ルベシ杯ト苛激ノ言

シ突スル者有之候ヨリ三浦公使モ大ニ之ヲ持歸シ此輩ニ對シ  
速カニ退轉シ命ズベキ旨別紙第千号官ノ通りナル私書ヲ以テ  
小官へ申越候依ッテ小官ハ直ニ右ノ通り取計ヒ可然ヤ否ヤ電  
信ヲ以テ伺ヒ出置キ尚ホ三浦公使へモ其趣キヲ通テレ退轉  
處分ハ其節ヨリ何分ノ訓令有之候迄差扣ヘ置ク方可然ト  
申シ遣ハシ置キ候處今日夕刻ニ至リ今公使ハ更ラニ別  
紙第千号官ノ通りナル私書ヲ以テ速カニ退轉處分ヲ  
行フベシ其責任ハ一切自分ニ於テ引受ズキ旨申来リ候条  
此時小官ハ三浦公使ニ面會シ小官ガ職務上行<sup>フベキ</sup>ト關シ  
テハ小官自ラ甘ンシテ其責任ヲ負フベキニ付必スシモ閣下ヲ煩  
ハスニ及バズ唯本國政府ノ訓令ヲ待タズ如此處分ヲ執行致候  
テハ責任ノ何人ニ歸スルヲ問フズ我國ノ外交上恢復スベカラザル  
不都合ヲ来スヤノ懸念ナキニテス依ッテ小官ハ兎ニ南其筋

ノ訓令ヲ候ツノ外ナレ而シテ若シ此レガ爲ソ何事ノ不都合ヲ来  
シタラバ其責任ハ小官自ラ負担スベシト陳弁致候處全日  
ハ其低ト相成リ翌十四日ニ至リ退轉處分ハ小村到着迄見  
合ハスベシトノ御電訓有之候依ツテ翌十五日小村局長ノ入  
京ヲ待テ受ケ直々ニ面會シテ本件ノ顛末ヲ陳述シ至急ニ  
何分ノ指圖有之度旨申出候然ルニ小村局長到着ノ節ハ陸海  
軍參謀官憲兵巡查安藤旅長等之レニ隨行致シ候ニ  
付一全奇異ノ念ヲ起シ候（其其後聞モ無ク本件關係者ハ  
退轉ト一決シ当館ニ於テ岡本柳之即外ニ二十余名ニ對シ  
在留禁止ヲ申渡シ候ニ付彼等ハ退轉處分とミテ可相清  
義ト心得稍安心ノ模様ナリレカ此際安藤旅長正ハ突然帰  
朝ノ途ニ就キタリシカバ再び疑怖ノ念ヲ起シ退去ヲ躊躇  
スル者アルニ至リジモ小村公使ヨリ柴田郎ニ申合ノ可成一時

一多敷ノ退轉者ヲ引續メ下ニセシムルコトニ取計ニ候ニ付彼等  
案外容易ニ當地ヲ退去致候所ニテ其後モ尚本件關係者ナ  
クモ對ニ在函禁止リ書渡シ候處此等モ亦小官ニ於テ或ハ説  
諭或ハ強迫ヲ加ハタリシカバ別段ノ面倒ヲ惹起スコトナリシテ  
ハに致候然ルニ本件ニ關係セシ堀口領事官補藤原隆  
吉及ニ巡查六名ハ豫テヨリ帰朝ノ電命小村局長ノ許ニ到  
達セルヲ小官ニ於テ聞及候ヘ共全島長ノ取計ニヨリ故ラニシテ  
商人等ニ通達セズ極メテ秘密ニ致置キ事實ノ探偵方及居  
由氏ニ對スル退轉處分方ニ關シテ小官ニ於テ平素如何被  
等リ使用致候處他ノ關係者ハ皆之ト事ヲ共ニシタルモノナルガ  
故ニ却ツテ好結果ヲ奏シ候依ツテ他ノ關係者ノ處分畧相濟  
ニ候時至リ小村公使ノ差圖ニヨリ始メテ之ニ歸朝ノ命ヲ相  
傳ヘ至急出發セシムルコトニ取計候處ニ入國ノ事變ニ關係ノ



嫌疑ナル者並ニ直轄之ト關係ナキモ向來当地、安寧ヲ妨害スルニ至ルベキモノト認メタル者ヲ以テ當館及仁川領事館ニ係属セシテ退韓ヲ命シタル者ノ原籍姓名ヲ舉クレバ則ハ今別紙ヲ二二号ノ通りニ御座候

以上開陳セルハ今回ノ事變ニ関シハ官ガ自ラ見聞セシ事項及職務上取扱ヒタル事項ノ顛末ニ御座候處抑モ今回ノ事變ハ實ニ意外中ノ意外ナル出来事ニシテ壯士輩ノ取締方ニ付テハ豫テ御訓令ノ次ヲモ有之充分畏懼ニ其舉動ヲ一息ハ苟モ疑フベキモノナル時ハ至間ノ論難批評ハ勿論松村其他ノ公使館員及星岡本ヲ始メ其他顧問官連中ノ請託ヲモ顧ミズ断然之レニ向ツテ相當ノ處分ヲ加フル事ニ取計未候ニ付近來ハ不穩ノ非常モ迄々減少し其殘留セル者モ亦少シテ尤モ惡ク逞フスルヲ能ハサル様相或居候處今回

ハ計ラズモ意外ノ邊ニ意外ノ事ヲ企ツル者有之独リ仕  
士輩ノミナラズ數多ノ良民及ビ安寧秩序ヲ維持スベキ任  
務ヲ有スル當領事館員及守備隊迄ヲ煽動シテ歷  
史上古今未曾有ノ光惡ヲ行フニ至リタル我帝國ノ爲メ  
竊ニ残念多極ナル況ヤニ御座候別紙本件ニ關スル証憑  
書類及電信往復(本省ノ分ハ除ク)相添此致及具報候  
敬具

在京城一等領事内田定雄

明治二十八年十月廿日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵西園寺公望殿

別紙第一號

此紙係在... 御慈侍奉... 願候其...  
... 御慈侍奉... 願候其...  
... 御慈侍奉... 願候其...

七日後

格樓

因田敷 貴下

與樣 宜敷所禮相願候

別紙第二號

敬白朕之良兄弟

成道所

皇帝陛下友好有年報聘尚逢殊用欣悅現  
我國以政不得人設海亦滋貴國派來公使革  
貝才德兼備多所咨訪實為兩國之幸近聞  
有移駐清國之說此雖空聞惟我地壤相接  
關係不與他等必使革貝久留我國俾有嘉  
助益致兩國之和睦至以為盼使維

陛下宏猷盛化理清明更希深念大局無孤  
此言

光緒九年四月朕銜極三十二年五月二  
十三日在漢陽宮中

陛下良兄弟

姓譚

銜

別紙芽三聯寫

法書業經脩送今聞

貴公使華目移駐墨西哥全權撫念大局不勝  
一喜朕咨詢日滋輔益既多須定物國全權仍  
貴公面以昭陛下相濟之誼為希

朕御極三十三年閏五月二十九日朝鮮漢陽

御

俄國皇帝陛下

別紙慈西聯寫

將星位候昨復來失敬往候願青今新題景文  
藤止實以懸懷一御垂候

宮中口吟

國家之非無理 滿朝之無一忠臣  
宮中暗隱之憂 不斬離敵斬美人  
廣目之憂 無之只今 近知憂能任候處  
今一友之說 依上或六王妃十リト然其疑念之堪  
候此儀真否御未知 御座候六御一報被成下  
受奉萬難候

十月八日

高橋源次

再推

鈴木重元様

呈啓下

別紙第五聯寫

啓仕候先刻之御話ニ從ヒ色々評議之末

別紙人名、何時御召喚有之候共、差支無之候間、三紙  
紙知可被下候間、願、明日直、御開始、  
候、流、以書中、尊心如此御座候、預言

十一月廿二夜

國文

重章

清敷

山崎、  
重章、  
月成、  
重章、  
止善

山崎、  
重章、  
月成、  
重章、  
止善

山崎、  
重章、  
月成、  
重章、  
止善

山崎、  
重章、  
月成、  
重章、  
止善

山崎、  
重章、  
月成、  
重章、  
止善

別紙第六號

拜啓仕候昨夜差出置候人名中左記之一名御加被下度候

藤 勝顯

尚御實行可成御意被下候様事能候

丁卯十二月

同友蓮臺

杉村 濟殿



# 別紙第七號寫

一 私交上○○君ノ依頼ヲ受ケテ隨行入闕シタル者ナリ而シテ右ハ全ク自己ノ意思ニ出テタリ

一 依頼ノ趣意ハ單ニ隨行ト云フナリシモ○○君ノ真意ハ蓋シ途中安心ノ為メ同行ヲ求メシナラン我々モ亦之レヲ默諾シテ應ゼシナリ

一 途中宮門ニ至ル迄ハ何事モ無カリシガ光化門前ニ至リテ朝鮮兵相互ノ小戰興レリ右小戰ハ蓋シ訓練隊が強テ入闕セントシタルヲ侍衛隊又ハ宮中巡查ハ中ヨリ之ヲ拒ミ終ニ爭戰ニ及ヒタルト思考セリ是時我々ハ唯○○君ニ危害ノ及ハガラシメノミ注意セリ

一 ○○君入闕ノ趣意ハ全ク榜文ト同様ノ事ナリシ而シテ我々ハ之ヲ默諾シテ隨行シタルモノナリ

一〇〇君同行ノ時朝鮮人モ多数隨行シ其中日本  
服ヲ着シタル朝鮮人モ大分見受ケタリ

一宮内ニ於テ騷擾具リ之が為ソニ三ノ能傷者アルヲ  
目撃シタリ然レモ右ハ金ク韓服若クハ和服ノ朝鮮  
人等之ヲ為セシテ且ツ現ニ朝鮮人ノ拔刀シテ人ヲ  
殺害スルヲ見タルモノアリ尤モ未明及ビ困難ノ際ナレバ  
明白ニ之ヲ認ムルヲ得サリシ

一我々ノ内ニモ自防及ヒ大院君防衛ノ為ソ拔刀シタル  
モノ見受ケタルモ其誰タルヲ詳ニセス天明ノ後々見物  
ノ為ソカ多数ノ日本人及ビ洋人ヲ見受ケタリ但シ其  
人カハ詳ナラス

一大院君無事入闕シ且ツ騷擾モ鎮靜ニ歸シタルニ付同  
君ニ別レテ告ケテ退闕セリ

調書  
 調書ハハハハ  
 調書ハハハハ  
 調書ハハハハ  
 調書ハハハハ

調書

問 汝、往而氏名、年、齡、職、業、ハ、何

答 京城羅洞、某、三、男、地、族、人、宿、松、市、昨、一、方、團、友

重、章、文、久、元、年、十、月、生、無、業

問 汝、原、籍、身、分、并、ニ、出、生、地、ハ、

答 熊本縣、山、本、郡、美、形、村、一、千、百、六、拾、番、地、士、族

出、生、地、ハ、今、縣、熊、本、市、坪、井、町、ナリ

問 是、迄、處、刑、シ、受、テ、今、ト、ナ、キ、ヤ

答 アリマセン

問 亦、年、十、月、八、日、大、院、君、入、關、ニ、付、汝、が、随、行、シ、タ、ル

願、末、ニ、申、立、ヨ

答 亦、月、七、日、大、院、君、ヨリ、私、文、上、令、用、入、關、セ、ル、ニ、ヨ

リ、途、中、護、衛、ト、シ、テ、來、訪、セ、シ、ヨ、ト、申、越、シ、タ、リ

依テ今日大院君ノ邸内ニ至リ入闕ノ途中護衛  
モタリ

問 汝が依頼ヲ受ケタルハ單ニ護衛トシテ隨行セシモノ  
ナレカ

答 然リ依頼ニ應シ默認シテ護衛タルモノナリ  
問 其途中ハ何事モアラザリシカ

答 大院君ノ邸内ヨリ官城迄ハ無事ナリしが大院君  
ノ出入飛ヒタル際訓練隊ノ兵士護衛トシテ来リ  
官城門外ニ至リト頃ハ官城内ノ待衛隊ト査  
等ト爭鬪シ始メ入闕ヲ拒ミタル様ニ思ヒタリ  
依テ私共ハ大院君ノ危害ヲ防衛シタリ  
問 汝大院君カ入闕セラル趣意ハ聞カザリシカ

答 榜文ト同様趣意シテ承リタレバ唯ガ依頼ニ應

し黙謀随行したるにナリ

問 大隈君入關付随行せしモノハ如何人々ナリシカ

答 訓練隊ノ外ニ朝鮮人も随行し其中洋服着用

セシ者も多かりし而シ日本入ハ私ノ外ニ八九名も居り

問 宮内ニ於テ何カ騒擾セシコトナカリシカ

答 宮城内ニ入ル際訓練隊ト待衛隊ト戦アリ而シ

宮内ニ入ルヤ通常服装ヲ為シ又朝鮮人等拔刀

ヲ戰ヒ屠リ二三名ノ死傷者アルヲ認メタリ然レモ

未明ノ頃ナリト故少シク距したる處ハ明白ニ認めル

能ハカリシ

問 汝其外日本入ハ手闘セシコトナキヤ

答 我々ノ内モ自防及ビ大隈君防衛ノ為メ拔カシタ

ルモノヲ見受ケタルモ進シテ手闘シ又者ナク又々拔

刀を以て者、諱々ナリシカモ分ラザリシ然ルニ天明ノ後チ  
見物ノ為ナリシ多數ノ日本人及ビ洋人等ヲ見受  
ケタレド其人ハ難ナリシカ知ラザリシ而ノ騷擾々々  
舞シ大隈君ハ無事ハ關サレタレバ大隈君ニ云フ事  
直ニ歸宿ニタリ

問 他ニ申立コトナキカ

答 更ニナシ

右ハ國友重吉氏任其ノ口供ニ録取シ讀問タル事  
實相違ナキニ依リ本職ハ其ニ署名捺印セリ

明治三年十月十三日

於日本領事館

警部萩原秀次郎

國友重章

謝書

問 汝往所氏名年數種業如何

答 城泥牙西三馬地種人在田川絲市方月成光文  
三子一母生雜業

問 汝已稟藉身分年出生地

答 彌國絲彌國市土名町九々番地平民出生地ハ今  
餘那西郡縣國村ナリ

問 是處如何刑ノ變ケルナキヤ

答 可リマセシ

問 汝カ年月ハ大法院ニ施行シテ關シムル事ナリ  
答 日

是 年月七大法院ヨリ感な重章ハ入關ニハ傳衛  
ハシテ事言カユト事越ナリトト松ハ國な子トハ表

ナレハ大院君が邸に在り、黙然として隨行し、

大院君が入朝、途中何事をもりしや

と、年中、何事もよりしが宮城門外に於て侍衛兵一大

院君が入朝の拒し、後院にあり、依りて大院君が獲衛と

ら来り、皆りし訓練隊兵士等互に、年中、何事もよりしが

其大院君が危害を防衛せ、或は危害をかくし、進み来

し、モノアハ、板刃の、至る、刀の、ヨク、と

ハ、大院君が、入朝、は、何、の、強、意、の、御、方、あり、し、り

其、傍、文、に、據、強、意、を、来、り、た、り、し、テ、其、代、に、御、方、ナ、リ、

ナ、リ

大院君が、入朝、は、隨、行、を、命、じ、た、り、し、り、

訓練隊、の、外、に、朝鮮、人、の、執、解、人、を、し、し、西洋、服、を

着、用、せ、し、も、大、正、年、に、隨、行、せ、し、日、本、人、に、セ、ハ、る、を、ナ、リ



し様、見受たり

伺 官内、於テ所カ騷擾セシ一ナリシカ

是 大院君カ入闕、付訓練隊ト侍衛隊ト戦ニ宮内、

入る通常ノ執事ノ共扱ワシテ争鬪セシ故私丑ニ

大院君ノ傷ミ、復衛シタリ且陰死傷者五六名モ

アリし様、見受モ氏何カ事明コト故詳細ニ云ナリシ

呵 故其、他、日本人ニ争鬪セシカ

是 日本人ハ一カモ争鬪シ者ナシ併シ大院君ノ傷ミ、故

リ加害者ノ事、時ニ防衛ノ為ニ扱ガセシモノニ云アリ

氏進ラテ争鬪シタ者ハナリシ者大抵、云リ朝鮮

人及、日本人西洋人等来リタリ見受ケタリ而シテ私

共、騷擾ス鎮靜シ無事大院君入闕セリ帰

宅シテ宣敷旨按テ受ケタレバ古ニ帰宿セリ

心ニ申立ユトナキカ

冬アリマセン

右ニ月成光任意ノ口供ヲ録取シテ、  
空ニ相違ナキ依リ本職無ノ署ニ捺印セリ

此後五年ナキテ、  
此日本録事館

吾新萩宗秀ニ即

月成

光

調書

問 汝任所氏公年幾職業如何

答 京城羅洞方軍兵北來余深太郎方薩田止善

文之元年己丑主農業

問 汝ノ系親身ノ所生地

答 熊本縣飽田郡城山村一丁二百廿番地士族出生地

熊本市建町

問 是迄處刑ノ受シタリナキカ

答 アリマセ

問 汝ノ亦月日方院君ノ劍付隨行シタル事有シヤ

答 中主

答 大隈君ヨリ國友重幸ノ入劍付ノ護衛トシテ奉訪ヤ

ヨト申越タル旨御知シ私ニ曰老ウ故一巳ノ事ナリ

以テ護衛セシト故ニ大隈君ノ所ニ至リ隨行シタリ

大隈君ノ入城ニ途中何事モナカリシカ

是ニ途中ニ無事ナリシモ大隈君護衛ノ訓練隊ト宮城

門外ニテ侍衛隊ト戦ヒタリ今ノ大隈君ノ入城ヲ據

ニタシモト鬼方セリ依シ松共大隈君ノ傍ニ立リシ

護衛シタルノコ

大隈君ノ宮城門ニ入りシハ騷擾セザリシカ

是ニ宮城内ニ入りシ頃ニ朝鮮人軍拔リシタキヲ射セシ故常

ニ大隈君ノ傍方ニ護衛セリ此傷者ハ五六名モ自撃サヤ

シモ何モ未明ニテ故詳細知ルニ難リシ

同ニ汝其他日よムニテ手射セシモノナキヤ

是ニ日亦人ニシテ進ラタキヲ射セシ者ナシ併シ乱兵ノ近寄リコト

ヲ慮リ拔リシテ自衛セルモノ二三名アリシトハ認メタシモ

其人誰たりしかるや其内、鎮守府、方院、是ハ  
無事ニ入闕せし者ハ訓練隊士官、操人ヨリ挨拶ヲ受  
ケ帰還、執事たりた天明日頃ニ朝鮮人日本入ルヒ  
西洋人等ノ来リしヲ見受ケリ

問 他、申立ナキヤ

答 プリマセシ

本、應田正善任意見、口供ヲ録取シ該海ヤクルニ事  
実相違ナキ依、本職上其署各捺印セリ

明治廿九年十月二、六日奉領事館

警部 萩原秀次郎

應田正善

謹言

口 涉任所氏為常族候業、以何

君 妻傳羅田身四段餘地、市原保太於古田佐我

暇恒七事、月生張業

口 涉、至端身、至、至地、

美 熊手、對下、若、既、海、利、至、南、地、業、八百二番地

吾民、生、地、二、事、釋、之、全、

思 是、是、是、刑、之、其、名、ト、ト、力

若 丁、丁、也、

口 本、自、官、方、悅、大、一、願、各、地、が、隨、行、と、願、業、ヲ、申

立、

美 本、自、官、方、夜、松、既、之、傳、却、せ、し、地、ヲ、痛、工、耐、以、候

田、正、業、人、者、身、ヲ、松、ヲ、呼、返、し、自、立、ト、以、ト、業、力

右京魚國京坊日本寺食

ト申ス故私に友人ノコトヲ云何業々田州セシニ此德  
里に大徳殿ノ門首ニ事ヲナリ候ニ大徳殿大徳也  
之故用ニ途中度世セシニ台私共ニ随リニ云  
出方ナリ

只大徳殿大徳ノ途中何事モナラザリシカ

夫途中ハ馬ノミニ民宮様ノ前ニ事ナリ大徳殿ヲ度世

也訓傳隊ト宮内侍衛隊ト争闘シ此ノナリ

今多大徳殿ノ大徳ヲ拒ミモ事ニ思考ナリ依テ

秘兵ニ大徳殿ヲ度世度世ノ間モ事ニ事ナリ

度世度世ノ秘兵ヲ拒ミモ事ニ事ニ大徳セラズ

ハ大徳殿ヲ度世ナリ

大徳殿大徳殿ノ事ニ事ナリシカ

夫訓傳隊ノ兵ナリ秘兵人及ニ秘兵人ニ事ナリ

ハ洋報ニ有用セシマラシメタル日本人之名アリ  
又南ニテ死傷者見ガレシカ

若 害因ミテ見ガレシハ途ハ多シトケ一ニテ見ラシメ  
タリシ

ハ 日本人ミテ抜刀シ或チ争鬭セシ者アリシカ

若 争鬭者ニテ思ハレシ抜刀シ大喧嘩ノ傍ニ度  
得セシ者一ニテ見ラシメタ

ハ 領事館ニテ何カ令ハ込メタヤ

若 多数ノ駐在員ハ西洋人及日本ノ人等ノ事ニテ見  
タリ何用シテ事リシヤハ知ラズ

ハ 地ニ中立コトナキカ

若 アリマシ

右ハ有用係者任官タル供ラ録取シテ漢字ニテ



事上更甚遠事上亦事上其言於平海口存記可據  
聖教秋原秀次郎

前田後藏

詔書

河津氏名年齡身分職業

是平山名夫廣德三年八月生士族無職

河任所本籍生此地

是朝鮮國京城南大門西了會賢所佐、方居留

亦籍生此地無姓亦係能田郡里賢村七百四十四町

ナ

河是近取れ此に刑之處せしむたキヤ

是ナ

河亦月ハ、大流君ハ、朝、青、リ、隨、行、セ、ル、来、ハ、

是、河、國、ハ、國、友、重、幸、ト、云、ハ、亦、月、セ、大、流、君、即、招、カ、シ

亦、月、ハ、大、流、君、ハ、朝、ニ、付、隨、衛、ス、一、キ、リ、私、文、ト、ヨ、リ

承、諾、セ、ル、題、キ、國、元、ヨ、朝、取、リ、故、自、分、私、文、上、ヨ、リ

大隈君は薩衛に心を起し遂に國友の様に君う

薩衛に下る方あり入關せし事なり

入關途中異状ありきり

途中異状あり係し先化門の外に至り今や入るにせし

知り門より侍衛隊の兵士が大隈君の入關を拒むるに

り大隈君薩衛訓練隊の兵士に彼は今年諒し

遂に砲を打ちて殺すに至り

先化門は朝敵兵の老々々々朝敵をば汝等何所

とし居りしや

大隈君は身上に槍を打ち付自ら援勦して大隈君は危

険に自防し遂に守り偏し他人を害せしりいふ事なり

ナニ

大隈君は何處より随行する薩衛にせしや

其 興徳里、大院君、別墅ヨリ

問 日本人、大院君、何人程隨行シ居リヤ

其 詳細ニ知シサハモ五ニ名ニ見渡ケタリ

問 王城門ノ外傷者、何人程アリシヤ

其 朝鮮兵、二名ニ見渡ケタリ

問 大院君、護衛者、中日本服ヲ着セシ朝鮮人、幾リ

カリシヤ

其 詳細ニ知ラサハモ三ニ名ニ見渡ヘリ

問 王城門、日本人、幾ニ見渡ケタリヤ

其 日本人、二三名、西海人、二三名、見渡タリ、併シ之ハ

城内ニ在リ物ヲ見テ、其ノ名、鬼トモリ、彼地、此地、見テ居

シ

問 ハリ、何時頃帰宅セシヤ

是 何人カ詳細ニ知ルモ大坂君最早ノ入關ニ付帰宅シ  
ラモ互ニサトノ一政年所六時頃城門ヲ辭シテ帰宅ノ  
途ニ就キタリ

同 汝カ拔剣ニシテ大化門ノ入口ニ至ルヤ  
ハ只ニ於テ砲聲ヲ聞キ且ツ侍衛隊ノ進ミヲ換據ス  
ルヨリ拔剣シテ大坂君ヲ安老且ツ自防ノ途ニ謀シ  
少時ニシテ侍衛隊ニ退ヤタリヨリ刀ヲ納メタリ

右 傳述ニ録取シテ幸山先生亮ノ漢海ヤムニ此事ヲ相傳  
ナキ方ニ付本識ニ共ニた、四者ニ據ルニモナリ

明治五年十月十二日 在重城日本領事館ニ於テ

あゝ 新藤宗秀ヨリ即  
幸山先生亮

調書

河 汝氏名年數職業身分

是 張新事在明以天年三月生業農子民ナリ

河 住新牛籍出生地

是 朝露田安城縣洞馬外地居角牛籍出生地

牛跡玉台郡古金村々四戸寄地ナリ

河 長追罪ツ犯刑ニ入セリナキヤ

是 ナリ

河 本月ハ左院君入朝、幸リ隨行セシ以來

是 河内公國友重幸ト云人の牛付セ左院君即

招カシ本月ハ左院君入朝、之ハ左院衛之キツテ私

交上ヨリ承讓シタル類々國有ヨリ傳アリ故自今

私交上ヨリ左院君リ左院衛ト云ハ是ヨリ遂ニ國有

曰様曰君ヲ護衛シテ官ニ奉ル入朝セシ上ナリ

曰入朝ノ途中異状ニナリ

是と途中異状ナシ保シ先化門ノ如ク至リ今ヤ入リトセ

之ヲ内ヨリ侍衛隊ノ兵士ガ大隈君ノ入朝ヲ拒ミタル

リ大隈君ニ護衛ノ訓練隊ノ兵士ト彼ト爭論シ

遂ニ砲声ヲ互ニ發スニ至リ

曰先化門ノ如ク朝野兵士カ爭鬪セシハ汝等ノ如ク

ナシ居リトヤ

是と大隈君ノ身上梅ヤ危キハ自ラ拔劍シテ大隈

君ノ危急ト自防ノ途ヲ守リ保シ他人ノ害セ

テモナシ

曰大隈君ハ何処ヨリ隨行ノ護衛セシヤ

是と興德里ノ大隈君別墅ヨリ

問 日本人夫院君、或人程隨行し居りしや

答 詳細に知りしと云ふに、是れ是なり

問 王城内、犯傷者、何人程アリしや

答 朝鮮兵二名アリしと云ふなり

問 大陽君之護衛者、中日本服ヲ着せし朝鮮人、

兵アリしや

答 詳細に知りしと云ふ程に思ふなり

問 王城内、日本人、或西洋人、と云ふ受けしや

答 日本人、西洋人、各三名程、死に受けしと云ふ

物ニテモ事アリしと云ふ、如く彼地、地死に居りし

剣、持てし

問 何時頃、帰宅せしや

答 何人、詳細に知りしと云ふ所、君、最早入殿せし



しに付帰宅しけり良キトノ事故午六時吹城

四ノ緯山ノ帰宅ノ途新ヨリ

汝ノ被劔セシ先化門ノ入クミナルヤ

其門ヨリ於テ砲声ヲ聞キ且ツ侍衛隊ノ兵士が進

ニ事ヲ急擲豫見ヨリ被劔シテ大腕君ノ安全且

自防ノ途ヲ得シヲ女侍シテ侍衛隊ニ退サレ

ヨリ刀ハ納メタリ

外ニ言フーハ

其希望アリヤ

右侍連ヲ縁取リし限新米去ハ漬ズセム

事ヲ急ニ急ニテサキ名申立タリ依ラ奉御ト共

尤ノ署名持ボスニモナリ

明治廿六年十月十二日立寄城ノ奉御事新於

孝義  
族祭  
部米  
吉

調書

阿 汝、氏公年齢職葉身之

冬 河村雅之明以六年二月生無職士族ナリ

阿 住所亦籍出生地

冬 當時朝鮮國京城驛洞居留亦籍、然、本

縣無市上村町字番地ニ出生、地、今市坪

井町ナリ

阿 是、正罪ニ犯シ刑ニ處セリシナリヤ

冬 ナシ

阿 本月ハ、大隈君ハ關ニ當リ隨行セシ始末ハ

冬 左日、大隈君ハ關ニ入リ、知セシ付其途

中尋危險ナリ、アリハセ、ト私文上ヨリ心配レ隨

行ニ急ニ決ナリ

大内君より大内へ参り別殿異状なりと

途中別殿異状なりと先代門外より参り即

令々門内に入りしとせしは門内より侍衛兵士ト

大内君より警度せし訓練隊より彼是に論し遂に

砲声あり至りたり

大内君より其事ハ聞せしや

訓練隊侍衛隊ト兵士が先代門ノ入口より参り

侍衛隊ノ員より大内君より無事ハ入

参り

大内君より大内へ参り

大内君より復侍衛ト大内へ参り

日本ノ大内君より参り程随行せしや

詳細知りしとせしは大内より思ふ



冬

午前十時頃迄キ訓練隊ノ士官ヲ以テ大隈君ヨリ帰

宅シテモ宜キト挨拶アリシニ付セ特偵帰宅セリ

同

王城内ニ多数朝鮮人執リタ

冬

列明々併シ洋服ヲ被リタ朝鮮人平台住居

一見目小人ニ似タリ

右

傳述ヲ録取シ被告人、後聞ニタ知事実相違

ナキ旨ニ付本報止ニ署名捺印スモノナリ

明治廿六年十月十二日 立寄城日中領事館ニヒテ

警部萩原才次郎

澤村雅夫

調書

問

汝氏各年齡身分職業

答

武田範之文久三子生才民無職

問

住處本籍出生地

答

朝鮮國京城府西門外方止宿

本籍出生地共福田縣山本野

村此地不明

問

是迄罪多犯刑處セラレテアヤ

答

ナシ

問

本月廿六日大院君入殿之際隨行セシ始

末

答

私友人目成来在者本月廿七午

後十二時頃呼上其來付直行

處明朝大院君入關スルニ付護衛セ  
ニ目成ニ自分ニ話ニ致セニ付自分モ  
私交上ヨリ護衛シタキ心起リ大院君  
邸へ行カントセシニ其途中ニテ今君入關  
ニ出會ハルニ付之ニ幸ヒト轎ノ傍ニ就テ  
入關セリ

問 大院君入關ノ途次異状ハナカリシヤ  
答 大院君方今ヤ光仁所へ入ラントセシ内

ヨリ侍衛隊ノ兵士ガ拒ミタルニ付大院君  
護衛ノ訓練隊ノ兵士ト爭關ヲ始メ遂  
ニ砲声ヲ聞クニ到レリ

問 汝王入關セシヤ  
答 入關セリ



問

大院君護衛日本人中拔劍セシモノ

ナキヤ

答

三名に拔ギテ係レ拔ギ主音大

院君を危險防ギ且自防為ナリ

ト由テ其他朝鮮人多ク拔刀居ルヲ

見認メナリ

問

拔刀セシ日本人何名人相ハ

答

暗キ故公ニラス

問

王城内に死傷者何身受ケナリシヤ

答

訓練隊ト侍衛隊ノ兵士ガ多ク闕為

メ死傷セシヲ見二三身見受ケタルニナリ

問

大院君護衛者ハ日本暗ヲ看セシ

朝鮮人アリシヤ

一字削ル

在韓熊園子地日方等事録

春

餘程アリシモ暗夜故分テ現ニ私

ガ知リ居ル朝鮮人モ日本服ヲ着

シ居ルヲ見妻々々

問

何時頃ニ帰宿セシヤ

答

私ニ少々夜氣故早ク帰リタリ即チ

午前六時頃アリシ余今明セズ

右

証問ヲ録取シ武田範之ニ読直セタル處

事實真相達ニテ首府内職ト共ニ署名

捺印スル者也

明治廿五年正月在京城日本領事館ニ於テ

武田 萩原秀比郎

武田 範之

謠言

問 汝往所氏名年齡職業如何

答 京城鑛源才七拾三才地旅人宿浦尾キ

才方吉田友吉明証才自生新聞記者

問 汝有藉身才多出生地

答 嚴三縣以柔波郡具前村大番戸年氏出

生地、原藉地、今也

問 是近處刑ヲ受ケレトナキカ

答 アリマセン

問 女月八日大院君入闕ニ付汝方隨行ハル

難才明證ニ由立ヨ

答 女月七日夜國友童才ヨリ孔德里

ニ行カサリ才ト申妙ニテ休テ國所ニ至リ

名バ大院君入闕ニ付日廿人護衛ヲ依  
頼セラレ先旨宣知シ自分モ途中護  
衛トシテ宮内ニ隨行シタリ

回入闕ノ途中何事モアザリシカ

若余中無事ナリガ宮城ハ前ニ至リ

大院君ヲ護衛セシ訓練隊ノ兵士上宮

内侍衛隊ト申闕ヲ始メタリ今ク大

院君ノ入闕ヲ拒ミタルヲ身被ケタリバ

自分大院君ノ傍ヲニ護衛スル内宮

内ニ入リ直王ヲ鎮靜シタレバ大院君モ

無事ニ入闕セラレ朝野ノ主官様ノ者ヲ

接撫シテ安ケル事ナリ

回宮内ニ入リ頃死傷者ハ認メザリシカ

答

二三名モ有リナラン候モ明ナリ故詳細ニカラサルナリ

問

日本人ニシテ抜刀モ或モ關セシ者アリカ

答

日本人ニシテ多關セシ者認メサルモ大陽君傍ラニ居リ二三名抜刀ニテ防衛セラ見受ケテ併シ其人誰ナリカ知ズ

問

鎮靜後宮内ニ入込タル人ハ

答

通常服裝ニテ朝鮮人及ビ西洋人ノ

徘徊セルヲ認メタリ

問

他ニ申立コトナキカ

答

アリマセン

右

吉田方吉陳述ヲ録取シ詭ニ聞セタル者

實

相違無キニ依リ七職ト共ニ署名捺印ナリ

明澤公事目言在日并領事館

警部秋原秀太郎

吉田友吉

請書

問 汝住所氏名年齡職業如何

答 京城南大門口通商會賢坊佐正之方

片野猛雄照天寺首生無業

問 汝有籍身否并出生地

答 能本縣託兩郡大正四品西番地土族

出生地唐籍今在

問 是近處刑ヲ受ケレコトナキヤ

答 有リマセン

問 本自今日大院君入殿付汝才隨行シタル

始メヲ申立ヨ

答 本自七日國友童童身大院君ヲ入殿

フル付途護衛ヲ依頼セシ其旨國友

ヨリ通知ヲ受ク又私王大院君トノ面接ノ  
交際モカレバ大院君邸ニ辛隨行シテ

同入殿途中何事モナリシカ  
若途中無事ナリシモ宮城門前ニ辛大

院君護衛訓練隊ト宮中侍衛隊ト

並列ヲ始メテ依テ私大院君傷ラニ

護衛ヲシテ居ル内宮内ニ入リタルハ驛樓止

又朝鮮人等拔刀シテ爭鬪セシ故大院

君傷ラテ離テ防衛セル内終ニ鎮靜シ

大院君無事入殿セラレタルヲ認メタルハ大

ヨリ帰宿シタリ

同宮城内ニ於テ死傷者認メザリカ

若一二名死傷者ヲ認メテ然レモ未明ナ



リ故語細ニ分ナルナリ

同 日本人ニシテ争鬪セシモノナキヤ

答 争鬪セシモノ認メザリシ

同 他ニ申スルトナキヤ

答 有リマセン

右 片野猛雄 陳述ヲ録取シテ自セタル

事實真相遺無キ依テ本報ト共ニ署名各捺

印セリ

明治廿九年十月十二日 日本領事館

警務部長 秋原秀次郎

片野猛雄

# 調書

旧 汝住所氏名三郎職業八郎

若 京城南大門口 水防揚阿比雷註作

才大崎正吉慶應九年自生無業

旧 汝原籍身分并出生地

若 宮城縣桃生郡深谷村大字大窪庄不務番

地平民出生地原籍ニ云レ

旧 具右處刑ヲ受ケテ下ナキ力

若 アリマセン

旧 本月八日大院君入驛ニ付隨行タル顚

末ヲ申立ヨ

若 本月七日戌光寺大院君入驛タル

旨通知ヲ受ケタル途チ安全ヲ諷ル是

西大門ニ至リ大院君ニ来ルヲ待テ命  
ヲ官城内ニ隨行セリ

大院君入闕シ途中何事モナリカ  
途中ニ無事ナリ官城門前ニ至リ大

院君護衛刻疎疎ト宮中侍衛隊  
ト至闕ヲ始メテ今大院君入闕ヲ拒  
ミタル様ニ思ヒ考ヤリ依テ私大院君傷ミ  
護衛間モナク官内ニ入リ騷擾鎮靜  
ヲ待テ大院君無事ニ入闕セシメバ夫レ  
ヲ帰宿セリ

大院君死傷者見受ケザリカ  
死者見ザレハ血腫アル衣服ヲ着タルモノ  
ハ見受ケタリ

問 日本人ニシテ争鬪セシ者アリシカ

答 認メタルコトナシ

問 他ニ申立コトナキカ

答 アリマセン

右大崎正吉陳述ヲ録取シ詰メ聞セタル事

實相違無キ依 本職上共ニ署名捺印セリ

明治八年十月十二日 在日中領事館

警部秋原秀次郎

大崎正吉

別紙第二十號

此士處分之事二付種々協議致候。候處何分  
六、義、決行爲致候。又、謝罪、難り  
官職、名義、之関、大不體裁。又、候處、不少  
依、三十名已上、指定妨害、目途、急速  
是、韓、處置、出、候事良策、有候、尚、御、勤、亦、  
上、御、考、按、承、知、致、候、小、村、未、着、迄、是、非、共、大、體  
片、付、置、度、存、候、右、爲、御、合、此、御、座、候、不、備

十三日

橘 樓

内田領事殿

出、下

別紙第二十一聯恩

今朝御談致隨候通、吐上御事、  
若、遷延候、及、而大要、之、而、  
毛有之候間速、之、御、  
村之来否、不、候此、大、  
不相、候、日、政、府、日、  
便之命令、應、之、如此、  
相下、不、若、候、為、其、  
不、不、不、不、不、不、

十三日

梧 樽

内田殿

別紙 第三号

退韓者姓名表

今回ノ事件ニ関係ノ嫌疑アリ者

和歌山縣海部郡須村番六番地

士族

岡本柳之助

熊本縣山本郡菱形村大字遑田野千六百六

十四番地

士族

國友 重章

左縣託产郡砂取町四百十番地

士族

佐々 正之

文久三年一月生

福岡縣福岡市大名町九十八番地

平民

月成 光

文久二年一月生

退韓

熊本縣飽田郡城山村大字上代千二百八十番地士族

廣田 止善

父大元年三月生

福岡縣福岡市博多瓦町五十五番之二士族

藤 勝頭

安政六年十二月生

岩手縣紫波郡見前村大字東見前六番地平民

吉田 友吉

明治五年一月生

熊本縣飽田郡黒髪村大字坪井七百四十番地士族

平山 岩彦

慶應三年八月生

宮城縣桃生郡深谷村大字大窪六十番地



平民

太崎 正吉

慶應元年月生

熊本縣熊本市上林町廿一番地

士族

澤村 雅史

明治六年四月生

熊本縣託磨郡大江村四百廿四番地

士族

片野 猛雄

明治六年十二月生

熊本縣玉名郡大原村千四百四十八番地

平民

隈 和 米吉

明治元年三月生

熊本縣上植生郡家村

平民

山田 烈盛

在朝鮮國京城府中林洞事館

文久三年五月生

熊本縣山鹿郡中富村十一番地

士族

佐藤 敬太

安政五年十二月生

熊本縣八代郡鏡野十一番地

平民

菊地 謙讓

明治五年十月生

熊本縣八代郡上町六百十七番地

士族

佐々木 正

明治六年正月生

福岡縣山本郡草野村番地不明

平民

武田 乾之

文久三年十一月生

熊本縣下益城郡海東村大字南海東八百三  
番地 前田 俊藏

明治七年二月生

熊本縣阿蘇郡宮地村二千百十一番地  
士族 家入 嘉吉

明治十年四月生

全縣熊本市長安寺町二十四番地  
士族 牛嶋 英雄

明治六年十月生

全縣阿蘇郡內牧村三百八番地

士族

松村 龍起

明治元年十二月生

京都府下京區若松町十四番地

平民

鈴木順見

明治元年九月生

熊本縣熊本市北坪井町二十番地

小早川秀雄

明治三十四年三月生

全縣託于郡廣畑村百廿一番地

士族

中村楯雄

元治元年四月生

神奈川縣愛甲郡荻野村大字下荻野千三百

四十七番地

平民

難波春吉

元治元年四月生

熊本縣飽田郡力合村六百二十番地

士族

安達 謙造

元治元年十月生

土縣主郡奥古河村

平民

渋谷 加藤次

安政二年三月生

福岡縣河沼郡金上村大字福原九百十番地

士族

佐瀬 熊鉄

明治元年十二月生

新潟縣中頸城郡高田本町四番地

士族

鈴木 重元

安政元年二月生

熊本縣熊本市一丁目四十二番地

平民

宮任 芳乃喜

生月半國元歲才太頁事官

長崎縣村馬田下野郎里奈久田十五

士族

仁川北邊韓也分

淺山顯藏

嘉永三年四月生

新鴻縣北清原郡新花田町字上鉄砲町

士族

新鴻縣北清原郡新花田町字上鉄砲町  
高橋源治

三十四

新鴻縣東清井郡大畑村字難波

平民

薄元康丸

應仁二年七月生

長崎縣下縣郡古原町字谷所八番

士族

大浦 茂彦

萬延元年六月二日生

今因事實關係嫌疑者

新潟縣中頸城郡大出口村大字代石一番戸

士族

鈴木 義兩

明治九年十二月生

島根縣神門郡杵築町四百四十三番地

平民

田中 忠一郎

明治四年三月生

宮城縣仙台市大町五丁目新町六番地

士族

高橋 誠自

明治九年三月生

山口縣熊毛郡濤江村八十二番地

平民

室迫繁勝

四十三

佐賀縣小城郡小城町五百五十五番地

士族

川久保常吉

慶應元年十一月生

新鴻縣西蒲原郡岩田村六十四番地

士族

金二十六藏

慶應二年九月生



名称	井上 馨 文書
標題	貨幣制度ヲ立ツル事 明治26年朝鮮幣制改革に對シ 井上馨の意見書

分類 番号	673
	21
	22

国立国会図書館

登録 番号	254006
----------	--------

# 貨幣制度ヲ立ツル事

一國ノ財政ヲ整理セシト欲セハ先ツ貨幣  
制度ヲ立テサル可ラス貨幣ハ凡百ノ物價  
ヲ計量スル標準ナレハ獨交易ノ媒介ナル  
ノミナラス凡ソ國ノ歲入タル可キ地稅家  
稅海關稅營業稅皆貨幣ニ依リテ計量セラ  
ル可ク國ノ歲出タル可キ百種ノ費用亦皆  
貨幣ニ依リテ計量セラレ可シ故ニ貨幣ノ  
物價ハ極メテ高貴ニシテ且ツ其價格ノ高



低少ナキモノシ選擇セサル可ラス從來銅  
鮮ニテ使用シタル銅錢ハ一般ノ貨物ト同  
シク一高一低極マリナキモノナレハ到底  
物價標準ノ職務ヲ盡ス能ハス是ヲ以テ這  
國紙幣ヲ發行シ銀行ヲ創立シ以テ財政整  
理ノ基ヲ立ラント欲セハ宜シク先ツ銅錢  
本位ノ習慣ヲ廢シテ更ニ銀貨本位ノ制度  
ヲ立テ之ヲ實行スルヲ先務トナス可し胡  
鮮政府ハ蓋シ此ト見ル所アリテ獨キニ典  
墨局ヲ創立シ外國ノ貨幣制度ヲ參酌シテ

銀、白銅、赤銅、黃銅、四種ノ貨幣ヲ鑄造シ、翌年  
八月中別紙新式貨幣發行章程ノ發布ト共  
ニ世ニ發行シタルニ其鑄造ノ高ハ各種リ  
合セテ僅カニ二十萬以內ニ止マシ、其通  
用ハ京城附近ノ一部ニ止マリ、その他各  
道各地ニ及ハズ、以テ新貨幣章程ハ、以テ  
不少而シテ其重ナルモノハ新貨幣ト曰銅  
錢ノ比較其重少得ナルト是ナリ  
抑銅錢ノ貨幣ハ古來銅錢ノ一種ニ限リ、  
以テ人民之ニ慣レ、兎角銅ヲ喜ム、銀

リ金ニセサル所アリ而シテ昨年貨幣章程  
發行ノ際ハ偶々日本軍隊多數入り此ニ一  
時銅錢騰貴シタルニ依リ遂ニ之ヲ標準ト  
シ銅錢百枚ヲ以テ銀貨一兩ニ充テヨルタ  
リ然ルニ平常銀銅ノ比較ハ昨年春頃ヤテ  
實ニ銅錢百三十三枚乃至百二十五枚ヲ  
銀貨貳十錢即チ一兩ニ交換シタリ若シ銀  
銅ノ實價ニ就テ之ヲ比較スル時ハ蓋更ニ  
銅價ヲ減スルニ相當ナシ今日銅錢ノ通用  
全國ノ九分已上ヲ占ムルノ時ニ際シ斯ノ

如ク銀銅ノ比較リ誤ルトキハ其弊ヤ自ラ  
 物價ツ高カラシメ銀貨ヲ以テ物品ヲ買フ中ハ  
 其割合高シ銀貨ヲ外國ニ送出す再ヒ粗  
 悪錢通用ノ四態ニ復ス可シ故ニ其弊ヲ根  
 ハシト欲セハ貨幣章程ニ甘二三ノ修正ヲ  
 加ヘサル可ラ大依テ之ヲ別紙ニ掲グ  
 貴國局ノ事 同局ハ三年前仁川ニ創立セ  
 リシタルモ同所ニテハ唯極印ヲ打ツ止  
 マリ其餘ノ工事は總テ他ノ造幣局ニ依頼  
 セサルヲ得タ故ニ先般日本ヨリ技師ヲ招

中乏リ調査セルメク此ニ別封敎告ニアル  
如ク同所ニ於テ貨幣鑄造ニ係ル工事悉皆  
リ行ハント此ハ器械ノ整備工場リ増築等  
ニ貳拾七萬圓ヲ要スト云ヘリ然ルニ同  
下此大金ヲ支出ス可キ餘裕ナキニ因リ姑  
ク四例ニ從ヒ典國高ノ事業ハ銀銅貨ニ極  
印ヲ打ツニ止メ其他地金鑄造ニ適スル一  
切ハ日本造幣局ト契約シテ造レリ依頼ス  
ルヲ可トス

一紙幣ノ發行ハ内ニ財政ヲ整理シ又外ニ  
民間ノ融通ヲ便シ貿易ノ旺盛ヲ助ケ  
ルモノナレハ其利益素ヨリ大ナリトス  
然レモ利ノ大ナルモノハ其實モ亦隨テ  
大ナリ故ニ豫メ其弊メヨリ嚴正ナル規  
律ヲ立テ之ヲ遵守セサルヲ得ス何トナ  
レハ則政府ニ於テ或ハ財政ノ困難ニ迫  
ラレ或ハ紙幣ノ流通渇渇ナルニ至リ唯  
目前ノ急ノモツ邊ニ於テ制限外ノ紙幣  
ヲ發行スルヲ力ニシ力縱令一時其弊害



リ見サレ也一旦紙幣其信用ヲ失フハ  
政府ハ其列替ニ應スル能ハズ紙幣ソレ  
ヲ益々下落セシメ人民ハ紙幣ノ下落ト  
共ニ頓震シ被リ苦境ニ陥リ怨聲四方ニ  
起リ之カ為メ政府財政ハ勿論國民ノ財  
産モ併セテ破壊スルニ至ルハ故ノ免レ  
サレ所ナリ是レ外國ニ於テ往々見ル所  
ノ明ナリ故ニ紙幣ノ發行能カ其方法ヲ  
得テ其兌換準備金ノ如キ又規律ニ從テ  
之ヲ確保シ政府ノ信ヲ得ルニ至レハ國

リ富マシ民ニ便スモ利器タリト雖モ不  
幸ニモ大君皇陛下リ始メ各部大臣協同  
等第一其方法リ確乎セザルハ必ス更  
對ノ結果リ致ス可シ本業ハ前ニ述ヘタ  
ル如ク貳百五十萬元ノ基金ニ對シ最多  
額三百拾貳萬五千元ノ紙幣發行リ許ス  
モノナレハ其差額ハ千貳萬五千元ニ對  
シテハ初メ日リ準備金アルニアラハ若  
シ紙幣一圓其費用シ出ツルハ一時ニ其  
交換リ請求セザル 掛念ナレトモ又故

一 豫メ之カ準備シ為メ之ヲ充テ必要ナル

ニ付其差額ニ對シテハ政府所有ノ鐵道

株百萬元ヲ以テ之ニ充テ臨時發賣シテ

兌換ニ應スル為メナリ將又前記百五

十萬元ノ準備金ト爲メ紙幣ノ交換ニ應

スルニ隨テ漸次其額ヲ減スル様ナリハ

政府ハ其交換ノ爲メ減額シタル準備金

ヲ補填シテ再び旧額ニ復セタル間ハ斷

リテ既ニ交換シタル紙幣ヲ行使ス可ク

ス若シ一方ニハ紙幣交換ノ爲メニ準備

金ヲ支出シナカレ他ノ一方ニ於テ準備  
金ヲ減少シモ願ハス既ニ交換シタル紙  
幣ヲ再ニ行使シ準備金ト流通紙幣高ノ  
間ニ大差額ヲ生スルニ至ラシメハ紙幣  
忽チ其信用ヲ失ヒ將ニ收拾ス可カラサ  
ルニ至ラレトス蓋ニ恐レテ戒メサレ可  
ケンヤ故ニ兩者ノ増減ヲ詳ニシテ能ク  
其比例ヲ保ツテハ最も緊要ノ事務ナリ  
舊ハ帝國政府財政ノ整理ト民間ノ融通  
ヲ便ナシシムル爲メニ此計畫ヲ勸誘セ

しモ規律ニ因リ嚴正確者ヲ欠キタル片

ハ紙幣發行前ノ財政ヨリモ其困難ニ致

層ヲ増スニ至ランヲ恐レ故ニ其事務ヲ

精辦スル為メ本政府ノ保薦シタル監

督官一名ヲ延聘シ度支部ノ常設官ト共

同シテ其事務ヲ監督シ金庫及ビ兌換金

タニ紙幣等ヲノルキハ二重ノ鎖鑰ヲ施

シテ各々其一ヲ保管シ二人ハ規則ニ從

ヒ其意見シ一ニスルアラサレハ金庫ヲ

開閉スルヲ得サレ制規ト爲シ以テ契機

シ豫方ス可シ又準備金ノ増減ト流通紙  
幣ノ高シ對照シテ毎週其調書ヲ作り需  
該官實ヨリ之ヲ度支大臣ニ報告セシメ  
併ニ之ヲ官報ニ公告シテ世人ノ信用ヲ  
固ムルヲ勉ム可シ

名称	井上 馨 文書
標題	警務所校改革建議書

分類 番号	673
	22

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

甲号



警務ノ改良タル其緩急ノ  
適度ヲ圖リ新ニ設定ヲ  
要スヘキ者不尠而シテ目  
下最モ其急ナル者ハ捕  
校ノ改革ヨリ急タルハ無  
シ熟ラ既往ノ事跡ヲ  
顧ルニ警務ノ動ク所正  
道ヲ過リ公平ヲ失シ均  
一ヲ缺キ甚シキハ良民ハ  
其保護ヲ受クルヨリモ反  
テ害毒ヲ蒙ルカ如キ弊



一ツ飲キ甚シキハ良民ハ

其保護ヲ受クルヨリモ反

テ害毒ヲ蒙ルカ如キ弊

一ニシテ足ラサリシ也是レ

多年捕校ノ養成其

道ヲ失スルニ依ル可シト雖

寧ロ其弊害ヲ生スル

所ハ政權爭奪ノ餘弊

トシテ執權者不法ノ專

用ニ基因スルモノト言ハガ

ルヲ得ス果シテ然ラハ捕

校其者ノ害毒ニ非ラ

サルハ亦論ヲ俟タサルニ在

校其者ノ害毒ニ非<sub>レ</sub>

ガ<sub>ル</sub>ハ亦論<sub>ヲ</sub>俟<sub>タ</sub>サ<sub>ル</sub>ニ在

リ<sub>ハ</sub>ヤ之<sub>ヲ</sub>率<sub>ル</sub>ニ嚴<sub>ク</sub>明

確<sub>ニ</sub>實<sub>ナル</sub>方法<sub>ヲ</sub>授<sub>ケ</sub>懇

篤<sub>ニ</sub>周到<sub>ナル</sub>訓<sub>ヲ</sub>習<sub>ヲ</sub>與<sub>ハ</sub>

以<sub>テ</sub>兇<sub>ニ</sub>漢<sub>ニ</sub>賊<sub>ニ</sub>盜<sub>ノ</sub>探<sub>ヲ</sub>偵

捕<sub>ヲ</sub>拿<sub>ハ</sub>勤<sub>ニ</sub>務<sub>ニ</sub>專<sub>ニ</sub>用

ス<sub>ル</sub>ニ於<sub>テ</sub>ハ更<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>害<sub>ヲ</sub>毒

ヲ排除<sub>シ</sub>得<sub>ル</sub>而<sub>レ</sub>已<sub>ナ</sub>ラ<sub>ス</sub>

國家<sub>ニ</sub>最大<sub>ニ</sub>必要<sub>ナル</sub>警<sub>ヲ</sub>

務<sub>ノ</sub>一機關<sub>タル</sub>ヲ得<sub>ハ</sub>キ

也<sub>ニ</sub>而<sub>シ</sub>テ多<sub>ク</sub>數<sub>ノ</sub>中<sub>ニ</sub>教<sub>ル</sub>

務一機關タルヲ得ハキ

也而シテ多數ノ中教ル

モ習フ能ハス法ヲ設ルモ

服從シ得サルカ如キ者

亦必スシモ無シトセス是

素ヨリ其任ニ適當セ

サルノ人物タルヲ以テ止ヲ得

サル至テ之ヲ免職スルモ

彼必ス自得スヘキ也如

斯シ而シテ漸ヲ以テ弊

害ヲ一洗セハ急更速變

ノ害ヲ招ク事ヲ見スシテ

改良ノ力ヲ養フル友ヲ生

害ヲ一洗セハ急更速變

ノ害ヲ招ク事ヲ見スレテ

改良ノ功ヲ奏スル敢テ難

シトセカレミ在リ而シテ彼ヲ

侍ツ正道ニ據テ至當ノ

厚惠ヲ與ヘカルク得ズ政

補校從來ノ穀祿ヲ

廢シテ之ヲ俸給ニ改メ

凡八元ヨリ十元以内ノ月

給ヲ與ル事ニ改正セコト

ヲ希望ス雖然目下政

費多端而シテ財源未

給<sup>ヲ</sup>與ル事ニ改正<sup>セシ</sup>コト

ヲ希望ス雖然目下政

費多端而<sup>シテ</sup>財源未

タ充實スルニ至ラズ爲之

九拾有餘名ノ補校ヲ<sup>シ</sup>

一其制ヲ新ニスルヲ得ス

トセハ要費ノ許ス限リ撰

拔<sup>シテ</sup>以テ新法採用シ

其他ハ古<sup>ラリ</sup>從前儘

ニ存シ置<sup>カ</sup>ルヲ得<sup>カ</sup>ルニア

リトス幸ニ<sup>シテ</sup>建議採

用ヲ得ルニ至ラ<sup>ニ</sup>補校ノ

職責及勤務方法ヲ

たし置カナルヲ得ニ  
カレルニア

リトス幸ニシテ建議採  
言採

用ヲ得ルニ至ラ補校ノ

職責及勤務方法ヲ

起草シ更ニ可及建

議也

備考

姑ラク従前ノ儘ニ存シタルニテハ穀稔リ

然レテ使用スルニ可ク

名称	井上 馨 文書
標題	朝鮮問題ニ関スル日露交渉、沈黙 著

分類 番号	673
	23

18

国立国会図書館

登録 番号	264629
----------	--------

## 朝鮮問題ニ関スル日露覚書

明治二十九年五月十四日  
京城ニ於テ  
調印

在京城日露兩國代表者ハ其ノ各自ノ政府ヨリ  
同様ノ訓令ヲ受ケ協議ノ上左ノ通り議定セリ  
一、朝鮮國王陛下ノ王宮、還御ノコトハ陛下  
御一己ノ裁斷ニ一任ス、一キモ日露兩國代  
表者ハ陛下カ王宮ニ還御アラセラルルモ  
其ノ安全ニ付キ疑懼ヲ抱リ、及ハサル時  
ニ至ラハ還御アラムコトヲ忠告ス、一モ又  
日本國代表者ハ茲ニ日本壯士ノ取締ニ付  
嚴密ナル措置ヲ執ル、一キ保證ヲ與フ





二、現任内閣大臣ハ陛下ノ御一存ヲ以テ任命  
セラレタハモノニミテ多クハ過ル二年間  
國務大臣若ハ其ノ他ノ顯職ニ在リテ寛大  
温和主義ヲ以テ知ラレタハ人人ナリ日露  
兩國代表者ハ陛下ヲ寛大温和ノ人物ヲ其  
ノ閣臣ニ任属セラレ且寛仁以テ其ノ臣民  
ニ對セラレモコトヲ陛下ニ勸告スルコト  
ヲ以テ常ニ其ノ目的ト為スヘシ

三、露國代表者ハ左ノ點ニ付全ク日本國代表  
者ト意見ヲ同クス即朝鮮國ノ現況ニテハ  
釜山京城間ノ日本電信線保護ノ爲メ或場  
處ニ日本國衛兵ヲ置リ、必要アル一キコ  
ト及現ニ三中队ノ兵丁ヲ以テ組成スル所

ノ該衛兵ハ可成速ニ撤回シテ之ニ代フル  
ニ憲兵ヲ以テ之左ノ如ク之ヲ配置ス一キ  
コト即大邱ニ五十人可興ニ五十人釜山京  
城間ニ在ル十箇所ノ派出所ニ各十人トス  
尤右ノ配置ハ變更スルコトヲ得一キモ憲  
兵隊ノ總數ハ決シテ二百人ヲ超過ス一カ  
ラス而シテ此等憲兵モ將來朝鮮政府ニ於  
テ安寧秩序ヲ回復シタル各地ヨリ漸次撤  
回スヘキコト

四、朝鮮人ヨリ萬一襲撃セラレル場合ニ對シ  
京城及各刺港場ニ在ル日本人居留地ヲ保  
護スル爲メ京城ニ二中隊釜山ニ一中隊元  
山ニ一中隊ノ日本兵ヲ置クコトヲ得但一

中陽ノ人負ハ二百名ヲ超過ス一カラス鉄  
兵ハ右居留地ノ最寄ニ屯營ス一ツ而シテ  
前記襲撃ノ虞ナキニ至リ次第之ヲ撤回ス  
一ニ又露國公使館及領事館ヲ保護スル爲  
メ露國政府モ亦右地ニ於テ日本兵ノ人  
數ニ超過セザル衛兵ヲ置クコトヲ得而シ  
テ右衛兵ハ内地全ク靜謐ニ歸シ次第之ヲ  
撤回ス一ニ

明治二十九年五月十四日京城ニ於テ

日本代表者 小村青太郎

露國代表者 シエーバー

# 朝鮮問題ニ関スル日露議定書

明治三十九年六月九日  
モスクワニ於テ調印

日本國皇帝陛下ノ特命全權大使陸軍大將山縣  
侯爵及露西亞國外務大臣ル、スクレラル、デター、ブラ  
ンス、ロバノフ、ロストウスキーハ朝鮮國ノ形勢ニ関シ甚  
意見ヲ交換シ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

## 第一條

日露兩國政府ハ朝鮮國ノ財政困難ヲ救済スル  
ノ目的ヲ以テ朝鮮國政府ニ向テ一切ノ冗費ヲ  
省キ且其ノ歲出入ノ平衡ヲ保ツコトヲ勸告ス  
一ニ若舊止リ得サルモノト認メタル改革ノ結

果トミテ外債ヲ仰リコト必要トナレニ列シハ  
兩國政府ハ其ノ合意ヲ以テ朝鮮國ニ對シ其ノ  
援助ヲ與フニシ

## 第二條

日露兩國政府ハ朝鮮國財政上及經濟上ノ狀況  
ノ許ス限リハ外援ニ藉ラスニテ內國ノ秩序ヲ  
保ツニ足ルキ內國人ヲ以テ組織セシ軍隊及  
警察ヲ創設シ且之ヲ維持スルコトヲ朝鮮國ニ  
一任スルコトトスニシ

## 第三條

朝鮮國トノ通信ヲ容易ナラシムル為メ日本國  
政府ハ其ノ現ニ占有スル所ノ電信線ヲ引續キ  
管理スニシ

露國ハ京城ヨリ其ノ国境ニ至ル電信線ヲ架設スルノ權利ヲ留保ス

右諸電信線ハ朝鮮國政府ニ於テ之ヲ買收ス、  
キ手段附キ次第之ヲ買收スルコトヲ漏ルモノ  
トス

#### 第四條

前記ノ原則ニシテ尚ホ一層精確且詳細ノ定義  
ヲ要スルカ又ハ後日ニ至リ商議ヲ要ス一キ他  
ノ事項生シタルドキハ西國政府ノ代表者ハ友  
誼的ニ之ヲ妥協スルコトヲ委任セラルヘシ  
千八百九十六年五月二十九日「モスクウ」府ニ於テ之  
ヲ書ス

山

縣

手署

ト

省

督

口  
ハ  
ノ  
フ

手  
署

外

務

能

朝鮮問題ニ関スル日露議定書

明治三十一年四月二十五日東京ニ於テ  
 明印同年五月十日公布

日本國皇帝陛下ノ外務大臣西男爵及全露西亞  
 國皇帝陛下ノ「コンセイエー、デター、アクチュエル」侍從特命  
 全權公使「ロ、ゼ」男爵ハ之カ爲メ各相當ノ委  
 任ヲ受テ千八百九十六年五月二十八日「モスクウ」  
 ニ於テ陸軍大將山縣侯爵ト「スクレター、デター、フラ  
 ンス、ロバノフ」トノ間ニ調印セラルタル議定書第四  
 條ニ準據シ左ノ條欵ヲ協定セリ

第一條

日露兩國政府ハ韓國ノ主權及完全ナル獨立



ヲ確認シ且該國ノ内政上ニハ總テ直接ノ  
干涉ヲ爲ササルコトヲ約定ス

### 第三條

將來ニ於テ該解ツ来スノ虞ヲ避ケムカ爲メ日  
露兩帝國政府ハ韓國カ日本國若ハ露國ニ對シ  
勸言及助力ヲ求ムルトキハ練兵教官若ハ財務  
顧問官ノ任命ニ就テハ先ツ相互ニ其ノ協商ヲ  
遂ケタリ上ニアツサレハ何等ノ安置ヲ爲ササ  
ルコトヲ約定ス

### 第三條

露西亞帝國政府ハ韓國ニ於ケル日本ノ商業及  
工業ニ因スル企業ノ大ニ發展セムコト及同國  
居留日本國臣民ノ多数ナルコトヲ認ムルヲ以

テ日韓兩國間ニ於ケル商業上及工業上ノ關係  
ノ發達ヲ妨碍セサルニシ

千八百九十八年四月二十五日東京ニ於テ本  
書二通ヲ作ル

西

印

ローゼン

印

名 称	井上 繁文書
標 題	施政要綱 施政要綱

分 類 番 号	673
	24

国立国会図書館

登録 番号	264033
----------	--------

書女警 上井

95  
11  
11  
11

興園局調查報告

施政要綱

日本文

一  
綴

## 施政要綱

一 各部奏任官撰擇ハ其試驗規則又ハ登用規則アルモノニテ其一定ノ規矩ヲ履ミ内閣通議ニ附ミタル片ハ各大臣異議ナク之ニ押印シ其主務大臣總理大臣ト連署シテ上奏書式ヲ備ヘ大君主ノ裁可ヲ請フベシ其官等ヲ陞叙スル片モ亦同ジ其規則等無之モノ、撰擇ニ関ミテハ其主務大臣自ラ之ヲ推薦スル力又ハ他ノ大臣ノ之ヲ推薦シタル場合ハ主務大臣ニ熟議シ主務

大臣ハ其被薦者ノ當ルベキ職務ガ其人ノ  
才能ニ適スルヤ否ヲ察シ又其為人ヲ識ラ  
ザル片ハ其推薦シタル大臣若クハ他ノ知  
友ニ聞知シタル上公平無私ニ其採否ヲ決  
スベシ若シ之ヲ拒否スル片ハ拒否ノ理由  
ヲ言明シ又之ヲ採用セトスル片ハ書式  
ヲ備ヘ内閣ノ迴議ニ附シ同意ヲ求ムベシ  
而シテ閣議ニ於テ異議ヲ生シタル場合ハ  
更ニ他人ヲ推薦スル様アリタシ以上ノ如  
ク選擇ヲ為スニ當リ苟モ党派ニ拘泥セラ

之ヲ排斥シ又ハ親戚旧知ノ故ヲ以テ援引  
スルカ若クハ猜嫌忌避ヲ為スカ如クニハ  
竟ニ又内閣ノ平和ヲ維持スル能ハズシテ  
再ビ波瀾ヲ挑起スベシ

一 官中又ハ各部ニ於テ顧問官又ハ教官  
事務整理員ヲ聘用スルニ當ツテハ各大臣  
先ツ内訌ヲ為シ然ル上日本人ナレバ日本  
公使ニ其使用ノ目的ヲ述ヘ其擢拔ヲ依頼  
スベシ尤モ其嘱托職務ノ技術ニ係ンモノ  
ハ被聘者ノ博士学位等ノ稱號ヲ有スルヤ

否ヤ又曾テ其職務ニ實験アルヤ否ヲ調査  
モタル上聘用スベシ

但經常豫算内ニ於テ顧問官ノ俸給ヲ支出  
モ得ルハ前條ニ準シ聘傭スベシ大モ豫算  
定額以前ノ支出ニ係ルハ當年度於テ聘傭  
スルヲ得ス

一 各大臣ハ其所屬判任官ノ選擇ニ就テ  
ハ之ヲ專行スルヲ得ルト雖モ其各局專屬  
スル判任官ハ先シ其局課長ニ内議スベシ  
又局課長ヨリ推薦シテ大臣ニ申請スル



アルベシ以上ノ場合ニ於テハ其人才技能  
ノ充リ其職務ニ適スルヤ否ヲ考究スベシ  
就中其技術ニ涉ル者ノ如キハ能ク其技藝  
ニ習熟セル者ヲ撰拔スル様注意スベシ  
又其會計事務ニ當ル者ハ第一清廉潔白ナ  
ル人物ヲ要シ且筆算ニ長スルモノニ限ル  
ベシ

但傭賃ヲ雇入スル場合モ亦同シ

宮内府ニ於テモ前同様ニ施行スベシ

一 軍部ニ屬スル文官

兼任  
判任

ノ撰擇法ハ前

二條ニ因ルベシ其武官ニアツテハ任用規  
則并ニ進級條~~令~~ヲ制定シテ軍部全般ニ用  
ユベシ侍衛隊附武官モ亦之ニ准スベシ  
一侍衛隊新設隊等ニモ士官學校卒業ノ  
武官ヲ登庸セザルヲ得ザルニ至ルヘシ就  
テハ武官ニ現役豫備後備等ノ服役法ヲ制  
定シ各其服役年齡ヲ限定シ年俸ノ等差ヲ  
設ケ縱ヘハ豫備中ニアツテハ年俸五分ノ  
一後備中ニアツテハ年俸七分ノ一ト云フ  
力知シ)新旧漸次交迭セシメテ以テ漸進ノ

方針ヲ取ルベシ兵卒モ亦年齢ヲ限定シ其  
老朽疾病者ニ對シテハ歸休免役等ノ方法  
ヲ設ケ新旧交迭漸次改良ヲ加ヘテ以テ他  
日精鍊勇壯ノ良兵士ト爲サバカラス  
但侍衛隊新設隊士官兵卒モ日ヲ定テ訓練  
ヲ行フベキハ勿論ナリ尚ホ漸ク以テ旧ヲ  
廢シ新募兵ニ換ユルノ方案ヲ定メテ再已  
變轉勿ラシムヲ要ス

一 本年七月九月十一月ノ三四ニ募集ス  
ベキ各地方訓練隊ハ當年中之ヲ中止スベ

こト大君主ヨリ余セラシタルハ本年度末  
ニ於ケル度支部財政ノ結果ヲ豫メ推究セ  
ラシタル適當ノ處置ト云フベシ何ントナ  
レバ本年度ニ於テ侍衛新設ノ二隊設置ハ  
豫算外ノ支出ニシテ爲之多額ノ費用ヲ支  
出セザルヲ得不然ルヲ尚ホ依然トシテ訓  
練隊ヲ漸次募集スルトセシカ歲計上大ナ  
ル困難ヲ來スノ恐レアリ故ニ侍衛新設ノ  
二隊ニ關スル始末ヲ爲シ前條但シ書ノ方  
策ヲ制定スル事來年度ニ於テ其人員ニ如

何程ノ削減ヲナシ得ヘキヤ又其費用ハ本  
年度ニ比較シ何程ノ減額ヲ生スルヤヲ案  
じ而テ来年度ニ於ケル歳計ハ本年ノ秋獲  
高長ニ紙幣發行ノ結果ニ依リ九ノ何程ノ  
余裕ヲ生スルヤヲ細密ニ積算シタル上内  
閣ニ於テ熟議ヲ遂ケ仔細ヲ大君主ニ内奏  
シ然後此ニ始メテ来年度ニ於テハ幾大隊  
ノ訓練隊ヲ制シ得ベシトノ事ヲ確定スベ  
シ

一 馬隊ナル者ハ農馬ヲ借用スル旨名無

實ノ制ニシテ爲之馬一疋ニ月手當銀三  
元ヲ付與スル由聞知セリ本年中ハ此手當  
金ノ制ヲ廢止シ來年度ニ至テハ馬隊新設  
ノ方強ク設クル方可ナリト云々之ヲ新設  
スルニ就テモ元々財政上ノ如何ヲ調査シ  
テ然ル後ニ於テスベシ

一馬隊ニ關スル農馬八百疋ノ月手當銀  
ヲ廢セバ約千四百圓ノ支出ヲ月々減ズル  
ヲ得ベシ若シ之ヲ撤廢シ得ルトセバ當  
度ト雖此度支部ノ財政ニ幾分ノ餘裕ヲ生

殊

又ル見込アリハ精細ニ計算シテ九月又ハ  
十月ニ第四訓練隊ヲ編成スルモ或ハ可ナ  
ラシ

一 軍部ニ属スル文武官等ノ採用規則先  
ニ兵隊ニ關スル條例規則ハ此モ必要ナリ  
又東軍部ハ他行政事務ト特異ノ性質ナル  
ニ付最嚴正ナル規矩ニ因リ事務ヲ取扱ヒ  
又ハ規矩中ニ於テ諸隊ノ指揮監督ヲナス  
ノ必要アリ

一 内部ハ最ニ主務大臣時勢ノ緩急ヲ察

也。不新ニ地方制度ヲ布キ之カ斷行ヲ企テ  
ルモ未ダ幾ナリズシテ憲中トノ衝突、各大  
臣ノ軋輦ヨリ竟ニ其身ヲ容ル、地ナリ他  
國ニ奔竄スルニ至レリ而シテ現今地方ノ  
有様ヲ察スルニ旧制度已ニ廢セラル新制  
度未ダ緒ニ就カズ官民坎間ニ彷徨シテ強  
シト適從スル所ヲ知ラザルモノ、如シ如  
クシテ久シカラニ力終ニ地方ノ事收括ス  
ベカラザルニ至ラシ且ク坎際各地方長官  
外官等ヲ中央政府ニ召集シ之ヲ舉スニ



中央政府ノ組織及ニ施政ノ方針ヲ以テ之  
先ニ地方制度ノ各條項ニ就キ逐條審ニ視  
明ヲ與フン等其職務ヲ行フ上ニ於テ遺憾  
ナカラシメザルベカラス又地方長官老練  
官等之制度中意味ノ了解ニ難キモノ或ハ  
疑義ノ生ズルモノアリハ恊辦先ニ顧問官  
ニ質訊シテ其詳細ヲ承悉スルヲ要ス右ノ  
外指令ハ退廢官ノ始末吏員採用ノ方法事  
務引續ノ手續ヨリ收積官トノ職務分域又  
ハ下級ノ里面村ノ關係警察ノ職務先ニ述

換採用法之文書類ノ取扱振ニ至ル迄法規  
慣例ヲ略定スベシ執中收税上ニ關スル事  
續ノ如キハ通ニ之ガ設置ヲ為サレル中ハ  
終ニ本年度ニ於ケル徵税ノ如キモ大ニ錯  
乱ヲ極メ同官吏ノ如キハ已ノ私慾ヲ充サ  
セガ爲メ人民ニ向フテ掠奪ヲ專ラニシ其  
已收ニ係ルモノ私囊ニ盜藏スルニ至ラシ  
即制ノ組織ニ至リテハ現ニ發布シタル地  
方制度ノ漸ク實施セラレ其治働ヲ為スリ  
見テ後々各地方官ヲ召集シ其意見ヲ聽キ

夕に上編制スル方能ク其實際ニ適シ施行  
上好結果多カルベシ

地方官制中警察官ヲ平均七十名置クノ制  
ナリ然ルニ本年度ノ歳入ニ不足ヲ生スル  
ノ恐シアシバ之ヲ五十名乃至四十名ニ減  
削スルヲ要ス縱令多數ノ警察官ヲ分置ス  
ル氏其警察官ニシテ職務ニ馴熟セザル以  
上ハ人民ニ對スルニ暴威ヲ以テシ從來ノ  
墮習ニ泥シテ無故氏物ヲ押奪シ又他人ニ  
逢ヘバ金錢ヲ收メテ之ヲ放免シ或ハ金錢

竹韓魚鹽印材

物品ヲ強收スル等ノ吏負多數ヲ建設スル  
ニ均シク且リ罪科ヲ民ニ嫁スル等ノ事ア  
リテハ地方ノ安寧秩序ヲ保持スル能ハリ  
ルノミナラス夫レ如クニ巴國利民福ヲ  
増進セシガ爲メ内政ヲ改良スル本旨ニ違  
フモノニシテ徒ニ國費ヲ消費シ却テ人民  
ノ疾苦ヲ増スニ過ギガルナリ故ニ地方ニ  
採用スベキ然レノ如キハ充分警務廳ニ任  
テ人人撰ヲ嚴重ニシ第一清廉潔白ニシテ  
且其精神ノ堅固ナル者ヲ撰拔シ之ヲ訓練

シテ規矩ノ中ニ養成シ其試験ヲ経タル者  
中日リ採用スベシ斯ノ如ク養成シタル者  
速ニシテ各地方ニ赴キ其部下ノ速捷ヲ訓  
練セバ始メテ警察官ノ本分ヲ盡シ人民ノ  
信用ヲ博シ地方ノ安寧ヲ保リニ足ルベシ  
一 警察官ノ人撰ハ擬ヘ内務大臣ノ撰拔  
ニ出ワルト至先ツ警察使ニ其人物ノ適  
否ヲ商議シ又警察使ノ推薦シタル場合ニ  
内務大臣ニ先ツ内議スベシ其人物ノ必不  
何竟派ニ属スルト又因縁故旧ナルトニ拘

ハコズ苟モ私情ヲ挾コテ之ヲ排斥又ハ援  
引スベカラズ須ラク厓心平易各公正ヲ主  
トスル事ヲ是レ務ムベシ其判任官ノ進退  
ニ關シテハ警務使ノ專管スル所ナレバ其  
責ノ重リ常ニ忘レズ己ノ曉澈又ハ録故ア  
ルノ故ヲ以テ引據ヒズ唯一ニ其職務ニ適  
スルヤ否ヲ標準トスベシ及令ハ會計物品  
ニ關スル事務ヲ取扱フ官吏ナレバ第一瑣  
廉潔白ニシテ筆算ニ長ゼザルベカラズ其  
他細則立案者ナレバ警務事務ニ稍爾曉シ

し文筆アルモノヲ授ムガハ力ヲス其地  
模。於テハ年齢體格學識等ヲ試験し其合  
格者ハ之ヲ訓練ニ卒業ノ後採用スベシ  
前二条ニ就テハ但ニ訓練中ニ於テ司法并  
行政警察ノ區別又ハ豫防警察ノ種別ヲ明  
瞭ニ教官ヲ以テ會得セシムルヲ要ス  
一 地方長官兼書記官ノ授擢ハ内閣大臣  
ニ屬スルカ如ク觀テシモ凡ソ各部ノ事務  
ハ間接直接ニ地方事務ニ關係シ有スルモ  
ノ多シ故ニ其授擢ニ當リ内閣大臣ト熟議

今朝御覽  
卷之四  
公卿列傳

又各大臣之公平無私其人物ノ適任ヲ查  
察ニ務メテ其人ヲ得ルヲ要ス居シ又各大  
臣ヨリ地方實ヲ推薦スル事アリハ内務大  
臣ハ職權侵犯等ノ諍免ヲ以テ之ヲ拒否ス  
ル事ナク互相合意ノ撰出ニ依ルヲ專要ト  
ス

一 五年一回各地方長官ヲ招集シテ會議  
ヲ開キ處務上ノ事柄並ニ新制度ノ適否其  
措置ノ困難ナル事項又ハ處分ニシル事件  
ノ結果等ニ關スル意見ヲ述ベ内務大臣既



辦各局長モ一場ニ相會シテ商議ヲ爲シ或  
ハ其實問ニ應スベシ然レハ其處辦スベキ  
ハ之ヲ設置シ制度ノ變換スベキハ之ヲ増  
減シ又ハ新規ヲ要スルハ之ヲ設ケ如缺ス  
ル片ハ地方事務ヲ円滑ニ處置シ且各地方  
一取扱ヲ爲スリ得ベシ

但各地方官集會ニ當リテハ各部大臣モ亦  
列席レテ互ニ質問スル所アリバ直ニ辦解  
ヲ爲スベシ

一 各地方官職務モ同様ニ準同期ヲ定メ

行政會議規則

ヲ相會し其事務ノ取扱方或ハ警務規則増  
加變更各地方警察ノ關係事務並ニ手續等  
ヲ會議スベシ大ニ内務大臣協辦ニ由リ質  
問し或ハ質問ヲ受テ漸次改良ノ目的ヲ達  
スベシ前各地方警察會議並ニ警察官會議  
・ハ内務大臣會長トナリ若シ大臣事故アリ  
シハ協辦代ワテ會長トナルベシ地方警察  
官集會ノ時ハ司法警察ニ就テハ司法官ノ  
臨席ヲ乞ヒ且警務使又ハ警務官モ出席シ  
テ議事ニ参與スベシ但シ該會ニハ警務使

顧問官モ出席シテ年明セシムル事ニアル  
ヘシ

一度支那ハ五月一回經過ニタル歳入出  
ノ計算表ト歳入出ニ因リテ年度末ニ至ル  
迄ノ平均月割高ノ推算表又ハ前月ヨリ歳  
入歳出増減ノ理由書ヲ製シ大君主ヘ其一  
通ヲ呈シ各大臣ヘ一通先ヲ配附シ置クベ  
シ即大君主并各大臣新事業ヲ企圖セシト  
シ又ハ旧ヲ廢シ新ニ替ヘシトシ或ハ新設  
アルニ係ラズ旧慣旧制ニ復スルノ利アリ

竹  
韓  
魚  
國  
一  
林  
六  
作  
金

トスルを固シテ財政ノ現況如何ヲ参酌セ  
ガシバ一利ヲ生スルを隨テ數三ノ害ヲ生  
シ興廢常々テ政務ハ緒ニ就クノ暇ナクシ  
テ愈以テ錯亂シ來シ終ニ收澁スベカラザ  
ルニ至ラン故ニ度支ヨリ送附シタル財政  
表ニ因リ慎重考究シ籌畫ヲ精密ニシタル  
上着手スル様注意ヲ要ス

一度支部ニ於テ前年度歲入前ノ計算ニ  
係ル歲入ヲ區別シ置クヤノ説アリ

度支大臣ハ勘内貯テ遂テ經常費外ノ支出

セバ各處別ノ歳入ヲ以テスルヤノ誤アリ  
ト聞ク豈モク將來一切之ヲ禁止シ其歳入  
ノ何年前ニ係ルト何種ノ税ニ関スルト否  
トヲ問ハス其年度ノ歳入ニ組入ルヘシ  
度吏部大臣豫算外ノ支出スルニ當リ何種  
ノ支出ヲ問ハス各大臣又ハ宮内府其他勢  
力アル人ノ筋ニ内務依託ヲ受ケ支拂ヲナ  
スヘカヲズ其時ニ支出スベキハ内閣ニ於  
テ各大臣公然利害得失ヲ慎重講究シ大君  
主ノ裁可ヲ得正當ナル手續ヲ經テ施行ス

へし

一 朝鮮ノ錯亂ニタリ財政ヲ整理シ其基  
礎ヲ鞏固ナラシムルハ難事中ノ至難ニシ  
テ独リ度支大臣ニノミテ其責ヲ放任スベ  
カラズ上ハ兩陛下ヨリ各大臣忝稱各局長  
其他各地方官ニ至ル迄皆モ一事業ノ興廢  
一物品ノ處置購買ト雖凡輕易ニ看過スル  
事ナク其費途ノ如何ニシテ節減レ得ラル  
ハヤリ深思熟慮シ常ニ意ヲ財務上ニ注ギ  
是ニ其責ヲ分擔スルノ覺悟アルニアラザ

ルヨリハ到底財政ノ整理其緒ニ就ク能ハ  
ズシテ國政改良ノ事モ是レヨリ阻喪スベ  
シ之ヲ人身ニ譬フルニ凡ソ身体ハ血液ノ  
循環宜キヲ疎ラ後精神ヲ萎靡シ四肢ヲ弛  
テ健全自在ナラシムルニアラスヤ去レバ  
血液ハ人身ノ要素ニシテ若シ血液ノ分泌  
異常ヲ失フカ或ハ流通一タビ壅塞スルカ  
或ハ血液ノ乾涸スルニ至リテハ全身ヲ保  
全セント欲スルモ得ベカラザルハ理ノ尤  
親易キモノナリ國家財政ノ事亦タ恰モ是

竹  
韓  
國  
同  
知  
事  
任  
命  
書

ト相類似スルナリ故ニ兩陛下ヨリ各大臣  
恠等其終ヲ克セシト欲セバ先ヨ其始ヲ  
慎ミ即チ資金ノ分配并ニ起業上ノ精悉ナ  
ル豫算ヲ立テ度支部ノ財政ニ質問シタル  
以上ニアラガシバ敢テ遽ニ輕シク施行ス  
ベカラズ若シ夫ニ然ラズシテ目前ノ憤實  
ニ拘泥シ將來ノ利害ハ捨テ問ハズ各自復  
旧新設企業ニ奔逸シテ財府ノ如何ヲ顧ミ  
ザル片ハ益財政ノ紊亂ヲ来シ竟ニ王室并  
ニ國家ヲ衰弱ノ極ニ至ラシムルヤ必セリ



一度支部ハ内部ヨリ各地方廳ニ向ツテ  
幾スル部令指令訓令或ハ府郡邑村落等ノ  
事ニ付直接間接ノ關係ヲ有スル事頗ル多  
クシハ互ニ其權限論争ヲ是レ事トセズシ  
テ各々和衷親睦ヲ旨トシ地方事務ニ関シ  
テハ互ニ先ツ協議ヲ盡シ其職務ニ矛盾ヲ  
生セス円滑ニ處理シ得ラル様注意スヘシ  
夫レ地方官廳ナル者ハ各法律命令等ヨリ  
各部ノ指揮訓令ヲ奉ヒテ直接人民ニ施行  
スル所ノ一小政府ナルハ若シ法律命令ニ

朝鮮總督府  
文書  
第...  
...

牙橋ノ事アリ或ハ各部ノ指揮訓令ニ  
事アルハ其事務ノ奉行ニ苦ミ徒ラ人  
民迄モ迷惑ヲ感セシムルに至ルヘシ故ニ  
各大臣タルモノ主計部務ニ踰躋シ眼ヲ全  
局ニ注ガザルカ如クニ巴終ニ全局事務ノ  
發端ヲ来シ政府機關ノ運用ヲ誤ルニ至ル  
ベシ宣禁セザルベケンヤ

一 度支部ニ於テ從來ノ歲入全額ヲ調査  
スル由ナク隨テ其歲出入確乎タル費額ヲ  
慥ムルニ苦シムノ現情ヲ就テハ來年度

ニ於テ各地方ノ事務ヲ整理シ先ツ歲入ノ概畧ヲ豫算シ然ル後簡便ナル耕地丈量方策ヲ立テ漸ク以テ着手ス可シ

一 新ニ鑄造スヘキ貳百五十拾萬圓額内に於テ各位貨幣ト補助貨ノ割合(鑄造スベキ)ヲ定メテ鑄造ニ着手スル準備ヲ為スベシ是レ取モ直サズ貨幣制度ヲ實行スルノ階梯ヲ作ルモノナリ

典國局ノ鑄造諸機械ハ果シテ貨幣鑄造上實用ヲ為スヤ否ヤヲ検査セシムル爲メ日

朝鮮國  
鐵道局  
技師  
益田  
某  
出張  
セシ  
ノ  
タル  
ニ

本道郵局技師益田某ヲ出張セシメタルニ

同技師力典國局ヲ調査シタル結果報告書

并ニ設計書ヲ提供セリ其設計豫算書ニ據

ルニ尚ホ二十七萬元余ノ巨額ヲ費スニア

ラガシバ該機械ヲ運用シテ別紙豫算表ノ

實部ヲ鑄造スル事能ハスト云フ事實如ク

ニ度支部現今財政ノ窮乏ナル到底以上ノ

巨額ヲ支出スル能ハザンハ當然ナリ由シ

假リニ支出ニ得ラルトスルニモ増築事業等

ノ為メ多少ノ歲月ヲ要シ急遽ノ開港ニ達

ザルベシ故ニ這側ハ日本造幣局ト契約シ  
銀ビ鑄造シ企ツルニアラガシバ時機ヲ失  
スルノ恐シアルナリ

一 前掲金二百五十萬元ニ對シ兌換証券  
ノ紙幣ヲ政府ヨリ發行スベシ其法兌換準  
備金ヲ貳百五十萬元トセバ之ニ對シテ發  
行スル紙幣ハ銀貨百元ニ對シ百貳十五圓  
ノ兌換証券ヲ發行ス可シ即貳割五分増ノ  
割合ヲ限定シ合計紙幣發行高三百拾二萬  
五千元ノ額トナルナリ而シテ紙幣ハ必ス

人民ノ望ニ任セ何時モ正貨ニ引換ヲ爲シ  
政府ノ信用ヲ博シ流通ノ端緒ヲ開クヲ要  
ス政府ハ又嚴正確守タル是規ヲ立テ之ニ  
遵ヒ引換ヲ爲シ并ニ銀行トノ契約其他諸  
細目等ノ要件ハ度支顧問官ニ立案セシメ  
之ヲ兩陛下并ニ各大臣等ノ腦裏ニ納得セ  
シメ並内閣ニ於テハ上裁ヲ經タル上嚴重  
ニ確守スルニテラガシハ終ニ信用ヲ損シ  
流通ヲ誤リ再ヒ財務紊亂ヲ來スハ紙幣飛  
行前日リモ甚シキヲ敗スニ至ラン

一 紙幣印刷ノ事ニ至ツテハ此ニ必要ノ  
機械ヲ先然ナラシムルニハ巨額ノ資金ト  
年月ヲ要スルカ故ニ是亦夕日本政府ニ屬  
スル印刷局ト契約シテ之ヲ製造シ其原紙  
ニ至ツテハ朝鮮政府ハ特ニ實着ニシテ信  
用アル造紙營業者ヲ揆定シ之ト約定シテ  
原紙ヲ製造セシムベシ而シテ原紙ハ偽造  
豫防ノ爲メ秘密ニ藥劑ヲ混和シ暗符トナ  
ルベキ事ヲ添入シ之ヲ印刷局ニ送致シ  
朝鮮政府ハ一人ノ監督者ヲ派出シ紙幣ノ

印刷事務ヲ監督セシムルヲ要ス

一 紙幣ヲ以テ銀貨ニ引換ヲ望ム者アル

ハ銀行ニ於テ引換ヲ爲サシメ其銀行ヘ

八百ニ對スル一分又ハ一半ノ割合ナル手

數料ヲ政府ヨリ支拂フヘシ又政府ハ紙幣

發行額ノ割合ニ應ジ引換準備トシテ銀貨

ヲ銀行ニ交附シ置クベシ度支部ハ之ヲ監

督スル爲メ監督官吏ヲ日々時刻ヲ定メ銀

行ニ派出シ其引換ノ爲メ受納シタル紙幣

ノ額ト其支出ニタル銀貨額ト吻合シテ差



連ナキヤ否ヲ検査シ銀行頭取ニ証明書ヲ  
作ラシメ之ニ監督官吏ハ註明ヲ與ヘ度吏  
大臣ニ提出シテ其査閲ヲ受クベシ  
但シ引換タル紙幣ハ封印ヲナシ度支ニ於  
テ本位銀貨又ハ金銀塊ヲ準備中ニ補欠シ  
タル上ニテ再ニ発行スルノ細則ヲ立テ確  
定スベシ

右紙幣發行ノ時機ハ鉄道布設工事ヲ起ス  
ノ時ヲ以テ最好時機トス故ニ日本政府  
基金ノ事ヲ朝鮮政府ヘハ必然照會ヲ為スニ

當り直ニ銀貨鑄造紙幣製造ニ着手スル爲  
メ鐵ノ一人ノ高幹官ヲ日本ニ派遣シ大臣  
並ノ命ヲ受ケテ政府委任狀ヲ携ヘ領鈔其  
他ノ事務ニ當リ得ルヲ要ス但鐵道建設ニ  
同標ヲリ

一 度支部ハ京城内其他ニ於テ財産ヲ有  
スルモノヲ統論シテ九三十萬元以上ノ基  
金ヲ以テ銀行會社ヲ組織セシムルノ必要  
アリ是レ即貨幣制度ノ實施並兌換紙幣ヲ  
發行セント欲セハ宜シク此機關ヲ具ヘザ

ルベカヲザルナリ然レニ此ニ貨幣制度新  
ニ施行セリルニ其ハ從來ノ銅錢ヲ以テ本  
位貨幣ト見做スコトヲ得ス故ニ銀行株主  
タル者ハ銅錢ヲ以テ株券額ヲ何兩若クハ  
何貫丈ト定ムル能ハス何トナレバ銅錢部  
價ハ物價ノ價ヲ定ムル標準トナリザルノ  
ミナリズ貨幣ト均シク高低ヲナスコトナ  
リ就チハ銀行株主タル者其資金ノ拂込  
出スニ當リテハ必ズ銀塊若クハ日本銀行  
又ハ貯金金塊ノ中ヲ以テ之ヲ納メシメ其

西位ヲ酌定シ本位貨幣ニ換算シテ其金額  
ヲ定メレシメ而シテ此金銀塊ハ漸次日本連  
邦幣ニ送致シ本位貨幣ニ鑄造スヘシ尤モ  
度支部ハ銀行者ヨリ金銀塊ヲ受取リタル  
時ハ本位貨幣ニ換算シ其分折品位標準額  
ニ相當スル銀貨ヲ該銀行ニ下渡し銀行東  
側ノ規定ヲ立テ之ニ遵ヒ流通ヲ計ラシム  
ヘシ當分ノ中銀行ニ對シテハ紙幣發行權  
ヲ保持セズ營業漸ク旺盛ニ成テ流通漸ク廣  
金ナルノ時機ヲ俟ツ事畢ニ事情ニ適スル

ナラレ

政府ハ鐵銀行ニ兌換事務ヲ依託シ又銀行  
ノ信用漸ク世間ニ生スルニ至リハ漸次各  
所ニ支店ヲ開設シ政府ノ租税ヲ送達シ又  
一定ノ手費料ヲ收メテ租税出納事務ヲ起  
サシムルヲ要ス尤モ租税ヲ取扱ハシムル  
ニ就テハ相當ノ擔保品ヲ着金カレシメ必要  
ノ契約ヲ結ブベシ

一 鐵道敷設ニ要スル材料、日考品又ハ  
外國品ニ關スル購入代價ハ本春借入タレ

二百萬圓ノ内其日本銀行兌換紙幣ニ屬ス  
ル部分、金田ヲ以テ支拂。先ツルノ手続  
ヲ取ルヲ要ス

一 本年四月一日ヨリ當七月ニ至ル  
間通ニタル豫算決定額内。於テル金田入  
甲種借金支出ノ金高及負債額ヨリ調査シ之  
ヲ以テ當期末ニ至ル歳出入ヲ推算シ置ク  
其節減スベキモノアリハ充分節減シテ年  
度末ニ餘裕ヲ生スル様ニ考慮シ置クべシ  
然レ夫レ然スシテ自然ニ一任スルカ如ク

ニバ再ニ昨軍中ニ於ケルト國體ノ無事ヲ  
奉シ文武官ノ傳令ニ三月分ノ延擲ヲ生  
シ起聲道ニ滿ルニ及ビテ止リ得ズ一時傳  
令ヲ起シ續ニ集局ノ急ヲ救ヒルニ奇同一  
ノ事ヲ再演スルニ至ルベシ謂フベカラザ  
ル國體ヲ破成スルニ至リシ

一 法部ニ據リハ今日ノ如ク國政ヲ改  
シ國步ヲ進ムルニ當リ明律由ハ大員會議  
ノ如キ不充ナル法律ヲ依然維持スル能  
ハガルヲ以テ民情風俗習慣ヲ察シ最モ

當ニル新法律ヲ制定セザルヲ得ズ

總ニハ四條新法(重罪輕罪)民法商法犯罪法  
等ノ區分ニ從ヒ顧問官ニ命シテ其籌策ニ  
着手セシムベシ等ニ實務廳ニ連署署名  
ノ權限ヲ附與シ同時ニ其監目ヲ停止スル  
強業創制ヲ制定スルヲ要ス

一 新法ノ制定裁判官卒業ノ上ハ必先試  
補トレケル六ヶ月以上勤務セシメタル事  
實ヲ命スベシ監成官ハ必ス他ニ採用スベ  
カラス地方裁判事務ト地方事務ヲ兼事ス



別スルハ必キナレバ各建設省ノ裁制官ヲ  
得ニニ能レバ區別シタル機能ヲ見ニ能ハ  
カニナリ

一 運輸二部。概テハ日本政府ヨリ運送  
ニベキ國內ノ電信線ニ對シテ運ニ其管理  
權ヲ是ノ且ツ外國政府人民等。外國人民  
ニ對シテ安全運送ノ要ヲ通信ノ總費ヲ  
保護セザレバカラス故ニ先ツ其技術者ヲ  
擁護シ偶電信ノ人為災災。因リテ破壊ス  
ルコトアルニ直ニ能理ニ是又ナキノ備ナ

とし五カ年ヲ得ふ而シテ技術者僱用ノ  
手帳等も管理一切ノ費用ヲ取調めヲ要ス  
（就中各年度ニ要スル費用ヲ精算スベシ）  
一 電信線ノ管理ヲ朝鮮政府ノ責任ニ科  
スル以上ハ郵便線路ヲ電氣化附道ノ都  
府ヲ雄ノ各所ニ漸次擴張セザルヲ得不至  
又是方法果モ費用ヲ調査スルノ必要アリ  
一 仁川京城間鐵道敷設ニ就テハ農商工  
部ノ管理スベキ事務ニ屬スル此線事業多  
ルヤ巨額ノ資金ト多額ノ技術ヲ要シ且ワ

神速ニ事業ヲ決行セザレバ無用ノ時間ト  
費用ヲ需ムルノ恐アリ故ニ事業ノ完成ニ  
至ル迄ハ特ニ一局ヲ設ケ通衢ノ高等官ヲ  
之ヲ敷設上ノ全權ヲ附與シ其事務ヲ總裁  
セシムルヲ要ス又敷設工事ヲ監督スルニ  
ハ特別ノ學術ト經驗アル技術官長ヲ要ス  
ルヲ以テ適當ナル人物ヲ人日本ヨリ僱聘  
セ屬長ノ顧問兼技術長トナシ其責任ヲ分  
擔セシムベシ兼ニ工事長土工長等諸般ノ  
技術者ヲ僱入セザルヲ得ズ其細目ニ至リ

ヲハ別ニ定ムル所アルベシ

鐵道竣工ノ日ニ當リテ職員トシテ採用ス  
ベキ人物ヲ豫メ揀拔シテ日本政府ニ依頼  
シ之ヲ養成シ置クヲ要ス

一 近來仁川ヨリ鉄山間ヲ往來スル小蒸  
氣船ハ多クハ危險ナル先朽船ヲ使用シ屢  
々遭難ノ事アリ爲之在仁川日本領事館ニ  
於テ嚴重ナル検査法ヲ施行セシトスレバ  
鮮有日本人ハ其検査ヲ免カレシト欲シテ  
船籍ヲ朝鮮人ニ移スノ策アリ故ニ仁川ニ

村々穀桑使又ハ税関、船舶検査掛ヲ設ケ  
其船籍ノ朝鮮人ノ名義ニ変更セラシムル  
モノアルハ當分ノ中日本技術者ヲシテ  
検査セシムル方法ヲ設ケ乗客又ハ運送貨  
物ノ安全ヲ圖ルハ目前ノ急務ナリトス故  
ニ速ニ其案ヲ起シ仁川日本領事ニ内渡シ  
運ルヲ要ス夫モ東城仁川間ニ於ケル郵便  
物運送ニ關シテモ該検査ヲ受ケタル琉球  
ニ幾千ノ補助費ヲ與ヘ運送ヲ取扱ハシム  
ルハ一便法タルベシ

一 漢工商等も漢字を發達せし全圖スル爲  
メ教師ヲ聘雇スル方法ヲ設ケ漸次改良ヲ  
加ヘ祖傳ノ述ヲ開クベシ

一 學部ニ於テハ即國家主要タル普通學  
ノ發達ニ注意シ人民ヲシテ漸ク以テ軍紀  
容易ナル普通學ヲ修ムルノ道ヲ工夫スヘ  
シ朝鮮ニ於テハ從來最も便利ナル藝文ノ  
アルアリテ其使用自在ナリ之ヲ加フルニ  
些少ノ漢字ヲ以テセバ意味通シ易シ故ニ  
漢語混合ノ文体ヲ以テ普通ノ教科書ヲ編

纂スルヲ急要トス普通教育ヲ教訓セシト  
スルニ當リ先以達成ノ教師ヲ養成セザン  
ベカラス

何ノ外國語ト云ハ當國ノ普通教育中ニ學  
課ヲ置キ強近ニテ一般人民ニ學ハシムル  
ノ必要ヲ見ス然リト云ハ他國ノ言語ニ通  
シ其文章ヲ修ムルハ他日外交官領事官通  
譯、翻譯等ノ需用多キヲ生スルノ目ニ便利  
ナリシ故ニ此種ノ學問ハ學生各自ノ望ニ  
應ジ學ビ得ラル、ノ設備ヲ爲シ置クモ不

不可ナカリシ

普通教育ニ關スル費用ノ出所ハ何レノ國  
ニ然ルニ然ル國庫ノ負擔ニ能ハサル所ニシ  
テ其人民生活ノ度ニ應ジ地方費ヲシテ貢  
措セシムルト同時ニ若子ノ授業料ヲ生徒  
ヨリ納メシムルノ方法ナリ之等ノ組織ニ  
對テハ日本現行ノ學制ヲ(教育費ノ支出方  
法)調査スベシ但普通教育トハ中學ヲモ意  
味スルモノナリ

專門學即大學校ノ制度ハ巨額ノ費用ヲ要



スルカ故ニ姑ク之ヲ措キ財政ノ基礎固定  
セタル後ニ於テ新設スルモ未ダ遅カウ不  
トナス方今ノ急務タル普通教育ノ方針シ  
一定スルニアリ而シテ一旦之ヲ定メタル  
上ハ縦ヘ學部大臣ノ交迭アルモ屢々之ヲ  
変換スベカラザルヲ要ス何ニトナレバ教  
育方針ニシテ不定異動セシカ幾多ノ年サ  
子弟ヲレテ彷徨而フ所ヲ知ラザルニ至ラ  
シメン故ニ學部大臣タルモノ教育上一定  
ノ方針ヲ定メ大君主兼ニ閣員ノ決定ヲ經

之ニ因リ漸次擴張スルヲ要ス

乙未教整ノ如キ私立学校ヲ設ケルハ外國ト

慈惠ニ出ルト云々氏教育上弊害ナシト云フ

ヘカウス故ニ全然之ヲ廢止シ生徒中ノ一

部(軍長者)ハ試験ヲ經テ速成校ニ其一部(年

少者)ハ小學ニ入シ普通教育ヲ受ケシムル

ニ如カズ

一 各部大臣(概年其他官吏タル者ハ決シ

テ免派ニ加ハル可カウス)近來創設セリシ

タル朝鮮協會ト云ヒ或ハ員派派ト云フ如

是、ナリ何トナレバ虎旅ノ軋轢日リ互  
ニ患顧ラ害ニ終ニ蜚語作誤人ヲ之ヲ益疑  
心ヲ深カラシムルニ至ル左ナク民從來當  
國ニ愛敬ノ多キ老少南北ト云ニ閭閻大陝  
旅ト云ニ或ハ日清旅ト云フ力如ク其他權  
門勢力家アルハ遠ニ之ニ愛ス是即己ノ私  
情ノ為ニ愛スルニ過キス夫レ如此ナレ結  
果ハ官吏ノ人攫黥陟等一トレヲ愛敬ノ醜  
先ヲ帶ビガルモノナレ尚甚ニキニ至リテ  
ハ讐敵相見ル力如ク己ノ位地ヲ利用シテ

五ニ階級ニ政事上往々影響ヲ来スニ至ル  
如此ニテ如何ニ上下恒和一致ヲ求メト  
スルニ蓋シ得ベカラザルナリ宜シク大臣  
候辦諸官吏タルモノ先ツ己ノ自ラ清シク  
以テ偏見爭鬭ノ弊ヲ矯正セザレベカラズ  
一 官中又ハ各部ニ於テ農商工ニ関スル  
事或ハ鑛山採掘山林採伐諸器械購入其他  
何種事業ニ拘ハラズ苟モ事業起サレトス  
ルニ當リ其契約ノ外人ニ關係スルモノア  
ラズ先ツ其必要ト財政ノ如何ヲ調査シタ

理由ヲ大君主ニ内奏シ并ニ各大臣ニ詳述  
シ熟議ヲ遂ケ其同意ヲ得タル上契約書ノ  
草案ヲ起シ法律専門家ニシテ又ハ経験ア  
ル顧問官ニ其鑑定ヲ求シ其意見ヲ聞キ或  
ハ校正ヲ經ヘタル後再ニ内閣會議ニ提議  
シ若シ又大臣中異議アリタル場合ハ更ニ  
顧問官ノ再考ニ附スル等充分注意ヲ爲シ  
タル上據ンテ大君主ノ許可ヲ得テ決行ス  
ル事トノ内規ヲ設クベシ之ヲ既往ニ徴ス  
ルニ造紙機械典國局機房又ハ独逸鐵船廠

入等ノ訓令其契約ノ不實金ナレ爲ノ常ニ  
外國人ヨリ苦情ヲ訴テ提起シ不該整ハガ  
ル片ハ其斯様ニ使テ外部大臣ト交渉シ終  
判ノ結果終ニ償金ヲ支拂フ等ノ事畢リテ  
敵ヲ可カラズ斯ノハ一事業ニ其目的ヲ達  
スル能ハガルノミナリズ貴重ノ國財ヲ使  
費シテ相償ハガルニ至ル將來深ク懊ミガ  
ルベケレヤ

一當時已ニ派遣シタル留學生二百人又ハ今般新派遣セラルベキ學生  
生三十余名及將來派遣スベキ人負ハ之ヲ二種ニ區別

二十歳以上ノ者ハ留學後稍其日  
本語ヲ解シ得ルニ至ラハ之ヲ各局ニ分配  
シ實務ヲ見習ハシムルヲ要ス從ヘハ大藏  
局ニアツテハ收帳事務帳簿ヲ法金納事務  
銀行局蔵務司法局ニアツテハ各裁判所界  
・訴訟手續・農商務局ニアツテハ農商工  
礦山鑛泉事務陸軍省ニアツテハ會計事務  
物品買收法給與令遞信省ニアツテハ電信  
郵便鐵道事務ヲ内務省ニアツテハ各地方  
廳事務土木事務警察事務郡區町村事務ヲ

文部省ニアリテハ諸学校ノ組織(大学高等  
学校中学小学)又ハ其費用負擔ノ区分等ヲ  
一々調査習得シタル後歸國セバ各自其習  
熟事務ニ應ジ各部ニ採用スル事トスベシ  
然ラレバハ現今ノ如キ不熟練ナル官吏多  
ク爲ソ事務ノ整理ヲ爲ス能ハズ故ニ不得  
止多数ノ外国人ヲ顧問官ヲ僱聘シ隨テ其  
僱給ノ多額ヲ支拂ハザルヲ得ル意思ハザ  
ルベケン

其年齡二十歳未満ノ者ニ對シテハ專ラ實



學ヲ修メシムル爲メ第一處意義塾ヲ卒業  
セハ高等中學ニ入シ之ヲ經テ大學ニ進メ  
シメ各專門學ヲ卒業セシメタル上歸國其  
所轄ニ應シ之ヲ登用スベシ大留學生ノ中  
軍事上ニ從事セルト望ム者アリハ士官學  
校ニ入學セシメ卒業ノ上歸國セハ必ズ隊  
附士官トシテ採用スベシ以上ノ如キ後進  
子弟ハ專門學ヲ修メ卒業シタル上國家事  
務ヲ經營スルノ暇ニアリザシバ眞正ニ開  
明ノ文物ヲ模範シ國歩ヲ進捗ナラシムル

能ハザルナリ

日本へ派遣ノ達成留學生ナル者アリテ各  
處并ニ地方事務ヲ見習ハシムルニ當リ先  
ツ學生ノ性情學識ヲ察シ之ヲ配附シテ外  
業ニ就カシメ又之ヲ監督スル爲メ日本人  
ノ中嚴正ニシテ識力アル者ヲ撰ヒ之ニ依  
頼スルヲ要ス表ニ學生自然ノ意向ニ放任  
シテ顧ミザル片ハ其成業ヲ見ル恐リク困  
難ナルベシ

一 大君主ハ各部大臣職權内ノ事務ニ関

レテハ現今ノ成行及時未進行ノ模範等處  
モ知悉セリル、ニ由テキモノ、如シ是レ  
必竟上下和セテ事情通ゼガルノ致ス所ニ  
レテ是レヨリ種々ノ想像ヲ盡キ込心ヲ生  
シ偶々離間策ノ之ニ乗スルアリバ忽々疑  
心暗鬼ヲ起スニ至ル蓋シ事ノ此ニ至ルモ  
ノ抑誰ノ罪ゾヤ上下情意ノ洽カラザル事  
情ノ貫徹セサル臣職ニ於テ豈ニ欠ク所ナ  
レト為ス可ケンヤ耳今以後各部大臣タル  
モノ平素其主管事務ノ整革又現今ノ成行

將來ノ結果或ハ事業ノ興廢ニ関シテ其ニ  
 雄策有リ作り特ニ度支部ニ於テハ財政ノ  
 消長ハ細明ニ大君主ノ内覽ニ呈供シ置ク  
 ノ必要アリ如此シテ政府内諸般ノ事宜ヲ  
 察ケテ大君主ノ意中ニ收メ明瞭ナル計ハ  
 上下ノ逆歩ハ釋然トシテ霧散シ又離間ノ  
 業スベキ隙ナカルベシ各大臣ハ表面ニ揚  
 言スラフ國家ノ為メ一身ヲ犠牲ニ供スル  
 志敢テ避クル所ニアラズ其言ハ壯大甚ク  
 善シト竊以常ニ其裏面ヲ伺ヘハ言行多ク

ハ之ニ一致セザルヲ如何セシ得ル思ヘ共  
政事上ノ動作ハ如何ニ官吏熟練ハ如何ニ  
常ニ私党ノ感情ニ動カサレ互ニ疑心ノ中  
ニ彷徨シ國家ノ事務ハ檢テ之ヲ顧ミザル  
力如キ形跡鮮クザルニアラフヤ曰ク君權  
曰ク内閣ノ權限曰ク各部ノ職權ト云々職  
權ノ衝突ヨリ事端百出結句甲斐ルカ云  
ルカ政府内一日ノ無事ヲ保ツ能ハス而テ  
其君上ノ前ニアツクハ假面ヲ粧ヒ君主ノ  
貴族一夕ニ下シハ唯々談々唯々命ノ了ハ

是レ黙從ニ其退ヲ己ノ党派ト私語スルニ  
當リテヤ大ニ其不可ヲ警シ之ヲ非議ニ聞  
入之ニ和シ小人之ヲ利ニ棄シテ以テ離間  
ノ具ト爲ス夫レ如坎レテ何ヲ以テ國政改  
良ノ事務ヲ進歩ナラシメ得ベキヤ夫レ私  
党ノ軋轢ハ君臣上下ノ疑心トナリ上ハ大  
臣怙辨者屬謀ヲ屬僚ニ至ル迄交迭常ナリ  
百僚其職ニ安スル能ハズシテ必竟國政ヲ  
阻喪シ國力ノ衰頹ヲ来スニ至ル豈深ク極  
省セガレバテニヤ要スルニ各大臣タレモ

、此ニ務メテ從來ノ惡習ヲ蟬脱シ君臣ノ  
虛礼ヲ祛リ補弼ノ實ニ就キ君ノ兩陛下ノ  
意志ニ出テ事ノ苟モ國政ヲ害シ人民ノ疾  
苦ヲ来シ或ハ財政紊乱ヲ致スノ恐レアリ  
ト認ムベキ事實アリバ詳ニ其利害得失ヲ  
内奏シ洋々和氣ノ間ニ醇々之ヲ諫メテ其  
採納ヲ乞ヒ未タ其不徳ニ解セザルノ前ニ  
於テ之ヲ防止スベシ兩陛下ニ於テモ此傷  
合ニ覆シテハ虚心平易ニ其諫ヲ容シ亮セ  
疑フ此間ニ扶マレガリシコトヲ至要トス

又

之ヲ總フルニ方今ノ急務タル宜シク君臣  
間ノ城府ヲ排シテ上下和衷協同ノ途ニ就  
キ事ノ緩急ニ應シ時勢ノ宜ニキリ察シ國  
務改良ノ實ヲ舉ケ國民ノ困苦ヲ救ヒ身命  
財産ヲ保護シ各其業ニ安シ幸福和樂ノ地  
ヲ得セシメガルベカラズ

日本政府此次以爲ウリ朝鮮政府ノ財政項  
●困難ヲ致シタル原因ハ從來財政ノ不規  
素尤ウ極メ賣官賄賂橫行人民ハ苛税ニ苦



ゝ加フルニ三南ノ軍魁ト東匪ノ擾亂地ヲ  
至ル所ニ起リタルニ職トシテ之ニ由ラス  
ンバアラス又日韓同盟ノ弊ニ就ラズ止ム  
ヲ得ガルノ費ヲ要シ其概今日財政ノ困弊  
ヲ致シタルヲ察シタル故日本政府ハ從來  
ノ友誼ヲ恩ヒ銀貨三百萬圓ヲ惠與スルノ  
希望ヲ抱ケリ因テ朝鮮政府ハ之ヲ受ケタ  
ル上ハ前項ニ該明シタル如ク鐵道工事ヲ  
起シ是ト同時に紙幣ヲ發行シ財政ノ困弊  
ヲ救済セガルベカラス果シテ然ラハ朝鮮

ノ將來生多事ナリ乃ヤ此間ニ屬シテ當局  
者ノ調理宜シキヲ得ルニ非ラザルヨリハ  
到茲此ノ大計畫ヲ成達スル能ス方今各大  
臣始メ其他官吏ト尹モ要途ヲ屢スルハ漸  
々事務熟練スルモ再ヒ新官吏ヲ揀用シ彈  
以テ事務錯亂シ終ニ止ル所ヲ知ラカルニ  
至ラシ故ニ上下和睦誓テ更迭ヲ屢ムセリ  
ルニ意ヲ用ユルモ必要ナリ固シク各大臣  
恒辦タルモノ事ヲ已徃ニ鑑ミ前途未遠ノ  
策ヲ講セシト欲セバ以上列舉スル所ノ數

條目ヲ略守シ各其良知良能以テ孜々努メ  
テ倦マズ張ワテ弛メス終始一貫國運ヲ振  
作セガハベカラス若シ夫シ然ズシテ上下  
ノ和セガル國政ノ舉カラザル尚ホ旧時ノ  
觀ノ如リアラハ本使過ル六月一先ハ歸國  
シ昨年来視察シタル朝鮮政府ノ真相ヲ衷  
情以テ吾皇帝陛下ニ政府ニ遞陳シテ竟  
ニ日本政府ヲシテ友誼上此厚意ニ出テシ  
メタル馨ヲシテ不明ノ咎責ヲ免カレシム  
ル能ハザルナリ馨ノ任ヤ重ク責ヤ大ナリ

殊ニ各郡大臣ハ須ラク誠意忠實ヲ布キ第  
一王室ヲ奉ヒテ職責ヲ慎ミ善ク國政ヲ調  
理シ第ニ馨ラシメ大罪者ヲラシムルコト  
勿ラシコトノ確證ヲ大君並各大臣ニ望  
ム

井上馨文書

同一物  
日文  
漢文  
韓漢混合文

原來如此。

M 28.7.

(清朝後)

再渡拜呀)

一壽山記

張

## 施政要綱

一 各部委任官選擇之試驗規則外全用規則  
 員以以官制令該規則之施行  
 附以以各部大臣之異議留是  
 該主務大臣之總理大臣外連署者  
 試是備官之大者不可不請喜  
 等是備是喜研之亦是准之喜  
 無之者多是提提喜研之談主務大臣  
 等之其外或是他大臣之推舉  
 大臣以外商議者外主務大臣者  
 以實重職務其人以實能取實事



察言時人其爲人是不識之乎其惟學之大  
 用也。一氏之知友以行細以亦其見也。公平無  
 私則其評古是決于凡或是否拒絕否非否此  
 是其中綱。是言明言明或是言採用否非否此  
 是書式之備否。亦內閣恢弘公附否此合意是  
 求言不之以此時也當否亦附語外異議是生  
 否此三六社他人之薦舉否此可否此所右賢  
 之撰薦否當否亦苟任受派也拘碍排斥否  
 又及之朝戚知萬數已援引否此或否偏否  
 嫌疑否亦且口有否時心然則閣之平和否難

其嘉慶二十五年十月二十日奉  
上諭

一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事  
一、著將大員等處，領事官等，奉旨，如事



存輯鯨圖日本公伴錄

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四

日本公伴錄卷之四



做

但信傳新故兩族士官兵卒等以少壯者必

[illegible]

臣等謹將臣等所著欽定四庫全書

目錄開列於左

臣等謹將臣等所著欽定四庫全書

目錄開列於左

臣等謹將臣等所著欽定四庫全書

目錄開列於左

臣等謹將臣等所著欽定四庫全書

目錄開列於左

臣等謹將臣等所著欽定四庫全書

目錄開列於左

可也

一聞知各地引馬隊此什名義則在馬用是  
是六所引之馬一及四月結報云云式出各  
是下市井是亦有名無實之物引之引便今以  
便此此類以馬隊制是義之及在云云年廣者  
此馬隊新設之方法金引之引之可為然以此  
此隊是新設者云云云云十分取上則云  
照之以此云云

一馬隊之三月云云農馬八百八十月結報  
是年之引每朝實千四百元云云出之引之引

六日若見是據處者即以下令至度內以外  
至度支部財力之多少時餘剩是生是候者以  
精意計出者也九月又十月以其四訓錄  
是編制之也或人可也

一其他軍部以屬重文武官是採用重規則此  
其隊之關係條例規則足至極引緊要者以  
此本軍軍部引之他部行政事務外特別以  
管外上外件等引最正重規則由之外事務  
是指處者且是該規則中以諸隊是指揮監  
督者以要者이라

一 內郡之向日主務大臣の時時變遷を料  
量するに無きは新創地方制度を頒布するは是  
を斷行するに科するに未久に當内を止る賢能  
を以て各大臣を以て之を觀望するに必らず  
一國を客觀之地と爲すに則ち他國之主と爲  
す其地境の定まるに由りて現今地方之形勢を  
察するに其利便なる已れども新制度を未だ  
當に當てぬ此間則ち彷徨徘徊するに不知適從  
の至り如此を止むに經久なる方針を地方事務に  
對するに古の遺則を以て其地境の定まるに由り



時山町各地方長官及書記等由町長  
府州福果等由中央政府之組織及施政之方  
向及方針之明否地方制度之各條目是逐  
條說明其執行事務之進行及遺憾之處  
至是年春町長地方長官書記等五例  
度中州長官之職務及町長或區長之職務  
概轉與顧問官之職務其未詳之事項  
是知町長書記等及其他退任官之職務及官吏  
任用之方法外兼任職務及代官之職務境  
界外又各地方官廳之新舊官廳面村之關係

舊案外賦稅外並補用之往時王  
 舊式之新一日新法例是劃定  
 中外外賦稅上以開條者事  
 補用之新一日新法例是劃定  
 舊案外賦稅外並補用之往時王  
 舊式之新一日新法例是劃定  
 中外外賦稅上以開條者事  
 補用之新一日新法例是劃定

創設外館其時勢以適當重도중어이  
行重기實効가다는頃重다

地方官制中警察官總額은七十名式置重도  
로형重였도引本年度에歲入이不敷을生重  
實가引스니是重五十名乃至四十名如지  
創重이要重아로라許多히警察官總額을分  
賦重다重어도其官吏가職務에訓練치아  
重어人民이對重아威迫도重어已往陋習  
으로糾無故히民財를取奪重고又犯人을잡  
早晚收賂私免도重어威名缺兩物件을強取

朝鮮總督府  
文書  
第...號  
...





○不可生煩慮心平易則各別公且之心是為  
主事이可喜이라其別仕官이進退는警務使  
外專管히되其責이重是是恒常不忘中且  
已黨孤外又私緣은且州縣의히아니中且  
其職務이敎育을지與否是分揀喜이且假  
令會外物件이關係는事務是主事是官吏  
이면第一清廉五五中且是은警務이長  
有是是喜이且其他規則新舊記是喜이  
警務事務에對히進退中且文筆以는者是撰  
事은是顯是喜이과又其進退是年斷體檢

朝鮮國史  
卷一百一十五  
職官三  
訓鍊使

學識等是試驗者止其合格者是訓練也  
年貢者車以抹用者以可也

一 地方長官(觀察使)及老書官之撰擇也內

部大臣(州專屬官)受別以早吳各部事務也

間接直接(表裏)關係者是謂者以外(以地方

事務)正關係者是有者以多者故且其撰擇

以當其(以)肉關大臣(以)均(以)商議等且又各大

臣(以)云平無私(以)其人物之適否是查察者(以)

敢(以)其人物是得者(以)要者萬者各大臣中(以)

何地方官是推薦者事(以)스時內部大臣(以)





欽定四庫全書  
御批通志卷一百一十五

是是是議論之非則定喜之要喜如此意之則  
地方事務之圖端以指履施行之此各地方事  
務外均一引情喜之則

一各地方事務官至亦是亦舉一次定期之

中相會之其事務措施之法此或也警案類

則則增加實政意也其地之警案則關

係是等事是會議喜之可也此時則內務大臣

或或相是相也實則提是也且是大臣協

辦是實則提是也實則提是也且是大臣協

以可也前條之新地方官會議外本條警案官

會議則三開都文臣以會議長以副正萬萬大  
臣以有故者以候補以會長是代理者也此以  
外地方警察官會議是時以司法警察事務以  
關稅官事務以關稅官以臨席者則有正勿論警  
務警察官五出席者此會議則老典書이다  
總務會議則三時警察廳顧問官五出席者  
此總務會議五出席者

一 廳吏部之每月二度金歲入出以計算表  
計則以金歲入出以計者以年度末日正午  
正時月額數是推定也且計表是以此又計月

皇朝文獻通考卷之八

大馬主州州里出寺正海春是各大臣の州配

大皇帝年各大臣이新事業을立圖하러가  
나선을發露就新하러가거나或은舊業之事  
를다시復故하러가거나或은古來의  
이유평의와호호를好廻利를取음이이便도  
무喜이로다만일是에及하면

大君主以下各大臣の職務等是不問乎時

[illegible]

一 關吏官位引度吏部以前前軍吏前數事

是謂者 一 關係者稅關是供正引區別者亦

置也計者正各部大臣各度吏大臣以密議

亦計者正各部大臣各度吏大臣以密議

亦計者正各部大臣各度吏大臣以密議

亦計者正各部大臣各度吏大臣以密議

亦計者正各部大臣各度吏大臣以密議

亦計者正各部大臣各度吏大臣以密議

亦計者正各部大臣各度吏大臣以密議

亦計者正各部大臣各度吏大臣以密議

臣이利害得失은 공藏하고 正典을 論究하고  
大君主이 政司를 早히 正當히 吏出에 施  
행喜이라

一 朝鮮에 錯亂한 財政을 整理하기 爲其 基礎  
을 爲한 爲은 王 難中 難事 一 故 王 特別 度支 大  
臣의 任命을 爲한 爲은 一 任 重히 아나 方止 上은  
自 兩陛下 王 於 各 大臣 以 轉 各 局 及 其他 各 地  
方 官 吏 等 互 一 事 業 之 爲 爲 外 一 個 物 之 爲

[illegible]

鴻卷一升二

異之天下易相之理

外之

有

此

是

也

自

以

有

也







是整頓을 고치기 전歲入의 概數를豫算을 하여  
後에 豫算이 國庫를 踏査할 때는 豫算을 以可  
하니라

一 貳百五十萬圓의 對을 銀地王制本位  
貨幣外補助貨를 作鑄할 數를 定을 하여 著手  
을 準備함이 亦是 貨幣制度를 實施을 하는 手段  
을 作함이 然나

與 國庫의 對進出을 果然 貨幣鑄作의 從價  
을 考하여 豫算을 爲을 하여 日本進出局 後에  
該日 國庫의 對進出을 考하여 該日 國庫의

查有昨報告書以款計案是提報云其款計  
陳軍案以提這期此以二十七萬余元是巨款  
是加生利이니當時款機械是使用者作別單  
取款之貨物是請作吾是能引其者다有다리  
事勢如故云나度之部現今財力으로있지此  
又云巨款云云云云教育云云然이나萬一  
黑地云昨此額是加款吾是得云리云築建  
等事是為云云多少開敷月是經云이云나  
神速引云云其意云云云今書云아직日本  
道幣局云云云是定云云云云云云云云云

이失機之端이잇스미라

一 右開金二百五十萬元에對호야兌換紙

幣是政府에發行호리호은되其法이兌換

準備金是銀貨貳百五十萬元으로삼우면大

抵正貨百萬元에對호야銀貨百萬元을이름이호

紙幣百二十五元十分之二五을發行의限定

重正合이紙幣額數가壹百拾萬五千元이

일시호리

小類紙幣三批호人民에對望을從호야何

時十五正貨호小兌換호야호되時政府官

用金博外金亦流通之端緒是明其權利之  
此則政府之職不確實者休祥則連累者亦交  
換之方法以銀行之規則此其他綱目  
緊要事是度支部顧問官之五者亦其起草  
時是也

函照下以下各大臣之知悉其到日  
是是嚴密確守其不令其知悉其信用是損  
傷者止流通是誤者亦其財務紊亂之端是  
關切至極이라

至於紙幣印刷之事亦其此其用者其機械

是與備者即此新多金斗幾多單月是雲云  
上三夏亦曰水天有以別各斗則知者以是  
道斗也原此三和轉政府外特引舊實引俱用  
道斗者多理得者以此斗而後三正原故是  
道斗則各斗原故也德運是轉陽言之五和太  
川是如是理和者以暗符信是也書又字是更  
祇斗則以此斗也止原故斗外斗也其是印和  
上三斗道斗三斗轉轉政府也一人之監督者  
是祇與者以斗和斗則其事始多旺來喜以  
喜





外給更令其差違計無異與否是核實中昨錄  
押贖銀是者中皆以四銀明書是作音是命者  
正夏則收對官史亦會所是之吏吏之注引以  
現出者其有朋更吏是引可外

但此之陳是事是如帶是吏部以收銀對印  
書以年以四計本位銀銀更如銀此是單備  
如備法自後四計以是行是書三細書以是確  
定是引可外

而更之智是更行是神機也似便或或更從  
書以年以四計本位銀銀更如銀此是單備





三  
十  
三  
日

點連者昨以時以係例之先奏者貨幣外流通

을 제하되 아직은銀行에對하야紙幣를發行  
할權所謂銀行紙幣한가지는許諾치 아니  
하고그外紙銀貨한가지도營業하오나規定하  
여其營業이漸々爲實되되且完果히進步하  
겠거니와事務量은外가되紙幣發行之權을付  
與하야其事務勢에適當할수있고且  
政府는該銀行에兌換事務를囑托하야該銀  
行之信用이漸々國內에서外州至하야自然各  
處의支店은漸次하야政府에租稅를運送하  
고그外一定之事務를命上하야是收하야外租稅

이 것은 미국에 공금이 있으나 그러나 이 공금의 사용은  
미국에 관련된 것은 물론이지 아니하고는適當하게  
保之한 典當之物云云是은 政府에 仕置하는  
에 要緊한 物條는 定금이 可하

一 鐵道敷設에 쓰는 材料가 日本或外國之  
物에 關함이 以는 是은 購買金에 是은 其價文是  
今年春에 借款은 三百萬圓에 半額이 以上  
日本銀行之兌換紙幣로 存貯하는 中  
으로 外支出금이 良手 賤이라

一 今年四月一日부터 七月까지 이 86 萬圓

有歲畢次定額內以歲出歲入以核備金是更  
出之金額昨日核由是查明者昨是至什今年  
東川至是歲出歲入是核計者昨是皆如其節  
用者乎是也十分是是節用者昨是東川至  
者昨是少開餘地是生是是是理者昨是置  
以是若不然者昨是自然之勢以一任者止不  
顧一也昨日昨是末及是是是是者昨是不可  
謂之用難是是是是是是是是是是是是是是  
是是官祿俸是三知是是是是是是是是是是  
不得已一時情狀是是是是是是是是是是是

今日時政

一法部今日時政是改良者則同步是追  
從吾國時政大明律或大典會通若不先  
之法律是依然株守舊例不可言政王民惜此  
風俗習慣是案也亦足引通書者今日新法律是  
整定吾國可也

假令軍律刑法重罪輕罪是也民法商法  
罪法等類是觀問官以命者即其編纂吾國可  
外警務廳外則是警署(駐署生官)是處分  
是權限是所與外則其權施是法律是法案細



日定規程이 있음

一 今年四月에新設한法官養成所에學生이卒業은후先任法官候補로叙用되고는一年勤勞후에年俸本官으로陞差함이可라  
裁判官이란가는旁히다然官職에補用이나官制定함이可라各地方裁判所事務外地方行政事務는漸々區別함이緊要하고나養成所是卒業은法官이나기편은아직區別하고는오직함이無히지아다

一 農商工部는日次政務에依하여各官署는

國內世襲의 對호 非理의 其管理 法은 重正  
外國政府外人民이 以本國人民이 對호 非理  
信이 安全히 되고 邊境之憂가 時시 確實을 是  
件 諸君이 可호 나 是故로 先其 技術者는 檢擇  
중고 후 시 實錄이 人爲外 天災로 出호 亦 破損  
중이 有호 故로 是時 檢理는 準備을 設호 亦 正  
君이 要호 檢知 者는 招聘之 方 法이 管理之 費  
是 所 查호 君이 可호 爲 先 本 年度에 先 費用을 查  
實호 君이 要호

一 四 信 錄이 管理之 費이 朝鮮政府이 辦호

後者卸通事務王東養勝並郡府外各處川漸  
次擴張者以昨古以今是亦其方強外其貴  
用是顯重喜以緊要喜以計

一 仁川東城間川鐵路是夜設重業之本利  
與商工部川仙管理喜以當然者中以此此  
事業以巨額之資金外多稅之技術是重者以  
且其事業是神速計決行利其者則無用之長  
時間外費用是虛實是應外有重故王該事業  
以設單是應外是特別一面是設置者非適當  
是商等官之王者則吾是以上以全端是所共

市井其事務是總裁者以可斗又數般工事は  
監督者七特別之學術及經濟學と技術官長  
是重要なる主として適當な人物一人を日本に  
招聘す市井局長は顧問官兼技師長を省正其  
責任を分擔する可し其他工事長土木長等  
數多技師者も應に入ることなり其細節目七  
別上り規定する以外は市井

鐵道工事の竣工之日は當市井工職員に充  
てられ是外當市井の人物を選擇す上日本  
政府の條件より市井是を養成す外置するに要ら

一 近來由仁川至龍山之間是往來者多小  
汽船是是以此危險是老朽船是使用者正數次  
遭難是當者多是故現在仁川日本領事館以  
嚴密検査法是施行者此等船主日本人是  
該検査是免者其不欲者此船籍是朝鮮人外  
川改移者多變者以此朝鮮政府以此時以  
仁川觀察使又海關以此船軸検査實是該者正  
該船籍以朝鮮人以此名目正互變易者以此是  
以此日本技術者是以此其検査者以此方法是  
該者以此船客又運轉物貨之安全是圖者以此

其川國今之急務一也故其方案是也  
昨仁川日本領事以川私鐵等川喜以可也  
京城仁川間郵物運送三三也昨互談檢查  
量短也既船川川多少間保助費是與也昨使  
之運送川吉也亦是一辦法也三也

一 農工商及職業川進步是全國川為也  
工教師是招聘是方法是也昨漸次其業是改  
良也昨貨殖之道是聞也川可也

一 至於學部也即國家主要也普通學川類  
違害是着意也且國民是也昨漸次其業是

易引普通學是於學重道理是計策吾以可也  
以相解也自古王外皆便易重經文以以什什  
其便用以甚引便古以是以著于理學量加入  
古以引以自然物理學是統通重也意故王此時  
以理統混合之又體王引普通教科書是編纂  
吾以急務王中

普通教育也教科書中已為先進成教師是養  
成吾以可也立

勿論何國實施王引普通教育中引一課  
書置入也止新止王國民一體以統學也引

臣心雖不無幸也然以此他國書籍是川外其  
文法意於學也他日外交實領事官通譯款  
譯等事川所用也多々是實是當也亦至便是  
也此以此數之學問是學生各自所望也應也  
亦餘等是也其設備是也也其不可知也外  
音

普通教育川關也其資金出處也無論何國也  
亦全然川國庫也何更權也其是也其也其也  
其民生也生治之度是酌量也亦地方費是更  
權也其廢鍊也其一遺也其是也其是也其是也



生의 什 俸 給 与 法 이 료 다. 之 川 關 係 者 是 規  
定 也. 日 本 現 行 之 學 制 是 教 育 費 支 出 之 法 是  
參 酌 吾 人 可 矣. 但 普 通 教 育 中 의 是 中 學 至 今  
未 有 이 也.

專 門 學 校 即 大 學 校 制 度 인 디 此 大 學 是 設 置  
吾 邦 地 點 多 數 費 用 是 重 大 하니 外 列 置 之 者 以  
自 後 財 政 之 基 礎 外 國 定 章 其 是 必 當 이 新 設  
有 이 故 計 邊 境 外 하니 重 大 是 也. 方 今 之 急 務  
是 普 通 教 育 川 方 法 是 一 定 也. 止 一 期 是 是 定  
也. 年 是 川 學 部 大 臣 이 交 邊 이 小 學 次 是 是

實改以以爲王着意喜以要緊以耳何止有  
以教育之道不足有昨吳動意則幾多年少  
看是當時吾仿徨不知向方之境則至有是故  
王學部大臣者也教育上一定之方法是定有  
大君主及關負則必定是短吾昨見是曲吾昨  
漸次此道是振作喜以要耳

如乙未義塾名私立學校王本引慈惠之心以  
出古立耳然以耳是又教育上則無笑耳且不  
可不謂耳以全然以是是廢止耳則學徒中則

一部已（筆長者）試驗色短也。昨教師養成所。其一部（筆少者）也。小學校。則入學也。昨普通教育。是能者。可也。

一、各部大臣。恆轉其他官吏者。也。斷然。則。偏。偏。偏。則。加。喜。也。不可。則。新。習。近。日。創。設。是。朝。時。候。會。以。或。是。更。殖。殖。一。以。稱。喜。竟。續。是。也。一。昨。何。五。也。以。黨。被。外。五。相。乳。轉。喜。也。五。人。心。感。懷。是。實。也。昨。心。然。盤。語。作。觀。也。百。出。也。昨。人。是。也。昨。身。幾。心。也。拉。理。也。又。則。重。喜。也。五。不。然。也。昨。五。本。未。書。也。以。黨。被。外。多。也。五。四。也。昨。五。日。

聖憲曰大院祇曰日清派一外稱爲額外其他  
權門勢族亦以人地辭然走而棄者以是則自  
較私情是爲古作黨者以夫如此則政府內  
則官吏則揮差點差等事亦一今以黨派與  
以不有是者無喜以爲商重子甚者亦已體  
相見喜以如古且自家則地位是利利用之亦  
相階壻者且是往々政治上則阻礙是及則至  
古山如此者亦以則上下不和一致乎求者亦  
敢利求者則且大臣極辦諸官吏者已以此  
先殫己身古亦偏黨閥爭之端是矯正古皆則

卷五

一 宮中又各節制什農商工關係事  
歐列鎮山關地山林林伐及諸畝城隍外  
其他無論何類事皆由大體外區人爲之  
門與東道事及外又定約事及外爲  
先其必受之緣由外財政之真境是爲事  
大君主及各大臣則詳述事止於此  
在東川各州外又定約事是爲事  
大君主及各大臣則詳述事止於此  
約事是爲事



商書昨取商領事王公使州移文古以外郡大  
臣耳文通狀則意厚雖意平心然朝鮮政府外  
賄債金年計則也計以至於今購數古引不能  
古山如斯之作也一幸業至其成引難心學外  
以外書星之國財是運其古外不備之地則多  
古引將表彈前外此則大者者外無意矣  
一已德祇遺意留學生徒百余名外位今書  
州見祇遺意留學生徒百余名外及日後則學徒  
是祇遺意留學生徒百余名外及日後則學徒  
是祇遺意留學生徒百余名外及日後則學徒





頃惜之區分等事是一々綴密に研究を奉に  
歸國の時各々其技能を取て各郡に採用  
決定爲可爲若其不然者여지吾外之利生  
疎官吏多きが爲て昨各郡事務を整理し  
果て之成る不得已數多き外國人顧問官を  
招請す昨自然に其月給に許多の支出を  
列し以て此の思慮が益ぢあなりきり也

其年齡二十歳以下者ありて專科其學を修  
むが爲て昨第一度應義塾に入學せり卒業  
後此の高等中學に三たび入學是を卒業せり大

學之。又建修古訓陳明學是成就重事。朝鮮國  
有明其斯作之才能是應重。昨採用此意。可以  
升

明學生徒中。則軍事上學業是終。古訓願重者  
以人。則古官學校。則入學於業。古昨卒業之後  
歸國。古則此古。人軍隊士官。則採用是。古  
右。則之後進子弟。古各專門學是成就。古卒業  
國古。則國家事務是經營。古古是真實。古開明  
之文物是模範。古則國運是振作。古則易古古  
古古古

日本川派連連成省學生은 昨古各衙事  
務은 工夫을 當을 川爲先學生의 性品과 學  
識은 果否에 當의 是은 分排否에 分業之地  
(事務) 川就川을 昨古에 此는 監督은 爲否에 昨  
日本人의 嚴正의 識力에 是은 是은 擬舉否에 川使  
之 委囑其 監督은 其 緊要 吾萬若 掌徒 自然之  
意 則 川一任否에 不顧否에 則 其 業의 成事否에 難  
心을 有斗

一 大石主는 各衙大臣의 職權內事는 現今  
之 實情에 時來 進步는 情은 是은 是은 未도 知是은

引引以無目者如喜이니是也  
亦不知其正事情이不通喜이致也  
然像有出者非迷心層也故也  
衆之而忽然引正邪易地喜은  
使事至此方引抑是誰罪一  
論者正事情이實微하아니喜은  
斯大이時다아리生願은  
大臣者는恒常其主官之事務  
之情形外將來進步者事狀  
與廣川關係者는事단節々  
引其業은正時引

度支部財政之瑣長是細悉之隨錄者亦均之  
大君主聖覽之呈供吾之至要耳如此是政府  
內諸般事宜是一體也

大君主則其細燭之理之上下迷蒙之釋  
然以務散之正其離間之司乘之際而無其  
以耳各大臣之外而揚言者亦謂吾之國家是  
為中外一身也職能之供者亦敢不避其咎  
也其其言之性大者亦雖甚善也然其以一  
顧其東面也則其言行相及不符者何也  
其故甚之則其政治上之至者也其行止亦

如一列其言是則官吏黜陟以公平其言  
是則上司明私事朋黨之情懷以感動吾意受  
言昨互相疑惡則彷彿言則國家之事務之不  
顧而道之者以與之歎此亦不也

或曰君權이多威日內閣權限이多或曰各部  
職權이多亦外及及彼此職權權限이多則  
相持云正事端百出云亦以吾이甲退乙去而  
止云나政府內外一日互無事事權이多事則  
이多其一出君上之前者亦나彼面是疑云亦  
君上之言辭가一下有明唯々諾々惟命是從

當時其一退者何故哉蓋欲是也乎則私結者  
以當之非也大不可是聲唱非離是也則以  
和之亦示人利之者何樂而離間之莫若作  
以失如此者何也則國政改良以事新是也  
吾以得之則其由者何則之者何則私黨之  
親是一輪者何居臣之親心也則其臣之親  
心也亦轉者何上皇大臣悅轉的件下也各  
親屬僚佐更迭也無常者止百僚其職也  
安靖者不能者必竟也國政之阻礙者何  
國力之衰頹者何招致者何其所以也

則雅者之音이 업스니可也리 且時要는 各大臣  
者一此이 物也 昨從今으로 隨習惡慣을 除去  
叫君臣之虛權을 祛去 昨補弼之實이 就是호  
王實하마도리

兩陛下가 出於意也 昔心事一라도 妨害國政  
市止人民이 疾苦을 致호시 或은 財政에 紊亂  
을 招호시 留하가 似호시 則仔細의 其利害外得失  
을 內奏호시 且 詳令和露之間에 時々히 諫호시  
昨其聽納을 請호시 昨하리 其不使이 歸호시 其  
에 是은 豫止호시 可하리 至於



明陛下事昨至此境通川嚴守其心軍易  
則其忠誠是容納者昔此一毫至誠然其  
附川扶置外り者昔此思尋下念者此其  
斗

總之論之者方今之急務也此臣聞  
川存意城府是排城者昨上下和衷悅國之道  
川款者時事川緩急是應者昨時勢川宜是察  
者此國務改良之實意矣者此國民之疾苦是  
救者此身命財財產是保護者此各其生業川  
安堵者此多福和樂之地是得者此外り者此

不可斗

日本政府此次竊想吾兄朝鮮政府財  
政之傾圮國難之致者。緣由有三。南年凶  
東亞紛擾。則徵由古。次。然。亦。日。清  
戰事。以。居。其。一。利。外。子。日。清  
開戰之初。則當古。朝鮮。是。是。軍。隊。行。軍。之  
衝。以。到。時。或。是。千。戈。硝。烟。之。場。以。到。外。民。生。以  
失。其。業。者。古。也。三。子。亦。外。可。憐。以。外。子。古。也。三。子。  
是。故。且。日。本。政。府。也。朝。鮮。國。也。如。此。不。幸。是。事。  
古。也。陳。邦。之。舊。誰。是。思。古。外。銀。貨。三。百。萬。元。也。

思進者三利是所望也抱者一利是所國也昨朝  
解政府之款額受者其是前項에說明者之  
引로鐵道役事是起者正是外國時에紙幣是  
發行者昨日下에因缺是財政是放濟者是可  
喜然則朝鮮將來亦以多事치아니호리  
是日時에慶者亦當局者에調理가固喜是得  
其不喜是曲者亦之必然此大計策是以此  
是者則되리今時科品各大臣以下諸官吏  
亦慶者亦受進者亦事務에訓鍊을受地이시  
什何는事務가錯亂者亦不知止處호니是故

五上平外和睦引지니時管而交送之端引來  
喜의 要(要) 吹(吹) 당이 舍大臣 順轉 看外事是已從  
의 體 否 昨 前 裡 永 遠 之 策 是 難 矣 否 昨 止 飲 否  
거 든

以上의 體 別 是 條 目 是 恰 乎 否 昨 各 其 良 知 良  
能 否 王 州 致 否 勤 而 多 倦 否 昨 張 而 勿 弛 否 昨  
終 始 一 貫 喜 否 王 國 運 否 振 興 否 昨 昨 否 否 否  
矣 不 然 否 昨 上 下 不 和 喜 否 國 政 不 舉 喜 否 權  
謂 謂 之 觀 否 昨 本 使 否 本 年 六 月 以 一 時 歸 建  
否 昨 昨 年 以 來 以 觀 聚 否 朝 鮮 政 府 實 相 是 哉

皇帝陛下及政府は備置陳方止是は由  
昨終日本政府は外吾友誼上の此原意を  
おし開談を警い不明之咎責を免るべき  
則ち是れは王の警い任重責大なり各大臣  
候補者は是を意忠責を教ふ止第一は  
王室を辱す非職責を懷ふは其は國政を亂  
る事なり是れ二は警をふは其は國家を貶  
ふなり是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ  
大臣は各大臣の則ち是れ是れ是れ是れ

65

1115

明治廿八年二月廿日

兵庫縣下赤松村有志者  
對  
大

八、施政要綱

漢文

一  
張

# 施政要綱

一凡選擇各部奏任官自有試驗規則若登用規則可循或由某部擬定章程議於內閣在在各大臣會同畫押後該部大臣與總理大臣呈會銜奏請

大君主裁可其奏保障叙亦當一律簡照辦理其於選擇無規可循之官於各部自行得薦若或由別部大臣薦舉則與需用該員之各部大臣商確而該大臣審察該員才能補其職務與否如或不知該員為人若



何則就原爲大臣或與伊相識友朋詳加  
詰訪秉公定其取捨倘以爲不可則須聲  
明其所以然果屬堪用卽當咨會內閣衆  
議僉同方可照前開辦法施行萬一閣議  
有爲不可者另當推爲別員以昭慎重但  
於選擇人材苟存朋黨之見故行挑難若  
或意欲援引親戚故舊否則無故決嫌忌  
憚此種情弊有一於此恐難失內閣協和  
而免波瀾紛生也

一在宮內府或各部以延聘顧問官教習若輩



理事務等類須先各大臣商議其延聘之  
員如為日本國人則向日本國公使聲明  
因何延聘求其代為選薦但其所司事務  
係屬技術則須訪查明自應聘之員帶有  
博士學士等稱號或於該事務曾經歷練  
與否方可定其取舍  
但在經常預算內可以支出該延聘之員  
薪俸則照前開辦理如係預算定額以外  
支出則不得延聘

一各大臣選用所屬判位可得專行之法其係

專屬各局課者須先與各局課長商明方可舉用或由各局課長保薦于大臣請為舉用亦無不可遇有以上情節尤當審察人才技能克稱其職與否為要就中係屬技術者必須選拔嫺熟于其事之人

至如司理會計出納及徵稅者首奉清廉潔白且長於算數之人勿得稍涉冒濫如隨時僱用人員亦當一律照行

但在宮內府亦當照此遵行

一選擇為軍部之文官

奏任其舉用之法俱照

前開二段辦理惟至武官另定試驗法  
用規則以及進級條例一體遵照如屬  
衛隊武官亦當一律照行

一在侍衛隊新設隊等將來必當擢用  
小官學校出身武官自須制定現務  
豫備後備等服務章程限定服務年  
歲並定年俸等差  
譬如在豫備之間為現務年俸五分之一  
一在後備之間為現務年俸七分之一  
新舊換替以漸充擴至兵丁亦當  
限定年歲分為現務豫備後備其年  
限已滿或疾病者設法分別歸  
休撤退以舊換新漸行整

備以期他日成經制勁旅也

但各隊士官兵卒定期操演切勿懈怠而其所制定各章不可輕易變更爲要  
一大若至有

旨將本年七月九月十一月三次應行招募之  
各地方訓練隊姑行停止一節蓋係本系  
豫校本年度末尾度支部財政情形仰見  
聖鑒洞察甚合特宣查在本年度設置侍衛新  
設二隊係未曾料及之事所需費用勢不  
得不由豫算外支出籌辦而仍然分募訓

練隊則誠恐歲計不可支持故須照前段  
所開制定新舊換各章程變通辦理庶可  
新舊傳銜新設二隊亦無妨碍但須察明  
於來年度果得裁減人員若干又其費用  
比之本年度果得減少若干併將來年度  
估計按照本年度秋收之數以及發行紙  
幣如何情形約可剩餘幾何等節逐細推  
算明白在內閣公行商議併祕奏  
大君主於是來年度可得編制幾大隊之訓練  
隊方能確然定矣

一聞悉馬隊係債備農家馬匹充用每一疋給銀三元作為養資此則實為有名無實之制至宣統本年度內廢撤此項養資俟明年安定章程新設馬隊亦無不可但須先查明財計若何方可施行

一廢撤馬隊所需農馬八百疋養資每月可以剝出二十四百元支款果能將此一併撤廢則雖於本年度內度支部必能有此一數剩餘再行逐細核算可於九月或十月編制第四訓練隊亦無不可

一制定屬於軍部之文武官登用規則以及副  
參兵丁各項條規規則殊屬緊要惟因軍  
部所司照別部行政事務迥異必須核定  
嚴正規矩遵從辦理之當按照所定規矩  
將諸隊指揮監督為要

一內部彙因該部大臣未經察明時勢緩急頒  
布新定地方制度一欲立即施行而未幾  
與

宮內生際各大臣互相軋輾竟致無容身之  
地出亡國外而今考察各地之情形舊制

已見廢罷新領制度未及就緒使官民彷徨迷惑於此間莫知所適似此擴日彌久則各地方治理恐致不可收拾方此之時亟宜招集地方長官參書官等於內部示以中央政府組織以及施政方針將地方制度逐條詳說使其於辦理治務無隔模遺漏又各該地方長官參書官等於地方制度內有所難解涉疑之處必向備辦以及顧問官等推詢明確期無遺蘊為要其餘將已被廢罷之官應如何措處舉用



吏員之法若或交卸事務次序與收稅官  
職掌分域與出納村相涉事宜警察職務  
以及挑取巡檢之法公文牒報一切案牘  
授受存備各項事宜須先明定章程通行  
尤如應辦收稅事務如不遵違定章施行  
則本年度他收稅賦紛無頭緒終致舊官  
割削民財以肥己其已徵之稅適歸中飽  
而止

至如郡制視已領地方制度以漸施行果  
有成効然後招集各地方官據其所陳意

見方可酌度編制却於實際有裨行之無  
不順常輿情也

按地方制度內以各警察官之數均勻定  
置七十名第本年度歲出恐不敷支須減  
為五十或四十名為要縱令仕置數多警  
察官如其警察官而不諳於職務者則以  
威脅蒞下甚至無故吞沒民物或私得錢  
物縱放罪犯或向罪犯勒索錢物等舊習  
難除是通縱此劣蹟多端之員罪民于罪  
戾中尚何得保持各地方安寧秩序哉徒

消國家經費而反使累民若於擾累則實  
與聲止內治以圖轉進則利民福之旨相  
戾者也故如在各地方應舉總巡先於警  
務廳讀史挑進得其為人清廉清曰老氣  
重實者能到練養成於規矩之中然後  
考取調用似此可得一洗舊日之弊實此  
等總巡而出肅地方之任率其所部巡檢  
訓練之方可克盡警察官之本分得百姓  
倚信足以保持地方安寧也

一警務官雖由內郡大臣選擇擢用亦當與警

務使商議該員能不稱職又警務使有所  
保薦亦先察商內部大臣其於選擇之時  
切勿以黨與之殊故意排斥之或以親朋  
故舊之屬挾私援引之總宜虛心持平各  
矢公忠為要至所屬到任官進退等事自  
屬警務使所專管亦常常存慎重責任之  
念不可援別黨與故舊一以其稱職與否  
為準早覺如掌理會計什物等事務之員  
須要深廉持已長於算數或係核定細則  
之員則須要諳悉警署事務併具文學其

餘如巡檢之年歲身格或通諳國文與否等皆須考驗其中式者方可取而教練俟業成而後用之

但如前開二節於其訓練警察官巡檢當令教官將司法警察行政警察若豫防警察等區別周密教授為要

一地方長官以及參事官雖似一屬內部大臣選擇擢用但各部事務多與各地方事務互相關涉故當其選擇時先與內閣大臣妥議在各大臣亦當考究人職相稱與否

一秉至公期得人才若或由各大臣保薦  
地方官則內部大臣切不可為越俎有  
所拒斥須宜衆意恰愜方行定奪

一每年招集各地方長官會議一次各將所辦  
治理情形以及新制度適否實際若或遵  
辦法律勅令閣令部令若訓令等之如何  
困難事宜其成效如何等節各叙所見與  
內部大臣協辦各局課長會于一堂討議  
一切遇有質詢之處安予解說然後其應  
如何辦理者旋即施行制度之宜酌改者

損益之應新定者即當設施如此則各地方事務得以轉圜辦理亦能可以均一但各地方官集議之時各部大臣亦須隨事列席互相質詢即行辦解

一各地方警務官亦每年定期相會於內部一次將事務辦法警察規則之應損益更改者與警察相關事務以及如何辦法各相會議其有難解者可向內務大臣協辦質詢或由大臣協辦有所下問則明行解說以因推漸釐正於前段所開各地方官會

議以及此段警務官會議當推內部大正  
當會長如有事故乃協辦代之其當地方  
警務官集議時警務使警務官入席與議  
而事涉司法警察者隨時請檢察事臨席但  
於前兩段所開會議內部及警務廳顧問  
官亦時有入席辨明

一廈支部每月一次造已過歲出入月表以及  
按已過歲出入推至年度末尾分月平均  
核計之推算表又比較前月歲出入增減  
理由書其一分呈



大君主閱覽併分呈各大臣一分核閱遇有  
大君主若各大臣意欲釐興一事業或廢舊例  
設新章或因新設之事仍以為復行成例  
原章為勝俱當首先酌核財政情形方可  
定其或施或罷否則一利方興數弊隨生  
一興一廢政務莫暇就緒上下俱在紛紜  
錯亂之間徒消時日終致不可收拾此所  
以由度支部送閱財政各表使得慎重考  
究萬無一失方可施諸實際者也  
側聞在度支部將應歸數年以前載入之

欵分存各部大臣與度支部大臣情地相  
商遇有經常費以外所需之欵則由以歲  
入別欵內支出云嗣後將此種前案概行  
禁絕無論係歲年以前應收歲入或係何  
項稅賦均當歸併在度支部實收該欵之  
年度歲入核計

在度支部大臣無論係屬何事不得隱承  
官內府若或其餘有權勢之人商託轉於  
豫算以外有所支出而其應得支出者先  
於內閣各大臣將其利害得失慎重講究

方可奏請

大君主裁可循慈公正辦法施行

一整理朝鮮西錯雜紊亂之財政使其井然就緒以固基礎蓋可謂難中之至難者也夫財政之任不得專責于度支大臣自

兩陛下迄至各大臣協辦各局長以及各地方官苟係一事業興設廢罷一物件之措辦購置亦不得輕之看過須先深考其如何可以節省用項非似此事之留心于財政之上常存分擔責成之念則財政竟難得

以整理以致國政聲華亦由此而梗阻  
諸人身凡血液循環無阻精神方得充足  
四肢應心而動故血液之於人身可謂切  
要如或血液短缺或塞而不通甚至一旦  
涸竭則欲保持身體何可待乎此尤為易  
觀之理而國家財政之道適與此理恰相  
吻合

兩陛下迄至各大臣協辦非將如何籌款如何  
興辦之處詳密籌為核定賢之度支部財  
政情形不可輕易舉辦一事以慎始免終

為要倘或徇於目前情私不究將來利害  
所繫又不顧資財所出從復舊新設等事  
是則則致財政復紊必使

王室國家再陷于衰的疲敗也

一度支那事務其由內部向各地方官廳所發  
部令指令訓令若或府郡邑村落等事直  
接或間隔各相關涉之處甚多各宜和衷  
共事為懷其於地方事務互先妥商以免  
事生分收初不得以權限分割各相爭執  
而只轉圖夫地方官廳乃係承法律命令

以及各部指令訓令直達人民奉行之一  
小政府也如於法律命令有所矛盾或各  
部指令訓令有所齟齬則其事難于施行  
人民亦因而受累不少故在各大臣不宜  
踴躍於泥于惟其所據部務須觀到全  
局上宣下行期使政府機關靈運無阻為  
要

一稽查度支部目下情形欲溯考往年歲入全  
數莫從著手於歲出之數亦不可確知宜  
於來年度整備各地方事務豫行核確歲

入概數併酌立簡便章程推漸施行丈量  
耕熟畝畝之法

一於定購新式貨幣之二百五十萬元額內核  
定鑄造十位銀幣以及補助銀之比例  
亦先準備而將鼓鑄事宜此乃為務須領  
行貨幣制度之楷模也

量法日本則造幣局校而為國庫直接由  
國庫之項撥為果能採用鑄幣備用共  
具呈報書以及設計書今據其估計  
實內稱如欲用該局機器按別單添

朝鮮國日本公使館

奉 命 照 會 貴 部 則 尚 有 二 十 七 兩 計 入  
之 鉅 款 可 能 則 全 事 辦 如 以 方 不 定 是 計  
為 源 竭 乏 之 際 則 不 能 算 出 新 斯 報 款 計  
請 有 可 辦 辦 之 款 其 應 係 該 工 程 後 需 款  
月 五 難 濟 事 除 俟 姑 且 其 日 本 國 道 部 司  
計 大 夫 約 以 便 往 來 則 該 款 亦 遺 失 機 之  
虞

一 批 實 額 二 百 五 十 萬 元 應 由 政 府 定 額 付 託  
中 國 銀 行 以 該 部 為 其 應 辦 之 事 定 額  
如 銀 額 不 足 及 行 而 二 十 五 萬 元 紙 幣 比 例



以二百五十萬元姑為兌換準備金則合計可得發行紙幣三百一十二萬五千元而有願將紙幣換收銀貨者隨到隨換以示政府大信藉開紙幣暢行之道為要在政府須先確定嚴章遵照此章所定互行對換以及政府與銀行訂立契約其餘各項細目皆令度支顧問官酌立底稿先行奏明

兩陛下牢記于

聖懷各大臣尤當背誦勿忘確切遵守如果不

然則民信難繫壅塞不通將致財政復紊  
更甚於未發紙幣之前

一至刷印紙幣欲備各項應用機器尚需鉅款  
以及若干歲月方能整齊此亦可向日本  
政府之印刷局訂立契約暫為印造但其  
所用堅實之紙可由朝鮮政府選定妥實  
可靠之抄紙商訂約抄造而其料紙內祕  
配藥物併抄成符號字樣以防偽造之弊  
即將此項料紙運送日本印刷局並派監  
督官一員使之監督刷印紙幣之工

一遇有願將紙幣兌換銀貨者使其到銀行換取應由政府算付銀行每百一分或一分半之規費又由政府比照紙幣發行之數將若干貨幣豫行交存銀行以充兌換準備由度支部每日定准時刻派出監督官到銀行查驗其換收紙幣之數共取支出貨幣之數確相吻合否令銀行總董開具証明書該監督官復証其無訛方呈度支部大臣查閱但其換收紙幣封固蓋印俟在度支部將本位銀貨或金銀塊填補

準備款之取欠少然後得再發行須宜按  
照此法立定細則嚴守施行

發行紙幣以開辦鐵路工程之時最為適  
宜之機一俟日本政府以贈款之事明行  
照會則立即將鑄造貨幣製造紙幣兩事  
興辦為此豫行遣派高等官一員到日本  
國並由政府附興奉

大君主批准之委任狀以便訂立契約以及辦  
理其餘各項事宜至興造鐵路亦當一律  
照辦

一興設銀行事宜由度支部諭令京城各道殷實富戶備積約三十萬元以上資本以興設合本銀行為要蓋因既頒行貨幣制度而行使兌換紙幣則不可無此具備然一朝施行貨幣制度則嚮之銅錢不得視為本位貨幣也夫銅錢之位非但不足為計量物價標準且其銅錢市價每隕落不定仍如尋常貨物故為銀行股份主者不得用銅錢若干兩核計股份之額當其過付資本於銀行使其必交銀塊日本銀貨沙

金銀塊按照成色換算本位貨幣以定其所交資本之數其金銀塊沙金等隨時分送日本國造幣局鑄成本位貨幣存儲但在度支部由銀行收到金銀塊則按照成色換算本位貨幣照數用銀貨交付該銀行併另定銀行條例令銀行遵照期因流通至發行銀行紙幣之權暫且勿庸准予俟其根本牢固周全興旺之時再可准行似合時宜

政府囑託該銀行以兌換事務俟銀行見

信于世卽在各要區逐漸分設支行使其  
承辦轉運租稅或收一定規費匯兌租稅  
等事務為要但須先酌交抵押之物併訂  
立確實契約方准銀行承辦租稅事務  
一修造鐵路所需一切材料價銀其由日本國  
或泰西國購買者應在本年春間所借三  
百萬元內之屬日本銀行兌換紙幣之款  
支出為安

一於本年四月初一日起至七月已歷豫算決  
定額內將其歲出歲入以及豫備金支出

之數月事由切實核明推算本年度末尾  
歲出歲入之數如有可節省者極力節省  
併至年度末尾如何可得剩餘若干等事  
須先考究如果不顧前後不問出入則恐  
再釀成深憂即無異於上年年底艱絀情  
形指上年庫款竭乏文武官俸祿停於三  
個月以故怨聲載道在政府籌借款項  
終得救燃眉之急而言

一在法部當此釐革庶政振興國運之際如夫  
明律或大典會通欠全粗疎之法律殊不  
可依然株守亟宜觀風察俗制定適切時



宜之新法為要譬如軍律刑法輕重罪治罪  
法民法商法等飭令顧問官分別酌量編  
纂至若將違警罪處分之權限附與警務  
廳併同時制定法案細則以防濫行為要  
一新設連成裁判官俟其業成後必先作為試  
補六個月間使之學習行走然後授以實  
任而此項連成裁判官不得由別路舉用  
至地方裁判事務與地方行政事務必須  
漸行區別惟非俟連成裁判官成業後仍  
無分割之實効

一在農商工部宜速妥定管理法以待接辦由  
日本政府應還國內所設電線且先須選  
用技術者其接發外國政府人民以及本  
國人民電報確保通送無誤并豫備應用  
材料遇有人為天災傷壞之時立即趕為  
修理完整至延備技術者事宜以及管理  
線務所需一切用款亦當豫先查明備案  
尤如本年度所需款項宜核妥詳為要  
一電線事務既歸朝鮮政府責成管理則郵遞  
線路亦由京城附近各都府施及各地方

秋小寒黃帝紀此經地黃創引衛氣經  
時經之門以經生之用其時經有一三  
不特其與中經字句相起之經之則日針  
同蓋其與中經字句相起之經之則日針  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教  
一經此經也日本政府已西國教

之事正處，然繁雜而無司，全力經營不  
足以成此大業，倘各大臣以及各項官類  
悉能守此，如今日情形，則不得不以前時  
訓練之事，苟易子生乎，斯實事，竭其力  
以，稍訓練，不知其所以止，故上下無知  
無意，其意也，思可先初，提之於止，其大  
涉，而訓練，以知成，其所以止，其大  
之策，則其所以止，其所以止，其大  
知，其所以止，其所以止，其大  
其所以止，其所以止，其大

今不暇一一四日二親則本使冀於我  
六月間歸國方則將五年以來純行直履  
朝野生財節在情礼無以奢博

大望而陛下海內博懷子政財各大臣使日本  
政出由於此其謬解情皆非日而一易其  
力而已又貴者不見子不情之路實惟  
之得也夫貴也重預各計大臣一以崇奉  
玉璽先慎職責實堪國政為念立勿傳焉  
謹啟所啟

兩陛下及并大臣誠意與奉確切保証再拜啟

新刊  
古今圖書集成  
人事典

一凡國家重要事務莫如外交切須審察其事

前切通曉其大者後細詳其小者也

大者主以通曉外國之事務一則新舊策也

內閣情事查詢至關重要有急于此則先

與同僚商議意見相協然後再與事出矣

也

聖上下一心無異議方可施行其無論

大者主或各大臣首先詳請苟有外事

起則商榷通曉情事同議亦必慎詳矣

劉處辨說云新誤切為幻外以術新補此  
明以爲體則不察外侮之害通也而或  
有得此者使或情以周未等事乃自誤則  
衆口耳大計時有嘆焉及之嘆也



名称	井上 馨 文書
標題	度支衙門年度歳入歳出

分類 番号	673
	25

21

国立国会図書館

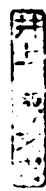
登録 番号	564023
----------	--------

21

264023

21

昭和27年4月2日



度支衙門年度歲入歲出

歲入

比較歲出

稅米三十萬四千一百七十二石

五萬七千五百十五石不足

小米三千九百六十七石

千七百十九石剩餘

小豆二百三十七石

三十石不足

黃豆四萬七千八百二十八石

四千四十四石不足

稅錢二百六十四萬二千四百一十兩

二百四十三萬九千六百七十二兩不足

稅銀五百兩

二百兩剩餘

軍木五千七百一十同三十一疋

五十四同五疋不足

軍布五百十八同十九疋

九十九同九十八疋剩餘



歲出

米三十六萬一千六百八十七石

小米二千二百四十八石

小豆二百六十七石

黃豆五萬一千八百七十二石

錢五百八萬二千八十二兩

銀子三百兩

銀貨二十八萬二千五百四十四元

木五千七百六十四同三十六疋

布四百十八同二十一疋

名称	井上 馨 文書
標題	各邑及徴使署至費減額見込 各々別紙に記し置かる

分類 番号	673
	26

国立国会図書館

登録 番号	264023
----------	--------

各邑及徴税署經費減額見込

科 目	豫 算 額	更 正 額	差 引 減
各 邑	三二三八一三.〇〇元	一七二七〇二.〇〇元	一五一一一一.〇〇元
徴 税 署	三六〇七九八.〇〇〇	一四四、三二〇.〇〇〇	二一六、四七八.〇〇〇
計	六八四、六一、〇〇〇	三一七、〇二二.〇〇〇	三六七、五八九.〇〇〇

備考

一各邑ノ豫算額ハ一去年額三千五百八元ノモノ二百五十箇所本年  
閏五月以後八ヶ月分ヲ要スル計画ナリシカ之ヲ二百六十箇所ニシテ  
九月以後四ヶ月分ヲ要スルストニ更正シタルモノナリ

一徴税署ハ本年四月ヨリ設置スルノ豫算ナリシカ之ヲ各邑

廣 東 道

廣 東 道

ト同シタ九月ヨリ設クルストニ更正レタルモノナリ

名 称	井上 馨 文書
標 題	典圖書調查報告 朝鮮貨幣業務擴張=漢文書類

分 類 番 号	673
	27

国立国会図書館

登録 番号	264623
----------	--------



# 興國局調查報告

現今該局事業之貨幣正置圓形之壓印及極印製造  
 并機械修理一事雖以五一日間之工業時間在十時  
 間之呈之昨役員十四名耳工匠五十名以各權其掌  
 務之昨實用馬力十馬力常用之蒸氣機關之運轉之  
 昨則赤銅貨一日間則凡二十斤箇(二十元)內外呈製  
 造之工匠時工之白銅貨及黃銅貨之壓印之此圓  
 形地金台準數以大板製銅金社之件製造之輸入  
 之昨貨幣作元法之地較前年之工匠之練耳其  
 節次之整頓之量因之本則之通場之成績表示

本局經費決算等科方法正係是漸次妥當得者吳  
亦以然的小圓形地金的輸入以常時不足則外完  
然則工業經營則吳者且或半朔或一朔以地金  
絕之者且出若干月休停復業者免之者且且該  
局經費年度支部外交難者以有者故至其額數是不  
能校白置知者者且該局現狀是謹明照準者外費額  
者做置者者一日間以工業費之如左者其的否者  
難置者其以任四形價金之除之者

一 金拾圓

石炭二千五百磅 每噸八元

一 金三圓

作業消耗品

油系屑紙及其他

一金二十八圓九十錢

役員工匠給料

月給總額七百二十四元五十一圓  
月工費曰字以三十九日做定而六十三人

一金十二圓五十錢

極印二箇半價

一箇價以五元做定  
而數支則納以五元做定

一金九圓五十錢

機械損耗料及其他雜給等

都合金六十一圓九十錢

該金額者一日間製造二十萬枚且明扣除金則赤銅

貨一千箇の壓印費也凡三十二錢の五明其外の該

額十分一量增加計量者外五三十五錢已上四十錢

是超過の可無き矣之五佐京内五輸運之五用費七

每百元の一元式量者一千箇移送費七拾五元用

舊司の事

沿革之事

該典國局は既に四年前

即開國五百年五月

の地基は定まり、

復ち此同十一月に成工となり、開國四百九十四年

に典國局は京内に設立され、此の成功之時に至り

水仁川より移轉され、今京内に残存する

人有り、京城に水仁川より移轉する起因を聞きたる

該局内所用石炭及其他工業用の物件輸入は全數

仁仁港に到り、故に該物品は京城より轉運され

る、漢江に水利を依り、嚴冬時水江に航行し

絶止者其所以及人馬是依者亦搬運者其時一年間  
紐費之某人其計其費亦其是年二萬元以下  
亦其亦用此是因者亦移標者其亦其開國五百一  
年十一月十二日其機械是運用者亦新制貨幣是製  
造者其此時其朝鮮新製貨幣製造之創始其同年十  
二月其亦其工業者其亦其暫時中止者其翌年七月其  
亦其亦其工業者其亦其亦其十二月其亦其亦其停止者  
其翌年八月其始者其亦其二月其亦其工業者其亦其亦  
其今施業其亦其如此每年傳業其亦其亦其是圓形地  
金其絶之者其亦其創業後其亦其本年四月其亦其數其亦

詳言未滿一個年而其間製造之貨幣總數如左開  
喜

五兩銀貨

一萬九千九百二十三元

一兩銀貨

七萬〇四百二元二十錢

白銅貨

七萬六千六百〇一元四十錢

赤銅貨

十五萬三千百七十二元五十一錢

黃銅貨

八百三十八元四十二錢二分

都合三十二萬九百八十七元五十三錢二分

銀貨則當初以製造之次日以後今名赤銅貨白銅貨

黃銅貨其製造喜

# 位地之事

該局在仁川濟物浦後花村州在之非仁川港市街州  
外七八里是厚之非其中間州一小丘外州之原野  
之中央州設置之到東西兩邊三百十五尺南北兩邊  
一百七十三尺之丘(據英尺)坪數在一千五百五十餘  
坪之丘南方是向之非坐之丘前面之低之非畚是接  
之丘後面之丘麓之丘其高處之田之丘東之西之  
之田地是接之非北之海邊之丘防等之非潮水是防  
之非海濱之水淺之非潮落則泥砂露出之非潮滿則  
水深之三四尺之丘之非道路之東西南三面之

有市川皆畦路斗車는通치吳호故主運搬의不便  
호且海邊호호船隻의往來호호石炭及機械等의運  
搬호該處호호市川然호호該局內호移運호斗時人  
馬호迂路호來往호호仁港市街外京城호出入호  
호物貨호皆人馬의背호호搬運호호該基地開拓호  
處호平坦호호空氣融通호適當호호호호乾燥호호以  
害

工場호設호時爲先加意호호호地理호見호호가장  
要緊호호第一運搬호便否호호第二給水호多少及空  
氣融通호호又竊盜豫防호호호運輸호호工業經濟호原



關口之緊要也且任其運輸事之便也여도給水之缺  
乏也其空氣之不通也其環境工業之永久甚難수업  
五竊盜豫防之貨幣製造事業中之一難事也其守  
備甚完全也其極難也此等節是爲其改羅  
巴各團之造幣所是市街內에設寔는其當初設  
施者其揮地也其極히注意함이라道路를修築  
호其運輸를便宜케 하고守備를嚴格히 호其方法을  
適當케 호其合當호其地位를成함

### 建等物之事

圖書에示호其호其工場은三棟으로四字形樣히호其

中庭ハ以ハ其ハ中間處所之出入口軒間秤量室事務

所貨幣調查及極印室ハ并有ハ東邊一棟之地金

倉庫機關室及汽罐室ハ立西邊之正貨倉鑛工室彫

刻所及監察所等ハ立其外ハ附屬之凹形磨室及鍛

治工室ハ充ハ之做家ハ以ハ其ハ其他巡檢入直所一

棟ハ有ハ其ハ其内ハ木工室做設其處ハ接續ハ之雜物廠置所一

棟ハ其内ハ鑛匠間做設以ハ皆煉壁ハ立造ハ之瓦家ハ立其外ハ木

造家雜物置所一棟官舍一棟及工匠宿舍一棟ハ

各ハ以ハ排備ハ立其外ハ烟突一箇所外并二箇所以

其周圍之長水ハ立圍柵ハ之每間ハ橫架木三箇

式棟之亦四月水造門是設喜 造幣所工場是無  
論何國之極堅固則造幣之恒造例等其大異  
是거신金銀等貴且重之物品是出納之自然盜難  
之難是逢할亦念慮可有之是因之可以然之其該局  
建築은如此是斟酌의無之可以之其恒例造家外無  
異할也外之其顔落之應外有之其恒東西倉庫는各  
二十六坪의是之其周圍는壁一箇半의厚是等造之亦  
天井板子是無之其甚弱之板子是鋪之其破落  
의是之其大門是石造是之其鉄板門扇外有之其如此  
是構造是之其金銀儲置의用之其難之其其他各室의

此工業擴張時是當其時狹隘之外事境適用할 수 있  
시나 工新設排備의 方法設計書는 別冊에 記錄을  
하며 目前工業의 不便不利는 極히 工場에 空氣融通  
의 不適은 時先線暗은 是 且 佐其他 汽罐室은 適當  
改修을 外 中은 炎暑에 難堪할 且 是 此間에 窓門  
을 開設을 可 且 汽罐給水用의 井水는 深 三十三尺의  
立直經 八尺八寸의 立 今水深의 十五尺의 有은 且  
周圍는 圓形으로 是 外 花崗石으로 外 什壁石으로 緣  
邊을 修築을 且 水色은 若干濁은 且 鹹味가 有은 時 一  
時間에 涌出을 是 量의 凡 一百五十尺의 立 佐 飲用

은井水는直經이四尺이요深이三十尺이요土色  
은黃赤色이요地質이堅硬호야此基地에建塔호야  
此石材은과引飲호야할염니합실호야

### 瀛罐烟突及給水의事

瀛罐은란가야<sup>1</sup>形正箇鐵製之機關及其他機械은  
自京城典圖書으로移來호야이요旣往十有餘年前  
製造호야이호야使用호야이호야未久호야고호야過  
호야傷호야호야  
아나호야이호야然이호야다만外樣만보고斟酌호야호야  
나其狀을詳知호야못호야호야此等係重호야物은十分  
注意호야호야檢査호야호야工業始復호야時호야其内面을檢査

朝鮮國國史院  
國史編纂所  
國史刊行所  
國史館

할길의 無<sub>지</sub>나 此後州 式精細引 檢査할바 以실가<sub>지</sub>  
오 叶 其各區 分의 分數는 如左 開喜

直經

六尺

丈

十五尺

火床 廣

二尺 丈四尺

總面十六平尺

觸火面

二百五十平尺

火床十六倍

甲板 厚

二分之一寸

兩端板 厚

八分之五寸

鐵直徑

八分之七寸

節二寸半 單列重綴

徑主早

徑二尺八寸

高三尺

安全辦

一箇

桿錘式

徑二寸半

吐出管及給水管

兼用

徑二寸

常用壓力

三基

四十磅

水壓

六基

叩今匠吸子半吋吸子

各一箇

水量計

四分之三寸

水壓計十二基內

各

一箇

水筒

一箇

徑一寸

石炭消費額一日間

十時間

二千五百磅

此水筒名古式製造尺寸不甚長故觸火面以不多也

外石炭以經用其甚引不利且任火床面以十六立





給足電以之其實力之果然幾強力之有否之水壓  
器是用手檢査之吳之且不能詳知之也然之  
良好之汽罐之出杯之之吳之之也

烟突之高六十六尺之以之錐形之之基礎之  
一邊之六尺之以之積之假量二尺半平之之人造  
石之幾處積落之以之完全之等造法之之可  
且其烟突之汽罐之近接之之此汽罐之適當之吳  
之也他日汽罐增設之例量當之之無用之之也  
之設計書之記載之給水之目下之雍塞之之也  
之一時間之湧出水量之一百五十方尺之以之吳六百

德義錄卷之四 雜錄

五十外로는을得호면有餘할거시호佐伏熱를當호  
水或酒盡할호호호호호地勢가水脈호有호호他  
處로外導水할호호호深處호無호호水質호若干處  
所有호호他有害物호호호호호호可謂適當호

機關唧筒溫水器及水槽의事

原動機械호橫裝단기호氏形單動膨脹辦付同板曲  
柄호其主要호호分호如左開호

活塞直径

十一寸

衝程

十六寸

回轉數호一分間

七十回

節動輪兼調車

直径五尺 廣五寸

蒸氣管

径二寸二分之一

放出管

径三寸二分之一

曲柄桿

径四寸

四筒厚

八分五七寸

平均壓力

(一平方吋에 18磅)

實用馬力十馬力

(能力二十馬力)

右實用馬力は現今使用するに於て一匹の蒸氣力計量機

械に無き其正數極量に適當するを得ず其より蒸

氣壓力の巨概算を則上昇せしむる以上は

此傳氣機を開放す、外面轉數は八十五回以上九十  
五回許に増加す、此機械の能力は外立二十馬力  
の如く作働す、其難之處は、此機械外若干損傷處  
に有る、其多少間修理を要す、此十餘年間使用を要す、  
且、此節動輪の外直径三尺半、此調節車は運動を傳  
へ、此數多き機械は運動を要す、故に主軸の回轉は  
一分時間、一百回轉の音、此唧筒は二筒あり、一  
は井水を汲み、外水槽の音、此より立一は、蒸氣罐の  
汲水用に、此吸收唧筒は主軸の外滑車を傳へ、外曲  
柄は回轉運動を、且、中止を、此より立、此外柄は固結

其左側是執除刊き且汲水唧筒是單動の其各區  
分台左開き

凹鑄

徑五寸

衝程

十寸

吸入管

徑三寸

放出管

直徑二寸半

衝行數

一分間百回

汲水量收

一時間凡百二十一戸尺

汲罐汲水唧筒上單動の其主機関の曲柄桿の附着  
其左偏板の片往來働き其時給水の不用時其吸

子門運動州之水水道是遠逝之正空然の運動也  
州の此即筒の各主要区分を如左に

円筒

直径二寸半

衝程

三寸

衝行數

一分間百四十回

暖

管及敷出管

一寸四分之三

水量

一時間二十五方尺

濕水器は円形<sub>下</sub><sup>上</sup>樋の

其容積を直径三尺の立高五

尺の立水量の凡三十立方尺を足り入<sub>ハ</sub>管に

水槽は亦是同形樋の四尺の立高架上に置る

井水昌吸る可濕水器臣引導之後瀧罐川拾水吉

### 秤量器の事

該局の秤今使用せるは大秤量機を一唯此の  
以東京州製造せる恒常各製造局の秤使用せるは  
此一標の以道幣所の秤量機外極に緊要なる秋毫  
に差違る可留外不可用할거시오是に該局所有する  
秤量機を製作者の完全なる難認せるは是に使用せる  
此の機を以て是に是に其の機作者の不完の以て差異が七  
五五分重の有るは該局備置할何大秤量機一唯有  
るは標準秤の無る可分朱銅に其當否を檢査할今

習人其秤之出入輸入輸出之量並量之其利害之無  
量以事小貨幣之輕重を計量하기 合當치 못하고 其  
他小秤의 數多하고 正則치 못하고 且任分銅鼓  
備하고 小秤外니 則貨幣一箇의 重量의 幾何差異하고  
是能히 分拆치 못하고 田形의 不均하고 有하고 其是  
別함을 得지 못하고 且 唯其數는 檢査하고 小極印  
額의 小知할 事의 니 據此論之하면 該局 所在 秤量器  
는 可謂有名無實의 事 則第一 標準秤을 備  
置하고 時々 是를 使用하고 秤을 比較하고 相準秤의  
符合하고 小外할 事의 니 必也 大秤은 二陸外 中秤



量器及小秤量等正確之計並備有之此外亦別置  
精細計量之緊要者且現今使用之計量器不足且  
不完者亦工業上大款典之計量器該秤量機之熟練之  
工匠至者亦修理之計量器不足者即設備之計  
若不然則工業成功之期必延矣

### 極印器之事

極印機之都合九座之計現今八座是使用之其  
一座之破傷者亦改修理之計量器不足者亦  
中六座之同形極印機之計量器大坂造幣局之計量器入之  
計量器其外三座之形極印機之計量器各異者亦同各機使用



轆轤盤은 目下 使用 する 所 三 呎 가 同 形 이 나 深 一  
尺 長 一 尺 五 寸 이 나 此 種 印 製 造 界 機 械 修 理 是 尤  
用 する 所 極 印 削 用 의 尤 する 所 是 特 別 是 着 口 是 具  
備 する 所 實 用 之外 나 是 時 刻 의 空 費 外 或 時 極 印 의  
破 傷 する 所 幣 外 有 する 所 該 局 是 如 此 是 排 備 外 無 する 所  
現 今 二 呎 是 求 する 所 外 나 二 呎 是 使用 する 所 或 是  
其 効 量 得 卷 矣 云 云

壓 寫 機 是 螺 絲 重 鎗 二 腕 形 이 나 三 螺 旋 節 四 寸 半 直  
徑 六 寸 이 나 五 人 力 이 나 明 動 機 이 나 現 今 事 機 是 是  
工 引 豆 用 卷 也 是 是 五 葉 是 擴 張 卷 地 境 이 나 此 機 械 力

並運用刊裝置之件可用世以喜

以上各機械中至要之件已記錄之目下該局備置

以固定資本及供備品各在列開列喜

極印機 九座 滑車付屬

氣罐 一個 付屬物一切

機閥 一個 同

轆轤盤 三座 同 其外重七求質中

水導卸筒 一個

給水卸筒 二個 木製一個 鐵製一個

溫水畧 一個

凹砥石

一坐

萬力

四個二個求質中

大秤量機

一坐并分銅

臺秤

一坐同

車軸

四個長形

軸受

若干

不完貨幣截新機

一坐

極印翻磨器

一坐

極印壓寫器

一坐

凹磨器

二坐

煙

一個

手秤

十二個

洋吹子

一個

錘揉器

一咗

削平機

一咗

已上典國局時在

罐轆

一咗

旗甲呈呈呈三號

截新機

二咗

耳附機

三咗

自働天秤

一咗

壓車機

一哩

己上京城典圖局時在一

右機械止固定資本内川屬喜

書案

四哩

椅子

十二哩

戸棚

五哩

貨幣五

一哩

圓俵

八十俵

秤量鋸

二哩

貨幣翻査器

三十個

同包器

十二個

水桶

三個

油差

六個

火斗

十七個

鎚

十五個  
大小

鑪

十本

火箸

一箇

鑿

四箇

鉋

一箇

鉅

一箇



小刀

二口

尺度

卷尺  
折尺

二箇

斧

一箇

柑塙

三十箇

吹子

一箇

鉈

一箇

篩

一箇

極印

鉢

二箇

時計

四座

車

一臺

算盤

十箇

暖爐

六座

湯釜

三座

火爐

一座

眼鏡

四箇

洋燈

五箇

螺旋型

二雙

小

鏈車

二箇

五

以上各當局備置物

極印製造外事

最初極印之印大坂造幣局所製造之印及所便  
用之印其後次、該局所製造之印目下各當局製  
造物皆使用之印至其印各之印當局、從來製造之  
極印額之如左開書

五兩 一兩 二兩五分 五分 一分 合計

母印表 〇 一 〇 二 一 四

裏 〇 一 〇 一 一 三

極印表〇十

四十

百三十四

十一

二百九十六

表〇八

三十三

百二十

十一

一百七十二

極印本質之大坂造幣局の所製造するものなり  
無量なり小體の地金本質より破傷のなり本局  
在地金土質より機械より未備より則製作する  
焼生する焼か無き故に該局の所地堀内に一箇  
尖の骨より明理する所渾吹より所適當なる時  
外煉出する所骨灰の所生冷する所正地堀の所  
水炭をより所製造する所の所立所  
削るもの其の配する所三寸の所壓寫機の所置る所

寫生事此大生熟事此至此法地燭是兩利也  
木炭火此非是據觸利事且硬度是量事非習匠內此  
科生冷利事後大生應富事非職事然此利樣色適  
唐利則事非工會加事後此燒八事至其燒入法名鉄  
利事五硬度則利事且此利再燒是皆且在其後極  
印廢法名紅唐粉名且此利極面此磨擦事此利大  
概極印製造法此利大抵極印製造法此造幣事業中  
緊要事此利極印此不好事此實造貨幣事世上此  
現出是事不免此利且勿論何國事且妙工是盡事此  
疎忽此利事此利該局是當初此機械及優事工匠此

無きハ事無不得已ハ銅貨正極印ハ如此之ハ甚ク  
不名譽ヲ知ルシハ急遽ニ改良準備ニハ該局大急  
務ト稱言以テ喜

### 機械修理の事

機械修理の法ハ木工鑄工等名色ニ有キハ外乎  
機件非生完全ニ得テ其ノ其他用物未備キ  
ハ急知補テ且次ハ機械使用キ量從テ破傷ハ生  
ザルシハ其準備甚適當ナキ量要キ

### 銀銅本金更入及成貨調査之事

當局ハ更入之ハ本金ハ正貨ハ形銀貨ハ白銅黃銅赤

銅貨は最初大坂造幣局の約託を以てし現今も  
大坂製銅会社との約託を以て製造出来たりしと最初  
半引受入る地金四成貨の比例が如き開き

揮捲

正貨

不正貨  
及欠縮

正貨  
完貨  
比格

五兩銀二萬五

一万九千七  
百三十三元

七十元

0.00三元

一兩銀

九千九百  
三十五元六十

五千五百三  
十三元四角

十三元四角

0.0七八六

白

其七万七千四百八  
十五元六十

七万六千六百  
一元四十

八百八十四  
元二十

0.00一一

赤銅

十五万六千  
六百元

十五万三千百  
七十三元五十

三千四百二十  
七元四十九

0.0二二三

黄銅

四形地金は正貨の適當利製造を以て該局輸入

其是否未知名唯外形으로 보아則本地  
 金州一定之制度外無意以고고大坂製銅會社로角  
 輸入코고其金銅貨一櫃의二千五百個을裝置코以  
 시며其函之箱板으로釘封코고貨幣條例定코는物  
 據코면正量四形銅貨의稱量則每一箇一錢八分  
 九厘七毛五釐二千五百箇의重量은四百七十四兩  
 三錢七厘니函內의所在코고四形의箇數亦不足四兩  
 其重量欠額으로由自然明亮할지과一日間壓印코  
 고四形의二千五百箇即八十函內外의供給코는地  
 金의定時코는輸入의無코고恒常供給의絶乏코는



空手是遊可恠異此外可喜

成貨調查其周達及表裡是改竄亦不正貨是除  
之可五十五箇作封可亦封印後可亦工餘置是  
比格可亦每種二十五元今釘封可亦京城之是送付

書

### 作業消費品之事

工業實內山川數多類是石炭山川石炭好也不好也  
工業及漁鱸保存上川大關係亦有是則買入時賤價  
且粗惡物是求得可亦川加意可亦可亦外可亦  
國之石炭開礦川吳川外川外圍炭是買入當時川

正當의 令 拂法을 行하되 吹出하되 其 成分을 檢査하  
非 適當하되 其 引込하되 當然하되 便房 今 本局의  
用하되 石炭을 보아 極下 品 高價炭인 以하 色이 灰  
泥에 有하되 烟氣가 多出하되 其 不燃이 自 十分之二  
로 至 十分之三 以上이 되되 任 汽罐의 南 害하되 硫黃이  
多하되 時 一 日 間(十 時 間) 平均 二千五百磅이 되하되 一 時  
間 消費하되 二百五十磅이 되하되 機械 十馬力에 排付하되  
一 馬力에 二十五磅式이 되하되 其 品之 粗惡은 可하되 알  
지하되 每 一 噸 價 八元에 買入하되 以하하되 其 實否는  
外지 吳하되 하되

石炭之次州必要物也油ハ當局所用油也日本産保  
母油及甲麻子油是用之其保母油ハ各樣機械州用  
之且唯極印機噓合處ハ甲麻子油是用之其他團工  
場州汽笛州ハ汽笛油立啣筒州ハ水今ト早油是用  
吾方トミ斗毎朔保母油ハ四櫃州超過外ハミ斗  
甲麻子油ハ一箇斗州一櫃是用之其価錢則保母油  
ハ每一櫃州四元ハ立甲麻子油ハ每一櫃州八元五  
十錢ハ斗トミ斗其外系屑ト外國ト立輸入ミ斗或  
以他品ト立代用ミ斗有ミ斗水炭ト立雪國州有餘ミ  
斗其他の用物當國所産恒用物ト立即購入ミ斗是得喜

職員及給料之事

目下局内現員之數員三人員役十一名工匠五十名  
 各其工場部分如左開

主事李鑄成	書記一人
官員前委員韓旭	員役總巡二人
前委員李行一	巡檢四人
使令四名	

工匠

汽罐 二名 木手 二名

極印工匠與  
 庫捲工匠

機關 二名 鑄爐 二名

△呈互相通用

極印 十六名 轆轤 五名

秤量 二名 治轆 四名

擇捲 九名 掃除 二名

刺手 二名

工匠二人 台擇出之 工頭是月之五 各工匠之監  
督川喜

各部分官員員役之俸給之如左開

合計 人員 一人平均額

官員一百二十元 人員 四十元

員役一百五元 十二人 九元五十四元

工正四百九十五元五十錢

四十九名

十元十一錢三厘

工匠月給最多額二十元最少額七元試補四元  
工匠の疾病の有りし給休業者は月給全額を給  
ふ且私故に不業者は日計を準ずる減給を且任一  
箇年間勤勞有る者に賞給の有りしとす規例に  
未備を

工匠の員數と工業の分數は量るに過ぎぬとす  
國の工業技術の優劣者少數に過ぎぬ故に事故外有る  
外不業者を補充するを以て且給料を當  
國に未曉故其否に難說のし月給を増減額の

商中以下至中凡觀例之吏部書

監禁之事

清聖公此後四人的每日二人式空番中非警備之務  
。到工部在官職者給與中非禮休檢能事請行。到  
前法在局內入者時以私服者服。及被休生二管是  
經。亦此處。如官服者。以。通出時。官服者。晚  
。及二管者。雖。中私服者。以。嗽。及。事。上。無  
。中。諸。及。是。此。檢。以。認。許。是。經。是。此。通。器。及。以。工。正。今  
。然。在。食。當。禁。用。中。非。此。檢。以。檢。查。是。輕。中。非。持。去。中。以  
。此。中。外。陳。運。是。以。及。同。室。是。此。是。門。是。開。開。中。中。中

新入在社此處生州本州中此處陳以正年一  
檢在事時各步同各飲細金帳較正正兒事不刊以整  
備是以各叫工正忠書是局內山滿置事、時守護其後  
明子以可續及算也

清深法在工案山可引緊要之事士身體強健是也  
此種引物運替日此變中至本局工匠以五十名內所  
中二人有病不務者主叫金員中五步一在病人以  
外、清深山、叫陳防事、是叫物運引北、以、至、引外  
就結之事

以上所載會理地是則作案形收去見事整齊之端、



開發者以此各員竭力不其業言行不機械以運  
轉此極印壓捺之法正漸次熟鍊至此道趣亦有習以  
之以此其重要者欽典稱之時四形地金的不完且  
不足至是事外極印的不良事外極量機不實事外機  
械修理法未備事外室內不淨等事是作國貨幣以成  
蹟以不好者爲免之是以此四形本金不完者爲品位  
是不知上之理學上成蹟之是州銅貨是論之是之第  
一色以潤澤之是之且今茲以此四形數年爲檢之是  
純銅色以現之是之其表面汚斑以或不脫是之有是  
否實上完全之是之其말할수없고製造法正厚形外薄

形의 有은 山 巖의 一同의 吳 市 田 畝 附 法의 完全의 到  
土의 數 少 是 山 何 由 至 然 是 地 檢 査 此 斗 是 且  
分 別의 實 情 今 是 山 成 實 上의 妨 害 不 少 是 以 邊  
界 改 良 是 最 要 事 土 田 無 地 金 供 給의 不 足 是 以 頻  
傳 賣 事의 至 失 利 是 是 勿 論 是 且 稅 印 不 良 是 屢 違 貨  
幣의 生 弊 是 以 亦 易 事의 十 分 謹 覺 是 是 要 事 是 以 經 量  
機 生 不 完 是 且 修 補 是 機 械 亦 備 事의 破 傷의 加 是 地  
事 境 修 作의 失 力 是 亦 不 用 說 是 以 在 室 內 不 淨 是 工  
業 上 有 害 是 故 是 噴 煙 是 是 務 事의 可 是 且 田 形 地 金  
是 嚴 刑 削 度 是 故 是 亦 極 是 良 好 品 是 亦 以 地 受 入 是

幣工製造法五十分加意監督之并改良造幣局  
謀之并印製作法是適當刊之并秤量機之并  
入之并臨時適當之保存法是設備之并製作場是加  
設之并機械之破傷是修補之後并作圖之完全希望  
할지并根本是不備之并成印是責任할지并可得  
之并以此若現今形狀是從之并貨幣是製造之다가  
는粗惡之并是日增加之并因而廣造貨幣가造出之  
外世上并失信之并通用之并斷絶之并惟異치外并  
上并各國新貨之并之并外并金銀之并未通處만之  
以是初并粗惡之并貨幣是各地并通用之并并日後

嘆其之端之無限之可以深慮其所以  
速到凡節之準備者最急務也 知燭之旨外事  
業礦張川開之設計及豫集等之別冊之列錄焉

名 称	井上 馨 文書
標 題	典拠司事業拡張計画書

分 類 番 号	673
	28

18-9

国立国会図書館

登録番号	264623
------	--------

複

書文  
65  
11  
10  
井上

朝  
魚  
心

造  
幣

業  
務  
振  
張

二  
関  
下  
に  
書  
日  
類

二  
用

(同一物  
どう  
方  
は  
ま  
)(おまけ)

(11)の  
引  
紙  
に  
後  
当

今度典國局事業을擴張하야造幣全體의工  
業을完全히하리야하되現今되로已到底이行  
하야難할바라現時概況는前日報告하와갓  
치工業의小區分에依樣型樣이아此는擴張  
하야진실로全般을改備하되每日貨幣製造  
額은凡宗銅貨十五萬枚(百元)白銅貨은十萬  
枚(五元)五兩銀貨은五千枚(五元)一兩銀貨은  
一萬二千枚(六元)一切鑄造量得望目的으로  
增設州關하야建築物及機械類概算費目  
是總計二十七萬元可量이호此는細別하되

次以列錄其及하고以上凡百計畫을極히小  
規模를選數호야單함을主호야機械만排置  
함이라故其各機械의勵力에當호야호고過及  
이호거신不得已之事者호其詳細에關호일  
은別紙에列陳함이이호호호호호호其製法  
品方를從호호價値도亦一定호지호호호호  
니以上을主호호完全될거실擇호호若貴目  
者減호호總額內에호一割可量減될호호호  
호製作場에호各호物機械全般를備置호호  
호鐵工에關호호凡百工事의需用을應호호호



製造함을得할거시호여建築物川開호호일  
 호아호調查를充分케吳호호호호異有無를  
 保호호難호

### 建築物事

圖面川示호호호從來建築物호側川增設를某  
 樣堅固호호호風路호便宜호호호煤瓦호造  
 호호各工場區別호호別紙明細書호詳見

場所	坪數	單價	價格
圓形庫	五十	三〇〇 <sub>円</sub>	一五、〇〇〇 <sub>円</sub>
鎔解所	四十	一六〇	六、〇〇〇

不章魚園一可公个金

伸延所

四十

一六〇

四

六〇〇

四

樞印所

七十

一六〇

一、〇〇〇

機関室

三、六

一七〇

六、一三〇

精製所

五十

一六〇

八〇〇〇

精煉所

三十

一六〇

四、八〇〇

製作所

一五〇〇〇

煙突及爐

一〇、〇〇〇

柵

三、五〇〇

附属建家

二〇〇〇

彫刻所

試驗所		從東已建	家屋用之可也
事務所		一一八〇	
土地收購	道路修繕		
統計		一〇〇、〇〇〇	

機械之部

事業擴張川關方外主要型機械外各場配置  
 等事是次川列録方外新購入型機械之代價  
 是記附方且從來所存機械可用型之代價  
 豈不託方且左川明細仕様書如右

場所	名稱	件數	代價
----	----	----	----

機閘室

蒸氣機械

百馬力

一台

一〇、〇〇〇

元

蒸氣濃罐

二個

一〇、〇〇〇

唧筒

三台

一〇〇〇

溫水管

一個

二、二〇〇

運接管及附屬品

一切

二、三〇〇

主軸軸受及調車

一切

二、五〇〇

通計

二八、〇〇〇

鑄解場

鑄型

銀貨用

三台百五枚

一、五〇〇

鑄型

銅貨用

八十枚

一、一五〇

剪斷機

一台

六五〇

削秤機及其他諸具

一切

八六〇

秤量機大中小各二台

大一中一  
小一

大三〇〇中四〇〇  
小一四〇

火爐用鐵物及其他

一切

一八〇〇

通計

八七〇〇

伸延町 大秤量機

一台

二二〇〇

小秤量機

三台

／

荒伸

二組

五〇〇〇

銀貨用  
五十一

中伸

二組

三五〇〇

上

一組

三五〇〇

荒伸

二組

四二〇〇

一、不、蘇、銀、國、日、之、分、作、銀

銀貨用  
五、一、二、

中伸

二組

三〇〇〇

上

一組

/

截斷機五兩銀貨用

三台

二二〇〇

全

一兩銀貨用

一台

一六〇〇

全

自銅及鋼貨用

三台

/

火爐用鉄物及小諸具

一切

二〇〇〇

圓形研磨器

二台

五〇〇

通計

二二七〇〇

極印所

極印機

八台

/

全

一台

二五〇〇

耳附器	二台	/
自勵天秤	三台	七、五〇〇
大秤量機	二台	/
小秤量機	六台	/
試驗秤	二台	七〇〇
凹形洗盤	一個	二五〇
乾燥盤	一台	三〇〇
燒生爐鉄物糸諸具	一切	一六〇〇
唾金壓搾機	一台	二〇〇
凹形削減機	一台	三五〇

不計銀國庫之公作銀

極印研磨機

一台

/

不全貨幣截斷機

一台

/

通計

一三五〇〇

彫刻所

極印壓寫機

一台

/

全

一台

三五〇〇

轆轤盤

二台

一〇〇〇

蒸氣機械附屬其他

一切

一五〇〇

煙生爐及小諸具

一切

一〇〇〇

極印磨機

一台

三〇〇

通計

七三〇〇



地金課

大秤量機

一台

三〇〇〇

小秤量機

一台

/

通計

三〇〇〇

試驗所

分拆用秤

六台

三〇〇〇

全器具

一切

一〇〇〇〇

瓶振機

一台

二五〇

通計

一三二五〇

精煉所

廢車機

一台

/

精煉鍋附屬

一切

三二〇〇

蒸氣機械

一台

八〇〇

通計

五〇〇〇

精製

精製鍋

三個

一六〇〇

沈瀝釜

一個

八五〇

耳鑿用器具

一切

五〇〇〇

秤量機

一台

二二〇〇

鑄解爐鐵物

一切

一五〇〇

通計

二一五〇

製造

蒸氣機械

一切

／

各子物機械

一切

二五〇〇

諸管類

一切

七〇〇

通計

三二、〇〇〇

雜用費

材料諸品

一切

一〇、〇〇〇

供備品

一切

五、〇〇〇

運搬費及振付費

一切

一四、六〇〇

通計

二九、六〇〇

總計

一七〇、〇〇〇

費目之事

以上外凡百以整頓及工業之設施等之  
 且且以各種貨幣製造之費用以概算之如左

各種貨幣製造費

兩銀貨

千粒頭

二元六十四錢

一兩銀貨

全

七十六錢

白銅貨

全

一元〇八錢

赤銅貨

全

九十二錢

黃銅貨

全

六十五錢

全上業減量每千頭

九百位

銀九銅一之意

一一八

八百位

銀八銅二

一二六

白銅

五五〇

赤銅

一七六

黃銅

二八四〇

地金代價則時勢無定故不載于此



此等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

等事乃人心之計慮也。此

製造할을得할기시호산建築物이開市되  
 는아즉調查를充令則吳雪호호異有無  
 得方川難音

建築物事

圖面以示意其지從來建築호則川增設  
 標堅圖則호호風路호便宜호호호煉瓦호  
 호호各工場通則善호則紙明細書호詳見

場所	坪數	單價	價格
圓形庫	五十	三〇〇	一五〇〇〇
鐵庫	四十	一六〇	六〇〇〇



伸延所	四十	一六〇	六〇〇
極印所	七十	一六〇	一、〇〇〇
博同室	三十九六	一七〇	六、一二〇
精製所	五十	一六〇	八〇〇
精煉所	三十	一六〇	四、八〇〇
製作所			一、五〇〇
煙灰及煙			一〇、〇〇〇
料			三、五〇〇
附屬建築			二、〇〇〇
彫刻所			



小 大 機 力	一 台	一 〇、〇〇〇
大 機 力	二 個	一 〇、〇〇〇
中 機 力	三 台	一 〇、〇〇〇
小 機 力	一 個	二、二〇〇
運 送 機 力	一 切	二、三〇〇
主 動 機 力	一 切	二、五〇〇
通 車		六、〇〇〇
鐵 道 機 力	五 台	一、九〇〇
鐵 道 機 力	八 十 枚	一、一五〇
剪 所 機	一 台	六、〇〇〇

制和機自具

一切

八六〇

柱量機自具

一切

大三十 中四十

火煙用銀物其地

一切

八〇〇

通計

八七〇〇

補修火神臺

一切

一〇〇

小柱量機

一切

一〇〇

諸仲

一切

九〇〇

銀具

中仲

一切

三〇〇

上

一切

三〇〇

其仲

一切

二〇〇

鐵 二 斤

上

新式鐵 三 台

全 一 台

全 三 台

火爐用鐵 一 台

圓形研磨器 二 台

通計 二六七〇〇

鐵 八 台

全 一 台

厚河舊

二台

自南天祥

三台

七五〇〇

九祥豐鐵

二台

小祥豐鐵

六台

誠順祥

二台

七〇〇

興利源豐

一爐

二五〇

乾源豐

一合

三〇〇

建豐源號

一合

一六〇〇

金豐源號

一合

二〇〇

同利源號

一合

二〇〇

石草魚目一六八分金

極神驗靈機

一合

✓

不金貴者製其機

一合

✓

通計

一三、五〇〇

影刻所 極神驗靈機

一合

✓

合

一合

五、五〇〇

機驗靈

一合

一〇〇〇

其機驗靈其地

一合

一、五〇〇

其生機驗靈其

一合

一〇〇〇

極神驗靈機

一合

三〇〇

通計

七、三〇〇

地金部 大并量

一

〇〇〇〇〇

小并量

一

〇〇〇〇〇

通計

〇〇〇〇〇

試驗所 分拆明細

六

〇〇〇〇〇

全量

一

〇〇〇〇〇

耗損

一

〇〇〇〇〇

通計

〇〇〇〇〇

精製所 雜品

一

〇〇〇〇〇

精製所 雜品

一

〇〇〇〇〇

精製所 雜品

一

〇〇〇〇〇



在朝魚國日本領舍

通計

一、六〇〇

清室時自來就

三、〇〇〇

一、六〇〇

地產

一、〇〇〇

八、五〇〇

庫警明器具

一、〇〇〇

五、〇〇〇

神量

一、〇〇〇

二、〇〇〇

鑑時

一、〇〇〇

一、九〇〇

通計

一、一、一、〇〇

奉詔

英理機城

一、〇〇〇

／

各町

一、〇〇〇

六、五〇〇

諸宮

一、〇〇〇

七、〇〇〇

通計

五二〇〇〇

御用金

御用金

一〇〇〇〇

一〇〇〇〇

供備品

一〇〇

五〇〇〇

通帳費

一〇〇

一四六〇〇

通計

二九六〇〇

總計

一七〇〇〇〇

實日金

此品計凡百以整頓市井之業是設此書也

至其得各權實物製造等之實用山概實也此也

各權實物製造等之實用

卷之四

五元六角

三國志

合

一元八角



七十二

The figure consists of three black and white photographs arranged vertically. The top photograph shows a top-down view of a dark, irregularly shaped object with a central protrusion and several smaller appendages. The middle photograph shows a side view of the same object, highlighting its profile and the arrangement of its parts. The bottom photograph shows another side view, possibly from a different angle, showing the object's interaction with a surface or another component.



六六六

金剛經



第九卷

三

10



一六六

卷一

三六〇

元初六日國朝皇帝親臨不殿于此

名称	井上 馨 文書
標題	(韓国) 予算定額中削減見込

分類 番号	673
	29止

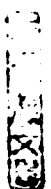
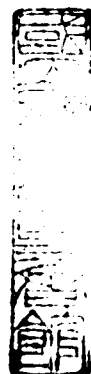
国立国会図書館

登録 番号	264023
----------	--------

豫算定額中削減見込

	削減金額	備考
地方行政廳經費	二五,七九七,九三五	別紙第一号ノ面
漢城府	二,三〇〇,〇〇〇	同五月以降出賃停止款概算
訓練隊費	二五,四〇三,二二〇	別紙第二号ノ面
管稅司	一三,一七一,二〇〇	自四月分即チ定額十分三成 至同五月
徵稅署	一〇八,二三九,四〇〇	同上
兵亂地方救恤費	四九,九二二,六〇〇	
道路橋梁修築費	九,九〇九,〇〇〇	
計	二三四,七四三,三五五	

本表削減見込高ハ二十三万四千金元ニ上ルトモ本年一度ハ豫  
算實施ノ初年ニ爲シ當初ノ計画完全ナリト云フヲ得ス隨テ臨



時豫算外支出ヲ要スルモノ意外ノ多額ニ至ルハ亦免レハカラスノ弊ナリ  
リトス現ニ本年四月以後同五月二十七日迄約三ヶ月間豫備金ヨ  
リ支出シタル金額ハ総計十五万四千余元ノ多キ、及ヘリ故ニ此削減  
ノ足コト云ハント曰時々其一方、於テ臨時ノ増加ヲ要スルノ事モ亦豫メ  
想像シ置カサルハカラス之ヲ改定ノ経験、考フヘ、本年と同尚サナ  
リモ十数万元ノ豫算外支出ヲ要スルモノト覺悟セサルハカラスナカレシ  
蓋シ財用短乏ニ至レヤ、夫レ今口、廢、其濫費ヲ戒ムヘキハ勿論、  
為勉メテ節制ノ事ト歟ヘキモ一國政府ノ會計上此位ノ増費、實  
ニ已ルヲ好サルノ事ナリト信ス

地方心控減負

俸給減額

区分	現定負	改正定負	減負	每人給額	結典月数	減負、俸 給額
特別派遣心控	百十人	五十人	六十人	年額、百二十元 月額、九元五角	八月	四、四三〇元
居勇心控	五百五十人	四百四十人	百一十人	年、七十八元 月、六元	七月、半	六、五七〇、〇〇〇
増加居勇心控	八百八十人	六百四十人	二百四十人	年、五十四元 月、四元五角七分	七月、半	七、二九五、五三九
計	千五百四十人	千百人	四百四十人	年、 月、		一八、二九五、九三九
平均一府分	七十一人	五十一人	二十人			八三一、六三三



被服費減額

品名	單價	減負係數數量	同上費額
外套	八元	四百四十	三五二〇元〇〇〇
冬服	三元三十錢	四百四十	一四五二〇〇〇
夏服	一元二十五錢	四百四十	五五〇〇〇〇
帽及日覆	一元	四百四十	四四〇〇〇〇
帶劍	三元五十錢	四百四十	一五四〇〇〇〇
計	十七元五錢		七、五〇二、〇〇〇

在  
俸給及被服費減額合計 二万五千七百九十七元九十三錢五厘

訓練隊

未設置二大隊經費

第五大隊

自九月至十二月間

壹萬六千九百五十四元四十八錢

第六大隊

十一月十二月間

八千四百四十八元七十四錢

合計 二萬五千四百三十二元二十二錢

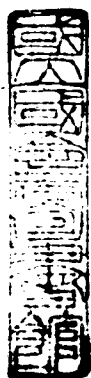
名 称	井上 馨 文書
標 題	日韓議定書 諸案 日韓議定書 諸草案

分 類 番 号	674
	/

国立国会図書館

登録 番号	264029
----------	--------

外來  
用之件  
韓國產名三



第一案（公使案初案）

明治三十六年五月廿日

若以不：此等代表、分



## 議定書

大韓帝国外部大臣ハ大日本帝國代表者ト妥商シテ  
左開案件ヲ議定スル事

一 日韓兩國々際上ノ障礙ヲ嚴重ニ措處シテ情誼ヲ  
完全ニ疏通スル事

一 东亚大局平和ヲ關シテ萬一時變ニ際當ルハ日  
韓兩國力誠實ナル情誼ヲ互相提携シテ安寧  
秩序ヲ永久ニ維持スル事

一 未備細目ハ外部大臣ト日本代表者間ニ隨機妥

大韓帝國ノ獨立ヲ維持スルニ必要ナル事

### 日韓同盟基礎ニ成ルハキ條項

第一 大韓帝國ノ獨立ヲ永世ニ保全スルヲ目的トシテ日韓兩帝國ノ同盟ヲ要スル事

第二 日韓兩帝國防備上ノ目的ヲ以テ同盟ヲ要スル事

第三 日韓兩帝國經濟共通ノ目的ヲ以テ同盟ヲ要スル事

第四 大日本帝國・大韓帝國ノ獨立ヲ扶植シ大韓帝國皇室ノ永世安寧隆盛ヲ圖謀スル事

第五

第二条ノ目的ヲ達スル為メ大韓帝国自ラ  
陸海軍備ヲ擴張スル外必要ノ境遇ニ於テハ  
大日本帝国ニ其兵力ヲ以テ大韓帝国ノ防備  
ニ任スル事

第六

第三条ノ目的ヲ遂行スルカ為メ大日本帝国  
必要ノ資金ヲ大韓帝国ニ供給スル事

第七

經濟共通ニ伴フ交通機關ノ完備ニ日韓兩  
帝国ノ方法ヲ設ケ此ヲ實行スル事

## 別途條項

一 大日本帝國政府、現今其國土内、流寓スル所ノ大韓  
帝國亡命者ニ對シ、處分ヲ決行スルヲ快諾シ  
其重キ者之ヲ臺灣島僻隅ノ地ニ竄配シテ其  
自由ヲ束縛シ以下其輕重ニ從ヒ大韓帝國政  
府ノ意見ヲ徴シテ之ヲ處分スル事



# 第三案（公使館再案）

明治三十四年二月十三日

## 議定書

第一条 兩帝不恒久不易ノ祝文ヲ保持シ東洋ノ  
平和ヲ確立スル爲メ韓王ニ日本ニ信賴シ專ラ  
助言ヲ受ケ内治外交ヲ改良スル事

第二条 大日本帝王政府ニ大韓帝王皇室ノ安  
全康寧ヲ保証スル事

第三条 大日本帝王政府ニ大韓帝王ノ独立及  
領土ヲ確實ニ保全スル事

第四条 第三国ノ侵害者ノ内乱ニ當リ大日本帝

五政府臨機必要ノ措置ヲ取事

第五條 此條約ニ違反スル條約ヲ第三不結

スル事

第六條 未備ノ條項追テ議定スル事

附則

第廿四案 修正案 二日七、子

明治三十七年

## 議定書

第一条 日韓兩帝國ハ恒久不易ノ親交ヲ保持シ

東洋ノ平和ヲ確立スル爲メ、大韓帝國ハ大日本帝國  
ノ政府ヲ確信シ施政改善ニ関シ大日本帝國ノ政府  
ニ忠告及助力ヲ用スル事

第二条 大日本帝國ノ政府、大韓帝國ノ皇室ヲ安全康

寧ヲラシムル事

第三条 大日本帝國ノ政府、大韓帝國ノ独立及領土ヲ  
確實ニ保全スル事



第五案（後附條約之表）以此三十七年二月廿五日所定

### 議定書

大日本帝國天皇陛下、時命全權公使林權助及大韓  
帝國皇帝陛下、外部大臣臨時署理陸軍參將李址  
鎔、各相當委任、受付、條項、協定、之、條約、

第一條、日韓兩國間、恒久不易、親交ヲ保持シ、東  
洋ノ平和ヲ確立スル爲メ、大韓帝國、大日本帝國、政府  
ハ、確信シ、施政、改善、關シ、其忠告ヲ容ル、事

第二條、大日本帝國政府、大韓帝國、皇室ヲ確實  
保護、以テ、安全、康寧、ヲシスル、事、

第三條 大日本帝國政府大韓帝國政府互不獨立及領土保全ヲ

確實保證スル事

第四條 第三國侵害ニ因リ發生スル内亂ノ爲メ大韓帝國

皇室安全或領土保全危險ナル場合大日本帝國

政府速ニ臨機必要措置ヲ取テ而シテ大韓

政府右大日本帝國政府行動ヲ容易ナラシム

ル事

第五條 大日本帝國政府前條目的ヲ達スル爲メ軍略上必要

ノ地点ヲ臨機採用スルコトヲ得ル事

第六條 兩國政府相互承諾ヲ經スル後來協約ノ

趣意ニ違背スルキ協約ヲ第三国トノ間訂立スルヲ得可  
ル事

第六条 本條約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大日本帝國代  
表者ト大韓帝國ト外部大臣トノ間ニ臨時協定スル事

明治三十七年二月二十三日

特命全權公使 林 權 助

光武八年二月二十三日

外部大臣臨時署理 李 址 鎔

名 称	井 上    馨 文 書
標 題	契 紋 考

分 類 番 号	674
	2

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	264629
------------------	--------



(約案第二号)

契約書

大韓帝國宮内大臣閔丙奭

皇帝陛下ノ勅旨ヲ奉シ大日本帝國東京府士族長森藤吉郎ト契  
約ヲ締結スルコト左ノ如シ

第一款 大韓帝國宮内大臣閔丙奭ハ山陵、廟、寺院、禁山墳墓及  
其付屬地、現在宮内府用地及付屬地、現在官有既開墾地並ニ民  
有地ニシテ其所有ノ事實明白ナル土地、田畑、山林、原野等ヲ除ク外  
大韓帝國八道(京畿、忠清、慶尙、全羅、江原、黃海、平安、咸鏡諸  
道)ニ散在セル荒蕪ノ土地、山林、原野、其他一切ノ未墾地ヲ開墾整  
理改良、拓殖等一切ノ経営ヲ大日本帝國長森藤吉郎及其代理人



井上 廣文

(日本人又ハ韓國人)ニ委任ス

前項ノ荒蕪<sup>ヤシ</sup>土地山林原野其他一切ノ未墾地ハ本契約成立後三月以内ニ帝室御料地ニ編入シ宮内府所管ト爲ス(キモトス)

第二款 大韓國宮内府又ハ政府ハ契約年限内ニ前款所掲ノ土地ヲ自ら經營シ又ハ長森藤吉郎以外ニ何人ニモ許可又ハ委任スルコトヲ得サルモノトス

第三款 前掲土地ヲ開墾整理改良シタルキハ長森藤吉郎及其代理人ハ漸次之ニ米麦大豆其他ノ農作物樹木菓物等ヲ植付ケ又ハ牧畜漁業狩獵ヲ爲シ其他有利ニ之ヲ使用スルコトヲ得ルモノトス

第四款 前掲土地全部ノ經營竣成ヲ告ケタル後長森藤吉郎ヨリ宮内

府上納スル金額ハ大要左如シ但全部ノ經營致成ニ至ルマデ其致成  
シタル部分ニ對シ年々本文ノ率ニ依リ一定ノ金額ヲ上納スルキモノトス  
一總收入七百參拾萬圓

内諸經費貳百參拾萬圓

差引上納金五百萬圓

第五款 大韓帝國宮内府ハ長森藤吉郎ニ本契約ニ依リ經營ヲ委任ス  
ル一切ノ土地ヲ他ニ賣渡シ讓與シ又ハ使用スルコトヲ得ス但長森藤吉郎  
ノ承諾ヲ得タルトキハ此限ニアラス

第六款 右經營ノ實行ニ關スル細目ハ本契約調印後六ヶ月以内ニ於テ大韓  
帝國宮内大臣ト長森藤吉郎ト間ニ協定スルキモノトス

第七款 本契約ハ前款ノ土地全部ノ經營ヲ竣成シタル年ヨリ起算シ拾年

トシ期限ニ至リ收益ヲ計算シ相互ノ協議ニ由リ再ヒ之ヲ繼續スルコトヲ得

第八款 本契約ハ韓文及日本文ヲ以テ各ニ通ヲ作成シ一通ヲ大韓國宮  
内府一通ヲ長森藤吉郎ニ於テ嚴ニ之ヲ保存スルコト也

大韓帝國光武八年 月 日

大日本帝國明治三十七年 月 日

大韓京城ニ於テ

大韓帝國宮内大臣 閔 丙 奭

大日本帝國東京府士族 長森藤吉郎

(約案第三号)

契約書

大韓帝國宮内大臣関丙奭、

皇帝陛下、勅旨ヲ奉シ大日本帝國東京府士族長森藤吉郎ト契  
約ヲ締結スルコト左ノ如シ

第一款 大韓帝國宮内大臣関丙奭、大韓帝國領土内ニ於テ酒類、

煙草、白蔘、食塩、石油、砂糖、鐵ヲ一手ニ製造輸入及專賣シ並

ニ其取締ニ関スル一切ノ經營ヲ大日本帝國長森藤吉郎及其代

理人(日本國人)ニ委任ス

(又、韓國人)

ニ委任ス

第二款 大韓帝國宮内府又ハ政府ハ契約年限内ニ於テ前款ニ基キ酒類、  
煙草、白蔘、食塩、石油、砂糖、鐵ノ製造輸入及專賣ヲ自ラ經營シ

及長森藤吉郎以外何人ニモ之ヲ許可シ又ハ契約スルコトヲ得サントス

第三款 大韓帝國宮内府又ハ政府ハ本契約成立後三月以内ニ酒類、煙草、白蔘、食塩、石油、砂糖、鐵ノ官營法ヲ發布シテ實施ノ時ニ當リ一般人民ノ製造<sub>シ</sub>輸入<sub>シ</sub>及販賣スルコトヲ禁止<sub>シ</sub>所轄專賣廳ヲ設置<sub>シ</sub>專ラ之ニ關スル事項ヲ司リ嚴ニ其取締リヲ為ス（キモノトス）

第四款 長森藤吉郎及其代理人ハ本契約成立<sub>シ</sub>後細目ニ涉ル事項ノ協定<sub>ノ</sub>了<sub>リ</sub>タルトキハ漸次各種目ノ專賣ヲ開始<sub>シ</sub>七ヶ年ニ至テ完成スルモノトス

第五款 長森藤吉郎及其代理人ハ其經營ヲ完成<sub>シ</sub>タル後ハ每年左記ノ金額ヲ宮内府ニ上納ス<sub>ヘシ</sub>但全部完成ニ至ル迄ハ其成效部分ニ對

レ年々本文ノ率ニ依リテ一定ノ金額ヲ上納ス（キモトス）

總益金

経費

純益上納金

一酒類

四百五十萬圓

貳百萬圓

貳百五十萬圓

一煙草

貳百五十萬圓

八拾萬圓

壹百七拾五萬圓

一白蔘

壹百萬圓

叁拾萬圓

七拾萬圓

一食塩

五十萬圓

貳拾萬圓

三十萬圓

一石油

拾五萬圓

六萬圓

九萬圓

一砂糖

五萬圓

貳萬圓

三萬圓

鐵ノ製造專賣及輸入ハ追テ調査ノ上上納金額ヲ定ム

第六款 煙草、白蔘、食塩ノ耕作及製造ハ主トシテ韓國人ヲ使用ス但

宮内大臣ト長森藤吉郎及其代理人ト協議ノ上日本國人ヲ使用スルヲ得

第七款 前款各種目ノ製造輸入及專賣ノ順序手續及其實行方法等ニ関スル詳細ノ事項ハ本契約成立後六ヶ月以内ニ宮内大臣ト長森藤吉郎ト間ニ協定スルモノトス

第八款 本契約ノ有效年限ハ長森藤吉郎及其代理人カ全部ノ製造專賣ヲ完成シタル年ヨリ起算シ十年トス但期限ニ至リテ收益ヲ計算シ相互ノ協議ニ由リテ再ヒ之ヲ繼續スルコトヲ得若シ本契約ヲ繼續セサルトキハ當初長森藤吉郎ニ於テ投資シタル創業資本金ハ年利五分ノ計算ヲ以テ大韓帝國宮内府ヨリ長森藤吉郎ニ元利償還ス



キモノトス

第九款

本契約ハ漢文及日本文ヲ以テ各一通ヲ作成シ一通ヲ大韓帝  
國宮内府ニ一通ヲ長森藤吉郎ニ於テ嚴ニ之ヲ保存スル也

大韓帝國 光武八年 月 日

大日本帝國 明治三十七年 月 日

大韓國京城ニ於テ

大韓帝國宮内大臣 閔 丙奭

大日本帝國東京府士族 長森藤吉郎

名 称	井上 馨 文書
標 題	酒類、他専売益金(の)洞 韓国における酒類煙草等専売益金積蓄

分 類 番 号	674
	3

2

国立国会図書館

登録 番号	104020
----------	--------

一、酒類ノ專賣總益金ヲ大凡四百五十萬圓ト計算セルモ別表ノ如ク日本  
國及韓國彼我ノ人口ヲ以較シ其消費高ニ依リ稅額ヲ計算スルトキハ  
僅ニ日本ノ三分ノ一ニ外ナラス然レトモ我邦ノ酒稅ハ多少過重ナルヤノ疑ナキニ  
アラサルニナラス韓國ニ於テハ現下酒類ハ各人各家之ヲ釀造シ殆ト無稅ノ  
狀況ニシテ隨テ代價モ低廉ナルニ依リ今遽ニ韓國ノ酒類ニ我邦ト同様ノ  
稅ヲ課スルハ苛重ニ失スルモノト思料シ本文ノ如ク差當リ我邦酒稅ニ以  
較シ大凡三分ノ一ヲ以テ專賣益金ト定ムルヲ相當ト認メタリ

右金額中經費ヲ二百萬圓トセシハ我邦ノ徵稅費ニ以テ頗ル多額ナルカ如シ  
ト雖モ現下韓國ノ狀況ニ於テハ徵稅事務ハ全ク創設セサル（カ）サルニナラス



各人各家ニ對シ密造ノ取締ヲ為スハ最モ困難ニシテ創業ノ際ハ莫大ノ経費ヲ要ス一キモノナルニ依リ大凡本文ノ経費ヲ必要ト認メタリ

一煙草、白蔘ハ尚ホ多大ノ益金ヲ得ヘシト云モ何レモ創設ニ属スルヲ以テ本文ノ如ク計算セリ

煙草ハ最初数年ハ產地ヲ限リテ煙草ヲ耕作セシメ之ヲ賠償收納シ葉煙草ノミヲ專賣ヲ為シ適當ノ時機ニ於テ製造專賣ヲ為スヲ相當トス

白蔘ハ紅蔘ト同様製造專賣ヲ為スヲ適當トス

(日韓西國煙草消費調)

日本				韓國			
量目	價格	人口	平均一人當量目	價格	量目	價格	人口
(三筆度日)							
內國製造	八〇、五六七	三四六八五					
(利煙草)							
卷煙	一六五、一三五	一四、三七、三二					
(內國製造)							
葉卷	六九	二、八六					
輸入							
紙卷	八四九	三、三六					
其他	一、六六	五、九六					
計	九、六四九、五九五	五、六七四、九四〇					
(除輸入)							
卷煙	七、一六〇、五	二、一八、五五					
(利煙草)							
葉卷	六八五	三、三六					
純消費高	九、四四七、三	三、四五〇、三二〇	四、五、四、六、五、一	二〇九	七、五九	二、〇、九、〇、〇	七、五九〇、〇〇
							一〇、〇〇〇、〇〇〇

煙草專賣收支計畫

日本國 (人口四千五百萬二千餘人)

概割合

韓國 (人口三千萬人)

(三) 煙草專賣 (度算)

總歲入

二、八七八、四五八<sub>四</sub>

總歲出

九、五二〇、八八九

純益

一、三六七、五六九

(四) 煙草專賣 (度算)

總歲入

七、二一七、八九二

總歲出

三、一九七、八八二

純益

四、〇一九、〇三〇

四、八一六、二一〇<sub>四</sub>

二、〇九四、九九一

二、七二一、一五九

一、五八八、九一〇

六、八七九、九八五

九、〇〇九、一二五

酒稅、砂糖消費稅、塩消費稅對以計算書

[illegible]

名称	井上 馨 文書
標題	覚書 日韓議定書有効ならニムルニ必要ナル項目

分類番号	674
	4

国立国会図書館

登録番号	364029
------	--------



264029

昭和2年4月2日

紅  
字  
書

年冬不



秘

日韓議定書ヲ有効ナラシムルニ必要ナル項目  
左ノ如シ

第一、國防ヲ有効ナラシムル件

大日本帝國ヨリ若干ノ陸軍教官及防備  
ニ必要ナル陸兵ヲ韓國政府ノ使用ニ供スル  
コト

大日本帝國ハ其海軍ノ一艦隊ヲシテ常ニ  
韓國ノ沿岸ヲ巡邏セシムルコト

但シ之ニ要スル港灣及上陸地點ノ使用ヲ  
自由ナラシムルコト



第三、宮中、行政府間ノ權域ヲ明ニスルノ件  
各大臣補弼ノ任ヲ重カラシメ國務上責任ノ  
歸スル所ヲ明瞭ナラシムルコト

第三、保安維持ノ件

大日本帝國ハ憲兵及ヒ警察官ヲ韓國政  
府ノ使用ニ供スルコト

第四、外交上注意ノ件

外交上無用ノ經費ヲ節約スル爲メ韓國  
在外大日本帝國外交機關ヲ利用スルコト

第五、内政刷新ノ件

中央政令、實行ヲ期シ地方官ヲ精選スル  
コト

韓國、人材、養成ニ全力ヲ注キ大日本帝國  
ハ韓國留學生ニ向テ百方便益ヲ図ルコト

## 第六、財政改善ノ件

税法會計法ヲ設ケ出納ヲ明確ナラシムルコト

貨幣制度ヲ確實ナラシムルコト

收欽收賄、弊風ヲ剪除スルコト

財政上、究迫ヲ救済スルコト

内外ニ於ケル韓國、信用ヲ擴張スルコト

産業ヲ發達セシメ税源ヲ培養スルコト  
前記ノ各目的ヲ達スル爲メ中央銀行ヲ設  
立スルコト

但シ日韓兩國帝室ハ各該行株式ノ大部  
分ヲ引受ケアラセラルコト

韓國ノ金銀鑛山ハ該行ノ管理ニ歸セシムル  
コト

### 第七、産業獎勵發達ノ件

先ツ主トシテ農業ノ發達ニ重キヲ置キ就中  
大日本帝國農民ノ移住ヲ獎勵スルコト

日韓交商上ノ便益ヲ増進スル為メ貨幣、度  
量衡、海關稅ニ關スル同盟ヲ組成シ以テ其共  
通方法ヲ設クルコト

### 第八司法嚴正ノ件

法令ヲ簡ニスルト同時ニ法官其人ヲ精選ス  
ルコト

### 第九交通通信ノ件

陸上ニ於テハ道路ノ開通、鐵道電信ノ布設  
ヲ努ムルコト

就中京釜、京義、京元各線ノ速成ニ便ナラ

シムルコト

海上ニ於テハ燈臺建設、其他航路ノ安全ヲ  
図ル方法ヲ講スルコト

沿岸航海權ハ韓國及ヒ同盟國以外ニハ斷  
シテ許スヘカラサルコト

第十、教育、衛生、宗教上注意ノ件

最モ急ヲ要スル事項各其緒ニ就クヲ待テ  
小學校、市府衛生工事、佛教普及ニ着目  
スルコト

大日本帝國政府ハ日韓議定書第一条ニ依リ

施政改善ヲ實ヲ舉グル為メニ必要ナル顧問、教  
師其他各種專門家ノ使用ニ關シ斡旋忠告  
スルコトヲ怠ラザルモノトス

名 称	井 上 馨 文 書
標 題	市科の設置=関する收入見込 韓国市料田設定=関する收入見込

分 類 番 号	674
	5

6

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	364029
------------------	--------



## 御料田設定ニ關スル收入見込

一新ニ開墾スル田地

屯百。二萬二千九百八十一結

五百十一萬四千九百。五圓

一多少ノ加工ニ依リ耕シ得ル田地

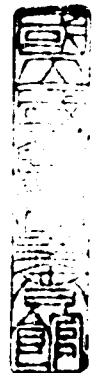
四十四萬。九百九十結

二百二十萬四千九百五十圓

合計七百三十一萬九千八百五十五圓也

以上、韓國現在地租以下ノ金額ヲ皇室ニ上納スルキモト假定シ平

均一結（我屯所七段歩）五圓ヲ上納スルコトニシテ計算セリ



(甲) 從來ノ荒地ニシテ多少加工ニ依リ生田タル事見込

一 田畑生地七十七萬五千三百三十一結

内譯

生田結反別 三十二萬五千〇四九結

生畑結反別 四十五萬〇三百五三結

一 開墾田隱田二十三萬二千六百二十結

一 荒地免稅地四十二萬八千八百六十六結

即チ韓國耕地ト看做シ得ヘキモノハ、慶百四十三萬六千七百九十七結ニシテ

之ヲ日本段別ニ換算スルハ二百四十四萬二千四百五十四町步ナリ

一 荒地免稅地隱田等ノ總段別ハ六十六萬一千四百八十六結ナリ之ヲ日本段

別ニ換算スルトキハ 壹百十二萬四千五百二十六町歩ニシテ残り壹百三十一萬七千九百二十八町歩ハ即チ生田畑ナリ

要之韓國荒地ヲ壹百十二萬四千五百二十六町歩トシ其三分ノ一ハ人民ニ所有權アルモノト假定シ大凡七十四萬九千六百八十四町歩(即四十四萬九百九十結余)ノ荒地アリトス

(七) 開拓ニ依リ新ニ生田ヲ得ヘキ見込

日本ニテハ田畑生地ハ之ヲ人口ニ以例シ一人ニテ凡一段七畝歩位ヲ耕ス割合ナリ韓國人ハ日本國人ニ以シ生活ノ程度低キカ故ニ一人ニテ一段五畝歩ヲ耕ス(キモノト推定スルヲ適當トス(酒匂農務局長報告ニ依ル))

韓國人只種々ノ説アリト雖モ不完全ニ政府ノ統計ト實際ノ事實トニ依  
リ推測シテ之ヲ壹千萬人トスルヲ相當ト認ム果シテ然ラハ韓國全體ニ於テ  
壹百五十萬町步(即九十萬結)内外ノ田地ヲ耕シツアルモノナリ

今韓國ノ總地積ヲ二千一百四十萬三千町步ナリトシ最近ノ調査ニカハ日本  
國ノ總地積ニ比シ可耕地ノ割合ニ割六分ナルニ依テ計算スルハ韓國ノ可  
耕地モ亦六百二十七萬三千八百町步内外ナラサル(カラス今假リニ韓國ノ可  
耕地ヲ日本ノ三分ノ二トシ一割七分ナリトスルモ四百十八萬二千五百三十二町步  
ナリトス

即チ甲案耕地ト認メ得ヘキ二百四十四萬二千四百五十四町步ヲ差引キ一  
百七十三萬九千〇七十八町步トナリ

從來荒地壹百十二萬四千五百二十六町ノ三分ノ二即七十四萬九千六百八十四町步ヲ合計スルニ二百四十八萬八千七百六十二町步ナリ之ヲ結ニ換算スルハ壹百四拾六萬三千九百七拾七結余ナリトス

名称	井上 馨 文書
標題	金百五拾万丹 韩国王室入京通方 法並順序

分類 番号	674
	6

28

国立国会図書館

登録 番号	364029
----------	--------

金百五拾万圓韓國王室へ融通ノ方法並順序

一金百五拾万圓ヲ度支部ヨリ王室へ差出スコト

一右金額ヲ度支部ヨリ差出スニ付テハ自今王自ラ地方官其他ニ向テ種々ノ名目ヲ以テ徴求セラレタル舊襲ハ一切之ヲ廢止シ王家ノ會計ト度支部ノ所管トヲ判然區別スルコト

又王家ノ收入ニ付テハ財政顧問ニ委嘱シ之ヲ整理増殖ヲ計リ又王家ノ支出ニ付テモ同顧問ノ意見ヲ諮詢シ處理セラルヘキコト

一前記百五拾万圓ハ度支部ニテ支出シ兼ルトキハ第一銀行ヲシテ度支部ニ貸付セシムヘシ

大 藏 省

此場合ニハ國稅ヲ擔保トシ利子何カ期限何カトスルコト

若シ第一銀行ノ資力不足ノ場合ニハ國庫又ハ日本銀行ヨリ援助スヘシ

右ノ如ク方針ヲ定メ林公使及目賀田顧問ヲシテ交渉處理セシムヘシ

名 称	井 上 馨 文 書
標 題	日韓協約、韓国、改変 日韓協約に關する英紙論評

分 類 番 号	674
	7

国 立 国 会 図 書 館

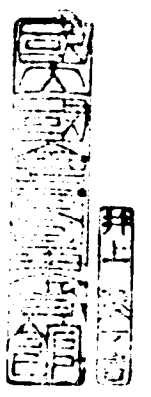
登 録 番 号	264629
------------------	--------



# 日韓協約

一九百七年七月廿九日倫敦タイムズ所載

曩ニ調印セラレタル日韓協約ハ恐ラクハ海牙會議ノ意外  
ナル一結果ト謂フヘキモノナラン暗愚ナル前韓國皇帝  
ノ密使派遣ハ其讓位トナリ帝權ノ制限トナリ又日本ラシ  
テ韓國施政ノ權機ヲ掌握セシムルニ至レリ彼ノ千九百四  
年ノ條約ニ依リテ生セル情勢ハ實際ニ適セサルコト明白  
ナリシヲ以テ今回ノ政變ハ早晚生ユサルヘカラサリシナ  
リ然レトモ日本政治家力能フヘクンハ這般政變ヲ要時  
遷延セシメナンコトヲ希ヘル理由ノアルアリ假令海牙密使  
事件ノアリシニセヨ若シ屬民主義ノ論者各地ニ於テ韓國



問題ハ到底孰レカノ形狀ニテ世界ノ法廷ニ提出セテ待  
ヘシトノ極メテ妄誕無稽ナル議論ヲナスモノナカリシ  
ナラシニハ左マチ早ク今回ノ政変ヲ見ルコトナカリシナ  
ラシ但前記ノ如キ說ハ日本輿論ノ忍ビ能ハサル所ナリ今  
ヤ老皇帝ハ讓位シ楚囚タルノ実アリ虚器ヲ擁セル新帝  
ノ調印セル協約ニ依リ日本ノ韓國ニ於ケル優越ナル權  
カハ絶對且ツ永遠ノモノトナレリ実ニ伊藤侯ハ米國新  
聞記者某ニ對シ新協約ノ條項ニ依リ日本ハ漸次韓國ヲ併  
吞スルノ意アリテ非難ヲ阻却スルヲ得ヘク又侯ハ韓國  
ノ併吞ヲ以テ不必要且ツ不得策ナリトテ之ニ反對セリト  
述ヘタリト云フ固ヨリ今後日本カ韓國ニ對シテ行フヘ

キ統御ト併吞トハ專斷的及形式的ニエテ見レハ差違ナ  
キニアラスト雖モ外交家以外ノ一般人士ヨリエテ見レハ  
其ノ差違タル至テ輕微ニシテエテ看過スルモ敢テ妨ケサ  
ルノ觀アリ新協約ニ依リ日本ハ韓國ノ行政、司法、立法  
ノ實權ヲ盡ク掌握スルコト、ナレリ而シテ外交上ノ監  
督權ハ已ニ日本ノ掌握シ居ル所ナレハ韓國ノ制ス所ハ皇  
帝カ詔勅ニ國璽ヲ鈐スルノ權アルノミ思フニ今後皇帝  
ハ小心翼翼豫メ日本統監ノ承諾ヲ經スミテ濫リニ國璽ヲ  
鈐スルコトナカルヘシ行政、立法、重大ナル國務ノ處理及  
大官ノ任命ニ付テハ孰レモ統監ノ承諾ヲ受クヘキ明示  
ノ規定ヲ設ケ又内閣員ノ任命ハ統監ノ推薦ヲ俟ツ

テ始メテ行ハレ外人ノ雇聘モ亦其ノ同意ヲ以テ行ハル  
ヘキコト、ナリ舊協約中外人ノ財務顧問僱聘ニ関ス  
ル條項ハ廢棄セラレタリ

聞説林子爵ハ新協約ハ韓國ニ於ケル日本政策ノ全斑ヲ  
綜合シタルモノナリト述ヘタリト吾人カ既ニ述ヘタルカ  
如ク這般政綱ハ今後若干ノ歳月間日本ニ興フルニ許多ノ  
事業ヲ以テスルナラン日本カ今回ノ重大ナル措置ヲ採  
レルニ際シ他邦ノ敢テスヲ是非スルノ色ナカリシハ多ク  
ニレテ對外國係上日本ハ最モ順境ニ在リテ對韓事業ニ  
手ヲ下セリト謂フヘシ而シテ這般事業ハ我カ英國ノ埃  
及經營ニ類スル節ナキニアラスト強モ亦左ノ点ニ於テ

ハ事情ヲ異ニセルモノナリ即チ韓國ニハ治外法權條約  
(誤謬ナラン) 混合裁判所ナク内政ニ累ヲ及ホスヘキ外  
邦トノ條約存セス國債券ノ所持者ナク又門戶開放主  
義ノ実行以外ニ外邦ハ同國ニ重大ナル政治的及通商の  
利害關係ヲ有セス從テ統監ノ行動ヲ束縛スヘキモノナ  
ルナレ今後統監如何ナル難局ニ遭遇スルコトアルモ  
外邦ノ隱謀ト内國ノ乖反ト相合シテ對抗スルカ如キ場  
合ニ臨ムコトナカルヘシサレト日本ノ對韓施設上我カ  
英國カ埃及ニ於テ遭遇セサル大障礙ノ横ハルアリ即チ  
韓國民ハ衷心日本人之宿怨ヲ懷ク者ニシテ而カモ此宿怨  
ハ輕侮ノ念ト混スルニ似タリ此事タル日韓兩國人ヲ以

レハ歐洲人ヨリ之ヲ見レハ滑稽者ナリト云モ事實ナル  
ニ似タリ且ソ韓國ノ上流社會カ過分ニ自國ノ文化ヲ誇  
稱セルハ最モ傷心スヘキ一現象ニシテ彼等ノ敬意ヲ表  
スルハ一ニ清國アルノミ是レ清國ヨリ政治宗教ニ関スル  
思想及其ノ最モ尊重スル宮廷儀式ヲ輸入シタルカ爲  
メナラシ然ルニ彼上流社會ノ日本ニ對スル敵意ハ遺傳  
的ナリ是レ舊時日韓間ニ戰爭アリ加フルニ日本カ輒  
近泰西ノ風ニ倣ヒ進歩發達シタル爲メ更ニ交情疎遠ト  
ナリタレハナリ

日本ニシテ韓國經營ニ成功セントセハ須ラク前記排日  
感情ニ打勝タサルヘカラス殖民的國家タル名譽ハ今

朝鮮ノ邊路ニ在リ殊ニ日本ハ對韓上毫モ制肘セラル  
ヲキヲ以テ其ノ成敗ニ對スル責任ハ一層厯然トレテ世  
人ノ眼孔ニ映セシ世人ハ結果如何ヲ見テ日本ノ能否ヲ批  
判セシ日本ハ其ノ然ルヘキヲ知ルヲ以テ大ニ奮勵スル  
所ナキヲ得ス若シ日本克ク強硬、機智及耐忍トヲ併  
用シテ韓民ヲ其ノ施政ニ心服セシムルヲ得ハ英國カ埃及  
ニ於テ成就セタルカ如キ功績ヲ舉クルヲ得ヘク且ツ不平  
民族ヲ異邦ノ治下ニ歸服セシムヘキ所以ノ方法ヲ他邦ニ  
示スヲ得ヘシ伊藤侯ハ言明シテ曰ク余及同僚ハ徐々且ツ  
着實ニ前進セサルヘカラスト此言明ハ將來ニ對スル吉兆  
ヲナスンハアラスト由來韓國ハ東洋ノ最モ因循ナル諸國

於テスラ頑固不屈ナル守舊主義ヲ以テ名アリルソ  
ノ改革ナル改革ノ如ク韓國人ノ思想感情ヲ傷害スルモノ  
ハ他ニ之アラサルヘシ此ヲ以テ韓人ハ且ク漸ク逐ヒ一歩  
毎ニ之ヲ誘掖シ終ニ之ヲシテ日本人ノ舊來ノ制度文物  
ヲ繼承セシハ亦一理アル所以ヲ悟了セシムルヲ得ヘシ今  
マデニ日本ノ指導ニ依リテ成レル改革ニシテ多數ノ下  
層韓國人ノ悦ヲ所トナレルモノアリ新協約ノ明記スル  
行政司法ノ分離ハ彼等ノ見テ奇異トスル所ナルヘキモ  
好ク情況ヲ明察シ之ヲ実行セハ或ハ彼等ノ歡迎スル所ト  
ナラン從來裁判所ノ貪汚不公平ハ大甚シキモノナリシテ  
以テ今復公平ニ司直ノ任ヲ行ハシメハ排日的僻見ヲ融



ハスルニカアラシ日本ニ對スル隱謀ノ巢窟タル韓國  
廷ニ對スル干涉ハ固ヨリ已ムヲ得サルヘクモ其ノ干涉ヲ  
為スニ當リ細心ノ思慮分別ヲ以テスルヲ要ス由來韓國  
臣民ハ其皇帝ヲ見ルコト殆ント神ノ如クナレハ韓帝ニ  
對スル不恭ノ舉動ナリト誣言シ得ヘキ羣柄アレハ無主  
義ナル隱謀家ハ之ヲ以テ奇貨ト為シ人心ヲ煽揚スルノ  
資料トナスハ容易ノ業ナリ聞クカ如クシハ林子爵ハ京城  
ニ於ケル政變ヲ以テ子爵ノ熟知スル隣邦清國ノ訓戒  
ナリトシ且ツ謂ラク清國ハ須ラク韓國ノ連合ヲ設鑑  
為スヘレ京城ニ於テ頃者顛覆セル專制政治ハ今尚ホ  
清國ニ行ハル、專制政治ヲ模範トセルモノナリ清國ノ

專制政治ハ最惠ノ制度ニシテ遠カラズ危急ノ秋ニ達  
セシ強國カ清國ノ國政ニ干涉シ韓國ニ於ケル事續ニ倭  
ハントスルニ先ケ清國ハ韓國ノ形勢ニ鑑ミ國政ヲ改革セ  
サルヘカラス以上ノ言ハ外務大臣タル林奎爵ノ如キ老  
練ナル政治家カ對清意見ヲ吐露スヘキ言辭トハ思ハレ  
サレトモ衷心或ハ友ノ如キ意見ヲ抱キ居ルヤモ知ルヘ  
カラス但シ公然自カラ之ヲ叙述シタリトセハ前記ト異  
レル言辭ヲ用ヒシヤ疑ヲ容レサルナリ

# 韓國ノ政變

一九〇七年七月廿七日倫敦「スベク」紙ノ所載（抄録）

（前略）今や韓國ハ日本ノ保護國ニアラスシテ其屬國トナ  
レリ然ルニ韓民ハ久シク同民族ノ君主ヲ奉戴シ来レルヲ  
以テ決シテ這般ノ政變ヲ悦ブモノニアラス此ヲ以テ諸國  
ニ匪徒蜂起シ宮廷モ亦猶ホ京城ニ在リテ陰謀ヲ連ラレツ  
、アリ而シテ必要ノ場合威カニ依リ秩序ヲ維持スルニ足  
ルハ其軍隊ハ日本ヨリ韓國ニ派遣セラレツ、アリ実ニ日  
本政府ハ斷乎タル決心ヲ以テ韓國ニ其ノ威令ヲ行ハント  
スル者ナルヲ以テ體ヘシナル政府カクランガ及ヘスヤシ  
クスノ爲メニ排除セラレタルカ如ク須臾ニシテ韓國政

府排除セラレ日本政府ハ韓國ニ起ルヘキ一切ノ事項ニ對  
シ歴然責任ヲ負フニ至ルヘキハ疑ヲ容レサル所ナリ斯ノ  
如キニ至ラハ云フ迄モナク韓氏ハ從前ヨリ良好且ツ有効  
的ニ支配セラレ其ノ天然ノ富源ヲ開拓シ得ルヲ以テ富ヲ  
致シ從テ商業モ速カニ發達スルニ至ラン然ノミナラス日  
本政治家ハ銳意島帝國ヲレテ世界ノ強國タラシメンコ  
トニ努力シ而シテ韓國ニ強硬ナル良政府ヲ戴カレオナハ  
半島國ハ克ク日本ニ供スルニ餘分ノ資源ヲ以テスルニ至  
ラン即チ韓民ハ少クトモ日本軍費ノ一部ヲ負担シ尚ホ且  
ツ戰爭ニ際シ日本軍人ト匹敵セサル迄モ有用ノ資性ヲ  
具ハタル兵員ヲ供給セシ韓國人ハ猶ホ我カクイカス人歟日

外人ノ如ク本ト蒙古人ニシテ一旦蒙古人ニ戦術ヲ競スル  
トキハ勇敢克ク戦ヒ死ヲ視ルコト帰スルカ如クナルコト  
此ヲ競鬪ナル歐洲人ニ譲ラザルヘシ今後ヤ年ヲ出テハ  
日本ハ外ニ對シテハ富肩具ヲ知テ競スヘク内ニ對シ  
テ先ク數百萬ノ日本移民ヲシテ繁榮ヲ總ノ狀態ニイ  
レテ如新クシテ本國ニ移クル人口ノ稠密ト衣食ノ不  
足ル困難ヲ輕カラシムルヲ俟ヘシ

英國ハ依テ以テ日本カ利益ヲ収ムヘキ何等ノ事項ニ對シ  
異議アルモノニアラズ設クモ日本ノ對清勢力大  
増進ヲ若クハ大不振ニ向ヘル邊國前途ノ再考ニ對シ防  
止策固ニ定ムコトアルモ英國ハ敢テ異議ヲ唱フルコトナ

自前ノ歐洲各國と云ふハ日本ノ處置ニ對シ痛痒ヲ  
感スルコト動シ目下ノ歐戰國ノ國內紛紜ニ忙殺セラレ  
莫ク日本と云フ橋フルニ意ナク佛國ハ日本ノ爲メ印度  
支那ヨリ馳使セラレント云アリ如キ妄想ニ信テ置クコト  
ナリ独逸ハ如何ナル雄圖ヲ抱キ居ルニモ標本ニ就テ大  
戰ノ爲メハ準備アルナレバ今佛國或ハ憂フル所  
ナラニ蓋シ同國ノ將來ヲ予言シ居候ニ然否否ナラナレ  
モソハ目下機軸中ナルニ身勢懸絶スル勢ナリ之國ハ  
何レノ安全ヲ謀ルニ慮ル必廢慮スルモノナレハナリ然  
レモ日本ハ其ノ特點ナル實力強國ナル事實ニ對シ其ノ  
影響ヲ受レバトテ吾國ハ日本ニ反抗スルハ如何ナル

ノ拳ニ出テサルヘシ故ニ吾人ハ信ス歐米諸國ハ韓國ノ  
運命ヲ拱手傍觀シ日本カ同國ヲ同化スルヲ是認スヘキ  
コトヲ、而レテ日本カ韓國ヲ同化スルハ秋毫モ韓氏ヲ害  
スルモノニアラスシテ結局世界通商ニ裨益スヘキモノ  
タルヤ必セリ若シ日本カ一步ヲ進メテ韓國ヲ併吞スルニ  
至ルトスルモ韓民眞人種ノ統御ヲ受クルニ至レリト言  
フ能ハサルナリ蓋シ日韓人ハ文化及理想ヲ異ニ韓人ノ  
因循ナルニ引換ヘ日本人ハ進取的ナリト俄氏人種、言語、  
及宗教上兩國人ハ酷似スル所アレハナリ思フニ遊惰ノ民  
カ其ノ懶眠ヲ驚醒セラル、ハ不快ニ感スル所ナランモ亦  
其ノ利益トナルヘシ蓋シ豊穰ナル韓國ノ富ハ一民級ノ龍王

断スル所トナリ表シ京城並ニ通信ノ傳フル所真ナラハ此  
輩ハ苛刺ニ寛宥ナラズ放逸ニシテ勤勉ナラサルニ似タリ  
設令韓民ハ教多ク印度土民ノ如ク國家獨立ノ表先ハ繁栄  
ノ克ク賠フニ足ルヲ感セサルニセヨ這様表先ハ世界全  
體ヨリ之ヲ見レハ何等ノ表先ニアラサルヲ以テ諸外國ハ  
寛容的態度又ハ是認的態度ヲ以テ韓國ノ政変ヲ傍觀  
シテ可ナリ而シテ將來京城ニ於テ生セントスル事端ハ歐  
大陸ニ於ケルカ如ク極東ニ於テモ貴重ナル平和ノ攪乱ス  
ルコトアルヘシトハ吾人ノ思惟セサル所ナリ



名称	井上 馨 文書
標題	大韓山林協會 大韓山林協會贈書規約

分類 番号	674
	8

国立国会図書館

登録 番号	264031
----------	--------

侯爵升上馨閣下



東城合洞

李夏榮

敬啟者山林之民國經濟以最大之問題係以有宜乎此者振興宜乎企圖宜乎國本之培養宜乎民利之享有宜乎宜乎持以急務之可謂宜乎宜乎今日韓閔係以日益調密之施政改善之共計政府以外林野整理之務勉宜乎宜乎生等以微力之不顧宜乎其意之體微宜乎林業發達以實行宜乎為宜乎客冬之山林協會之組織宜乎曾福副統監以極力贊成宜乎得宜乎會務之漸次就緒宜乎宜乎微衷宜乎深諒宜乎之協力贊同宜乎外期使本會之至圖展獲宜乎宜乎為要  
隆熙三年三月十三日

大韓山林協會

大韓山林協會總裁

完順君李載完

大韓山林協會副總裁

臨時代辦會頭李夏榮



侯爵井上馨

閣下

再本會趣旨書一冊宜另附寄

264031  
5  
田和20年4月3日

侯爵井上馨

閣下





京坡西小門內鶴橋洞五十三統七戶

# 大韓山林協會本部

(電話三九三番)

李復榮  
合個

264031
7
昭和 7 年 4 月 5 日

大韓山林協會

趣 旨  
規 約  
細 別 要 項  
支 部 設 立 規 約  
支 部 細 別 要 項  
說 明 書

# 大韓山林協會趣旨書

并上

夫山林은 國家에 最大寶庫라 其管理를 適宜케 하면 無盡의 寶庫를 成케  
고 荒廢에 委棄하면 其 最大寶庫가 變하여 最大禍源을 化成하니 其實例  
는 他邦에 廣求함이 不要하고 旣往에 徵比함이 不要하리라 現在 國內 現狀  
을 照察하랴 到處에 禿嶺 赭峯이 오 森林으로 屈指하든 極尠하야 國民  
의 日用하는 木材 薪炭도 不足을 告하지 아니하랴 此外에 又 年年 河水  
汎濫하여 良田은 荒蕪에 歸하고 人畜은 濁渦中에 陷하야 其慘狀이 實로 酸  
鼻함을 不堪하겟스니 是等 現象은 正히 邦家를 爲하야 一日이라 도 等閒  
에 附치 못하리라 思惟컨디 林業은 國內 面積의 大部分을 占하야 國家의  
經濟와 至大의 關係를 有하든 此 振興을 企圖함은 國富 增殖上 特히 急  
務라 可謂하리라 今也에 日韓兩國의 關係가 一新하야 施政 改善과 共히 政  
府는 近時 林野 整理에 孜孜 務勉하야 該法令을 頒布하며 且 造林하는 勸獎  
에 盡力함은 實로 國本을 培養하는 施設에 適當한 措置라 可謂하리라 然이  
나 造林은 歲月을 要하는 事業인즉 單히 當局者의 指導만 待하든 者아니고 國



民도亦自勇進하야其意를體做하야林業發達의方針을研究하고造林經營의實行을期圖하야國家에報答할美舉를行치아니치못할지라然而其方法은多端하나國民이一致하야林業振興할方策을講究하고智識의交換을容易케함에在하나然이나自來로國民은這般問題에留念치아니하며植林을思想과造林을料量이欠缺하야現今狀態로放棄하야其方途를不講하면政府의勸獎과法令의完備가其徹底를期하랴면或遲延할遺憾이無함을難保하겠도다所以로憂慮함을不堪하고微力을不顧하야林野改善의重任을自負코저하야日韓間專門한學者와多年經驗家와當路한有志의協贊을得하고茲에大韓山林協會를組織하야斯業을爲하야貢獻하느니라本會目的을透徹하느機關으로最良한捷徑과最善한有効的設備가됨은斷信코不疑하나惟我有志同胞는微衷을深諒하시고邦家를爲하야贊同할자아다

## 大韓山林協會規約

第一條 本會는大韓山林協會라稱함

第二條 本會는國內에在한林業에改良發達을圖함으로目的함

第三條 本會는本部를京城에置두고會員三百名以上이有한地方에는

支部를置함

第四條 本會는國內에서林業又는林産業의實務에從事하는者又林業을研究하여斯業에智識交換을目的으로하는者總히會員됨을得함

第五條 會員은林業에關한事項에就하여本會에調査를依頼하고質問함을得함

第六條 會員은林業의狀況及統計等の調査에關하여本會에必要한材料를提出하는義務가有함

第七條 本會에左의任員을置호되定時會議에서推選함

總裁 一人

副總裁 一人

會頭 一人

副會頭 一人

評議員 二十六人

理事 十人

第八條 總裁는本會를總轄하며且總督함

第九條 副總裁는總裁를補佐하며總裁가有故할時는其事務를代辦함

第十條 會頭<sup>ハ</sup>本會<sup>ヲ</sup>代表<sup>ス</sup>ヤ本會<sup>ノ</sup>一切會務<sup>ヲ</sup>掌理<sup>ス</sup> 四

第十一條 副會頭<sup>ハ</sup>會頭<sup>ヲ</sup>補佐<sup>ス</sup>ヤ會頭<sup>ガ</sup>有故<sup>ハ</sup>時<sup>ニ</sup>其事務<sup>ヲ</sup>代辦<sup>ス</sup>

五

第十二條 評議員<sup>ハ</sup>會中重要事件<sup>ヲ</sup>監查<sup>ス</sup>

第十三條 理事<sup>ハ</sup>會務<sup>ヲ</sup>分掌<sup>ス</sup>

第十四條 總裁副總裁會頭副會頭理事任期<sup>ハ</sup>四年<sup>ニ</sup>由<sup>テ</sup>評議員任

期<sup>ハ</sup>二年<sup>ニ</sup>由<sup>テ</sup>但特別<sup>ノ</sup>境遇<sup>ガ</sup>有<sup>ハ</sup>時<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>再任<sup>ス</sup>得<sup>ル</sup> 六

第十五條 本會<sup>ハ</sup>其目的<sup>ヲ</sup>達<sup>ス</sup>ガ爲<sup>メ</sup>ヤ會報及調查報告書<sup>ヲ</sup>發刊<sup>ス</sup>

且林業<sup>ニ</sup>有益<sup>ナル</sup>圖書<sup>ヲ</sup>刊行<sup>ス</sup>ヤ會員<sup>ニ</sup>頒與<sup>ス</sup> 七

第十六條 本會<sup>ニ</sup>會員<sup>ヲ</sup>分<sup>テ</sup>左<sup>ノ</sup>四種<sup>ニ</sup>由<sup>テ</sup> 八

名譽 會員

贊助 會員

特別 會員

通常 會員

第十七條 名譽會員<sup>ハ</sup>本會<sup>ニ</sup>特殊<sup>ナル</sup>功勞<sup>ガ</sup>有<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>學術或<sup>ハ</sup>名望<sup>ヲ</sup>

이有호人으로總裁가此를特選호

第十八條 贊助會員은本會의趣旨에贊助호야本會基金內에一時金五十圓以上을出호者로호

第十九條 特別會員은每年金六圓을出호者로호호티限度호十年으로호  
定호

第二十條 通常會員은每年金三圓을出호者로호호티限度호十年으로호  
定호

第二十一條 開會호定時와特別二種이有호니定時會호每年三月

日과九月 日에開會호야會務를處理호며林業에關호야演說或討論호을得호고特別會호重要호事件이有호時에評議會同意를得호야總裁나會頭가此를召集호

但特別會에호通常會員은參與호을不得호

第二十二條 本會에서發刊호호會報及調查報告書并圖書호會員外에實費로호發賣호호도有호

第二十三條 本會에學藝委員호호林業委員을置호

第二十四條 學藝委員又<sup>는</sup>林業委員은學術或實業에熟鍊<sup>熟練</sup>者<sup>者</sup>로總裁가此<sup>를</sup>選定<sup>함</sup>

第二十五條 學藝委員又<sup>는</sup>林業委員은會頭의諮問에應<sup>하</sup>야質問事項을調査<sup>함</sup>

第二十六條 本會會員의徽章을入會<sup>할</sup>際에交附<sup>함</sup>

本規約은隆熙二年十一月一日에此<sup>를</sup>作成<sup>함</sup>

## 大韓山林協會細別要項

第一條 本會<sup>는</sup>農商工部에서頒布<sup>한</sup>林野法令中部分林規則과山林山野及產物處分規則等의實行方法을會員에게知悉케<sup>하</sup>고實地應用的國利를增進<sup>하</sup>며個人에게利益을享有케<sup>함</sup>을事

第二條 本會々員中에部分林及國有林을農商工部에貸下<sup>함</sup>을申請코저<sup>는</sup>者가本會에委托<sup>하</sup>는時<sup>는</sup>其手續設計等を懇切히履行<sup>하</sup>야希望者로其願意를徹底<sup>하</sup>야遺憾이無케<sup>함</sup>을事

第三條 本會에專任技師를常置<sup>하</sup>되殖林其他林業에關<sup>한</sup>立案設計

會員에게 無料로 其要求에 應함이 可하고 實地出張 境遇에 實費를 要함이 可할 事

第四條 本會에는 種苗場을 置고 造林의 適當한 各種을 培養하야 標本으로 會員에게 無料로 頒給할 事

但多數要求者에게는 實費로 以하야 其需用에 應함

第五條 本會는 會報及 報告書와 造林에 關하야 有益한 圖書을 刊行하야 一般會員에게 無代金 頒給할 事

第六條 本會에 支出收入 其他會計에 關한 事項은 其所管의 監督을 經할 事

再申

前各條에 列記한 事項은 決코 當然實施를 期圖하야 會員의 附托에 違背치 아니하는 거는 本會의 責任上 多言을 不要하나 本會는 會員中 官有及 共有私有에 區別이 判明치 아니할 境遇에 本會로 委托할 時는 本會는 當局에 交涉하야 公允昭晰함을 盡力을 갖고 且 本會는 會員의 贊同을 得하야 模範的으로 一大造林을 營하야 一般會員의 共有資產으로 하고 將次 林業學校도

開設을야子弟의敎養과林業思想에關한秩序的發達을務圖을事

## 大韓山林協會支部設立規約

第一條 本部規約第三條에基한야各地方에支部를設置을되其細別要項은左開에依함

第二條 各地方有志人士가本會에趣旨目的으로該地方에支部를設立크저는거든同志를勸導한야三百名以上の會員을募集하고支部設立請願書를本部에提出을事

但十人以上有志人士가保證金三百圓으로本部에請願함도得을事

第三條 前條請願書의書式은左와如함專

### 請願書式

### 請願書

本人等이 貴會趣旨에同情을表한야一切會憲과義務를確實履行을意로本郡에支部를設立크저한야名簿(或保證金)을添附하고玆에請願을오니派員視察을한後依規認許을심을伏望

隆熙某年 月 日

道某郡大韓山林協會支部請願人

印

大韓山林協會本部會頭

閣下

第四條 本部는前項請願書에對하야本部에서視察委員二人以下를選派하야該地情形을調査報告케하事

第五條 本部는前項報告를接准하야支部會員中聲望과知識이能히一支部를維持할줄노確認할時에는理事會를經由하야會頭가此를認許하事

## 大韓山林協會支部細別要項

第一條 名稱은大韓山林協會某府某郡支部라稱하事

第二條 目的은本部規約第二條에依하事

第三條 任員은支部長一人評議員五人以下書記一人으로公選하事

第四條 任員職務는本部處務規程을依하事

第五條 開會는本部規約第二十一條에依하事



第六條 入會는本部規約第十八條第十九條第二十條에依고入會金

은本部에送納할事

第七條 支部에經費와任員의手當金은本部에서別로히定할事

但評議員은名譽로할

第八條 本부와支部間에往復호는書類에名稱과式樣은左와如할事

# 一 名稱

支部가本部에對호야호는報明書와請願書의二種으로

本部가支部에對호야호는指明書와通知書의二種으로

# 二 式樣

報明書 第 號

云々

隆熙 年 月 日

大韓山林協會 某府某郡 支部長

大韓山林協會本部會頭

閣下

印

請願書式 上全

指明書 第 號

云々

隆熙 年 月 日

大韓山林協會本部會頭

章

大韓山林協會 某府某郡 支部長

閣下

通知書式 上全

第九條 支部는 一個月間處理事件과 入會員名簿와 收支計算書를 記日

詳錄하여 每月末日內에 本部로 報明할 事

但書類用紙는 印札紙로 以하되 長廣은 本部用紙와 同一케 함

第十條 支部長은 本部에서 下送하는 會報其他殖林上에 關한 必要書類

를 接受할 時는 遲滯없이 一般會員에 配付할 事

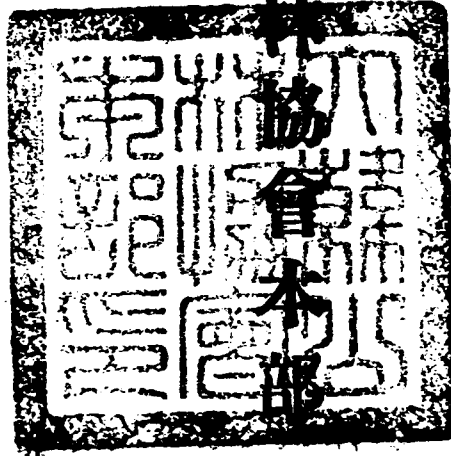
說明書

隆熙二年一月二十一日法律第一號로 森林法을 頒布하신 바 該法令은 實  
上 國民의 殖産을 勸獎하심이라 故로 國有山林의 賣下、讓與、貸付、及 部

分林의 諸般 規程이 詳細 備悉호니 一般 人民은 此를 曉解키 難호는 點이 不無호지 며 且 曉解호는 者 一 規程이 極히 細密호고 事項이 極히 繁錯호니 此를 實行호는 가 尙호 不易호지 라 故로 本會를 勸設호는 我 一般 人民의 此에 從事코 저호는 者의 委托에 對호야 懇切히 處理호고 該法令을 準據實行코 저호니 故로 此等 志望의 抱有호는 者를 本會會員으로 募集호야 業務를 共同 進行호되 本會會員된 者는 特別호 利益을 享有케 호니 第一은 此에 從事호는 者는 苗木의 購入과 技師의 僱聘에 多大호 勞力과 資本을 要호지 나 本會會員에 게는 本會에서 苗木을 實費로 分給호고 種植의 設計는 無料로 供給호니 第二은 本會에서 適當호 地面을 擇定호야 模範的 造林을 營호야 會員의 共同 財產으로 保有호니 第三은 部分林을 政府로 보르 九十九年의 長期의 貸下를 受호야 此를 植樹호면 七個年에 至호야 伐採호時는 多大호 利益을 假令 十丁步에 植樹費用이 四百圓을 要호면 七個年마다 一千五百圓을 取得호을 取得호자오 第四은 本會會員의 所有 林野로 官有及 私有의 區別이 判明치 못호時는 本會는 會員의 信託을 受호야 農商工部에 申請호야 區分이 判明호도록 務圖호니 第五은 會員된 者가 該法令에 依호야 私有及 國有 山林을 測量호야 申告或 請

願할時에凡百事項에不便이甚多하나本會는專擔處理하야希望者에願  
 意를徹底케함이니以上諸般利益은本會會員된者로特別享有하는者이  
 오其外各項纖悉은本書에備陳키不能하오니本會會員되기를志願하  
 는僉彦은即速入會하시고詳細規程은本會規約及細別要項을閱覽하  
 을務望함

# 大韓山林協會本部



大韓山林協會

總裁 完順君 李載完

副總裁 中樞院顧問 李夏榮

大韓山林協會名譽會員

完平君 李昇應 中樞院顧問

完興君 李載冕 表勳院總裁

義陽君 李載覺 宮內府顧問官

永宣君 李堉鎔 中樞院顧問

昌山君 李海昌 中樞院顧問

海豐府院君 尹澤榮 中樞院顧問

陸軍大將子爵 長谷川好道 中樞院顧問

前議政 李根命 掌禮院卿

前議政 閔泳奎 前大臣

內閣總理大臣 李完用 前大臣

宮內府大臣 閔丙奭 監查院卿

內部大臣 宋秉峻 前參政

度支部大臣 任善準 前大臣

軍部大臣 李秉武 輔國

法部大臣 高永喜 前大臣

學部大臣 李載崐 前大臣

農商工部大臣 趙重應 前大臣

中樞院議長 金允植 前大臣

前大臣 李鍾健 前大臣

前大臣 李容植 前大臣

勳一等 大倉喜八郎 前大臣

前大臣 趙義淵 中樞院副議長

前大臣 趙同熙 承寧府總管

前大臣 張博熙 侍從院卿

前大臣 李道宰 前大臣

朴齊純 李載克 李允用 李堉鎔 李海綺 尹澤顯 李權重 李岐根 李成根 李根岐 李泳根 李泳圭 閔主箕 閔泳微 閔泳夏 閔乾默 閔金鎮 閔嘉烈 俞雄濟 南廷哲 李容泰 李根湘 趙民熙 尹德榮 朴容大

名称	井上 峯 文 書
標 題	大韓山林協會 調査報告書 三島太郎 報告書 市原盛宏宛

分類 番 号	674
	9 止

国立国会図書館

登録 番 号	264031
	<del>264030</del>

大轉山林之閑  
書類  
明治四十二年

264031  
1~7  
昭和 年 月 日

字  
七  
點



264631

昭和二年九月日

大轉山林

李自良宗之國夫人

調子市原盤定板了

昭和二年九月廿五日





264031

昭和 年 月 日

株式会社第一銀行韓國總支店便箋

東京

平島 豊太郎 氏

拝啓 貴社より贈られたる試用品一箱を拝受し、誠に  
ありがとうございます。早速、試用させていただきます。

一 試用品の到着を承知し、早速、試用させていただきます。  
お礼状を、併せて送付させていただきます。人の名を、  
平島 豊太郎 氏とさせていただきます。大変わたく、  
誠にありがとうございます。

一 試用品の到着を承知し、早速、試用させていただきます。  
お礼状を、併せて送付させていただきます。人の名を、  
平島 豊太郎 氏とさせていただきます。大変わたく、  
誠にありがとうございます。

韓国總支店

二 東京 豊太郎 氏

電信略號一ル電話 拾一 番六百拾一番 三百三拾一番六百拾二番 千百〇六番

井上 文雄

明治 年 月 日

株 式 會 社 第 一 銀 行 韓 國 總 支 店 便 箋

拾一 番六拾一  
三百三拾一 番六拾二

此乃真書也

明治  
年  
月  
日

電信略號一ル電話

拾 一百六十六番  
三百三拾 一百六十六番  
千一百〇六番

# 大韓山林協會の活動概略

一、今更に至る人物

李載完

皇族にして、協會の總裁として、最も力を入りし者なり

李圭恒

李圭恒の親友にして、經營者として、最も力を入りし者なり

ルカ、此の現に現るる人物なり

李國璽

理事長として、協會の日本に在る活動の中心人物として、最も力を入りし者なり

李圭恒、元早稲田大學の教授として、協會の活動の中心人物として、最も力を入りし者なり

李圭恒、元早稲田大學の教授として、協會の活動の中心人物として、最も力を入りし者なり

李圭恒、元早稲田大學の教授として、協會の活動の中心人物として、最も力を入りし者なり

李圭恒、元早稲田大學の教授として、協會の活動の中心人物として、最も力を入りし者なり

李圭恒、元早稲田大學の教授として、協會の活動の中心人物として、最も力を入りし者なり

李圭恒、元早稲田大學の教授として、協會の活動の中心人物として、最も力を入りし者なり

電信略號一ル電話 拾一 番六百拾一番 三百三拾一番六百拾二番 千百〇六番

松下紋男

小林悦子ノ喪事ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
岡田君ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
時ノ御禮ノ成ニ付、先師  
岡田君ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
先師ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
三ノ御禮ノ成ニ付、先師  
先師ニ付、御禮ノ成ニ付、先師

右ノ御禮ノ成ニ付、先師  
小林悦子ノ二人ノ御禮ノ成ニ付、先師  
先師ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
先師ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
先師ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
先師ニ付、御禮ノ成ニ付、先師  
先師ニ付、御禮ノ成ニ付、先師

明治 年 月 日

李重榮ノ略歴

李重榮ハ元釜山附近ノ農民ナリシカ日本入。近キウ日本語ヲ  
習ヒシクニ為通譯ナリ。夫レヨリ當時ノ外部衙門ノ主事ナリ  
トシ。是ニシテ公使トシテ連シ外部大臣トシテ。後政府ニ入リシ  
朴齊純内閣成ルニ。法部大臣トナリ

同レノ主事ノ本ノ如クシテ元早。資産家ニ。アナリシモ。口實ヲ  
ノ際ニ。先カラ。其ノ子。監禁ヲ送ル。トシ。陰メ。今日。多ク。有勢ノ。監禁  
字。ナリ。トシ。評テ。其ノ。口。任。モ。多ク。西。門。外。ノ。建。物。ハ。煉。瓦。電  
燈。ニ。シテ。價。値。ハ。十。万。圓。ニ。價。値。ハ。多ク。性。質。自。然。トシ。能。月。トシ。ハ  
一。般。ノ。世。界。ナリ

一 本ノ重榮ノ子供

長男 奎三 年ハ幼キ。其ノ。當。ラ。日。本。人。ト。同。ニ。シ。テ。其。後。ハ。其。後

明治 年 月 日

電信略號一ル、電話

拾一 番六百拾一番 三百三拾一番六百拾二番 千百〇六番

電信略號一ル電話 拾一 番六百拾一番 三百三拾一 番六百拾二番 千百〇六番

二通さん成務年親より目下所在工石不明ナリト云フ

二男 主見

年約二十歳ニモ日本侍従ノ職ニテ日本滞ル

借し徳金一し

三男 主横

ナカス

四男 主星

十二歳

右四人共ニ東京ノ風俗学校ニ入リテ之ニ學ビテ通學中ニ在リキ  
徳金親屬中ノ人共ニ其ノ事ナカシキ事ナリ

山林懐念ノ感アリキ

山林懐念ノ感込ヘタニ如ク松下牧場力キ李東雲ニ從テテ後主ニ  
シメタシモノニシテ其ノ人カ今目下ニ懐念ノ念力ナリト云フ松下  
カ韓國政府ノ局長トナリシトシテ失敗シテ以テ故郷ニ入リテ其ノ  
業ニ從テ山林懐念ノ感込ヘタニ如ク松下牧場力キ李東雲ニ從テテ後主ニ

明治 年 月 日

電信略號一ル電話

拾 一 番六百拾一番  
三百三拾一番六百拾二番 千百〇六番

うたせし一カゝる者大に其他知名ノ士ノ大ウおと一カゝる信厚希  
非シ震る二カゝる運命とテ神助金其他ノ信厚ウ得レトモノ花ハ  
夢人ハ花下下ルオモ一性所最境遇ウシウニ此カ果シテ本林林事  
業ノ完達ウ計ンモ一サシヤ或モ事ヲ知外林ノ權利ウ得ウエウ  
雲却ニモ一ウ目的トスルモノヤニ自勝テ胞中多シテ少ク者又  
凡モ此カウ多事臨シ又事多事知テ情少ク事臨セシ申シ  
信厚没シ一ウ信厚トモト教シテ信厚事ニ於テ感無事ウ洗  
リ更ニ思フ一ウ信厚ウナリ

一信厚ノ信厚事々信厚

現在何カモ何カノ信厚事々信厚事々信厚事々信厚事々信厚事々  
事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々  
事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々  
事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々事々

明治 年 月 日

電信略號 一ル電話 拾 一 番六百拾一番 三百三拾一番六百拾二番 千百〇六番

要てな確うしお銀の代理うまいところコトハ神人の親お中  
 二重なる神の親なる所なりへしとありしを重なる事なり  
 京都金主より書更せしよしをうしとあり是等が金主とし  
 目的とありやと一様にして種々事々資本の即より改者  
 神ゆゑに依りし聲言とし神ゆゑに訴ふしうより日々に金を一  
 方より五日ノ金事々徴収たへストし金主より書更せしおの  
 人に容易に金主より金主より得しと書しつうし銀行中  
 金主より改かろしう通算もしりサへりしゆりんを改めし  
 改めしとしり金主より改めしと改めしと改めしと改めしと  
 金主より改めしと改めしと改めしと改めしと改めしと

明治 年 月 日